

国立研究開発法人情報通信研究機構

第4期中長期目標期間の業務実績(見込)に関する項目別自己評価書

国立研究開発法人情報通信研究機構

(空白)

= 目次 =

自己評価書 No.	該当項目			ページ
1	I 研究開発成果の最大化その他の業務の質の向上に関する目標を達成するため取るべき措置	1. ICT分野の基礎的・基盤的な研究開発等	1-1 センシング基盤分野	1
2			1-2 統合 ICT 基盤分野	27
3			1-3 データ利活用基盤分野	98
4			1-4 サイバーセキュリティ分野	126
5			1-5 フロンティア研究分野	147
6		2. 研究開発成果を最大化するための業務		164
-		3. 機構法第 14 条第 1 項第 3 号、4 号及び 5 号の業務		
7		4. 研究支援・事業振興業務等		209
8	II 業務運営の効率化に関する目標を達成するためとるべき措置			231
9	III 予算計画(人件費の見積もりを含む。)、収支計画及び資金計画			240
	IV 短期借入金の限度額			
	V 不要財産又は不要財産となることが見込まれる財産がある場合には、当該財産の処分に関する計画			
	VI 前号に規定する財産以外の重要な財産を譲渡し、又は担保に供しようとするときは、その計画			
	VII 剰余金の使途			
10	VIII その他主務省令で定める業務運営に関する事項			248

(空白)

国立研究開発法人情報通信研究機構 第4期中長期目標期間評価(見込評価) 項目別自己評価書(No.1 センシング基盤分野)

1. 当事務及び事業に関する基本情報			
中長期目標の当該項目	Ⅲ. -1. -(1)センシング基盤分野 Ⅲ. -3. 機構法第14条第1項第3号から第5号までの業務		
関連する政策・施策	—	当該事業実施に係る根拠 (個別法条文など)	国立研究開発法人情報通信研究機構法第14条第1項第一号、第三号、第四号、第五号、第六号
当該項目の重要度、難易度	重要度:高	関連する研究開発評価、政策評価・行政事業レビュー	行政事業レビューシート ****

2. 主要な経年データ												
主な参考指標情報							主要なインプット情報(財務情報及び人員に関する情報)※2					
	基準値等 (前中長期目標期間最終年度値)	28年度	29年度	30年度	元年度	2年度		28年度	29年度	30年度	元年度	2年度
査読付き論文数	—	131	114	128	102		予算額(百万円)	4,037	4,883	4,982	5,609	
論文の合計被引用数 ※1	—	856	958	1,080	1,297		決算額(百万円)	3,467	4,015	3,796	4,576	
実施許諾件数	12	8	8	7	9		経常費用(百万円)	3,805	4,638	4,368	4,963	
報道発表件数	3	7	7	3	2		経常利益(百万円)	△13	△21	△1	△7	
標準化会議等への 寄与文書数	36	76	50	56	43		行政サービス実施コスト(百万円)	4,714	4,455	4,105	6,269	
							従事人員数(人)	72	70	67	77	

※1 合計被引用数は、当該年度の前3年度間に発表した論文についての、クラリベイト・アナリティクス InCites Benchmarking に基づく被引用総数(当該年度の3月調査)。

※2 予算額、決算額は支出額を記載。人件費については共通経費分を除き各業務に配賦した後の金額を記載。従事人員数は、常勤職員の本務従事者数。

3. 中長期目標、中長期計画、主な評価軸、業務実績等、中長期目標期間評価に係る自己評価					
中長期目標	中長期計画	主な評価軸 (評価の視点)、指標等	法人の主な業務実績等	自己評価	
1. ICT分野の基礎的・基盤的な研究開発等		<p><評価軸></p> <ul style="list-style-type: none"> ● 研究開発等の取組・成果の科学的意義(独創性、革新性、先導性、発展性等)が十分に大きなものであるか。 ● 研究開発等の取組・成果が社会課題・政策課題の解決につながるものであり、または、それらが社会的価値の創出に十分に貢献するものであるか。 ● 研究開発等の成果を社会実装につなげる取組(技術シーズを実用 		<p>評価</p> <p>A</p>	
	<p>(1)センシング基盤分野</p> <p>世界最先端のICTにより新たな価値創造や社会システムの変革をもたらすためには、「社会を観る」能力として、多様なセンサー等を用いて高度なデータ収集や高精度な観測等を行うための基礎的・基盤的な技術が不可欠であることから、【重要度：高】として、以下の研究開発等に取り組みとともに研究開発成果の普及や社会実装を目指すものとする。</p>		<p>1-1. センシング基盤分野</p> <p>電磁波を利用して人類を取り巻く様々な対象から様々な情報を取得・収集・可視化するための技術、社会経済活動の基盤となる高品質な時刻・周波数を発生・供給・利活用するための基盤技術、様々な機器・システムの電磁両立性(EMC)を確保するための基盤技術として、リモートセンシング技術、宇宙環境計測技術、電磁波計測基盤技術(時空標準技術、電磁環境技術)の研究開発を実施する。</p>	<p><主要な業務実績></p>	<p>1-1.センシング基盤分野(3.機構法第14条第1項第3号、第4号及び第5号の業務を含む)</p> <p>本分野としては、世界最高レベルの高分解能等の画質の高精度航空機搭載合成開口レーダーの開発及び高度化、高出力パルスレーザ開発で世界最高出力達成、地上デジタル放送波を用いた水蒸気量推定技術の開発、ホログラム印刷技術の開発の推進、また、電離圏観測や各種観測データの取り込みからモデリングまで地球物理分野の手法を駆使しての最先端予報技術の確立、機械学習による太陽フレアの予測、高精度でかつ実用に耐えうる光周波数標準の開発、原子時計のチップ化の実現に必要な低消費電力発振器、MEMS アルカリ金属セルの開発、5G 端末等のミリ波帯アンテナからの電波ばく露量の評価方法の開発、従来よりも数倍性能が向上した電磁耐性試験用アンテナの開発、国際放射線防護委員会の</p>

		<p>化・事業化に導く等)が十分であるか。</p> <p><指標></p> <ul style="list-style-type: none"> ● 具体的な研究開発成果(評価指標) ● 査読付き論文数(モニタリング指標) ● 論文の合計被引用数(モニタリング指標) ● 研究開発成果の移転及び利用の状況(評価指標) ● 研究開発成果の移転及び利用に向けた活動件数(実施許諾件数等)(モニタリング指標) ● 報道発表や展示会出展等を受けた各種メディア媒体の反響状況(評価指標) 	<p>参照値に準拠した世界初の小児数値人体モデルの開発、テラヘルツ帯までの生体組織の電気定数データベースの世界初の構築等、科学的意義のみならず社会・政策課題の解決にも直結する成果を創出した。</p> <p>さらに、京コンピュータを用いたPAWR データの世界最大規模のビッグデータ同化実験実施及びリアルタイムデータ配信、地デジ放送波による水蒸気量観測システムの整備及び実証試験の実施、「水蒸気+風」ライダーの開発など気象観測・気象予測の高度化の実現、航空機搭載合成開口ライダーによる人工建造物の自動抽出、AI技術を活用した土地被覆分類などの情報抽出技術高度化の実現、マイクロ波イメージング技術の建造物錆検出への応用、ホログラム印刷技術の車載ヘッドアップディスプレイへの応用及び技術移転推進、ホログラム印刷技術による回折光学素子を開発、テラヘルツ波の文化財調査への応用、また、テラヘルツ小型センサの開発、テラヘルツ伝搬モデルの開発によるテラヘルツ利活用の活性化への貢献、大気汚染観測のGOSAT への概念採用、宇宙天気予報精度向上に関する国際連携</p>
--	--	--	--

		<ul style="list-style-type: none"> ● 報道発表や展示会出展等の取組件数(モニタリング指標) ● 共同研究や産学官連携の状況(評価指標) ● データベース等の研究開発成果の公表状況(評価指標) ● (個別の研究開発課題における)標準や国内制度の成立寄与状況(評価指標) ● (個別の研究開発課題における)標準化や国内制度化の寄与件数(モニタリング指標) <p>等</p>	<p>を推進、ICAO グローバル宇宙天気センターとしての業務開始及び宇宙天気予報業務の24時間化の実現、太陽放射線被ばく警報システム WASAVIES の実運用システムを開発・外部公開、3次元電離圏電子密度分布に対応する電波伝搬シミュレータ(HF-START)の開発・検証実施、過去の電波警報・宇宙天気情報資料のデジタル化及び外部公開、また、光格子時計による国際原子時の校正への貢献および標準時の分散化への貢献、原子時計のチップ化の実現に必要な注入同期型 FBAR 分周器・低背型 MEMS セルを企業大学連携での開発、WiWi を提案・技術実証し、コンソーシアム設立による実利用に向けた推進、人体安全性評価技術と標準化に関する国際ワークショップを開催、準ミリ波帯・ミリ波帯において人体に入射する電力密度と温度上昇の関係を定量的に明らかにし、ICNIRP や IEEE の国際ガイドライン改定版の根拠として採用、国家標準トレーサブルな電力標準の開発等、社会・政策課題の解決や社会的価値を創出する実績を達成した。</p> <p>加えて、スマホアプリ「3D 雨雲ウォッチ」の開発・実証・普及、地デジ水蒸気量推定技術を開発・技</p>
--	--	---	---

術実証を実施、ウインドプロファイラの ACS 抑圧技術開発および ISO 規格案への反映、テラヘルツ帯の文化財調査への応用、ミリ波帯の外壁タイル検査・壁画調査への有効性を実証し、技術移転推進、車載ヘッドアップディスプレイ向けの光学素子の技術移転を推進、空気品質の予報についてビジネス化に取り組んでいる、宇宙天気業務を 24 時間・365 日体制とし、ICAO 宇宙天気センターのためのサービスを確立、AI 技術を利用した太陽フレア発生確率予報システムを開発及び運用開始、タイ・チュンポンに VHF レーダーを開設し、準天頂衛星の測位精度向上に大きく貢献した、太陽放射線被ばく警報システム WASAVIES を開発し及び外部公開、また、標準時に関して、神戸副局を設置し分散化を実現、新しい無線双方向測位技術 (WiWi) を提案し民間企業の協力のもとに試作、光テレホン JJY サービス開始、次世代衛星双方向時刻・周波数比較モデムの製品化、4 拠点に散在する約 35 台のセシウム原子時計から合成時系を生成し、高精度の標準時の維持と安定供給の達成、光格子時計による国際原子時のオンタイム校正の実現及び、国際度量衡

				<p>委員会への報告、医療機器等の近接電磁耐性試験用新型アンテナの製品化、LED 照明からの雑音の医療テレメータへの干渉評価法の医療施設における無線利用ガイドラインへの反映、世界に先駆けた 330GHz までの電力較正の開始、5G 端末等の人体防護指針への適合性評価システムの製品化等、社会実装につながる実績を達成した。</p> <p>以上のことから、中長期計画を着実に達成した上で、顕著な成果の創出が認められた他、将来的な成果の創出が期待される実績も得られたため、評定を「A」とした。個別の評定と根拠は、以下の各項目に記載のとおりである。</p>
<p>○リモートセンシング技術 ゲリラ豪雨・竜巻に代表される突発的大気現象の監視技術及び予測技術の向上を目指し、前兆現象の早期捕捉や発達メカニズムの解明に必須な気象パラメータを高時間空間</p>	<p>(1)リモートセンシング技術 突発的大気現象の早期捕捉や地震等の災害発生時の状況把握を可能とするリモートセンシング技術、グローバルな気候・気象の監視や予測精度の向上に必要な衛星搭載型リモートセンシング技術及び社会インフラ等の維持管理に貢献する非破壊センシング技術の研究開発に取り組む。</p>			<p>(1)リモートセンシング技術 【科学的意義】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・世界最高レベルの高分解能等の画質の高精度航空機搭載合成開口レーダーの開発及び、3次元イメージング技術等の情報抽出技術を高度化したこと。 ・衛星搭載用ドップラライダー用高出力パルスレーザ開発で世界最高出力を達成したこと。 ・地上デジタル放送波を用いた水蒸気量推定技術を開発したこと。

分解能でモニタリングすることを可能とする技術を研究開発するものとする。

また、地震・火山噴火等の災害発生状況を迅速に把握可能な航空機搭載合成開口レーダーについて、判読技術の高度化等に取り組むことで取得データの利活用を促進するとともに、平成 32 年度までに世界最高水準の画質の実現を目指した研究開発をするものとする。

さらに、グローバルな気候・気象の監視技術の確立や予測技術の高度化を目指して、地球規模で大気環境を観測し、データを高度解析するための技術を研究開発するものとする。

加えて、社会インフラや文化財の効率的な維持管理に貢献する電磁波による非破壊・非接

(ア)リモートセンシング技術

ゲリラ豪雨・竜巻に代表される突発的大気現象の早期捕捉・発達メカニズムの解明に貢献する、風、水蒸気、降水等を高時間空間分解能で観測する技術の研究開発を行う。これらの技術を活用し、突発的大気現象の予測技術向上に必要な研究開発を行う。

また、地震・火山噴火等の災害発生時の状況把握等に必要な技術として、航空機搭載合成開口レーダーについて、構造物や地表面の変化抽出等の状況を判読するために必要な技術の研究開発に取り組むとともに、観測データや技術の利活用を促進する。さらに、世界最高水準の画質(空間分解能等)の実現を目指した、レーダー機器の性能向上のための研究開発を進める。

・ゲリラ豪雨・竜巻に代表される突発的大気現象の早期捕捉・発達メカニズムの解明に貢献するフェーズドアレイ気象レーダー・ドップラーライダー融合システム(PANDA)を活用した計測データの利活用としては、AI技術を活用しデータ品質管理手法を開発し、リアルタイムデータ同化により「京」コンピュータを用いたPAWRデータの世界最大規模のビッグデータ同化実験を実現すると共に、民間企業と連携したスマホアプリ「3D 雨雲ウォッチ」にデータ提供した。さらに、ゲリラ豪雨の早期探知システムをこれまでの手法に加え上空で発生する渦管を豪雨発生前に捉えることにより、豪雨災害がより発生しやすい雨の予測を可能とし、神戸市との実証実験等を通じて、突発的大気現象の予測技術の向上に貢献した。

・内閣府の戦略的イノベーション創造プログラム(SIP)により開発を進めたマルチパラメータ・フェーズドアレイ気象レーダー(MP-PAWR)については国土交通省が運用する関東圏の既存レーダー(XRAIN)観測データとの反射強度および降雨量の比較による性能評価を実施し、既存レーダーと同等かそれ以上の観測精度が得られることを確認し、観測データを用いた豪雨の直前予測情報による実証実験を通し、MP-PAWRの有効性を積極的に実施する。また、第二期(平成30年度～令和4年度で実施予定)において、防災科学技術研究所、日本気象協会、大阪大学、埼玉大学など他機関との密接な連携により実施し、首都圏豪雨予測システムによる大規模イベントおよび自治体との実証実験を実施する。

・地上デジタル放送波を利用した水蒸気量の観測網の展開のため、低コスト化による廉価版モデル(同時に4ch受信が可能)を令和元年度末に完成見込み。SIP(第二期)を通じてサービス化を日本アンテナと連携実施することにより、SIP最終年度の令和4年から首都圏のデータについてはサービス開始見込み。また、オリンピック・パラリンピック競技大会での首都圏豪雨予測システムにおいて地デジ水蒸気観測情報のデータ同化精度向上を実現する。

・ホログラム印刷技術の開発を進め、光学素子の印刷およびプロジェクトとの組み合わせ技術を確認したこと。等、科学的意義が大きい独創性、先導性に富んだ顕著な成果の創出や将来的な成果の創出が期待される実績が得られた。

【社会的価値】

・京コンピュータを用いたPAWRデータの世界最大規模のビッグデータ同化実験を実施するとともに、リアルタイムデータ配信を行ったこと。
・WINDASを用いたACS実証実験により航空機クラッタ除去に成功しISO規格に反映したこと。

・地デジ放送波による水蒸気量観測システムの整備及び実証試験の実施や、水蒸気の流れを捉える「水蒸気+風」ライダーの開発など気象観測・気象予測の高度化を実現したこと。

・航空機搭載合成開口レーダーによる人工構造物の自動抽出、AI技術を活用した土地被覆分類などの情報抽出技術の高度化を実現したこと。

・マイクロ波イメージング技術の建造物錆検出への応用、ホログラム印刷技術の車載ヘッドアップディスプレイへの応用など、新しい利用範囲を開拓したこと。

・ホログラム印刷技術を用いた光学素子等技術で自動車部品企業との連携を進め、技術移転を推進していること。

・テラヘルツ波を文化財調査へ応用

<p>触の診断技術について、観測データを高度解析・可視化するための技術の研究開発を行うとともに、平成32年度までに現地試験システムの実用化のための技術移転を進めるものとする。</p>			<ul style="list-style-type: none"> ・次世代ウィンドプロファイラにおけるアダプティブクラッタ抑圧システム（ACS）の開発については、気象庁の現業ウィンドプロファイラである WINDAS を用いた ACS の実証実験を実施し、有効性を明らかにした。また、NICT 主導で作成した提案を ISO 国際規格作業文書（WD）案を作成し、委員会原案（CD）についても反映し、2020年11月に発行予定。 ・世界最高レベルの画質（高分解能（15cm）、高感度化、耐偽像性能の向上）の高精細航空機搭載合成開口レーダー（Pi-SAR X3）について、令和2年度末までに試験観測を実施し、技術実証を実施。Pi-SAR 2 で培った観測データの情報抽出技術を Pi-SAR X3 データに適用すると共に、Pi-SAR X3 で新たに追加した機能の有効性を実証する。 	<p>したこと。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ホログラム印刷技術による回折光学素子を開発し、この技術がホログラム顕微鏡や AR/VR、通信など様々な分野で利用できる可能性を示したこと。 ・ESA が推進する木星圏へのハビタビリティ探査衛星に搭載するテラヘルツ小型センサの開発を行っていること。 ・テラヘルツ伝搬モデルの開発により、テラヘルツ利活用の活性化に貢献したこと。 ・超小型テラヘルツセンサの大幅な小型化や、大気汚染観測の GOSAT へ概念採用されたこと。 <p>等、社会課題の解決や社会的価値の創出に貢献する顕著な成果の創出や将来的な成果の創出が期待される実績が得られた。</p>
	<p>(イ)衛星搭載型リモートセンシング技術 グローバルな気候・気象の監視や予測精度向上を目指し、地球規模での降水・雲・風等の大気環境の観測を実現するための衛星搭載型リモートセンシング技術及び得られたデータを利用した降水・雲等に関する物理量を推定する高度解析技術の研究開発を行う。また、大気環境観測を目的とした次世代の衛星観測計画を立案するための研究開発を行う。</p>		<ul style="list-style-type: none"> ・全球降水観測計画（GPM）においては、Level-2 データの精度向上を目的とした二周波降水推定アルゴリズムの日米合同研究チームに主要メンバーとして参加し、開発した GPM/DPR の 3 次元観測の利点を活かした降雨判定アルゴリズムのプログラムコードが令和2年度末に Ver 7（現行 Ver. 6）として受理される見込み。 ・観測データから作成される衛星全球降水マップ（GSMaP）は、アジア太平洋地域の現業利用に加え、小笠原地域など日本国内のレーダー観測ネットワーク網が整っていない離島地域の気象庁の降雨モニタリグにも活用された。 ・EarthCARE 搭載雲レーダー（EarthCARE/CPR）については、高出力送信機従系（HPT-A）の不具合対応を JAXA と協力し実施される。地上検証用レーダーの電子走査型雲レーダーにおけるデジタルビームフォーミング（DBF）処理のリアルタイム化が完成し、EarthCARE/CPR の観測ビーム内の不均一性を解析・評価し、アルゴリズム開発に貢献する。 ・次世代の衛星降水観測についての技術検討および後継機ミッションの検討を国内の関連機関が集まり継続して実施している。 	<p>【社会実装】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・スマホアプリ「3D 雨雲ウォッチ」の開発・実証・普及したこと（約 25 万回のダウンロード数）。 ・地デジ水蒸気量推定技術を開発・技術実証を実施し、観測装置のプロトタイプから開発を始め、廉価版の開発まで至ったこと。 ・地デジ水蒸気量推定技術により取得したデータを外部で利用するサービスが開始見込みとなったこと。 ・ウィンドプロファイラの ACS 抑圧技術開発および ISO 規格案への反映などを評価。 ・テラヘルツ帯を文化財調査へ応用

- ・衛星搭載ドップラー風ライダーの基盤技術として開発を進めてきた単一波長高出力パルスレーザについて、超低高度衛星搭載ドップラー風ライダーのパルスエネルギー、パルス繰り返し周波数、パルス幅、パルスレーザのビーム品質 (M² 値) などのレーザ要求仕様達成に目処がつき、超低高度衛星搭載ドップラー風ライダーの実現性検討結果が明らかとなる。また、近年の社会課題である豪雨の高精度予測を可能にする水蒸気観測の実現に向けて、2 μ m 帯高出力パルスレーザ技術と CO₂ 差分吸収ライダー技術を活用した地上設置型水蒸気・風ライダーが完成し、技術実証に成功 (見込み)。
- ・大気温度、風、多種の分子濃度を高い精度で観測する小型衛星 (SMILES2) の実現に向け、課題である電力収支の成立性、開発費用削減に向け冷凍機構成を再検討し、冷凍機の消費電力 (150W 前後) の達成に目処。公募型小型衛星計画に基づく衛星に応募した。
- ・テラヘルツセンシング技術開発 (SMILES: 観測終了、JUICE/SWI: フライトモデル開発終了、超小型軽量テラヘルツセンサ: 開発中) に関連して、独自アルゴリズム開発によるデータ処理・電磁波伝搬モデル開発、測器開発などで 2017-2019 の間に論文を 16 報。おおよそが NICT が主著者であり、IF は 3 以上である。
- ・世界一の感度で観測終了後 10 年経つ SMILES 観測データの再処理を最適化アルゴリズムにより実施。人為起源物質が地球大気に損害を与えている実態を把握。データの有用性を示した。
- ・火星探査に関して、総務省「宇宙 x ICT 懇談会」と協力して成果展開。読売新聞の一面をはじめとして、朝日新聞・日経産業新聞など取材多数。
- ・総務省「4次元サイバーシティ タスクフォース」と連携し、衛星 BD 利活用を推進。スタートアップ企業などと組みながら、新たな衛星データ産業利活用のエコシステムを推進。
- ・地球近傍宇宙における産業活動のエネルギー源となる「水資源探査」を目的とした超小型軽量テラヘルツセンサを開発。BBM, STM と順調に開発を行い、2020 年に

したこと。

- ・ミリ波帯の外壁タイル検査・壁画調査への有効性を実証し、技術移転を行ったこと。
- ・マイクロ波イメージング技術の建造物の錆検出への応用に関して、企業との実用化を目指した活動を進めていること。
- ・車載ヘッドアップディスプレイ向けの光学素子について、民間企業からの資金受入れ型共同研究開発を通じて技術移転を推進していること。
- ・大気汚染物質・温室効果ガス等の衛星ビッグデータを独自アルゴリズム解析により新たな価値を創出する取組を外国ベンチャー企業と開始したこと。
- ・民間企業と MOU を締結し、空気品質の予報についてビジネス化に取り組んでいること。

等、社会実装につながる顕著な成果の創出や将来的な成果の創出が期待される実績が得られた。

以上のことから、中長期計画を着実に達成した上で、顕著な成果の創出が認められた他、将来的な成果の創出が期待される実績も得られたため、評定を「A」とした。

			<p>はフライトモデルを完成する予定。10kg 以下の THz 分光センサは世界でも初めてである。月や国際宇宙ステーションなどから搭載のオファー。これにより、新たな宇宙産業を支援促進。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・非宇宙企業の地球近傍宇宙への活動を支援するため、NICT 独自の「惑星保護法」制度への対応を推進中。 	
	<p>(ウ)非破壊センシング技術 社会インフラや文化財の効率的な維持管理等への貢献を目指して、電磁波を用いた非破壊・非接触の診断が可能となる技術やフィールド試験用装置に関する研究開発を行う。また、これまで使われていない電磁波の性質を利用した観測データの解析技術及び可視化技術の研究開発を行う。研究開発成果の実利用を促進するため、非破壊・非接触の診断を可能とする現地試験システムの実用化に向けた技術移転を進める。</p>		<ul style="list-style-type: none"> ・社会インフラや文化財の効率的な維持管理等への貢献を目指して、マイクロ波はコンクリート建造物、ミリ波はタイル壁、テラヘルツ波は絵画等文化財、赤外は金属鋼管内部など、各周波数帯の特性を活かせる対象についてユーザーとともに実証実験を行い、企業等へ技術移転した。 ・これまで使われていない電磁波の性質を利用した可視化技術等に資するホログラムプリント技術の開発を進め、光学素子の印刷およびプロジェクタとの組み合わせ技術を確立した。プリンタの精度向上等により、複数の民間企業との資金受け入れ共同研究及び技術相談を実施し、特に自動車部品に関する技術移転を促進させた。 	
<p>○宇宙環境計測技術 電波伝搬に大きな影響を与える電離圏等の擾乱の状態をより正確に把握する宇宙環境計測及び高精度予測のための基盤技術を研究開発することにより、航空機の安定的な運用等、電波利</p>	<p>(2)宇宙環境計測技術 電波伝搬に大きな影響を与える電離圏等の擾乱の状態をより正確に把握する宇宙環境計測及び高精度予測のための基盤技術の研究開発を行うとともに、航空機の運用等での電波インフラの安定利用に貢献するシステムの構築に向けた研究開発を行い、研究開発成果を電波の伝わり方の観測等の業務に反映する。また、人工衛星の安定運用に不可欠な</p>		<ul style="list-style-type: none"> ・AI 技術を利用した電離圏観測データの自動抽出・予測技術の研究開発を進めた。イオノグラムの自動読取率及び誤差が各段に向上した。また、AI を利用した予測については、フレア予測で培った技術を電離圏データに適用して開発中であり、今中長期中には運用見込み。 ・東南アジア域準天頂衛星システム (QZSS) 利用高精度測位実証に向けた機器開発として、タイ・チュンポンに VHF レーダーを設置した。令和 2 年 1 月稼働を開始。今後東南アジア諸国と連携し、プラズマバブル観測データを利用した全球衛星測位システム (GNSS) 測位の補正・補強方法について研究開発を進める。 ・様々な 3 次元電離圏電子密度分布に対応する電波伝搬シミュレータ (HF-START) を開発、観測データとの比較 	<p>(2)宇宙環境計測技術</p> <p>【科学的意義】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・太陽放射線被ばく警報システム WASAVIES を開発したこと。 ・GAIA モデルの高機能化を進めるとともに、データ同化モデルのプロトタイプを開発し電離圏観測データの同化実験を実施するなど、GAIA データ同化プロトタイプの開発を推進したこと。 ・タイ・チュンポンの VHF レーダーも含めたプラズマバブル観測データ

<p>用インフラの安定利用に貢献する。</p> <p>また、人工衛星の安定運用に不可欠な宇宙環境の把握・予測のための磁気圏シミュレータの高度化技術及び衛星観測データによる放射線帯モデル技術等を研究開発するものとする。さらに、太陽電波観測・太陽風シミュレーションによる高精度早期警報システムの実現に向けて、太陽活動モニタリングのための電波観測システム及び衛星観測データを活用した太陽風伝搬モデルに関する技術を研究開発するものとする。</p>	<p>宇宙環境の把握・予測に貢献するため、太陽風データを利用可能とする高性能磁気圏シミュレータの研究開発を進めるとともに、衛星観測データによる放射線帯予測モデルの高精度化技術の研究開発を行う。さらに、太陽電波観測・太陽風シミュレーションによる高精度早期警報システムの実現に向けて、太陽風の擾乱の到来を予測するために必要な太陽活動モニタリングのための電波観測システム及び衛星観測データを活用した太陽風伝搬モデルに関する技術の研究開発を行う。</p>	<p>による検証を実施。電離圏リアルタイムトモグラフィと結合することによるリアルタイム予測のウェブサービス化を令和2年度中に開始予定。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大気電離圏モデル(GAIA)の高機能化を進めるとともに、データ同化モデルとして、アンサンブルデータ同化を実装、電離圏観測データ(全球TEC)の同化実験を実施するなど、GAIAデータ同化プロトタイプの開発を推進した。 ・複数の衛星観測データを利用した放射線帯電子の2次元分布を推定する手法を開発するとともに、放射線帯電子の経験モデルから物理モデルによる予測への発展を見据えて、放射線帯変動シミュレータの開発を開始した。 ・中長期的展望に立って、衛星搭載宇宙環境センサの開発の実現に向けた検討を開始した。 ・国際協力の下に太陽風観測衛星データの受信を行うと共に、そのデータを入力とした高精度磁気圏シミュレータを開発し、リアルタイム運用を実施、衛星帯電情報の発信に向けたツール開発を行っている。 ・太陽電波のモニタリング観測を実施し、自動的に太陽フレア発生を検出するためのアルゴリズムの開発、実装を進めるとともに、過去を含めた全ての太陽電波・光学観測データを標準フォーマットで公開した。 ・太陽風伝搬予測シミュレーションを開発し、これをアンサンブル計算することで誤差情報を含んだ情報を発信できる運用システムを開発中。 ・AI技術を利用した太陽フレア発生確率予報システムを開発、実運用システムとして運用を開始した。 <p>宇宙天気予報業務にかかる活動：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・過去の電波警報、宇宙天気情報資料をデジタル化し復元することで、利用できるデータとして外部公開を開始した。 ・令和元年12月より宇宙天気予報業務の24時間化を実現した。 ・令和元年11月29日タイの宇宙機関GISTDAとMoUを調印。タイの宇宙天気予報体制構築に協力 	<p>を用いたGNSS測位の補正・補強に関する研究開発を推進したこと。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・太陽風データを利用可能とする高性能磁気圏シミュレータを開発したこと。 ・複数衛星観測データから放射線帯電子の2次元分布を推定する手法を開発したことなど継続して高い研究成果を上げていること。 <p>等、科学的意義が大きい独創性、先導性に富んだ顕著な成果の創出や将来的な成果の創出が期待される実績が得られた。</p> <p>【社会的価値】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・宇宙天気予報精度向上に関する国際連携を推進するとともに、2019年にICAOグローバル宇宙天気センターとしての業務を開始したことに加え、宇宙天気予報業務の24時間化を実現したこと。 ・太陽電波モニタリングに太陽フレア発生検出アルゴリズムを実装し公開したこと。 ・タイ・チュンポンにVHFレーダーを開設することで、準天頂衛星の測位精度向上に大きく貢献出来る可能性ができたこと。 ・太陽放射線被ばく警報システムWASAVIESの実運用システムを開発・外部公開したこと。 ・3次元電離圏電子密度分布に対応する電波伝搬シミュレータ(HF-START)の開発と観測データとの比較による検証を実施したこと。 ・電離圏リアルタイムトモグラフィ
---	---	---	--

・平成 29 年度補正予算により神戸副局を開局、実際に予報業務を実施し、有事の際にも予報業務が行えることを確認した。また宇宙環境イベント自動通報システムとデータ収集システムを統合し、システムの情報セキュリティ強化と冗長化を実現した。

国際連携にかかわる活動：

- ・宇宙天気予報精度向上に関する国際連携を推進、平成 30 年には駐米日本大使館において国際会議を主催した。
- ・国際民間航空機関(ICA0)にかかわる活動：ICA0 における宇宙天気情報利用および宇宙センターの検討のため ICA0 気象パネルに出席してきた。豪・仏・加とのコンソーシアムとしてグローバルセンターに決定。令和元年 11 月よりサービスを開始。
- ・世界気象機関(WMO)にかかわる活動：宇宙天気検討チーム(IPT-SWeISS)に石井室長がサイエンスタスクチームリーダーとして活動。2015-2019、および 2020-2023 の 4 か年計画の策定に寄与。EGU 等学会でのセッション座長をおこなうなどの活動を行う。
- ・ITU-R：SG-3 の国内対応組織である電波伝搬委員会に主査として石井室長が活動。同委員会の議長を行う。SG-3 関連会合に出席し電離圏全電子数のフォーマットに関する寄与文書を提出。

国内連携にかかわる活動：

- ・関連研究機関との連携：科研費新学術領域「太陽地球圏環境予測(PSTEP)」に当室から多くの研究者が参画し、基礎研究と実利用の架け橋となる研究開発を進めてきた。

実利用展開にかかわる活動：

- ・宇宙天気ユーザーズフォーラムを毎年 1 回開催し、ユーザーへの情報発信およびニーズ・シズマツチングの検討を推進。航空業界、測位業界等を中心に毎回 100 名前後が参加。

一と結合することによるリアルタイム予測をウェブサービス化したこと。

・AI 技術を利用した電離圏観測データの自動抽出・予測技術を開発したこと。

・過去の電波警報・宇宙天気情報資料のデジタル化及び外部公開を行ったこと。

等、社会課題の解決や社会的価値の創出に貢献する顕著な成果の創出や将来的な成果の創出が期待される実績が得られた。

【社会実装】

・宇宙天気業務を 24 時間・365 日体制とし、ICA0 宇宙天気センターのためのサービスを開始したこと。

・AI 技術を利用した太陽フレア発生確率予報システムを開発し、実運用システムとして運用を開始したこと。

・タイ・チュンポンに VHF レーダーを開設することで、準天頂衛星の測位精度向上に大きく貢献出来る可能性ができたこと。

・太陽放射線被ばく警報システム WASAVIES を開発し、実運用システムとして外部公開したこと。

等、社会実装につながる顕著な成果の創出や将来的な成果の創出が期待される実績が得られた。

以上のことから、中長期計画を着実に達成した上で、顕著な成果の創出が認められた他、将来的な成果の創

				<p>出が期待される実績も得られたため、評定を「A」とした。</p>
<p>○電磁波計測基盤技術(時空標準技術) 社会経済活動の秩序維持のために不可欠な標準時及び周波数標準に関する基礎的・基盤的な技術の高度化を図るため、安定的かつ信頼性の高い日本標準時及び周波数国家標準を目指して、原子時計に基づく標準時発生技術、その運用に必要な時刻・周波数比較技術及び時刻・周波数供給に係る関連技術、さらにテラヘルツ帯の周波数標準を確立するための基礎技術を研究開発するものとする。 また、高精度な計測技術の基盤と</p>	<p>(3)電磁波計測基盤技術(時空標準技術) 社会経済活動の基盤となる高品質な時刻・周波数を発生・供給・利活用するため、機構法第14条第1項第3号業務と連動した標準時及び標準周波数の発生・供給技術の研究開発を行うとともに、次世代を見据えた超高精度な周波数標準技術の研究開発を行う。また、利活用領域の一層の拡大のため、未開拓なテラヘルツ領域における周波数標準技術の研究開発及び新たな広域時刻同期技術の研究開発を行う。</p> <p>(ア)標準時及び標準周波数の発生・供給技術 原子時計に基づく標準時発生技術、その運用に必要な時刻・周波数比較技術及び標準時の分散構築技術等の研究開発を行い、信頼性向上に向けた分散システムを設計する。また、一般利用に向けた標準時供給方式に関する研究開発を行う。</p>		<p>(ア) 標準時及び標準周波数の発生・供給技術 ・標準時システムの耐災害性・信頼性向上を期して神戸(未来 ICT 研究所)に日本標準時副局を開局し、本部バックアップとしての時系生成機能及び時刻供給機能を確立した。 ・本部・神戸副局・2つの送信所に分散配置された30台程度の原子時計を衛星比較を介して結合した上でそれらの平均時系を生成する技術を開発し、従来の本部18台よりも高い周波数安定度を実現した。また、光電話回線を利用し、インターネットから分離された形でネットワークプロトコルによって民間企業等に日本標準時を供給する手法を実現した。放送衛星の信号を仲介</p>	<p>(3)電磁波計測基盤技術(時空標準技術)</p> <p>【科学的意義】 ・高精度でかつ実用に耐えうる光周波数標準を開発したこと。 ・NICTが開発した次世代衛星双方向時刻・周波数比較手法により10^{-17}レベルの周波数比較能力を確認し、日韓間の光格子時計周波数比較を実現したこと。また、同手法の専用モデムを民間企業と共同で開発して商品化したこと。 ・光格子時計をリファンレンスとする原子時系実信号を半年間生成、光格子時計で5×10^{-17}を実現するなどの成果を上げたこと。 ・In^+周波数標準で系統誤差5×10^{-16}に低減したこと。 ・日欧間VLBIにおいて広帯域かつ偏波合成を行うことで光時計周波数比較を16乗台前半の不確かさで実現したこと。 ・原子時計のチップ化の実現に必要な低消費電力発振器、MEMSアルカリ金属セルを開発したこと。 等、科学的意義が大きい独創性、先導性に富んだ顕著な成果の創出や将来的な成果の創出が期待される実績が</p>

<p>なり秒の再定義にも適応可能な周波数標準を実現するため、実運用に耐える堅実な超高精度周波数標準を構築するとともに、次世代の光領域の周波数標準等に関する基盤技術の研究開発するものとする。さらに、広域かつ高精度な時刻同期網の構築に関する基盤技術の研究開発するものとする。</p>	<p>(イ) 超高精度周波数標準技術 実運用に耐える安定した超高精度基準周波数の生成が可能なシステムを構築するとともに、次世代への基盤技術として、現在の秒の定義である一次周波数標準を超える確度を実現可能な光周波数標準の構築及びその評価に必要な超高精度周波数比較技術の研究開発を行う。</p>		<p>する方法や、廉価な GNSS 受信機の出力信号を利用することで、利用者がナノ秒精度で日本標準時と比較可能な手法も開発した。</p> <p>(イ) 超高精度周波数標準技術 ・光格子時計を参照して水素メーザー信号を調整することで、世界に先駆けて光格子時計に基づく高精度時系実信号生成を実現した。また、光格子時計の安定な運用を実現し、光格子時計と水素メーザーを用いた協定世界時の歩度(1秒の長さ)校正手法を開発して、国際度量衡委員会の時間・周波数諮問委員会より秒の二次表現を実現する原器としての能力の承認を取得。続いて当該手法によってオンタイムでの協定世界時の歩度校正を世界で初めて実現。2019年現在協定世界時の歩度を光時計で校正することで協定世界時の維持に貢献しているのは NICT のみ。また確度についても現在の最高精度のセシウム標準を上回る 5×10^{-17} を実現した。 ・インジウムイオン光周波数標準について時計遷移周波数を相対不確かさ 5×10^{-16} で計測し、国際度量衡委員会時間周波数諮問委員会の定める推奨値の更新に貢献した。またインジウムイオンでは世界初の光時計動作を実現し、光周波数コムを介したストロンチウム光格子時計との不確かさ 10^{-16} 台での周波数比較に成功した。 ・超長基線電波干渉計(VLBI)技術について、広帯域フィード・バンド幅合成・偏波合成の技術を開発して鹿島34mアンテナを仲介としたイタリア-小金井間の広帯域VLBI信号の検出に成功。さらにイタリアの国立標準機関である INRIM との間で当該 VLBI 技術を利用してストロンチウムとイッテルビウムの遷移周波数比を 16 乗台前半の不確かさで測定した。</p>	<p>得られた。</p> <p>【社会的価値】 ・光格子時計による国際原子時の校正および日本標準時のリアルタイム歩度評価を実現したこと。 ・NICT のストロンチウム光格子時計が国際度量衡委員会より世界二例目の二次表現として認定され、国際原子時のオンタイム歩度校正を世界で初めて実現したこと。 ・複数の海外研究機関と連携し、NICT 開発の次世代衛星双方向時刻・周波数比較モデムを用いた時刻比較実証実験を実施したこと。 ・原子時計のチップ化の実現に必要な注入同期型 FBAR 分周器、低背型 MEMS セルを企業大学連携で開発したこと ・WiFi を提案・技術実証し、コンソーシアム設立により実利用に向けて進展したこと。 等、社会課題の解決や社会的価値の創出に貢献する顕著な成果の創出や将来的な成果の創出が期待される実績が得られた。</p> <p>【社会実装】 ・標準時の信頼性向上にむけ、神戸副局を新たに設置し、分散化を実現したこと。 ・新しい無線双方向測位技術 (WiWi) を提案して実験室で非常に高い計測精度 (ピコ秒、mm) を確認し、安価・高出力なモジュールを民間企業の協力のもとに試作したこと。 ・光テレホン JJY の実用サービスを</p>
---	--	--	--	---

			<ul style="list-style-type: none"> ・光時計に対応したより不確かさの小さい遠距離周波数リンク手法として、搬送波利用衛星双方向時刻周波数比較(TWCP)を確立し、GPSの最も先進的な手法であるIPPPとの比較で17乗台の一致を確認。さらに同手法による新型モデムの商用品を民間企業と共同開発。また、TWCP技術を利用して韓国KRISSのイッテルビウム光格子時計との周波数比を16乗台後半の不確かさで測定。フランス、ドイツ、及びイタリアの各国標準機関においても同モデムによる実証実験を実施。 	<p>開始したこと。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・次世代衛星双方向時刻・周波数比較モデムを製品化したこと。 ・4拠点到散在する約35台のセシウム原子時計から合成時系を生成し、高精度の標準時の維持と安定供給を達成したこと。 ・光格子時計による国際原子時のオンタイム校正を世界で初めて実現して、その結果を国際度量衡委員会に報告したこと。
	<p>(ウ)周波数標準の利活用領域拡大のための技術 周波数標準技術の利活用拡大に向け、マイクロ秒以下の精度で日本標準時に同期する広域かつ高精度な時刻同期網の構築に関する基盤技術の研究開発を行う。また、テラヘルツ周波数標準の実現に向けた基礎技術の研究開発を行う。</p>		<p>(ウ) 周波数標準の利活用領域拡大のための技術</p> <ul style="list-style-type: none"> ・GPS及び標準電波を利用して、日本標準時にマイクロ秒以下の精度で同期する信号を遠隔地で生成・監視する技術を開発(標準電波については見込)。 ・前中長期計画期間において高価なソフトウェア無線機を利用して開発した無線双方向方式による時刻同期及び近距離測位技術(ワイワイ)について、コストを相当程度減少させる専用基板モジュールの開発に成功。また、この基板を利用して田無-小金井間の水蒸気量観測に成功。成果をRadio Science誌で2019年6月に誌上発表。 ・原子時計のチップ化を実現することで、携帯端末を時刻同期網のノードとして機能させることを企図して、原子時計のサイズ縮減及び低消費電力化を目指した研究開発を開始。圧電MEMS振動子を利用した低消費電力の3.4GHz発振器、位相変調方式による原子遷移への安定化、GHz帯ローコスト1/2分周器、長期安定度に優れた新しい原子ガス源等様々な要素技術の開発に成功。 ・量子カスケードレーザー(QCL)を利用して一酸化炭素の回転遷移を検出し、さらにQCLの発振周波数を回転遷移周波数に安定化してテラヘルツ量子標準を実現した。また、テラヘルツ域の基準周波数を通信帯に変換して遠隔地に伝送することで、遠隔地の周波数基準を利用してテラヘルツ域光源の周波数を正確に測定する技術を開発し、応用物理学会論文賞を受賞。 	<p>等、社会実装につながる顕著な成果の創出や将来的な成果の創出が期待される実績が得られた。</p> <p>以上のことから、中長期計画を着実に達成した上で、顕著な成果の創出が認められた他、将来的な成果の創出が期待される実績も得られたため、評定を「A」とした。</p>

<p>○電磁波計測基盤技術(電磁環境技術) 通信機器や家電機器が動作する際の電磁両立性を確保し、クリーンな電磁環境を維持するため、電磁干渉評価技術を開発するものとする。また、広帯域電磁波及び超高周波電磁波に対する高精度計測技術を開発し、平成 32 年度までに機構の試験・較正業務へ反映するものとする。 また、電波の安全性を確保するために不可欠な人体ばく露量特性を正確に把握するため、テラヘルツ帯までの周波数の電波について、マルチスケールのばく露評価を実現するための技術を研究開発するものとする。また、5Gやワイヤレス電力伝送システム等での利用も考慮して、6GHz 以上や</p>	<p>(4)電磁波計測基盤技術(電磁環境技術) 電磁環境技術は通信機器や家電機器が動作する際の電磁両立性を確保するために必要不可欠な基盤技術であることから、先端EMC計測技術や生体EMC技術に関する研究開発を行う。</p> <p>(ア)先端EMC計測技術 電磁干渉評価技術として、家電機器等からの広帯域雑音に適用可能な妨害波測定系の研究開発を行う。また、広帯域電磁波及び超高周波電磁波に対する高精度測定技術及び較正技術の研究開発を行い、機構が行う試験・較正業務に反映する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・医療機器に対する無線デバイス（スマートフォン等）の近接利用を想定した電磁耐性試験用アンテナについて、数値シミュレーションによって独自構造を持つTEM（Transverse ElectroMagnetic）ホーンアンテナの最適設計を行った後、国際電気標準会議（IEC）電磁耐性試験法国際規格に適合するプロトタイプ開発に成功した。さらに、高効率かつ広帯域な特性を目指してアンテナ給電方法を検討した結果、従来製品に比較して 4 倍（6 dB）の高効率化および 2 倍の均一性向上（IEC 規格で要求される 4 dB 以内の均一照射試験領域の面積の拡大や広帯域な放射特性等）を実現し、電気電子機器の製品試験コストを大きく削減できることを実証した。これらの成果が学術論文誌に掲載された。関連して、従来の試験用アンテナに必要とされていたバラや抵抗装荷を不要とした。製品化に向けた最終調整では、高性能を維持しながら誘電体材料や保持構造の最適化を行い、知財実施契約の下で外部メーカーからの発売を果たした。その性能の高さから、試験法を検討する通信機器産業界団体から借用依頼を受けるなど、製品試験におけるデ・ファクト化を推進した。 ・広帯域な船舶用レーダー不要発射（スプリアス）電波を高速に測定する小型可搬システムを開発し、従来方式に比べて約 10 倍の高速化と 7 分の 1 の小型化を達成した。本開発システムは、可変バンドパスフィルタによる自作前処理（フロントエンド）部と既製品の EMI（ElectroMagnetic Interference；電磁干渉）レーザによる高速処理部から構成される。プリセクタ部 	<p>(4)電磁波計測基盤技術(電磁環境技術)</p> <p>【科学的意義】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・5G 端末等を想定したミリ波帯アンテナ近傍の電力密度を簡便かつ高精度に評価する方法を開発し、IEC の国際規格として発行され、国内では、5G 人体防護規制が世界に先駆けて我が国で導入され、提案手法に基づく測定システムが世界で初めて市販されたこと。 ・従来製品に比較して性能が数倍向上した近接電磁耐性試験用新型 TEM ホーンアンテナを開発したこと。 ・国際単位系（SI）に紐づけ可能な 140 ～330GHz の電力標準を開発したこと。 ・LED 照明からの雑音の空間分布および時間特性の統計的性質を詳細に明らかにし、医療テレメータへの干渉量評価を開発実証したこと。 ・身長・体重および体内の各臓器重量について、国際放射線防護委員会（ICRP）の参照値に準拠した小児数値モデルを世界で初めて開発したこと。 ・高精度かつ簡便な測定システムを開発し、テラヘルツ帯までの生体組織の電気定数データベースの構築を世界で初めて実現したこと。 <p>等、科学的意義が大きい独創性、先導性に富んだ顕著な成果の創出や将来的な成果の創出が期待される実績が得られた。</p> <p>【社会的価値】</p>
--	--	--	---

10MHz 以下の周波数帯等における国の電波防護指針への適合性評価技術を開発するものとする。

さらに、国内研究ネットワークの形成・維持・発展を図るなど、電磁環境技術における国内の中核的な研究機関としての役割を果たすとともに、研究開発により得られた知見や経験に基づき、国際標準化活動や関連する国内外の技術基準等の策定に寄与することで安全・安心なICT技術の発展に貢献するものとする。

の設計として、フロントエンド部は YIG (イットリウム・鉄・ガーネット) フィルタの発熱対策を施し、高速処理部では極短パルス測定可能な条件を明らかにし、リアルタイム並列測定が可能な市販測定装置の機種選定を行った。従来の逐次測定方式では3日間以上の測定期間を必要としたが、本開発システムでは、同調制御機能の開発を経て、高速フーリエ変換を利用することにより約3時間で測定可能(10倍以上の高速化)となり、気象条件等の変化の影響を受けにくくなるため、測定精度向上及びコストの大幅な削減に寄与する。これにより、世界的シェアを有するわが国の船舶用レーダーメーカーの国際競争力向上が期待される。更に、従来方式では19インチラック2本分の機材を専用の4トントラックに積載していたが、本開発システムはラック1/3本以下のサイズの可搬ケースに収納可能である。これらの高速化・可搬化により、船舶用レーダーだけでなく近年利用が増えている気象レーダーや衝突防止レーダーの不要発射の現地測定にも寄与する。

・医療機関においてLED等の省エネ機器から発生する電磁妨害波が医療テレメータに与える電磁干渉の評価法を開発するために、LED照明および電源線近傍の電磁妨害波をミリメートルの空間分解能で数メートルの領域にわたり計測する3次元電磁界測定系を構築し、電磁妨害波の空間分布測定を行い、その発生・伝搬機構を検討した。並行して電磁妨害波の時間特性の統計的性質を解析し、医療テレメータ実機を使用した干渉実験を実施し、これらの結果を基に、干渉量の定量的評価法を提案し、医療テレメータの受信アンテナに対する直管型LED・電球形LED及び電源線からの離隔距離推定を行った。これらの成果は、医療関連学会における若手奨励賞受賞、国際学会における優秀賞受賞、レター及び論文の発行等の実績から、学術的に顕著であると言える他、電波環境協議会や日本建築学会における「医療機関の電波利用に配慮した建築指針」策定における技術検討にも寄与した。当該指針は病院建築の際に国内ゼネコン等から参照されるものである。

- ・人体安全性評価技術と標準化に関する国際ワークショップを開催するなど、電磁環境技術の国内外の基準策定へ貢献したこと。
 - ・ミリ波帯までの生体組織の電気定数データベースを開発し、準ミリ波帯・ミリ波帯において人体に入射する電力密度と温度上昇の関係を定量的に明らかにし、我が国の電波防護指針改定版(総務省情報通信審議会答申)および世界初の5G人体防護規制(総務省令等)に反映されるとともに、WHOが推奨し、ICNIRPやIEEEの国際ガイドライン改定版の根拠として採用されたこと。
 - ・無線機器の型式検定で義務付けられているレーダー不要発射試験を行う測定場の性能評価を行い、国際規格を満足する測定場として、アジア初、世界で2か所目の認定を受ける見込みとなったこと。
 - ・新スプリアス規格への対応として、新たに必要となった110GHz以上の国家標準トレーサブルな電力標準を開発したこと。
 - ・国際規格の大規模改定に対応するため、較正サービスに関する100編以上の手順書や管理文書を改定し、世界発の300GHz帯の電力計を含む数十種類の較正品目について較正サービスを提供していること。
- 等、社会課題の解決や社会的価値の創出に貢献する顕著な成果の創出や将来的な成果の創出が期待される実績が得られた。

【社会実装】

- ・電気自動車（EV）等において導入が見込まれるワイヤレス電力伝送（Wireless Power Transfer : WPT）やLED照明等の普及において重要となる 30MHz 以下の放射妨害波測定に用いるループアンテナの新しい較正法を開発し、国際相互認証制度に準拠した ISO17025 規格適合の較正サービスを開始し、国際無線障害特別委員会（CISPR）規格に反映される見込みである（2020 年度中に発行見込み）。また、30MHz 以下の放射妨害波測定を行う上での問題点を抽出し、CISPR 規格化に向けた提案を行った。
 - ・電磁妨害波に関する共通規格（最も汎用性の高い規格）の標準化活動では、いかにして規制対象地域を区分すべきかや、無線保護を目的とした適切な許容値を設定するための統計モデルの検討、直流給電機器に対する規制の考え方など、「規制の在り方に関する議論」に対して学問的立場から継続的な寄与・貢献を行い、妨害波許容値設定モデルに関する標準化文書（テクニカルレポート）が発行された。
 - ・超高周波電磁波に対する較正技術について、140GHz～330GHz の国家標準（国際単位系（SI））にトレーサブルな電力標準（等温制御型ツインドライカロリメータ）を開発し、その成果は IEEE 誌に掲載された。そして、同周波数帯用の市販電力計の較正装置を構築し、不確かさ評価を完了し、周波数 330 GHz まで、途切れることなく、ミリ波帯電力計の較正サービスを世界で初めて開始した（140～220GHz については R2 年度中に開始見込み）。これにより、ミリ波帯電力の基準値を提供できることになり、無線システムの認証に必要なスプリアス電力測定の新規格値（現在経過措置中であり令和 4 年 12 月 1 日完全施行）を、5G ベンダー等の無線機器・測定機器メーカー等が要望していた移行期限の 1 年以上前に、提供できる体制を整えた。
 - ・広帯域不要発射（スプリアス）の計測法について、測定レンジ 400m の測定場を確保すると共に周波数 1GHz から 26GHz に亘る 123 波の実験用無線局免許を取得し、測定場の性能評価（電波環境・季節変動・広帯域伝搬特性）を行った。測定場の性能を改善するために、多重波
- ・較正業務の改定を効率良く実施し、JCSS 認定を取得したこと
 - ・医療機器等の近傍電磁耐性試験用の新型 TEM ホーンアンテナを考案（IEC 電磁耐性試験法国際規格に適合）し、令和元年度に製品化したこと。
 - ・330GHz までの電力較正を世界に先駆け開始したこと。
 - ・ミリ波帯アンテナ近傍の電力密度の高精度簡易測定法を技術移転したこと及び製品化されたこと
 - ・LED 照明からの雑音の医療テレメータへの干渉量評価法開発により医療施設における無線利用ガイドライン策定に寄与したこと。
- 等、社会実装につながる顕著な成果の創出や将来的な成果の創出が期待される実績が得られた。
- 以上のことから、中長期計画を着実に達成した上で、顕著な成果の創出が認められた他、将来的な成果の創出が期待される実績も得られたため、評定を「A」とした

			<p>伝播（マルチパス）対策として草地による拡散反射及び電波吸収体による多重反射波防止板を導入することで、受信アンテナの高さの変化に伴う受信電力の変動を国際規格の要求（サイト挿入損失を理論値から±4dB以内に抑制）を満足した。国際規格を満足する測定場としては英国に次ぐ世界で2か所目（アジア初）であり、今後、無線機器の型式検定試験等で活用される見込みであり、国内レーダーメーカーの国際競争力強化が期待される。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ITU-R (WRC19) における 275GHz 以上の新たな周波数割当ての議論に対し、我が国で初めて開設した 300GHz 帯を用いた無線局を用いて、屋内における電波伝搬特性のデータを取得、成果がマイクロ波の世界最大学会（International Microwave Symposium; IMS）で産業界分野最優秀論文賞や電波産業会（ARIB）電波功績賞を受賞するとともに、新規周波数割当てを行うにあたり必要な情報を ITU に提供した。その結果、我が国として提案した 275-450GHz 帯の周波数割当てが決まった。これにより 6G を含むテラヘルツ帯の電波利用技術の開発を促進した。 ・ 30-1000MHz の微弱無線局の試験に必要な広帯域アンテナの特性であるアンテナ係数について、自由空間値を決定する方法について検討し、較正サービスを開始した。 ・ テラヘルツ帯の電波を用いた非破壊検査や、ミリ波・マイクロ波帯を用いた IoT 機器に不可欠なセンサに用いるパルス電磁界に関し、数値シミュレーションを行い、誘電体中における振る舞いを明らかにし、成果が学術論文誌に掲載された。また、パルス波形のピーク電力の測定法、及び、ピーク電力計の較正方法について検討を行った。 	
	<p>(イ)生体EMC技術 人体が電波にさらされたときの安全性確保に不可欠な人体ばく露量特性をテラヘルツ帯までの周波数について正確に評</p>		<ul style="list-style-type: none"> ・ テラヘルツ帯までの人体の電波ばく露評価技術を開発するために、以下の検討を行った。 - 人体を構成する皮膚や筋肉等の生体組織の電磁気的特性測定の詳細な不確かさ評価（信頼性の度合いの定量的な評価）を行い、成果が国際学術論文誌に掲載さ 	

価するための技術として、細胞～組織～個体レベルのばく露評価技術の研究開発を行う。

また、第5世代移動通信システム(5G)やワイヤレス電力伝送システム等の新たな無線通信・電波利用システムに対応して、10MHz 以下や 6GHz 以上の周波数帯等における電波防護指針適合性評価技術の研究開発を行う。

れるとともに、家兎角膜のテラヘルツ帯反射率を生体内および試験管内条件において比較し、テラヘルツ時間領域分光システムを用いた角膜のリアルタイム誘電特性評価法を確立し、テラヘルツ帯に含まれるサブミリ波帯までの生体組織の電磁気的特性のデータベースを構築し、その予測モデルを構築した。得られた成果は、総務省で実施している非熱作用を含む確立されていない作用に関する医学・生物研究のためのばく露評価やメカニズム解明の検討に寄与した。生体組織の電磁気的特性のデータベースは今後一般公開予定である。

- マルチスケールばく露評価のベースモデルとなるメッシュ構造数値人体モデルを開発し、末梢血管や神経細胞組織・ネットワーク等の詳細構造をモデル化し、メッシュ構造数値人体モデルに組込むことで、スケールの異なる解剖、組織構造を有したマルチスケールモデルを世界で初めて開発した。また、身長・体重および体内の各臓器重量について、国際放射線防護委員会(ICRP)の参照値に準拠した小児数値モデルを世界で初めて開発し、詳細な人体ばく露評価結果が IEEE 誌(IF>4)に掲載されるとともに、WHOが推奨し、我が国やEU各国等で参照される国際非電離放射線防護委員会(ICNIRP)のガイドライン改定版の根拠として採用され、携帯電話基地局に対する安全許容値の不必要な厳格化を阻止した。数値人体モデルは今後一般公開予定である。
- 人体を構成する皮膚や筋肉等の生体組織の電磁気的特性や数値人体モデルの研究開発の成果を用いて 5G 等で用いられる準ミリ波・ミリ波帯において人体に入射する電波の強度と体温上昇の関係を定量的に明らかにした成果が国際学術論文誌に論文掲載されるとともに、我が国の電波防護指針改定版(総務省情報通信審議会答申)および世界初の5G人体防護規制(総務省令等)に大きく貢献するのみならず、WHOが推奨し、我が国やEU各国等で参照される国際非電離放射線防護委員会(ICNIRP)やIEEEの国際ガイドライン改定版の根拠として採用された。

- ・最新・次世代電波利用システムの適合性評価技術を開発するために、以下の検討を行った。
- 携帯電話端末の人体防護指針値の指標である単位質量当たりの吸収電力である比吸収率（Specific Absorption Rate; SAR）の次世代型超高速測定システム（アレイ化測定システム）の不確かさ（測定の信頼性）の評価のために、4G/LTE 端末 20 機種（周波数、変調条件、人体モデルとの位置関係等）のべ 2000 条件）についての大規模データ取得を行い、研究集会等で当該測定システムの妥当性検証結果を報告した。
- また、4G/LTE やデジタル放送等の最新携帯電話端末の広帯域変調信号波形に対する SAR 測定で用いられる電界プローブの応答特性を詳細に解明し、広帯域変調信号に対する電界プローブの較正手法を開発し、開発した較正手法の妥当性を検証した。これにより LTE/5G 等の広帯域変調信号の測定の不確かさを低減し、適合性評価の信頼性を向上するとともに、不確かさに対する適合性評価のペナルティを小さくすることが可能になり、より効率的な電波利用が可能になる。
- kHz から MHz の周波数を用いた電気自動車用の大電力ワイヤレス電力伝送（Wireless Power Transfer : WPT）システム等の適合性評価に関する実証データを取得し、得られた成果を国際学術論文誌に掲載するとともに、国際規格標準化会議に寄書し、IEC 技術報告書に反映されるとともに、国際規格の策定作業に貢献した（国際規格の発行は 2022 年度を予定）。また、より高い周波数帯でビーム状の電波を利用した WPT システム周辺の電磁界分布データを取得し、防護指針への適合性評価方法について検討し、成果を学会等で発表するとともに、総務省情報通信審議会での審議や国際標準化会議での審議に寄書した。
- また、100kHz 帯の電波を利用する電気自動車用 WPT システムの電波防護指針への適合性評価をより高精度に実施するために、これまで確立されていない 100 kHz 帯における SAR や内部電界の直接測定法を開発し、成果を学会に発表した。より精密な適合性評価方法が利用できることで、より効率的な電波利用が可能とな

			<p>り、WPT システムの開発・普及を大きく後押しすることが期待できる。</p> <ul style="list-style-type: none"> - 5G/WiGig システム等のミリ波帯携帯無線端末の適合性評価方法の妥当性・不確かさ評価等に関する検討を行い、成果が IEEE 誌 (IF>4) に掲載されるとともに、IEC 国際標準化会議に寄書され、IEC 技術報告書に反映されるとともに、2020 年度末発行予定の IEC 国際規格にも反映される見込みであり、国内規制導入のための総務省情報通信審議会答申やその後の世界に先駆けた 5G の国内人体防護規制 (総務省告示) にも反映された。提案手法を実現するために、5G 端末等の適合性評価用プログラムコードを国内企業に技術移転 (数学的処理部分のプログラムを有償提供) し、当該手法に基づく世界初の製品の市販が開始された。 - さらに、国内の携帯電話端末に義務づけられている SAR 測定に必要な SAR 較正業務について、国内唯一の較正機関として着実に実施するとともに、較正業務の効率化及びその妥当性評価・検証を行った。これにより、適合性評価の不確かさ低減 (信頼性向上) に貢献するとともに、業務の持続的推進についての道筋をつけた。 ・日常生活における電波環境を網羅的に明確にするために、屋内外における電波環境の測定を行い、過去との電波環境の違いを明確化するとともに、車による広範囲な電波環境データを取得した。得られたモニタリングデータに基づき、電波利用の発展と拡大にともなうリスクの可能性について、適切な説明と対話を可能にするリスクコミュニケーションの在り方について検討を開始した。 	
	<p>さらに、大学・研究機関等との研究ネットワーク構築や共同研究の実施等により、電磁環境技術に関する国内の中核的研究機関としての役割を果たすとともに、研究開発で得られた知見や経験</p>		<ul style="list-style-type: none"> ・大学・研究機関等との共同研究 (実績: 大学 17、国立研究機関 4、公益法人 1、民間企業 3、省庁 1) や協力研究員 31 人の受入などによる研究ネットワーク構築、オープンフォーラム NICT/EMC-net (主に産業界からの要望取得と議論を行う場として設置し、傘下の 4 研究会およびシンポジウムに延べ 1000 名以上が登録 (うち研究会登録会員数は延べ 600 人))、国際ワークショップ 	

	<p>に基づき、国際標準化活動や国内外技術基準の策定等に寄与すると同時に、安心・安全なICTの発展に貢献する。</p>		<p>の開催（2016年度（5G等の人体防護ガイドラインに関する国際ワークショップ）および2019年度（5Gシステム等の最新電波利用技術に対する電波ばく露の人体安全性評価技術と標準化に関する国際ワークショップ）の活動などを通じて、電磁環境技術に関する国内の中核的研究機関として役割を果たした。</p> <ul style="list-style-type: none"> 研究開発で得られた知見や経験に基づき、また EMC 分野における唯一の国研として、下記に示す通り国際電気通信連合（ITU）、国際電気標準会議（IEC）、国際非電離放射線防護委員会（ICNIRP）等の国際標準化および国内外技術基準の策定に対して大きく貢献した（人数はいずれも延べ）。活動実績は NICT において最大規模（H30 実績では出席者数は NICT の 27%（86 件）、寄与文書数は 20%（45 件））である。 <ul style="list-style-type: none"> 国際会議エキスパート・構成員延べ 240 名・年、国際寄与文書提出 200 編、機構寄与を含む国際規格の成立 30 編など。 国内標準化会議構成員延べ 400 名・年（うち議長・副議長延べ 70 名・年）、文書提出 230 編、国内答申 10 編など。 	
<p>3. 機構法第 14 条第 1 項第 3 号から第 5 号までの業務 機構は、機構法第 14 条第 1 項第 3 号（周波数標準値の設定、標準電波の発射及び標準時の通報）に基づき、社会経済活動の秩序維持のために不可欠な尺度となる周波数標準値を設定し、標準電波を発射し、</p>	<p>3. 機構法第 14 条第 1 項第 3 号、第 4 号及び第 5 号の業務 3-1. 機構法第 14 条第 1 項第 3 号の業務 機構法第 14 条第 1 項第 3 号は、正確な時刻及び周波数の維持に不可欠な業務を規定したものである。この業務は、社会経済活動の秩序維持のために必要不可欠な尺度となる周波数標準値の設定、標準電波の発射及び標準時の通報を行うものであり、正確な時刻及び周波</p>	<p><評価軸> ●業務が継続的かつ安定的に実施されているか。 <指標> ●各業務の実施結果としての利用状況（評価指標） ●各業務の実施状況（モニタリング</p>	<p>・機構法第 14 条第 1 項第 3 号業務については、日本標準時の発生において、神戸副局をバックアップ局として安定維持すると共に、ダウンタイムなく協定世界時 UTC への同期を安定に保ちつつ（±20ns 以内）運用を行った。標準時の供給においては、標準電波を連続送信（稼働時間率 99.99%以上）させると共に光テレホン JJY（4 万アクセス/月）、テレホン JJY（13 万アクセス/月）、NTP（40 億アクセス/日）（括弧内は令和 2 年 3 月実績）など各種手法による供給を安定に行った。さらに機構本部及び標準電波送信所の標準信号発生機器の更新を計画に基づき実施した。</p>	<p>1-（4）電磁波計測基盤技術（電磁環境技術）に含めて自己評価 機構法第 14 条第 1 項第 3 号に定める業務を、関連する研究開発課題と連携しながら、継続的かつ安定的に実施すると共に、神戸未来 ICT 研究所内に日本標準時副局を設置して本部大規模被災時の代替機能を確保した。標準時の供給においては、各種手法による供給を安定に行った。さらに、標準信号発生機器の更新を計画に基づき実施した（機構本部及び標準電波送</p>

<p>及び標準時を通報する業務を行っている。</p> <p>また、機構は、機構法同条同項第4号(電波の伝わり方の観測、予報及び異常に関する警報の送信、並びにその他の通報)に基づき、短波帯通信の途絶や衛星測位の誤差増大等の影響を生じさせる太陽活動や地磁気及び電離圏の乱れ、宇宙放射線の変動に関する観測や予報・警報を行っており、安定的な社会経済活動の維持に不可欠な電波の伝わり方の観測等の業務である。</p> <p>さらに、機構は、機構法同条同項第5号(無線設備(高周波利用設備を含む。)の機器の試験及び較正)に基づき、社会経済活動に不可欠な無線設備の性能に関する試験や測定結果の正確さを保つための較正を</p>	<p>数の維持に不可欠である。このため、機構は関連する研究開発課題と連携しながら、これらの業務を継続的かつ安定的に実施する。</p> <p>3-2. 機構法第14条第1項第4号の業務</p> <p>機構法第14条第1項第4号は、電波の伝わり方の観測、予報及び異常に関する警報の送信、並びにその他の通報に関する業務を規定したものである。この業務は、短波帯通信の途絶や衛星測位の誤差増大等の影響を生じさせる太陽活動や電離圏の乱れ、宇宙放射線の変動に関する観測や予報(いわゆる宇宙天気予報)を行うものであり、安定した電波利用に不可欠である。このため、機構は関連する研究開発課題と連携しながら、これらの業務を継続的かつ安定的に実施する。</p> <p>3-3. 機構法第14条第1項第5号の業務</p> <p>機構法第14条第1項第5号は、高周波利用設備を含む無線設備の機器の試験及び較正に関する業務を規定したものである。この業務は、社会経済活動に不可欠な無線設備の性能に関する試験や、その測定結果の正</p>	<p>指標)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 機構法第14条第1項第4号に定める業務を、関連する研究開発課題と連携しながら、今中長期計画期間を通して滞りなく遂行し、適切な情報提供を行った。 ・ 宇宙天気予報センター神戸副局を開設し、予報業務に関わるシステムの冗長化を実現すると共に、宇宙天気予報業務の24時間化を開始した。 ・ 近年の予報データを用いて宇宙天気予報の予測精度の評価を実施するとともに、1950年代の電波警報業務にまでさかのぼって資料をデジタル化し復元することで、利用できるデータとして外部公開を行っている。 ・ 日本、フランス、オーストラリア、カナダのコンソーシアムとして、国際民間航空機関(ICA0)宇宙天気センターに選出され運用を開始した。 ・ 太陽放射線被ばく警報システムを開発し、ICA0宇宙天気センターの重要情報として航空各機関への情報提供を開始した。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 機構法第14条第1項第5号に定める業務を、関連する研究開発課題と連携しながら、継続的かつ安定的に実施し、電波の公平かつ能率的な利用の実現に貢献した(較正件数316件)。 ・ 国際相互認証(国際MRA)を可能とするISO/IEC17025規格の大幅改定に対応するために、100編以上の手順書や管理文書を改定し、ISO/IEC17025規格が要求する事項を満たす事業者である旨を示すJCSS(Japan Calibration Service System)認定のための現地審査への対応を、業務を止めることなく行い、認定機関か 	<p>信所)。</p> <p>1-(2) 宇宙環境計測技術に含めて自己評価</p> <p>機構法第14条第1項第4号に定める業務を、関連する研究開発課題と連携しながら、継続的かつ安定的に実施した。さらに、神戸副局を開設し、システムの冗長化を実現すると共に、業務の24時間化を開始した。加えて、国際民間航空機関(ICA0)宇宙天気センターに選出され運用を開始した。また、過去の電波警報・宇宙天気情報資料をデジタル化し外部公開した。</p> <p>1-(4) 電磁波計測基盤技術(電磁環境技術)に含めて自己評価</p> <p>機構法第14条第1項第5号に定める業務を、関連する研究開発課題と連携しながら、継続的かつ安定的に実施した。さらに、ISO/IEC17025規格対応のために管理文書等の改定を行い、JCSS認定を、業務を止めることなく完了し、合わせて、国際MRA認定を取得し、One-stop Testingを可能にした。</p>
--	---	------------	---	--

<p>行っており、電波の公平かつ能率的な利用を実現するためには不可欠な業務である。 これらの業務は、社会経済活動を根底から支えている重要な業務であり、継続的かつ安定的に実施するものとする。本業務は、「1. ICT分野の基礎的・基盤的な研究開発等」における研究開発課題の一定の事業等のまとまりに含まれるものとし、評価については、別紙2に掲げる評価軸及び指標を用いて、研究開発課題と併せて実施する。</p>	<p>確さを保つための較正を行うものであり、電波の公平かつ能率的な利用を実現するためには不可欠である。このため、機構は関連する研究開発課題と連携しながら、これらの業務を継続的かつ安定的に実施する。</p>		<p>らの指摘事項ゼロという高評価で、登録を完了した。これにより、国際 MRA 認定を取得し、NICT による較正結果が、世界中で受入れられ、諸外国との取引において、重複して行われていた試験を省ける One-stop Testing を可能にした。</p> <ul style="list-style-type: none"> 令和 4 年 12 月 1 日から、無線局が備えるべき技術基準のうち、不要発射（スプリアス）測定周波数の範囲が最大 300GHz になることや、6G 携帯端末では 300GHz 帯の電波の利用が候補として挙げていることから、100GHz 超の電力計の較正サービスについて、110-170GHz の較正サービスを着実に実施しつつ（12 件）、140-220GHz、220-330GHz の較正サービスを世界で初めて開始した（5 件；140-220GHz については R2 年度に開始見込み）。 4K/8K 放送の受信設備等に必要な 75Ω 系の電力計較正システムの ISO/IEC17025 対応を完了し、我が国で初めて、JCSS 登録事業者としてのサービスを開始した（6 件実施）。これにより、我が国の国家標準に遡ることが可能な基準値を提供できるだけでなく、国際 MRA 認定も合わせて取得したことで、受信設備の輸出に必要な性能試験を、国内で実施できるようになり、輸出先で行っていた試験に掛かる経費の削減を可能にした。 	<p>また、75Ω 系の電力計較正システムの ISO/IEC17025 対応を完了し、我が国で初めて、JCSS 登録事業者としてのサービスを開始した。また、100GHz 超の電力計の較正サービスについて、110-170GHz の較正サービスを着実に実施するとともに、220-330GHz の較正サービスを世界で初めて開始した。</p>
---	--	--	---	---

なお、この自己評価に関しては、国立研究開発法人情報通信研究機構の研究活動等に関する外部評価委員会（総括評価委員会）において、以下のような意見をいただいている。

1. 開催日
令和 2 年 5 月 15 日（金） 15 時～18 時
2. 委員名簿

酒井 善則	委員長	東京工業大学	名誉教授
安浦 寛人	委員	九州大学	理事・副学長
國井 秀子	委員	芝浦工業大学	客員教授
安藤 真	委員	東京工業大学	名誉教授
渡辺 文夫	委員	Fifth Wave Initiative	代表

有川 節夫	委員	放送大学学園	理事長
松井 充	委員	三菱電機株式会社	開発本部 役員技監
太田 勲	委員	兵庫県立大学	学長
飯塚 久夫	委員	株式会社ぐるなび	常勤顧問

3. 委員長及び委員からの意見

- ・全体として、自己評価の評点をもう少し上げて良いのではないか。

例えば、大項目については、センシング基盤分野については、見込み・単年度共に A となっているが、いくつかの S クラスの成果が含まれており、本分野についても S クラスにかなり近いと思う。統合 ICT 基盤分野については、見込み・単年度共に B となっているが、A に近いと思う。フロンティア研究分野については、見込み・単年度共に A となっているが、かなり S クラスの研究が含まれている。オープンイノベーション分野については、見込み・単年度共に B だが、非常に良い部分もある。

- ・(センシング基盤分野について) 中項目のリモートセンシング技術の見込み、電磁波計測基盤技術(電磁環境技術)の見込み・単年度共に S に相当するような成果をあげていると思う。リモートセンシング技術では、テラヘルツやホログラムなど業績は非常に高いものがある。宇宙環境計測技術では、大気電離圏モデルの高性能化や ICAO のグローバル宇宙センターに関する業績は非常に高いものがある。時空標準技術では、VLBI を用いたこの時刻の比較標準や、神戸副局の運用も安定的なサービス提供という意味で評価すべきと思う。電磁環境技術では、標準化に関して非常に多くの寄与文書を発行しており、産業的には、測定技術の構築というものを評価する。5G を含めて、携帯等の影響評価のための人体モデルを作る、あるいは将来を見越しテラヘルツまでそれを延ばしたということは、特別に顕著な成果と思う。

(全体を通して)

- ・社会実装という評価軸は科学的意義とは異なり評価されづらい。しかも、これからの世の中で重要になってくるので、このためしっかりと評価し、モチベーションの維持等を含めて、頑張って社会実装に取り組んでもらいたい。
- ・それぞれの技術分野で、様々な社会的課題に対して研究を行っており、技術分野だけでなく、社会課題別の視点でのアピールなど、多面的なまとめ方で情報発信を行うことが重要ではないか。
- ・コロナ騒動の中で、世界が一気に社会構造や産業構造、経済活動が大きく変化していく中で、新しい社会の在り方を NICT から描いていただきたい。
- ・全体の印象として、とても大きな成果を上げている。基礎研究の分野では、様々な賞を受賞しており、科学技術的に大変意義のある成果を達成している。

国立研究開発法人情報通信研究機構 第4期中長期目標期間評価(見込評価) 項目別自己評価書(No.2 統合ICT基盤分野)

1. 当事務及び事業に関する基本情報			
中長期目標の当該項目	Ⅲ. -1. -(2)統合ICT基盤分野		
関連する政策・施策	—	当該事業実施に係る根拠 (個別法条文など)	国立研究開発法人情報通信研究機構法第14条第1項 第一号、第二号
当該項目の重要度、難易度	重要度:高	関連する研究開発評価、政 策評価・行政事業レビュー	行政事業レビューシート ****

2. 主要な経年データ												
主な参考指標情報							主要なインプット情報(財務情報及び人員に関する情報)※2					
	基準値等 (前中長期目標期 間最終年度値)	28年度	29年度	30年度	元年度	2年度		28年度	29年度	30年度	元年度	2年度
査読付き論文数	—	310	262	244	300		予算額(百万円)	7,099	6,845	6,359	7,339	
論文の合計被引用数 ※1	—	630	731	711	1,002		決算額(百万円)	7,007	6,753	6,046	6,357	
実施許諾件数	38	40	34	35	40		経常費用(百万円)	7,283	7,275	6,720	6,160	
報道発表件数	16	3	8	9	5		経常利益(百万円)	25	142	△172	409	
標準化会議等への 寄与文書数	201	114	110	95	86		行政サービス実施コ スト(百万円)	13,579	10,144	6,068	6,861	
							従事人員数(人)	53	54	55	57	

※1 合計被引用数は、当該年度の前3年度間に発表した論文についての、クラリベイト・アナリティクス InCites Benchmarking に基づく被引用総数(当該年度の3月調査)。

※2 予算額、決算額は支出額を記載。人件費については共通経費分を除き各業務に配賦した後の金額を記載。従事人員数は、常勤職員の本務従事者数。

3. 中長期目標、中長期計画、主な評価軸、業務実績等、中長期目標期間評価に係る自己評価

中長期目標	中長期計画	主な評価軸 (評価の視点)、指標等	法人の主な業務実績等	自己評価	
<p>1. ICT分野の基礎的・基盤的な研究開発等</p> <p>(2)統合ICT基盤分野 世界最先端のICTにより新たな価値創造や社会システムの変革をもたらすためには、「社会を繋ぐ」能力として、通信量の爆発的増加等に対応するための基礎的・基盤的な技術が不可欠であることから、【重要度:高】として、以下の研究開発等に取り組むとともに研究開発成果の普及や社会実装を目指すものとする。</p>	<p>1-2. 統合ICT基盤分野 通信量の爆発的増加や通信品質・利用環境の多様化等に対応する基礎的・基盤的な技術として、革新的ネットワーク技術、ワイヤレスネットワーク基盤技術、フォトニックネットワーク基盤技術、光アクセス基盤技術、衛星通信技術に関して基礎から応用までの幅広い研究開発を行う。これにより様々なICTの統合を可能とすることで、新たな価値創造や社会システムの変革をもたらす統合ICT基盤の創出を目指す。</p>	<p>＜評価軸＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 研究開発等の取組・成果の科学的意義（独創性、革新性、先導性、発展性等）が十分に大きなものであるか。 ● 研究開発等の取組・成果が社会課題・政策課題の解決につながるものであり、または、それらが社会的価値の創出に十分に貢献するものであるか。 ● 研究開発等の成果を社会実装につなげる取組（技術シ- 		<p>評点</p>	<p>B</p>
<p>○革新的ネットワーク技術 革新的なネットワークの実現に不可欠となるネ</p>	<p>(1)革新的ネットワーク技術 革新的なネットワークの実現に不可欠となるネットワー</p>	<p>● 研究開発等の成果を社会実装につなげる取組（技術シ-</p>	<p>＜主要な業務実績＞ (1)革新的ネットワーク技術 ○ネットワークの利用者（アプリケーションやサービス）からの要求に応じたサービス間の資源分配・調停及び論理網構築等の自動化に求められる分散制御技術として、以下の研究開発を実施した。</p>	<p>(1)革新的ネットワーク技術 【科学的意義】 ○ネットワークの利用者（アプリケーションやサービス）からの要求に応じたサービス間の資源分配・調停及び</p>	

<p>ットワークアーキテクチャ及び基礎技術の高度化を先導するため、IoTサービスのアプリケーションやクラウドの進化等を十分に踏まえつつ、平成 42 年(2030 年)頃のネットワーク制御の完全自動化を目指した基礎技術の研究及びネットワークインフラ上を流通する情報(データ、コンテンツ)に着目した新たなネットワークアーキテクチャの平成 32 年度までの確立を目指した研究を行い、科学的意義(独創性、革新性、先導性、発展性等)が十分に大きな研究成果の創出を目指すものとする。なお、ネットワークアーキテクチャの確立のためには関係企業・団体との連携が</p>	<p>クアーキテクチャ及び基礎技術の高度化を先導する研究を行う。</p> <p>具体的には、IoT (Internet of Things:モノのインターネット)の時代に求められる柔軟性の高いネットワークの実現を目指して、ネットワークの利用者(アプリケーションやサービス)からの要求に応じたサービス間の資源分配・調停及び論理網構築等の自動化に求められる分散制御技術及びネットワークインフラ構造やトラヒック変動状況等に基づくサービス品質保証技術に関する研究を行う。IoTサービスのアプリケーション、クラウド技術及び仮想化技術の進展等を十分に踏まえつつ、広域テストベッド等を用いた技術実証を行うことで、平成 42 年頃のネットワーク制御の完全自動化を目指した基礎技</p>	<p>ズを実用化・事業化に導く等)が十分であるか。</p> <p><指標></p> <ul style="list-style-type: none"> ● 具体的な研究開発成果(評価指標) ● 査読付き論文数(モニタリング指標) ● 論文の合計被引用数(モニタリング指標) ● 研究開発成果の移転及び利用の状況(評価指標) ● 研究開発成果の移転及び利用に向けた活動件数(実施許諾件数等)(モニタリング指標) ● 報道発表や展示会 	<p>先ず、複数サービス間に対する仮想化資源の分配及び調停について、平成 28 年度は、認知型調停機構の自動化について、多様な品質要求を持つ仮想ネットワークサービスを提供中に、機械学習の一つである強化学習を適用した資源マイグレーションによってサービス品質を向上させる手法を設計した。本提案はネットワーク管理分野の代表的な国際会議 IFIP/IEEE IM 2017 に採択された。また、ネットワーク・サーバ挙動の監視・複合イベント処理(分析)・割付・調整を繰返し、サービスに必要な資源量を見積る自動資源調整方法の設計と設定自動化の設計を行った。自動資源調整方法の基礎設計は IEEE/IFIP ICIN 2017 で発表した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 大規模デバイス管理自動化のため、IoT ディレクトリサービスを設計・開発した。当システムは 10 億レコード規模の IoT デバイスの属性情報を、10 ミリ秒以内の低遅延応答で安全に提供することを目指して設計され、機構内 1 億レコードから抽出された 10 万レコードの単一データベースで基礎実験を行い、平均 5.12 ミリ秒、99.6%の要求が 10 ミリ秒以内に応答される性能を得られることを検証した。 ● 平成 29 年度は、エラスティック性能安定化と分散制御機構に関連して、以下の成果を創出した。 ● サービス品質要求およびトラヒック時変動に応じて、CPU 飽和発生や経路変更等に起因するサービス品質劣化の抑制に向け、複数の仮想ネットワークの計算・通信資源を投機的に自動分配調停する機構の応用にサービス機能チェーン(SFC: Service Function Chaining)を定め、複数の SFC 間で計算機資源を自動調停する機構を世界で初めて設計し、ネットワーク運用管理に関する代表的な国際会議 IEEE NOMS 2018 で発表した。資源固定割当法と比較し、全てのサービス機能チェーンにおける CPU 飽和発生頻度を 90%以上低減でき、サービス品質向上に寄与できることを確認した。また、資源固定割当法では、同程度の CPU 飽和発生頻度を達成するには 2 倍の資源が必要なことから、提案手法によって資源利用効率を向上できることを確認した。あわせて、複数のサービス機能チェーン(SFC)間で計算機資源を自動調停する機構に関して通信事業者の研究所と共同研究を開始した。 ● ネットワークの大規模障害・復旧の過程において、制御機能を自律分散的に再構築するリアクティブ型分散制御機構の実装を行い、国際会議 iPOP 2017 にて動態展示を行った。 ● 自動資源調停制御の実証実験環境構築に向け、相互接続性や実用性の高い IETF (Internet Engineering Task Force) 標準の SFC アーキテクチャに準拠したデータ転送基盤を開発した。通過パケットのフィル 	<p>論理網構築等の自動化に求められる分散制御技術として、</p> <ul style="list-style-type: none"> ● ネットワーク・サーバ挙動の監視・分析・調整・割付を繰返して各仮想網内でサービスに必要な資源量を見積るための「ネットワーク資源分配自動調停技術 ARCA」について、相互接続された 1 マイクロサービスとしてモデル化し、ARCA の各コンポーネントのアルゴリズムを定式化し、資源利用のピーク時およびバースト時に、ユーザーの資源要求棄却を 30%削減できることを確認、さらにネットワークモニタリング及び各サービス内の資源調整制御を行う AI/ML の組み込み性能向上を図った。 ● 複数の仮想ネットワークの計算・通信資源を投機的に自動分配調停する機構の応用にサービス機能チェーン(SFC)を定め、複数の SFC 間で計算機資源を自動調停する機構を世界で初めて設計し、資源固定割当法と比較し、全てのサービス機能チェーンにおける CPU 飽和発生頻度を 90%以上低減でき、サービス品質向上に寄与できることを確認した。 <p>○ネットワークインフラ構造やトラヒック変動状況等に基づくサービス品質保証技術に関する研究として、IoT エッジコンピューティング技術の研究を実施し、複数のサービスに簡便に提供可能なネットワーク基盤を実現するインフラ層とプラットフォーム層の 2 階層のアーキテクチャを考</p>
---	--	--	---	---

<p>不可欠であることから、中長期計画において機構の役割を明確化しつつ、産学官連携によって研究開発成果の最大化を目指すことを明確化するものとする。また、これまでの新世代ネットワーク技術の研究開発に関する総括を踏まえ、今後のネットワーク研究やテストベッド構築等の活動方針を中長期計画に反映させるものとする。</p>	<p>術を確立する。</p> <p>また、ネットワーク上を流通する情報に着目した、情報・コンテンツ指向型のネットワークに関する研究として、大容量コンテンツ収集・配信並びにヒト・モノ間及びモノ・モノ間の情報伝達等をインターネットプロトコルよりも高効率かつ高品質に行うため、データやコンテンツに応じて最適な品質制御や経路制御等をネットワーク上で自律分散制御に基づき実行する新たな識別子を用いた情報・コンテンツ指向型のネットワーク技術に関する研究を行う。広域テストベッド等での実証実験を行うことで、新たなネットワークアーキテクチャとして確立を目指す。</p> <p>なお、本研究の実施に際しては、研究成果の科学的意義を重視しつつ、ネットワークア</p>	<p>出展等を受けた各種メディア媒体の反響状況(評価指標)</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 報道発表や展示会出展等の取組件数(モニタリング指標) ● 共同研究や産学官連携の状況(評価指標) ● データベース等の研究開発成果の公表状況(評価指標) ● (個別の研究開発課題における)標準や国内制度の成立寄与状況(評価指標) ● (個別の研究開発課題における)標準化や国内制度の寄 	<p>タリングおよび組織内外のネットワーク間の IP アドレス変換サービスを想定し、Firewall と NAT の機能を網内に設定して、SFC のデータ転送を立証した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● ネットワーク・サーバ挙動の監視・分析・調整・割付を繰返して各仮想網内でサービスに必要な資源量を見積るための「ネットワーク資源分配自動調停技術 ARCA (ARCA: Autonomic Resource Control Architecture)」を、実用性能訴求と標準化寄与のためにクラウド環境構築用のソフトウェア群 OpenStack 上で資源調整プラットフォームとして実装し、RedHat Innovation Award Asia Pacific を受賞した。また、ARCA が行う、外部および内部のイベント検出データを相関付け、要求する資源量との関係性を学習する資源調整システムに関し、システムに 15%程度の余分な資源を割り当てることで、資源リクエスト棄却を回避可能であることを確認した。成果を国際会議 ICIN 2018 で発表した。 ● システムが要求する資源量を決定するのに外部イベント検出器から得られたデータ分析が有効であることを立証した。ARCA を、相互接続された 1 マイクロサービスとしてモデル化し、ARCA の各コンポーネントのアルゴリズムを定式化した。資源利用のピーク時およびバースト時に、ユーザーの資源要求棄却を 30%削減できることを確認した。成果をインパクトファクタ 4.682 の IEEE TNSM (Transactions on Network and Service Management) 誌で発表した。 ● 平成 30 年度は、ネットワーク環境の変化に俊敏に対応するサービス品質保証技術として、以下の成果を創出した。 ● ネットワーク資源分配自動調停技術 ARCA の拡張を行い、仮想ネットワークサービスの維持に必要な「計算コスト(設定されたサービス品質維持に必要な資源総量、運用時間、資源調整時間、パケット棄却によるサービス品質低下した場合に生じるペナルティ、から導出)」を関連手法と比べて 12%以上削減可能であることを示した。この研究成果は、ICIN 2019 にて発表された。 ● IA-SFC (Intelligent Adaptive Service Function Chaining: 複数のサービス機能チェイン間で計算資源を自動調停する機構)に対して、AI を適用したネットワーク技術研究を開始し、総務省直轄委託プロジェクトを民間企業 3 社と共に受託した。 ● 5G におけるスライシング技術の自動化手法に関する論文を ITU の旗艦国際会議である Kaleidoscope 2018 国際会議に投稿し、最優秀論文賞を受賞した。本論文では、ネットワーク構築技術で用いられる 	<p>案し、低遅延処理や省電力性を損ねることなく、階層間の制御メッセージ量を従来手法に比べ 1/100 に削減した。</p> <p>○新たな識別子を用いた情報・コンテンツ指向型のネットワーク技術(ICN/CCN)に関する研究として、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・移動体通信方式を設計し、CCNx と比較してハンドオーバー時のデータ損失、およびデータ取得時間を半減することが可能であることを確認した。 ・高品質なストリーミングを実現する L4C2 の基本設計およびシミュレーション評価し、CCNx と比較して制御トラフィックを 80%削減し、QoE を最大 25%向上した。 ・Blockchain 技術を活用したユーザーとコンテンツに対する分散管理機構を設計した。 <p>○レベルの高い研究成果を継続的に創出し、インパクトファクタやサイテーション(他論文からの参照数)が高い論文誌に多くの論文が採択されている。</p> <p>等、科学的意義が大きい独創性、先導性に富んだ成果の創出や将来的な成果の創出が期待される実績が得られた。</p> <p>【社会的価値】</p> <p>○ネットワークの利用者(アプリケーションやサービス)からの要求に応じたサービス間の資源分配・調停及び</p>
--	---	--	---	--

	<p>一キテクチャの確立を目指して関連企業・団体等との成果展開を見据えた産学官連携を推進する。また、これまで新世代ネットワーク技術の研究開発において得られた知見や確立した技術及び構築したテストベッド等の総括を踏まえた上で本研究を進める。</p>	<p>与件数(モニタリング指標)等</p>	<p>機械学習・AI 技術を分類し、ネットワーク制御自動化に不可欠であるネットワークスライス設計、構築、展開、運用、制御、管理を担うネットワーク機能を定義し、トラフィック変動に対してサービス品質を維持するための動的なネットワーク資源調整ならびに運用に役立つ機械学習・AI 技術について、IoT ディレクトリサービスをユースケースに挙げた。</p> <ul style="list-style-type: none"> 令和元年度は、ARCA にネットワークモニタリング及び各サービス内の資源調整制御を行う AI/ML (Machine Learning) の組み込みを実施した。IETF/IRTF で ARCA に関する標準化提案し、国内キャリアとの共同実験を開始見込みであり、令和 2 年度に論文発表見込みである。また、ARCA と、IoT ディレクトリサービスを統合し、資源自動制御機構を広域テストベッド等で性能評価を行った。 民間企業 3 社と共に受託した総務省直轄委託プロジェクトに対し、これまで研究を実施してきた IA-SFC に対して AI を適用したネットワーク技術研究を継続して実施した。計算資源の利用状況を時系列として扱い、これを AI に学習させることで安定的な SFC の移行・再構成案を導くアルゴリズムを開発し、国際会議 IEEE NetSoft 2019 に投稿・採録された。 サービス機能チェイン検証基盤を用いた産学官 9 社での連携実験の成果が、OECC/PSC' 19 の最優秀論文（通称ポストドッドライン論文）の特別セッションに採録された。 <p>○ネットワークインフラ構造やトラフィック変動状況等に基づくサービス品質保証技術に関する研究として、分散配置された多数のデバイスからのデータを低遅延で処理する IoT エッジコンピューティング技術の研究を実施し、複数のサービスに簡便に提供可能なネットワーク基盤を実現するインフラ層とプラットフォーム層の 2 階層のアーキテクチャを考案した。インフラ層では資源配置を抽象化する独自構造「仮想リージョン」の実現により、低遅延処理や省電力性を損ねることなく、階層間の制御メッセージ量を従来手法に比べ 1/100 に削減する効果をシミュレーションを用いた基礎評価により確認した。平成 29 年度には、利用状況が変動する動的な環境においても、低遅延処理や省電力性が損なわれないことを、シミュレーションにより確認した。方式設計と有効性検証結果を採択率 25% の IEEE ICCCN 2017 で発表した。また、プラットフォーム層の基本機能として、膨大な数のデータフローに対しフロー毎に</p>	<p>論理網構築等の自動化に求められる分散制御技術として、</p> <ul style="list-style-type: none"> ARCA の実用性能訴求と標準化寄与のためにクラウド環境構築用のソフトウェア群 OpenStack 上で資源調整プラットフォームとして実装した。 IA-SFC について、総務省直轄委託プロジェクトを民間企業 3 社と共に受託、サービス機能チェイン検証基盤を用い国内企業 9 社で連携実験を行い、技術浸透を図った。 <p>○IoT エッジコンピューティング技術として、クラウド・エッジ連携処理フレームワークを開発、企業連携のために総合テストベッド推進センターが構築中のライドシェア・見守り、スマート空調、コネクテッドカーの各実証システムへ導入した。</p> <p>○新たな識別子を用いた情報・コンテンツ指向型のネットワーク技術 (ICN/CCN) に関する研究として、</p> <ul style="list-style-type: none"> 通信基本ソフトウェアプラットフォーム「Cefore」を開発し、オープンソースとして公開した。 開発コードの大規模検証が容易な仮想ネットワーク環境を提供するため、Cefore を組み込んだネットワークエミュレータも開発した。 ICN オープンテストベッドも開発し、欧州の研究・教育機関向けネットワーク GEANT への接続に成功、日欧共同公募プロジェクト ICN2020 の実験検証基盤として稼働し、活用された。
--	--	-----------------------	---	--

			<p>処理資源を割当てる自律分散処理プラットフォームを設計し、作成した。作成したソフトウェアは github 上でオープンソース公開した。作成したソフトウェアを用いて 1,000 個のセンサーが 10,000 個/秒のデータを生成させるデータフロー処理において、資源割り当てを 100 ミリ秒内に高速動的変更できることを基礎評価した。関連成果は ICNC 2017 (採択率 28%)にて発表した。</p> <ul style="list-style-type: none"> 平成 29 年度には、IoT エッジコンピューティングの実装に関し、連続的に生成されるコンテンツを効率的に取得するため、膨大な数のデータフローに対しフロー毎に処理資源を割当てる分散フロー処理プラットフォームを JOSE テストベッド上で実証し、200 デバイスを想定した環境での動作実証に成功した。5ms 以内の平均データ配信遅延が実現可能であり、かつ、状況に応じたデータ処理の実行位置の変更に伴う配信エラーを少なく保つことができることを確認した。設計とシミュレーションによる有効性検証の成果を、国際会議 IEEE COMPSAC 2017(採択率 20%)で発表した。 平成 30 年度には、IoT エッジコンピューティングを対象としたネットワーク内データフロー処理方式において、依存関係を動的に解決して構造を再構成することでリソース利用効率を向上させる方法を考案した。再構成の際、10 万のノードが存在する状況下で適切な処理リソースを 5 ミリ秒以内に発見可能とする手法を詳細設計、シミュレーションにて効果を検証し、IEEE Globecom 2018 にて発表した。また、インフラ層において低遅延応答を維持可能なクロスレイヤ制御に基づくモビリティ対応手法を設計・実装、広域テストベッド上で動作を確認した。 令和元年度は、前年度までに提案してきた省電力エッジインフラ資源割当方式について、既存クラウドにて広く活用される Kubernetes と互換性を持つエッジコンピューティング環境構築用統合リソースアクセス機能を開発、同機能を用いたエッジインフラテストベッドを StarBED 上に構築開始した。また、クラウド向けデータフロー処理フレームワーク Apache Beam を拡張し、既存クラウド向け処理をエッジコンピューティングに適用するクラウド・エッジ連携処理フレームワークを開発し、同フレームワークについて広域テストベッド JOSE 上で基本性能評価を実施した。さらに、上記開発のインフラ・フレームワークについて企業連携のために総合テストベッド推進センターが構築中のライドシェア・見守り、スマート空調、コネクテッドカーの各実証システムへ導入を開 	<p>○IETF/IRTF 及び ITU-T SG13 において、積極的に多くの標準化提案を継続して実施した。等、社会課題の解決や社会的価値の創出に貢献する成果の創出や将来的な成果の創出が期待される実績が得られた。</p> <p>【社会実装】 ○ネットワークの利用者(アプリケーションやサービス)からの要求に応じたサービス間の資源分配・調停及び論理網構築等の自動化に求められる分散制御技術として、 ・ARCA について、今後の社会展開にむけた国内キャリアとの共同実験を開始する見込みである。 ・ICN/CCN について、Cefore の利用を促進するため、ハンズオンワークショップ実施、IETF ハッカソンへの参加などを継続し、国内外のコミュニティ拡大に努め、技術浸透を図った。</p> <p>○ IETF において、マルチキャスト通信経路状態を把握するための手法「マルチキャスト網トレース」が標準化文書(Proposed Standard RFC)として認定された。また、ITU-T SG13 で共同レポートとして継続的に標準化活動に寄与し、IoT ディレクトリサービスに関する勧告 Y.3074 が承認された。</p> <p>等、社会実装につながる成果の創出や将来的な成果の創出が期待さ</p>
--	--	--	---	---

			<p>始した。</p> <p>○データやコンテンツに応じて最適な品質制御や経路制御等をネットワーク上で自律分散制御に基づき実行する新たな識別子を用いた情報・コンテンツ指向型のネットワーク技術に関する研究として、以下を実施した。</p> <ul style="list-style-type: none"> 平成 28 年度には、移動体通信も含んだ環境における高品位ストリーミングの実現を目的とし、IRTF で標準化検討が始まっている CCN (Content Centric Networking) を拡張した移動体通信方式 (NMRTS: Name-based Mobile Real-Time Streaming) を設計し、CCNx と比較してハンドオーバー時のデータ損失、およびデータ取得時間を半減することが可能であることを確認した。本成果は IEEE Communications Magazine (インパクトファクタ: 10.356) に掲載された。 平成 29 年度には、大容量コンテンツ収集・配信の実現のため、CCN を拡張した L4C2 (Low-Loss Low-Latency Streaming using In-Network Coding and Caching) の基本設計およびシミュレーション評価を行った。L4C2 では、受信するデータ損失を最小限に抑えるため、ストリーミングアプリケーションが許容する最大遅延及びネットワーク内リンクの遅延とデータ損失率を推定し、それらに基づいて、ネットワーク内に配備されるキャッシュ機能と符号化機能を用いた損失データの復元を行い、低遅延かつ高品質なストリーミングを実現した。L4C2 は、CCN の代表的方式 CCNx と比較して制御トラフィックを 80% 削減し、QoE (Quality of Experience) を最大 25% 向上した。本成果は、ネットワーク分野における世界最高峰のフラッグシップ国際会議 IEEE Infocom 2017 (採択率 20%) に採択された。また、コンテンツを効率的に取得するための一技術として、これまで困難であったマルチキャストにおける帯域予約、さらに制御メッセージトラフィックの抑制を可能とする NFV (ネットワーク機能仮想化) ベースのマルチキャスト技術に関する研究を INRIA (仏) と共同で行い、成果がインパクトファクタ 4.682 の IEEE TNSM 誌に掲載された。 令和元年度には、スケーラブルな ICN (Information Centric Networking) / CCN 経路制御アルゴリズムに関して設計・評価を行い IEEE CCNC に投稿・採録された。また、L4C2 (Infocom 2017) にて用いられるトランスポート技術と、他関連論文手法の特性を比較解析し、 	<p>れる実績が得られた。</p> <p>以上のことから、中長期目標期間を着実に達成する成果の創出が認められた他、将来的な成果の創出が期待される実績も得られたため、評定を「B」とした。</p>
--	--	--	--	--

			<p>IEEE Communications Magazine (インパクトファクタ: 10.356, 採録率 19.3%) に投稿・採録された。また INRIA (仏) と共同で、ネットワーク符号化機能を含む CCN ベース移動体通信研究を実施し、EU で展開されているオープンテストベッド R2Lab を用いた評価を行い、IEEE CCNC に投稿・採録された。</p> <ul style="list-style-type: none"> • Cefore を用いた位置情報等に応じた情報共有アプリケーションを NICT オープンハウス 2019 にて動態デモ展示し、これが電波タイムズの1面にて紹介された。 <p>○ヒト・モノ間等の情報伝達を高効率に行うため、IoT に対する ICN/CCN ベースのデータアクセス制御技術研究として、以下を実施した。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 平成 29 年度には、従来の CP-ABE 技術を用いた場合に比べ、認証に用いる帯域幅使用量を半減させることを実証した。本成果は IEEE ICC にて発表、及び IEEE IoT Journal (インパクトファクタ: 7.596) に掲載された。またネットワーク内分散認証方式 (Elsevier DCN 誌) などの研究成果を発表した。 • 平成 30 年度には、ネットワーク内キャッシュ保護のため、ICN ルーター間認証機能、及び Suspension-Chain Model の詳細設計を行い、IEEE TNSE (Transactions on Network Science & Engineering) に採録された。ここで得られた研究成果をプロトコル設計し、IRTF へのドラフト提案に結び付けた。 • 令和元年度は、ネットワーク内キャッシュ信頼性判断のため、Blockchain 技術を活用したユーザーとコンテンツに対する分散管理機構を設計し IEEE Communications Magazine (インパクトファクタ: 10.356, 採録率 19.3%) 及び IEEE Globecom 2019 に投稿・採録された。 <p>○研究成果を社会実装に結びつけるため、新たなネットワークアーキテクチャとして確立することを目的とし、標準化技術を用いた参照実装の公開、広域テストベッド等での実証実験、標準化活動など、以下を実施した。</p> <ul style="list-style-type: none"> • IRTF にて標準化された CCNx メッセージフォーマットに準拠した ICN/CCN 通信基本ソフトウェアプラットフォーム「Cefore」の開発を平成 28 年度から行い、平成 29 年度にオープンソースとして公開した。 	
--	--	--	---	--

			<p>Cefore は、Linux (Ubuntu)、Mac、Raspberry Pi (Raspbian)、Android 上で稼働する。軽量かつ汎用的な基本機能実装 (cefnetd) と拡張機能 Plugin ライブラリ (キャッシュ、モビリティ、トランスポート、など) を分離することで、高機能なバックボーンルーターから軽量なセンサーノードまで幅広く動作することを特徴とする Cefore の利用者拡大のため、電子情報通信学会主催の産学官連携 Cefore チュートリアル / ハンズオンワークショップを実施し、また IETF ハッカソンに参加して Cefore のプロモーションを行うなど、国内外のコミュニティ拡大及び技術の普及活動に努めた。令和元年には、Cefore を用いた位置情報等に応じた情報共有アプリケーションが電波タイムズの1面にて紹介された。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 開発コードの大規模検証が容易な仮想ネットワーク環境を提供するため、Cefore を組み込んだネットワークエミュレータを開発した。1,000 台規模の Cefore ノードからなる模倣インターネットトポロジーを約 1 分で構成し、ネットワーク上のキャッシュ配置やキャッシュ置換アルゴリズムを自在に設定出来る。 • 実ネットワーク上での実証実験のため、ICN オープンテストベッド (CUTEi : Container-based Unified Testbed for ICN) を開発し、上記 Cefore をその上に導入し、実証実験用にテストベッドトポロジーを構成するための GUI 開発を行った。CUTEi は、欧州の研究・教育機関向けネットワーク GEANT への接続に成功し、平成 29 年から令和元年度まで実施された日欧共同公募プロジェクト ICN2020 の実験検証基盤として稼働し、活用された。 • 情報指向型ネットワークの一つであるデータ指向ネットワーク (DAN : Data Aware Networking) に関する ITU-T での標準化活動を推進し、DAN のユースケースをまとめた補助文書 Sup35 が平成 28 年 5 月に、情報指向ネットワークの要求条件と機能を規定した ITU-T 勧告 Y.3071 が平成 29 年 3 月に、それぞれ成立した。 • ITU-T SG13 において共同ラポータとして継続的に標準化活動に寄与した。IoT-DS のフレームワークは、平成 29 年度に勧告草案 Y.ICN-IoTDS-framework 作成を開始し、令和元年度に Y.3074 として勧告承認された。また令和元年度には、前年度に提案した IoT アプリケーション固有の ICN フレームワークを定義した Y.ICN-interworking 勧告草案の更新を行い、令和 2 年度に勧告承認される見込みである。 	
--	--	--	---	--

		<ul style="list-style-type: none"> • 総務省委託プロジェクトの参画者と共同で、AIを適用したネットワーク技術研究を総括し、成果論文発表に加え、令和元年度にはアーキテクチャとサービスデザインに関する2つのSG13への勧告草案提出を行い、令和2年度には勧告承認を得る見込みである。さらにITU-T FGML5G(Focus Group on Machine Learning for Future Networks including 5G)に提案していたユースケースに関する補足文書 Y.sup55 の承認を得た。 • IETFにおける標準化提案として、MBONED WGにて提案していたマルチキャスト通信経路状態を把握するための手法「マルチキャストネットトレース(Mtrace ver.2)」が標準化文書(Proposed Standard RFC)として認定された。またPIM WGに対し、IGMP/MLD標準機能要件のドラフト提案を行った(令和2年度にドラフト認定見込み)。またOPSA WGに対し、ネットワーク構築自動化ARCA検証にも利用可能なNetwork Telemetry Frameworkのドラフト提案を行ない、令和元年度にドラフト認定された。 • IRTFでは、上記「マルチキャストネットトレース」の仕様をベースとし、ICNRGにて「CCNにおけるネットワーク内キャッシュ状態および通信経路の状態把握を行うトレースプログラム」を提案し、RGドラフトに認定され、令和2年度に標準化(RFC)認定見込みとなった。また「ICN名前解決に関する要件」を提案し、RGドラフトに認定され、令和2年度に標準化(RFC)認定見込みとなった。NWCRG(ネットワークコーディング・リサーチグループ)では「ICN/CCNにおけるネットワーク内符号化機能要件」を提案し、RGドラフトに認定され、令和2年度に標準化(RFC)認定見込みとなった。ネットワーク構築自動化ARCAのメカニズムにおいてAIをサポートするための資源割当インタフェースをNMRG(ネットワークマネージメント・リサーチグループ)にドラフト提案した(令和2年度にドラフト認定見込み)。 <p>○第四期中期計画における研究意義と重要性、さらにこれらを発展させた新たな研究領域を創造するための国際的なコンセンサスを得るため、ネットワーク内データ解析とネットワーク内コンピューティングを融合した研究グループIEEE SIGBDIN(Special Interest Groups on Big Data Intelligent Networking)およびSIGIIE(Special Interest Groups on Intelligent Internet Edge)の立ち上げに成功した。</p>	
--	--	---	--

<p>〇ワイヤレスネットワーク基盤技術</p> <p>「モノ」だけでなく人間や物理空間、社会システム、ビジネス・サービス等のあらゆるものがICTによって繋がる、IoTを超越した時代においてはワイヤレスネットワークが重要な役割を果たすことになることから、5G及びそれ以降のシステム、人工知能(AI)やロボットを活用するシステム、ビッグデータ構築に必要となるデータ収集システム、高度道路交通システム(ITS)等に対する高度なニーズやシステム自体のパラダイムシフト(設計思想等の劇的変化)に対応するためのワイヤレスネットワーク基盤技術等を研究開発するものとする。</p>	<p>(2)ワイヤレスネットワーク基盤技術</p> <p>物理世界とサイバー世界との垣根を越えて、人・モノ・データ・情報等あらゆるものがICTによってつながり、連鎖的な価値創造がもたらされる時代に求められるワイヤレスネットワーク基盤技術として、5G及びそれ以降の移動通信システム等、ニーズの高度化・多様化に対応する異種ネットワークの統合に必要なワイヤレスネットワーク制御・管理技術の研究開発を行う。また、多様化するニーズに対応するため、人工知能(AI)やロボットを活用するシステム等に求められるレイテンシ保証・高可用性を提供するワイヤレスネットワーク高信頼化技術や、ビッグデータ構築における効率の高いデータ収集等に求められるネットワーク規模及び利用</p>	<p>(2)ワイヤレスネットワーク基盤技術</p> <ul style="list-style-type: none"> ワイヤレスネットワーク制御・管理技術では、5Gの「超高速・超低遅延・超多数接続」を実現するサービスエリアとして、自営マイクロセルの運用アーキテクチャを検討し、自営マイクロセルオペレータ — 既存オペレータ間のユーザ情報共有等の連携による、5G無線を想定するミリ波帯サービスの実証に成功した。上記運用アーキテクチャについては、3GPP SA2に提案し、成果文書案に採録された。さらに、自営マイクロセルの実装形態として、自動運転に資するスマート電子カーブミラーを研究開発し、路側センサにより移動中の自動車、歩行者、障害物を検出し情報として共有する実証に成功した。同様に自営マイクロセルの適用事例であるスマートオフィス環境の実証に成功した。さらに、システム協調制御技術を使い、マイクロセル基地局を共用することで、遠隔地の端末にも5Gのサービスを柔軟に提供できることを確認するとともに、営業路線を利用した鉄道システムのための応用実証についての検討を継続し、栃木県烏山線での実証を行った。特に本実証では、NICTより開発され、当該自営マイクロセル到着時に無線サービスを開始するまでの時間を短縮可能な事前仮想接続技術の効果についても確認した。 ワイヤレスネットワーク適応化技術では、工場の無線運用形態を追求する「FFPJ」を推進し、国内企業間連携の下、実工場内でデータ取得と検証実験を主導的に推進し、ドイツとの連携を行い、IEEE 802標準化にも寄与した。また、SUNシステムの物理層、MAC層、上位層の拡張による、複数無線機網構造の多様化アプリへの対応を検討し、IEEE 802.15.4g標準規格をベースとする1000台～10000台規模の多数無線機連携動作形態、及び、スリープ期間を活用した省電力動作形態についてそれぞれ仕様検討と評価装置整備、実証による評価を行った。多数無線機連動動作形態については、NICTが主導的に策定したIEEE 802.15.10の機能に即して、同一のパーソナルエリアネットワーク(PAN)内で複数の経路選択制御を実装する形態を実証した。省電力動作形態については、省電力のセンシングと、低遅延の機器制御を両立しながら、同一PAN内で異なるMACパラメータを運用する形態について実証した。上記複数無線機網構造仕様について、Wi-SUN認証規格への反映を行った。 ワイヤレスネットワーク高信頼化技術では、インフラに依存せず無線通信網構築が可能な端末間通信について、無線機配置環境等のパラメータ拡張検討を行い、UWB無線の制度緩和に即したARIB標準規格策定に貢献した。さらに、IEEE802.15.4z標準化において、国内規 	<p>(2)ワイヤレスネットワーク基盤技術</p> <p>【科学的意義】</p> <ul style="list-style-type: none"> 工場等製造現場における無線通信の適用モデルの策定を進め、SRF無線プラットフォームによるブリッジ処理を提案し、IEEEにおける工場無線のホワイトペーパーを作成した。 海底下の埋設物検出に1MHz電波が利用可能である事を示したことは大きな成果であるほか、ワイヤレス通信の適用範囲拡大に向けた極限環境技術を検討した。 低遅延・多数接続アクセス方式のSTABLEを開発し、実運用環境における実証実験を実施した。 既存広域網を介して複数拠点の自営網間を柔軟に接続する論理メッシュ化技術を開発し、地域ネットワークの高度化に貢献した。 複数の論文誌、学会等への採択、受賞があり着実な成果をあげた。 <p>等、科学的意義が大きい独創性、先導性に富んだ成果の創出や将来的な成果の創出が期待される実績が得られた。</p> <p>【社会的価値】</p> <ul style="list-style-type: none"> 自営マイクロセルについて、自営網と5Gの公衆網の認証・連携するモデルを検討し、技術実証を進めた。実用化に資する技術規格の検討に貢献している。 これまで開発してきた自営マイクロセルに関する技術を今後普及が
---	---	--	---

<p>また、研究開発に際しては、機構が産学官連携でリーダーシップを発揮しつつ、国内外の相互接続試験や実証実験に参加し、国内制度化及び国際標準化に積極的に寄与することで研究開発成果の最大化を目指すものとする。さらに、ミリ波やテラヘルツ波を利用した通信システムの実現に向けた未踏周波数領域の開拓や電波伝搬特性の研究等のワイヤレス分野の基礎・基盤領域の取組を行うものとする。</p> <p>さらに、海中・水中、深宇宙、体内・体外間等の電磁波の利用に課題を抱えている領域における通信を確立するための技術を研究開発するものとする。</p>	<p>環境に適応するワイヤレスネットワーク適応化技術に関する研究開発を行う。さらに、これらの研究開発成果をもとにして、高度道路交通システム(ITS)や大規模災害発生時の情報配信等、ネットワーク資源が限定される環境においても、ニーズに基づく情報流通の要件(レイテンシや収容ユーザー数等)を確保するネットワーク利活用技術の研究開発に取り組む。研究開発に際しては、産学官連携において機構がリーダーシップを発揮しつつ、国内外の相互接続試験や実証実験に参加し、国内制度化及び国際標準化に積極的に寄与することで研究開発成果の最大化を目指す。この他、ワイヤレスネットワークにおけるパラダイムシフト(設計思想等の劇的変化)に対応できるよう、異分</p>		<p>制緩和を考慮した Secured ranging 用バンドを欧州と共同提案し、ドラフトに収録された。また、3次元空間電波伝搬特性データに基づく電波伝搬シミュレータの開発を通じ、単一周波数資源の複数台共用に成功した。また、建造物密集地や山間部などの電波的遮蔽が多い環境下で、ロボットやドローンの見通し外運用に資する制御通信システム「コマンドホッパー」の研究開発を継続し、920MHz 帯マルチホップ通信を用いたドローンの飛行制御および 169MHz 帯の伝搬特性評価を実施した。また、同じ空域の飛翔体(ドローン、有人ヘリコプター等)間でリアルタイムに位置情報等を共有する通信システム「ドローンマップパー」の研究開発を継続し、ドローン同士でリアルタイムに共有した位置情報に基づき、自動で衝突回避制御を行う実証に成功した。また、高高度無人機を活用した制御システム構想を ICAO FSMP と RPAS に入力した。加えて、ICAO が現在改訂作業中の RPAS に関する勧告案への入力を準備中である。さらに、海中における無線電波適用技術について、海底下に埋設されている物体を電波によって検出する海底下埋設物センシングについて、浅海域(深度 30m)において模擬埋設物に対して原理検証を行った。結果、1MHz の電波によって、金属の埋設物を電波を使って検出できることを確認した。さらに、本センシング技術に関して、スパースモデリングを利用した海底下埋設物可視化技術の実証試験に成功した。また、体内外無線通信として、端末低消費電力化検証を実施した。また、電波による体内端末位置推定方法に関して民間企業と資金受入型共同研究を実施、ミリオーダの位置推定精度を模擬環境で実証した。また、「機動的ネットワーク構成技術」については、高速無線接続機能(IEEE802.11ai)と分散 Radius 認証を組み込んだ無線デバイスドライバ、常時接続を前提としないノード間で協調・統合動作する分散エッジ処理基盤を開発し、従来比 40 倍以上の伝送量の実証に成功した。また、即時構築ネットワーク環境のシステムを構築してその動作について実証した。(見込み)</p> <ul style="list-style-type: none"> • 災害時に重要な「長持ち=省電力」な通信手段の提供として、LTE の電波状況が良好な端末に、他の端末が LTE を切断して省電力な Wi-Fi で接続することで、「端末群」で見た通信に要する消費電力を大幅に低減できること(スマートフォンを用いた実験により、エネルギー利用効率を最大で 40%向上、バッテリーを 1.5 倍長持ち)を実証した。 • 熊本地震の応急対応として、熊本県高森町役場において災害対策本部(総務課)に行政用のアクセスポイント(AP)と町役場入り口付近に住民用の AP を設置して応急ネットワーク構築して WINDS 経由でイン 	<p>望まれるローカル 5G サービスに活用しようとしている。</p> <ul style="list-style-type: none"> • IEEE802.15.8 の標準化達成、5G/B5G として STABLE、自営マイクロセルの技術実証の推進と 3GPP での寄与文書入力、工場へのワイヤレスシステム導入のためのプラットフォーム開発とホワイトペーパー策定およびセキュリティガイドライン策定など、社会的に注目される技術実証を多く実施した。 • 工場内、極限環境での適用拡大に貢献した。 • 工場の無線化について、FFPS を推進し、機構の中立的立場を生かした国内外の企業との連携の場を構築しつつ現場の課題・ニーズを把握する取り組みを行った。 • 3GPP および IEEE802.1 に積極的な貢献をした。 • ドローンについて、衛星通信事業者と連携した実証実験を行った。 • 約 10km 離れた拠点間を移動する車両について、常時接続が保たれない環境下で、高解像度な写真データの伝送に成功した。 • 各地での訓練や実証実験等を多く実施し、開発技術の有用性をアピールしている。 • 高速無線接続機能と分散 Radius 認証を組み込んだ無線デバイスドライバを開発し、従来比 40 倍以上の伝送量を実証した。 • 端末間連携により、40%以上エネルギー利用効率を向上させ、バッテリーを 1.5 倍長持ちさせることに成功した。
--	--	--	--	---

	<p>野・異業種等を含む産学官連携を推進するとともに、機構の基礎体力となる基礎的・基盤的な研究にも取り組む。</p> <p>また、未開発周波数帯であるミリ波やテラヘルツ波を利用した通信システムの実現に向けて、フロンティア研究分野等とも連携しつつ、平成 37 年頃における 100Gbps(ギガビット/秒)級無線通信システムの実現を目指したアンテナ技術及び通信システム設計等に関する研究開発を行う。さらに、海中・水中、深宇宙、体内・体外間等、電磁波の利用に課題を抱えている領域におけるワイヤレス通信技術の確立を目指して、電波伝搬特性の研究や通信システム技術に関する研究開発にも取り組み、模擬通信環境等における実証を行う。</p>		<p>ターネット環境を提供し、実災害対応として各 AP で最大スループット 18Mbps を記録することができた。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 内閣府主催で行われた帰宅困難者支援訓練(宮内庁+千代田区、中央区の 2 回)において、NICT が開発した技術を用いた分散自営網を展開し、双方向映像伝送等の実証に貢献したとともに、中央区役所内の既設ファイバ網を活用した、残存ネットワークリソース活用による実証も初めて成功した。 • LoRa フラッドング技術の一部を活用して患者搬送情報共有システムを開発し、高層ビル群が密集する渋谷区内において、病院屋上に設置した LoRa 親機周辺約 2km 以内で、移動車両に搭載した LoRa 子機と通信できること、親機間では LoRa フラッドング技術で情報共有が可能であることを示すフィールド実証実験に成功し、その有効性を他に先駆け実証した。 • 立川地区にある内閣府災害対策本部予備施設とその周辺施設に、自律分散型自営ネットワークの機器(NerveNet と無線機)の実装を完了し、災害対策本部設置準備訓練で問題なく稼働できただけでなく、今後、実災害が発生した時にも使用される予定である。 • 高知県総合防災訓練において、約 10km 離れた拠点間を前述の一部技術(接近時高速無線接続にかかる分散エッジサーバ連携技術)を搭載した車両が移動し、拠点に接近した際に臨時ネットワークを構築することにより、公衆携帯電話網が途絶し、インターネットへの常時接続が保たれない環境下で高解像度写真データの情報を送ることに成功し、その有効性を実フィールドで実証した。さらに、高知県香南市内における双方 40km/h でのすれ違い通信(接続時間は平均約 20 秒)でも平均約 40MB の転送に成功し、従来方式に比べ 33%の改善を実フィールドで実証した。 • 地域網の応用実証として、LoRa 応用による高信頼・高効率フラッドング技術を活用し、広域即時展開型地震観測システム構築に向けた機器開発も実施した。また、耐災害 ICT 関連の IoT 技術として、不審船自動監視システムとしての音紋による自動検出の実現性検証の成功や、MEMS センサーと Raspberry Pi を組み合わせた小型インフラサウンドセンサーデバイスを開発し、東北大学キャンパスのワイヤレスメッシュテストベッドや桜島観測施設に設置して単体および多点連携インフラサウンド測定を実施し、桜島の噴火口位置推定を実現した。 	<ul style="list-style-type: none"> • 無線認証技術において積極的に特許を出願している。 <p>等、社会課題の解決や社会的価値の創出に貢献する成果の創出や将来的な成果の創出が期待される実績が得られた。</p> <p>【社会実装】</p> <ul style="list-style-type: none"> • FFPJ については、ドイツも巻き込んで標準化やガイドラインの作成まで進めてきている。 • 工場等製造現場における無線通信の適用モデルの策定を進め、Smart Resource Flow 無線プラットフォームに関する工場無線のホワイトペーパーを策定した。 • FFPJ 関連のライセンス提供に関する検討が進みつつある点が期待できる。 • 多数無線機連携動作および省電力動作について、民間企業への技術移転と並行して社会展開を進めた。 • SUN の超省電力仕様の MAC 開発実装により、実用性を高めた。 • NerveNet に基づく分散自営網を立川広域防災拠点に構築・導入し、2年間稼働させて現在も継続稼働中である。 • 立川防災施設への NerveNet 導入は、試験的ではあるが実用に結びつく可能性を高めた。 <p>等、社会実装につながる成果の創出や将来的な成果の創出が期待さ</p>
--	---	--	---	---

				<p>れる実績が得られた。</p> <p>以上のことから、中長期目標期間を着実に達成する成果の創出が認められた他、将来的な成果の創出が期待される実績も得られたため、評定を「B」とした。</p>
<p>○フォトニックネットワーク基盤技術</p> <p>2020年代には現在の1千倍以上の通信トラフィックが予想されていることから、世界最高水準のネットワークの大容量化を実現するため、1入出力端子あたり1Pbps(ペタビット/秒)級の交換ノードを有するフォトニックネットワークに関する基盤技術について、産学官連携による研究</p>	<p>(3)フォトニックネットワーク基盤技術</p> <p>5G及びそれ以降において予想される通信トラフィックの増加に対応するため、大容量マルチコアネットワークシステム技術に関する研究開発を行う。また、急激なトラフィック変動や通信サービスの多様化への柔軟な対応を可能とする光統合ネットワーク技術及び災害発生時においてもネットワークの弾力的な運用・復旧を可能とする災害に強い光ネッ</p>		<p>(3)フォトニックネットワーク基盤技術 (ア) 大容量マルチコアネットワークシステム技術</p> <p>○大容量マルチコアネットワークシステムに関する基盤技術、およびマルチコア/マルチモード・オール光交換技術を確立するためとして、以下を実施した。</p> <ul style="list-style-type: none"> マルチコアオール光スイッチングの原理確認のために、平成28年度は、空間光学技術を活用した空間多重用ファイバー括光スイッチを提案した。マルチコアファイバはコア数拡大により大容量伝送を実現する一方で、中継装置においてコア数分のスイッチ素子を実装したスイッチが必要であったが、本スイッチでは空間多重信号分離素子を使用しておらず、1個のスイッチング素子で多種多様な空間多重用ファイバに対応可能である。7コアファイバを利用し、世界最高コア数である7コア一括光スイッチを実装した。 <p>平成29年度は、音響光学素子(AOM)ベース7コア一括光スイッチを開発した。電界吸収型(EA)光スイッチと併用し、各光スイッチの切替速度等を活かしてネットワークに必要なパケット転送機能やパケット輻輳回避機能、プロテクション機能を実現した。パケット輻輳回避機能</p>	<p>(3)フォトニックネットワーク基盤技術 【科学的意義】</p> <p>○大容量マルチコアネットワークシステム技術について、マルチコア光ファイバに加え光スイッチや光増幅器でも世界トップレベルの研究成果を数多く継続的に創出し、常に世界を牽引している。</p> <ul style="list-style-type: none"> 標準外径・3コア光ファイバを用い、172テラbpsで2,040kmの大容量・長距離伝送実験に成功した。伝送容量と距離の積が351ペタbps×kmとなり、これまでの世界記録の約2倍である。 標準外径・4コアファイバで標準外径光ファイバの伝送容量世界記録610テラbps伝送に成功した。 38コア・3モードファイバで伝送容量と周波数利用効率の世界記録を更新した。

<p>推進や早期の社会実装を目指したフィールド実証等により、平成 32 年度までに確立するものとする。</p> <p>また、急激なトラフィック変動やサービス多様化への柔軟な対応を可能とするための技術の研究開発を行うとともに、災害発生時にネットワークの弾力的な運用・復旧が可能になる技術の研究開発を行い、研究開発成果の着実な社会実装を目指すものとする。</p>	<p>トワーク技術の研究開発に取り組む。</p> <p>(ア)超大容量マルチコアネットワークシステム技術</p> <p>1 入力端子当たり 1Pbps(ペタビット/秒)級の交換ノードを有する超大容量マルチコアネットワークシステムに関する基盤技術として、マルチコア/マルチモードファイバを用いた空間多重方式をベースとしたハードウェアシステム技術及びネットワークアーキテクチャ技術の研究開発を行う。また、マルチコア/マルチモード・オール光交換技術を確立するため、終端や完全分離せずとも光信号のまま交換可能とするオール光スイッチング技術の研究開発に取り組む。さらに、マルチコアファイバ等で用いられる送受信機に必須の小型・高精度な送受信技術</p>		<p>については、光通信分野のトップカンファレンスである国際会議 OFC (Optical Fiber Communication Conference) 2018 にて発表した。</p> <ul style="list-style-type: none"> マルチコアオール光スイッチング技術の研究開発として、平成 29 年度は、ナノ秒の切替速度の電界吸収型(EA)光スイッチ素子を並列化、宛先信号に応じて複数素子を同時に駆動させるコントローラを備えた高速並列光スイッチシステムを開発した。本光スイッチシステムは、平成 28 年度に空間光学技術を活用して開発した 7 コア一括光スイッチと比較し 100 万倍高速で、世界記録となる 53.3 テラ bps の 7 コア多重光パケットスイッチングおよび 38km 伝送を実験により実証した。光通信分野のトップカンファレンスである国際会議 ECOC (European Conference on Optical Communication) 2017 の最優秀論文(通称ポストデッドライン論文)の特別セッションに採択された。その後、さらなる高速化を進め 3 年で従来の世界記録を 6.5 倍更新する 83.3 テラ bps を達成し、OFC 2018 にてカテゴリのトップスコア論文として採択された。 <p>令和元年度は、大規模ミラーベース光スイッチ(MEMS)、波長スイッチから構成される大規模・低損失光スイッチノードを開発した。AO ベース 7 コア一括光スイッチを用いた 2x1 光スイッチによる冗長構成も備えた。22 コア多重 1 ペタ bps 光パススイッチング実験にも成功、世界で初めてペタビット超級スイッチング技術の実証となった。本成果は、ECOC2019 の最優秀論文(通称ポストデッドライン論文)の特別セッションに採択された。</p> <p>令和2年度は、ペタビット級ネットワークの長延化のために、空間多重信号分離素子を使用しないコア単位スイッチングが可能な低損失光スイッチを開発する予定である。</p> <ul style="list-style-type: none"> マルチコアファイバ光ネットワークのハードウェアシステム技術として、平成 28 年度は、従来コア毎に必要なハードウェアを 1 個にすることが可能な「空間スーパーチャネル光パケット方式及び一括光スイッチシステム」を提案・実証し、OSA 論文誌 Journal of Optical Communications and Networking にて発表した。 マルチコア/マルチモードファイバを用いた空間多重方式をベースと 	<ul style="list-style-type: none"> 19 コア一括光増幅器を用いた伝送実験で、伝送容量と距離積の世界記録を更新した。 世界初のペタビット超級スイッチング技術を実証した。 <p>○光統合ネットワーク技術について、時間軸・波長軸に対するダイナミックな制御を瞬時に行う技術及び関連するハードウェアシステム技術として、フレキシブル光パスノードを提案し、最大 8 波長の複数光パス一括の経路切替時の通信品質保持に成功した。</p> <p>等、科学的意義が大きい独創性、先導性に富んだ特に顕著な成果の創出や将来的な成果の創出が期待される実績が得られた。</p> <p>【社会的価値】</p> <p>○超大容量マルチコアネットワークシステム技術について、</p> <ul style="list-style-type: none"> 中長期計画の大容量のマルチコアファイバの研究開発に加え、早期実用化に適した標準外径のマルチコアファイバの開発を開始し、力を入れている。 IoT、5G、高精細画像伝送等の普及に伴う通信量の爆発的増加等に対応するための大容量トラフィックの収容を可能にするペタビット級光ネットワークの実現に必要な技術を開発した。 <p>○光統合ネットワーク技術について</p>
---	---	--	---	---

	<p>を確立するため、送受信機間の低クロストーク化等に関する研究開発を行う。加えて、更なる大容量化の実現に向けて、世界に先駆けた空間スーパーモード伝送基盤技術の確立を目指して、関連するハードウェアシステム技術の研究開発を行う。産学官連携による研究推進及び社会実装を目指したフィールド実証等によって各要素技術を実証し、超大容量マルチコアネットワークシステムの基盤技術を確立する。</p>		<p>したハードウェアシステム技術として、空間ホログラム技術の活用を研究し、平成 28 年度は、多数のモードが多重化された光信号を一つの光デバイスで分離可能なモード分離デバイスの原理確認を行った。平成 29 年度は、532nm 波長用ホログラム材料を用いて、532nm 波長によるモード多重信号の記録、850nm 波長による再生(分波)を実証し、学術論文誌 OSA Applied Optics にて発表した。</p> <p>平成 30 年度は、通信波長帯 1550nm において空間モード多重信号(3 モード)の分離に世界で初めて成功した。単一光学素子(体積ホログラム)を用いた簡素な空間光学系により、拡張性が高く、従来技術よりも小型化が可能なモード分離器を実証し、ECOC 2018 にて発表した。</p> <p>令和元年度は、空間ホログラム技術を活用したモード分離デバイスの分離機能を従来の 3 モードから 5 モードへ拡張することに成功し、世界トップレベルを堅持している。</p> <p>令和2年度は、ホログラム型モード合分波器をマルチモード伝送システムに組み入れ、5 モード伝送試験を実施予定である。</p> <ul style="list-style-type: none"> マルチコア/マルチモードファイバを用いた空間多重方式をベースとしたネットワークアーキテクチャ技術として、平成 28 年度は、海外研究機関と連携し、空間多重方式向けクロスコネクタを用いたネットワークアーキテクチャを提案し、従来の波長多重方式ネットワークと比較して 7 倍以上となる光資源量の有効活用方法として、波長フィルタ無し伝送やコア間分離による安全性確保などを検証し、ECOC 2016 にて発表し、報道発表も行った。 <p>平成 29 年度はマルチ粒度光チャネルに対応した各種光スイッチや 19 コア光増幅器を実装した 2x2 光スイッチノードを構築した。7 コア一括スイッチを用いた 10 テラ bps 7 コア多重光パスや 1 テラ bps 光パケットのスイッチング及び 19 コアファイバ 38km 伝送を実験により実証し、ECOC 2017 にて発表した。</p> <p>平成 30 年度は、通信性能要求に応じたマルチ粒度光チャネル提供方式を提案し、マルチ粒度光チャネルに対応した各種光スイッチや 19</p> 	<p>て、光スイッチトランスポートノード基盤技術の研究開発として、光通信システムのオープン化の実現の上で重要なデバイスである高線形性光増幅器を開発した。</p> <p>○災害に強い光ネットワーク技術について、光ネットワークでの監視機能が喪失したユースケースに対し、応急復旧用ユニットなどによる、光監視機能回復機構の実装、およびそれらの情報を自律分散的に収集するロバストなテレメトリ収集機構を実装し、実証実験を実施した。</p> <p>等、社会課題の解決や社会的価値の創出に貢献する顕著な成果の創出や将来的な成果の創出が期待される実績が得られた。</p> <p>【社会実装】</p> <p>○超大容量マルチコアネットワークシステム技術について、早期実用化に適した標準外径マルチコアファイバでの大容量伝送実証に加え、産学と連携しイタリアのラクイラ市の実環境テストベッドにおける実証実験を行った。</p> <p>○災害に強い光ネットワーク技術について、通信キャリア間での暫定共用パケット転送網の建設・自動制御のデータ層相互接続実験を、世界で初めて実施し、機密情報漏洩なしの全自動制御を実現、さらに資源提供の対価に基づいたビジネスモデルの観点を取り入れたキャリア間需給</p>
--	--	--	---	---

			<p>コア光増幅器を実装した 2x2 光スイッチノードを構築した。7 コア一括スイッチを用いた 10 テラ bps 7 コア多重光パスや 1 テラ bps 光パケットのスイッチング及び 19 コアファイバ 38km 伝送を実証、7 コア一括光スイッチ含めた各チャンネル用光スイッチのソフトウェア制御も検証した。また、既存の IP ネットワークと接続するインターフェースを備えた通信システムを構築し、IP パケットのデータタイプに応じて、光チャンネルを選択する方法およびマルチコアネットワークにおける IP パケット伝送を実証した。本成果は、学術論文誌 MDPI (Multidisciplinary Digital Publishing Institute) Photonics Journal に掲載された。</p> <p>また、データサイズを考慮した光パケットの空間チャンネルの適切なスライス化と資源割当手法を提案し、資源利用率向上と低遅延な衝突回避を証明し、通信分野最大の国際会議 IEEE Globecom 2018 にて発表した。</p> <p>令和元年度は、マルチコアファイバ、マルチモードファイバや大容量光スイッチングノードを用いて、複数シナリオでスイッチング実験を実施し、様々なネットワーク運用方法を実証し、1 ペタ bps 光パススイッチング実験にも成功した。</p> <p>○マルチコアファイバ等で用いられる送受信機に必須の小型・高精度な送受信技術を確認するため、送受信機間の低クロストーク化等に関する以下の研究開発を実施した。</p> <p>平成 28 年度は、高密度に集積した光導波路や高周波信号線路において、各線路の伝送容量のクロストーク依存性を明確化し、光と無線を融合した伝送システムにおいてクロストーク抑圧・制御が重要であることを示した。さらに、光ファイバや高周波線路等の複数のコンポーネントを経由した伝送線路において、伝送の周波数特性やクロストーク等の諸現象を伝達関数として伝送路状態を事前学習することで、線路の周波数特性の影響を等価する技術の開発に成功した。</p> <p>平成 29 年度は、送受信素子の高密度化と面的なパラレル化にともない発生する高周波クロストークに関して、その発生メカニズムの数値解析を実施し、デバイス分野のトップカンファレンス CLEO (Conference on Lasers and Electro-Optics) にて発表した。</p>	<p>マッチングプラットフォームの開発と評価を行った。</p> <p>等、社会実装につながる成果の創出や将来的な成果の創出が期待される実績が得られた。</p> <p>以上のことから、中長期目標期間に着実に達成した上で、顕著な成果の創出が認められた他、将来的な成果の創出が期待される実績も得られたため、評定を「A」とした。</p>
--	--	--	---	--

			<p>平成 30 年度は、光や高周波等のクロストーク低減を考慮した小型受信デバイスの高速化技術の研究開発として、高度に並列集積化された半導体素子等の配線間クロストークの解析と、クロストーク低減構造の検討を実施した。</p> <p>また、マルチコアファイバのコア間や伝搬モード間のクロストークのモデル化についての研究開発として、長距離伝送とコア間クロストークによるペナルティの影響について、7 コアファイバおよび広帯域 WDM (Wavelength Division Multiplexing) 信号を用いた周回実験系を構築して、最長で大洋横断に匹敵する 10,000km までの調査を行った。C 帯、L 帯に渡るクロストークペナルティの差が大きく異なる(各々 12.5%、58%)ことが判明した。本成果は、る ECOC 2018 に採択された。</p> <p>令和元年度は、並列集積に関するクロストーク抑圧技術を基に、マルチコアファイバを用いたパラレル大容量伝送技術のための小型並列送受信機の試作と高速動作が確認された。</p> <p>○空間スーパーモード伝送基盤技術に関連するハードウェアシステム技術の研究開発として、以下を実施した。</p> <ul style="list-style-type: none"> • コア間クロストークや非線形光学効果の研究として、平成 28 年度は、非線形光学効果がコア間クロストークにも影響を与えることを世界で始めて実験的に明らかにし、現象のモデル化に成功した。マルチコアファイバを用いた波長多重スーパーモード伝送システムの設計に重要な指針を与えた。 平成 29 年度は、動的に変動するクロストークと変調フォーマットの関係を明らかにし、システム安定度の向上に資する設計指針を創出した。また、広い波長範囲で群遅延差の異なる高次モード間で有効に動作する干渉除去アルゴリズムを実装した。 平成 30 年度は、高非線形マルチモードファイバにおける非線形光学効果を用いて、多値変調光信号のモード間波長変換実験に成功し、波長変換の柔軟性を向上させた。本成果は、OFC 2019 において、光伝送カテゴリーのトップスコア論文に採択された。令和元年度は、コア間クロストークや非線形光学効果の研究として、3 モードファイバを用いた 2800km の周回伝送実験系において、機械的振動による結合ダイナミクスを調査した。本成果は、OFC2020 においてファイバカテゴリー 	
--	--	--	---	--

			<p>一のトップスコア論文に採択された。</p> <ul style="list-style-type: none">• 早期実用化を目指した標準外径/準標準外径光ファイバ伝送の研究として、 平成 29 年度は、空間多重用の標準外径(0.125mm)ファイバとしては世界記録となる容量・距離積を更新する 159 テラ bps 光信号の 1045km マルチモードファイバ伝送実験に成功し、OFC2018 の最優秀論文(通称ポストデッドライン論文)の特別セッションに採択された。 平成 30 年度は、標準外径(0.125mm)の数モードファイバを用いた伝送実験において、モードあたりの周波数利用効率の世界記録となる、11.24 ビット/秒/ヘルツを達成した。国際会議 PSC(Photonics in Switching and Computing) 2018 において、最優秀論文賞を受賞した。さらに、既存光ファイバとほぼ同じサイズの直径 0.16mm の 4 コア・3 モードファイバを用いて、1.2 ペタ bps 伝送達成した。ペタビット級の伝送能力を持つマルチコアファイバとしては最も細く情報密度が高い。標準光ファイバと同じ被覆外径で、ケーブル化の際に既存の設備を流用することが可能であり、早期実用化が期待できる。本成果は、ECOC2018 の最優秀論文(通称ポストデッドライン論文)の特別セッションに採択された。 令和元年度は、標準外径(0.125mm)・4 コアファイバで 3 つの波長帯域(S,C,L) を使い、標準外径光ファイバの伝送容量の世界記録に当たる 596 テラ bps 伝送に成功した。本成果は、OFC 2020 において、光伝送カテゴリーのトップスコア論文に採択された。さらに同じファイバを用いた拡張実験では、変調方式を高度化し、世界記録を更新する 610 テラ bps 伝送に成功した。また、標準外径を持つ結合型 3 コア光ファイバを用い、周回スイッチを利用した大容量・長距離伝送システムを構築し、172 テラ bps で 2,040 km の大容量・長距離伝送実験に成功した。この結果は、伝送能力の一般的な指標である伝送容量と距離の積に換算すると、351 ペタ bps × km となり、標準外径の新型光ファイバのこれまでの世界記録の約 2 倍になる。本成果は、OFC2020 の最優秀論文(通称ポストデッドライン論文)の特別セッションに採択された。 <p>令和2年度は、標準外径 4 コアファイバ用の広帯域 4 コア光増幅器(C,L 帯)を開発し、周回ループ実験系による長距離・大容量実験を実施予定である。また、通常のマルチコアファイバより伝送距離の長延</p>	
--	--	--	---	--

化が可能な結合マルチコアファイバによる長距離・大容量伝送実験を実施予定である。

- 大容量伝送を実現する大口径光ファイバ伝送の研究として、平成 30 年度は、世界最大のコア数となる 39 コア・3 モード光ファイバを用いて、38 コア・3 モード双方向伝送システムを開発し、ファイバあたり 228 空間チャンネル伝送の世界記録を達成、短距離光伝送における大容量伝送を可能とする基盤技術の原理を実証した。本成果は、ECOC 2018 において、光伝送カテゴリーのトップスコア論文に採択された。

また、二つの通信波長帯(C 帯及び L 帯)に対応し波長範囲が広い 19 コア一括光増幅器を用いて、高密度 345 波長、715 テラ bps 信号を 19 コア一括で中継増幅し、周回伝送系による総延長 2,009km 伝送に成功した。伝送能力の一般的な指標である伝送容量と距離の積で従来の約 1.4 倍である 1.4 エクサビット×km となり、世界記録となり、大容量と長距離を両立可能なマルチコア伝送システムの実現可能性を実証した。本成果は、OFC 2019 の最優秀論文(通称ポストデッドライン論文)の特別セッションに採択された。

令和元年度は、38 コア・3 モードファイバを用いて、伝送容量 10.66 ペタ bps、周波数利用効率 1158.7b/s/Hz を実証、共にこれまでの世界記録を更新した。本成果は、OFC2020 において光伝送カテゴリーのトップスコア論文に採択された。

- コヒーレント光配信技術として、平成 28 年度は、長距離(1,600km)のコヒーレント光配信による 64QAM (Quadrature Amplitude Modulation: 直交振幅変調) 信号同期伝送実験に世界で初めて成功した。
平成 29 年度は、商用の光スイッチ(ROADM: Reconfigurable Optical Add/Drop Multiplexer)で構成されたネットワークテストベッドで基準光配信及び送受信実験を実施した。ネットワークで障害が発生しても半自動的に動作復旧を行い、光ネットワークを介する本方式のフィージビリティと、高コヒーレントな基準光配信ネットワークに商用 ROADM が適用可能なことを実証した。

令和2年度は、基準光配信技術の更なる高度化を目指して、マルチコ

			<p>アファイバ伝送や光ファイバテストベッドを用いた伝送等の実験を実施予定である。</p> <p>○産学との連携による社会実装を目指したフィールド実証として、イタリアのラクイラ市の実環境テストベッドに3種類の標準外径のマルチコアファイバを敷設し、外気温変化による光信号の伝搬時間の変化を測定し、高い安定性を実証した。本成果を、OFC2020にて発表した。</p> <p>○産学との連携により、革新的光ファイバの実用化に向けた研究開発として、以下を実現した。</p> <p>----- 28年度 -----</p> <ul style="list-style-type: none"> • ペタビット級空間多重光ファイバの実用化・大容量化技術として、64QAM信号を用いた6モード多重18コア伝送実験で、周波数利用効率947bit/s/Hzを達成、部分MIMO (Multiple Input, Multiple Output) を用いた10モード多重81km伝送実験に成功した。コア密度拡大と実用化のバランスをとった設計で、5コアマルチコアファイバで、外径11.2mmの200心ケーブルを実現した。世界最高密度のマルチコアファイバ MT(Mechanically Transferable) コネクタを開発し、開発した数モードファイバの高次モードの実効断面積の高精度測定法により全コアで1dB未滿を確認した。モード結合測定プログラム中に伝搬損失のモード依存性に対する校正機能を追加し、LPモード間のモード結合評価も実施できるよう改良した。 • マルチコアファイバの高品質・長距離化では、孔開け法により低損失・小コア間偏差で200km以上の長尺紡糸を実現するとともに、新規製造方法についてマルチコアファイバ製造の高品質化に加え空孔付与によるクロストーク制御への応用性を実証した。FMF技術では、世界トップデータの空間多重密度を有するFM-OEの報道発表を行い、本成果のアピールに努めた。また、入出力技術では厳密固有モード伝送を実現する入出力デバイスの設計を行った。評価技術では、高次モードの実効断面積や波長分散測など、主要パラメータの測定技術を網羅的に検討した。 <p>----- 29年度 -----</p> <ul style="list-style-type: none"> • 単一コア10モードファイバを試作し、単一コア世界最大の伝送容量257テラbpsを達成した。 • 6モード19コアファイバを試作し、高密度空間多重伝送実験を行い、ファイバ1芯の世界最大容量10.16ペタbps、11kmの伝送に成功し、 	
--	--	--	--	--

周波数利用効率は 1099.9 bit/s/Hz を達成した。伝送容量 10.16 ペタ bps は、平成 27 年機構の伝送容量世界記録 2.15 ペタ bps の 4.7 倍で、ECOC2017 の最優秀論文(通称ポストデッドライン論文)の特別セッションに採択され、関係各社連名で報道発表も行い、多数のメディアに掲載された。本成果により、総務省の「将来のネットワークインフラに関する研究会」の報告書における「2030 年頃に流通する最大で数 10 ペタ bps の大容量トラヒック」を支えるための光ファイバ伝送技術の原理を実証した。

- 100km 級のマルチコアファイバ(MCF)を実現した。また、1.5 μm 以下のコア位置ずれを確保する製法を確立した。複数コアの一括測定技術により、コア数が増大しても測定時間を増大させない技術を確立した。
- 光ケーブル内の MCF の機械強度、及び光学特性の影響に関する検討を行い、(長距離)通信インフラとして実用的とされる MCF の具体的設計を示した。
- MCF のコア配置精度向上について、 $\pm 0.5 \mu\text{m}$ 以下のコア間隔の誤差を実現した。96 および 256 コアコネクタの MCF 多条コネクタを開発し、1dB 以下の挿入損失を実現すると共に、全コアでのフィジカルコンタクト接続を達成した。クラッド断面形状が樽型である MCF において、単芯・多条でのパッシブ調心による接続が十分に可能であることを実証した。
- マルチコア・マルチモードファイバのいずれにも適用可能なモード結合測定装置を開発した。
- クロストーク 10 dB 以上低減、0.005 dB/km のコア間偏差、240 km 以上のファイバ紡糸を実現し、最終目標を達成する低クロストーク MCF を実現した。
- 空間・周波数利用効率を最大化する MCF の設計方法を確立し、隣接するコア間に空孔を配置した場合のクロストーク特性の低減効果について体系的に明らかにし、論理実証した。
- 日本技術の国際展開に向けた標準化のマイルストーンを策定することを目的として、得られた成果について国内外の展示会および報道発表等を通じ幅広くアピールした。
- 世界最高密度の数モード(FM)-MCF を実現し、特性評価技術の適用性を明らかにした。弱結合型 FM-MCF の解析設計技術を確立し、最適設計を実施した。4LP モード・19 コアファイバを作製し、空間分割多重数 114、相対空間多重度指数(RCMF)60 以上を実現した。
- テーパー結合逐次モード遷移型の設計指針を明らかにして試作によ

り実証した。また、評価技術を確認した。

○産学との連携により、空間多重フォトニックノード基盤技術の研究開発として以下を実施した。

----- 28年度 -----

- 大規模波長ルーティングノードアーキテクチャ検討において、サブシステムモジュラ構成の拡張性と80%程度のWSS (Wavelength Selective Switch) 数削減性を明らかにした。システム制御技術では、伝送特性を考慮した空間多重ネットワーク収容設計基本方式検討を完了した。また、クラッド励起マルチコア光増幅器の利得偏差特性を50 x 256 Gps, 5,040km 空間光多重伝送実験にて評価した。
- 空間多重ノード方路制御技術・光増幅制御技術では、スイッチ光学系のクロストーク性能の初期評価を完了すると共に、クラッド・コアハイブリッド励起マルチコア光増幅器の利得制御性(入力レベル変化などに対し0.8 dB 以下)の初期評価を完了した。省電力光増幅モジュール構成検討では、励起光源電力配分の最適化による省電力化構成を策定し、動作確認を完了した。
- 装置間と装置内配線のインターフェースを勘案したMTコネクタ、装置内用の小型MTコネクタを設計・試作し、多心一括接続の原理確認、並びに、正方コア配置ファンアウトを実現した。また、4コアファイバと通常SMF (シングルモードファイバ)間コネクタ接続を実現する積層型の石英導波路を設計・試作したほか、接続端面の微小変形とPC接続条件の関係について理論検討を進めた。

----- 29年度 -----

- 空間多重ノードアーキテクチャ・システム制御技術として、サブシステムOXC (Optical cross connect)構成において、M x M WSS (Wavelength Selective Switch)を適用した場合のファイバ収容効率、ならびに必要なWSS数の有効性を示すとともに、6 x 6 WSSを用いた伝送実験により、フィージビリティを確認した。信号雑音比(SNR: Signal to Noise Ratio)をコア間で均等化する手法を検討し、信号のベクトル表現の時点でチャンネル間のエラーベクトルを均等化させることにより、Q値偏差補償し、Q値が低いチャンネルの品質を改善する方法にて補償後Q値偏差0.1dB未満を確認した。
- 空間多重ノード光増幅・方路制御技術として、空間多重多方路制御ノ

			<p>ード構成用のスイッチデバイスのクロストーク低減技術の確認(-50 dB以下のクロストーク性能)、及びクラッド励起のマルチコア光増幅器とラマン分布増幅からなるハイブリッド分布増幅技術を提案し、コア間の損失ばらつきを補償できることを確認するとともに、8心4コアファイバMT(Mechanically Transferable)コネクタを試作し、32コアで2dB以下の接続損失を実現した(平均値0.6 dB、最悪値1.9 dB)。試作したコネクタ間の接続特性を評価し、接続損失平均0.23 dB、最大0.66 dB、反射減衰量40 dB以上を確認した。</p> <ul style="list-style-type: none"> 「革新的光ファイバの実用化に向けた研究開発」の成果を積極的に活用し、マルチコア光増幅中継系を用い、光通信で主に使われている波長(Cバンド:波長1,530-1,560nm)で118 テラ bps、316 km 光増幅中継伝送実験に成功した。この成果は、国際会議 OECC (OptoElectronics and Communications Conference) 2017 の最優秀論文(通称ポストデッドライン論文)の特別セッションに採択され、関係各社連名で報道発表も行い、多くのメディアに掲載された。 <p>----- 30年度 -----</p> <ul style="list-style-type: none"> 空間多重ノードアーキテクチャ・システム制御技術について、10 ペタ bps 程度まで拡張可能なスケーラビリティの高いフォトニックノードアーキテクチャを提案し、その基本機能をシミュレーションならびに伝送実験により実証した。また、提案ノードアーキテクチャの基本構成であるサブシステム OXC (Optical crossconnect)の主要構成要素として、1xN 集積多連 WSS (Wavelength Selective Switch) 光スイッチモジュールのポート間クロストークを-40dB 以下とすることで 16QAM 信号を安定に受信できることを実証した。光パス収容設計に関しては、基本方式を提案し、16QAM 信号においてファイバとノードのクロストーク積算値を想定したパス収容特性をシミュレーションにより評価した。さらにクラッド励起 MC (マルチコア) -EDFA の中継伝送適用性(5,040 km)を確認するとともに、光増幅中継システム制御における利得平坦化の実現にむけ、幾つかのブロック等化方式を提案し、5 段中継ノード通過後の SDM (Space Division Multiplexing) /WDM チャンネル間の利得平坦度目標(±3dB 以内)を実証した。 空間多重ノード光増幅・方路制御技術として、クラッド励起 MC-EDFA におけるクラッド一括励起とコア励起を併用したハイブリッド励起方式と WSS のアッテネーション機能の適用によりコア間、波長間のばらつきを抑圧する利得制御技術の制御方式の原理確認を実施し、±1.5 dB を可能とする利得制御技術の実現可能性を示した。また多方路制
--	--	--	--

(イ)光統合ネットワーク技術

共通ハードウェアの再構成や共用化により、異なる通信速度・通信方式・データプロトコル処理を提供する光スイッチトランスポートノード基盤技術の研究開発を行う。また、1Tbps(テラビット/秒)級多信号処理を可能とする光送受信及び光スイッチングシステム技術、時間軸・波長軸に対するダイナミックな制御を瞬時に行う技術及び関連するハードウェアシステム技術の研究開発を行う。これらの研究開発成果に基づき、機構内における実証実験及び産学官連携実験にて活用するテストベッドを構築する。産学官連携による研究推進及び構築したテストベッドによるフィールド実証等により各要素技術を実証し、

御技術の実現に向け、低クロストーク化を実現可能な 1xN WSS 一体集積モジュールを提案・試作し、6x6 WSS 構成にてその有効性を実証した。さらに省電力増幅モジュール構成技術、光増幅モジュール省電力化制御技術、高効率利得平坦化技術の各要素技術の検討を進め、ターボクラッド励起技術の有効性を検証するとともに、増幅器構成技術と制御技術との連携により 20.3%の省電力効果を確認した。

- 空間多重ノード配線技術について、125 μ m のクラッド径を持つ 8 本の 4 コアファイバの心線一括接続技術について検討を行い、中間目標特性を上回る 10 コア超一括接続を所望の光学特性で実現した。また、単心コネクタの回転角度を制御する機構について検討し、ランダム接続損失 0.5 dB 以下(97%)を達成する MCF (マルチコアファイバ)コネクタ基本構造とその設計手法を確立すると同時に、4 コア用光コネクタの損失要因分析手法を見出した。更に、IEC TC86/SC86B 会合において、MCF コネクタ試験方法の規格標準化を進める方針を提案し、合意を得た。

----- 令和元年度 -----

- 空間多重ノードアーキテクチャ・システム制御技術について、6x6 WSS(Wavelength Selective Switch)で構成されたサブシステムモジュール光クロスコネクタの実現可能性を検証し、16 台の WSS, 1200 km 伝送を実証した。ネットワーク収容設計技術については、空間多重光ノードの省電力化を目指した、コア経路割り当てと利用波長数を平準化するパス設計方式を提案した。中継ノードシステム制御技術については、10 段以上の中継ノードを考慮したブロック等化ノードの評価・設計指針策定系を構築した。さらに、信号雑音比をコア間・波長間で均等化する手法について、4 中継ノードを通過する 192km のマルチコアファイバ中継伝送路においてチャンネル間の信号品質の偏差を 0.1dB 以下に低減する効果を実証した。
- 空間多重ノード光増幅・方路制御技術として、入力側と出力側を非対称とした新しい光ノード構成によってノード内配線を大幅に簡略化できる構成を提案した。さらに、空間平面光回路技術による多連 WSS モジュール技術を検討し、異なる二つの光学系を採用した WSS アレイモジュールを組み合わせることで簡略化光配線ノードを実現できることを示した。省電力光増幅モジュール構成技術に関して、増幅効率向上が期待される 19 コア光増幅器の試作および初期評価を完了するとともに、ハイブリッド動作において、7 コアと比較して 6.9%の電力削減効果を確認した。

<p>光統合ネットワーク基盤技術を確立する。</p>		<ul style="list-style-type: none"> 空間多重ノード配線技術について、20 コア超マルチコアファイバー一括接続コネクタの作製および評価を行い、損失 1.5 dB 以下、反射減衰量 40 dB 以上、クロストーク -40 dB 以下を達成した。空間多重ノード装置内配線技術について、小型多心配線部材を開発し、125 μm、80 μm 両クラッド径のファイバに適した 24 心フェルール構造を実現した。空間多重ノード配線用光コネクタ技術について、4 コアファイバ用 SC(Subscriber Connector)形光コネクタの機械的特性評価を実施し、繰り返しかん合試験および通光左右曲げ引張り試験において、接続損失 0.2 dB 以下であることを確認した。ITU-T SG15 第 5 会合において、将来における空間分割多重伝送用光ファイバの標準化に備え、現在の技術レベルと標準化に向けた課題を明確化するための新規技術レポートの作成提案を実施し、2022 年文書制定に向けて作業を開始することが了承された。また、IEC TC86/SC86B 会合においてマルチコアファイバコネクタ反射減衰量測定法に関する標準化の開始が合意されたため、ファンアウトの損失と反射からコネクタ 1 接続点の反射減衰量を推定する手法の開発を開始した。 <p>----- 令和 2 年度（見込み） -----</p> <ul style="list-style-type: none"> マルチコアファイバを含む複数の光リンクを接続するスループットが従来の 100 倍以上となる 10 Pbit/s 超まで拡張可能なフォトニックノードアーキテクチャの機能配備とその構成要素技術を明らかにし、原理実証を行う予定である。また、10 Pbit/s 超のスループットを可能とする方路数 8 以上の空間多重ノードから構成される空間多重ネットワークにおいて、コア数 10 以上のマルチコアファイバを対象としたネットワーク収容設計技術の機能要件を明確にし、その要件に基づくネットワーク収容設計方式を提案するとともにその原理確認を実施予定である。また、方路数 8 以上、コア数 10 以上、方路数コア数積 150 以上、所望帯域が 10 THz 以上の空間多重ノード構成技術、マルチコア光増幅・多方路制御技術を検討し、所望帯域内の利得ばらつき制御精度が ± 1.5 dB を可能とする利得制御技術の実現可能性を示す予定である。また、将来の標準 MCF の方向性を見据え、クラッド径 125 μm の MCF を対象とし、既存の多心コネクタと同等の特性を有する 20 コア超まで拡張可能な一括接続技術を実現する。 <p>○産学との連携により、マルチコアファイバの実用化加速に向けた研究開発として以下を実施した。</p>	
----------------------------	--	--	--

			<p>----- 令和元年度 -----</p> <ul style="list-style-type: none"> • 高品質・高信頼性マルチコアファイバ技術について、ステップインデックス(Step Index: SI)型標準クラッド径マルチコアファイバの素線評価を行い、数十 km 長での高速伝送への適用性を伝送実験で確認した。品質異常部の発生状況を整理し、母材加工装置に求められる仕様を明確化した。長尺の 125 μm 径マルチコアファイバで 1%引っぱりプルーフを実施し、クラッド一括形成法のコア変形量を調査した。非開削母材におけるクリアランスとコア位置ずれ、コア変形についての設計、試作結果の検証を実施した。 • マルチコアファイバケーブル・伝送路技術について、SI 型標準クラッド径マルチコアファイバを実装した高密度光ケーブルの試作を行い、工程間変化の評価に着手した。SI 型標準クラッド径マルチコアファイバの多段接続構成を設計、構築し、平成 30 年度に構築した評価系を用いて、挿入損失やコア間クロストーク、偏波変動性等を測定した。 • 標準化に向けたマルチコアファイバ周辺技術について、標準クラッド径マルチコアファイバの幾何学パラメータの評価技術の方式検討を行い、原理検証に向けた評価系等の構築に着手した。マルチコアファイバを含む空間多重ファイバケーブル技術について、その定義や分類、国際標準化に必要な項目等に関する技術文書の作成を研究分担者との連名で ITU-T Q5/SG15 に提案し、合意された。 <p>----- 令和 2 年度（見込み） -----</p> <ul style="list-style-type: none"> • ステップインデックス型標準クラッド径マルチコアファイバの伝送帯域と適用領域の明確化を実施予定である。また、ステップインデックス型マルチコアファイバケーブルにおける損失・クロストーク特性の制御性やケーブルの多段接続特性の明確化を実施予定である。高効率のマルチコアファイバ母材の孔開け機を立上げ、異常点発生要因の明確化を実施する。また、1000 km・コア超の高品質・高信頼マルチコアファイバ製造技術を確立する。また、既存の孔開け法では実現できていない母材サイズを目指して、非開削法で 100 km 母材の実現する見込みである。 <p>○産学との連携により、大規模データを省電力・オープン・伸縮自在に収容する超並列型光ネットワーク基盤技術の研究開発として以下を実施した。</p>	
--	--	--	---	--

			<p>----- 令和元年度 -----</p> <ul style="list-style-type: none"> 超並列デジタル信号処理(Digital signal processing: DSP)高度化基盤技術については、信号復元復号処理・適応制御技術に取り組み、確率的信号点配置シェイピングとマルチレベル符号化により、符号処理機能の電力効率 9 倍改善に成功した。光送受信処理技術について、非線形波形劣化補償に有効なアルゴリズムとして全結合ニューラルネットワークの設計を最適化し、12 スパン伝送後の 9 チャンネル波長多重・偏波多重 64 値直交振幅変調信号に対して、信号品質の値が 1.2dB 改善した。 超並列光ネットワーク基盤技術については、超並列スライス設計制御技術に取り組み、信号並列度モードグループ数 6 倍のスライス制御実験に成功し、3 軸合計現行比 340 倍相当のオープンインターフェイスを用いたスライス制御実験にも成功した。超並列光ノード・ネットワーク構成技術について、階層化光クロスコネクタの空間バイパス/周波数グルーミング機能が転送品質劣化なしに実現可能であることを実証した。超並列ダイナミック MAC 技術について、多段ラウンドロビンを実装したエミュレータにより、ダイナミック MAC(Media Access Control)の基本動作確認に成功し、32 レーン単位のダイナミック帯域容量割当の実現性を確認した。 <p>-----令和 2 年度（見込み）-----</p> <ul style="list-style-type: none"> 1 運用波長当たり 10 テラ bps 級のスーパーチャネルへの適用を前提とし、電力効率 25 倍改善に資する信号復元復号処理およびスーパーチャネル内外での適応制御について、令和元年度に策定する仕様に沿って単体シミュレーションを行い、性能評価を実施する予定である。また、機械学習技術による非線形波形劣化補償については、テストベッドを用いるなどして大規模伝送実験を実施する予定である。また、効率的な空間軸・周波数軸のチャネル割当について、現行比 340 倍相当の信号並列度を確認し、さらに現行比 1000 倍相当の信号並列度の検証を実施する。また、超並列階層化光ノード構成技術と超並列階層化光ネットワーク設計技術に関して、リンク故障、装置故障に対応可能な予備資源専有/共有プロテクション技術を構築し、その性能を評価予定である。また、並列伝送の部分障害に対応して MAC レイヤでの自動障害回復の検討を行い、レーン伝送の部分障害に対応させ、ネットワークの実現を可能とするエミュレータの構築を行う予定である。 	
--	--	--	---	--

○産学との連携により、次世代 MCM 超小型光トランシーバの研究開発として、以下を実現した。

----- 令和元年度 -----

- MCM 型光トランシーバ基盤技術として、裏面出射型 1060nm 帯 VCSEL、表面出射型 850nm 帯 VCSEL の 25Gbps 高速変調動作とその MCM 実装に適合したアレイチップ開発、および MCM との低損失直接光結合の実現を目指し、1060nm 帯 VCSEL ウェハの設計を完了した。マルチコアファイバとの結合設計を行い、モードフィールド径を 7 ミクロン程度まで拡大することで、レンズレスで裏面出射、表面出射の 2 方式で結合損失 1dB 以下の低損失結合が可能であることを計算により示した。また、実験的に 850nm 帯 VCSEL を試作し、結合共振器構造を導入することで、単一モードでモードフィールドを 8 ミクロン程度まで拡大することに成功し、モードフィールド径 6 ミクロン単一モード光ファイバ（波長 1.1 ミクロン帯）とのレンズレス直接結合で 1.1dB の低損失結合を実現した。また、マルチコアファイバに適合する 16 アレイ、7 アレイの VCSEL アレイを試作した。
- MCM 型光トランシーバのための VCSEL アレイ開発としてマルチコアファイバの仕様に対応する 850nm 表面出射型スルービア VCSEL デバイスの設計・試作を行い、ファイバへの実装・伝送特性評価結果から、25Gbps 駆動を達成するためのデバイス構造およびプロセスの最適化を行った。また、シミュレーションによるスルービア構造の伝送特性および放熱性を検討した。25GHz 850nm 単ビット VCSEL を用いてスルービア形成プロセス条件を確立した。
- MCM 光トランシーバモジュールの設計・評価として、MCM 光トランシーバの全体構造の検討とシミュレータによる熱伝導解析を実施し、駆動電子回路 (EIC) の放熱性の向上と、EIC から光半導体素子への熱流入防止とを両立しうるインターポーザ材質および放熱部品材質と構造を選定した。さらに、本構造において VCSEL アレイ-マルチコアファイバ間の光路に充填する接着剤の厚さが VCSEL アレイの放熱に大きく影響することをシミュレーションで確認し、今後の実験結果と合わせてその厚さの最適化を図ることの重要性を見出した。以上により、MCM 光トランシーバの基本コンセプトと放熱構造を決定した。
- MCM 光トランシーバモジュールの動特性評価として、結合共振器

	<p>(ウ)災害に強い光ネットワーク技術 地震等の大規模災害発生時には、平時と異なる通信トラヒックへの対応が求められることから、通信網を支える光ネットワークの耐災害性向上に資する研究開発に取り組む。具体的には、災害発生時に生じた輻輳がネットワーク全体に波及することを阻止するため、時間軸上で動的な波長資源</p>		<p>を導入した 850nm 帯 VCSEL の単ビット素子を試作し、小信号変調帯域で 25GHz の単一モード VCSEL としては、最高レベルの小信号変調帯域を実現するとともに、大信号変調で NRZ 36Gbps、多値変調 PAM-4 48Gbps を実現した。さらに、1.1μm 帯の単一モード光ファイバの伝送帯域としては、130Gbps\sqrtkm の高速伝送の可能性を示した。</p> <p>----- 令和 2 年度（見込み） -----</p> <ul style="list-style-type: none"> マルチコアファイバを用いた VCSEL モジュールの実現に向けて、最適な VCSEL アレイの基本仕様を決定し、選択した波長領域における 25Gbps-16chVCSEL アレイの最適化設計ならびに試作を実現する。 Tx/Rx それぞれ数 ch において VCSEL~MCF および PIN PD ~MCF の安定した光結合を示し、最終的な全チャンネルでの光結合を可能とする基盤技術を開発する。 製作した VCSEL アレイを MCF に直接に光結合させ、back-to-back での伝送特性評価を行う。個別チャンネル独立駆動で、25Gbps、アイソレータ無しでのアイパターン評価を行い、25Gbps\times16ch=400Gbps の実現可能性を実証する。また、1060nm 帯の特性を活かして、リンク距離の km オーダへの拡張についても可能性を検証する。 <p>(イ) 光統合ネットワーク技術</p> <p>○共通ハードウェアの再構成や共用化により、異なる通信速度・通信方式・データプロトコル処理を提供する光スイッチトランスポートノード基盤技術の研究開発として、</p> <ul style="list-style-type: none"> 平成 28 年度は、様々なビットレート、変調フォーマットに対応可能なダイナミック波長シフト技術を提案し、波長資源の有効利用に寄与する中継装置における波長デフラグメンテーションの実証実験を行った。本成果を ECOC2016 にて発表した。 令和元年度は、8K などの高精細コンテンツや超大容量データの効率的な複製・複数配信を容易にするソフトウェア制御による光パケットマルチキャスト伝送を実証し、アプリケーション層の映像伝送、コントロール層、光ネットワーク層を連携させたマルチキャストに成功した。本成果は OFC2020 にて発表した。 	
--	--	--	---	--

	<p>制御を実現する弾力的光スイッチング基盤技術を確立する。また、災害によって損壊した光ネットワークの応急復旧のため、ネットワーク制御機構の分散化技術や可搬型光増幅器構成技術等、災害後の暫定光ネットワーク構築に必要な基盤技術の研究開発を行う。研究開発成果の社会実装を目指して、模擬フィールド実証及び部分的なシステム実装に取り組む。</p>		<p>また、光通信システムのオープン化の実現に向けて、キーデバイスとして高線形性光増幅器を開発した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・令和2年度は、高線形性光増幅器を光通信システムに実装し、マルチベンダの光送信器の使用を想定して、特性の異なる光信号が光通信システムの中に混在しても互いの光信号に影響を与えないことを実証予定である。 <p>○1Tbps（テラビット／秒）級多信号処理を可能とする光送受信及び光スイッチング技術の研究開発として、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・平成28年度は、400Gbps級光信号伝送に必要な16QAM多値変調信号のバースト光信号送受信技術を実証した。本送受信技術と産学官連携で開発した「強度変動抑制・低偏波依存・低波長依存かつナノ秒オーダーの高速な電界吸収型光スイッチ」を用いて、16QAM多値変調信号の光スイッチングおよび周回伝送実証実験を行った。従来の高速半導体光スイッチでは振幅・位相変調光信号に対してスイッチングを繰り返すと信号の歪や雑音が大きくなり伝送距離を延ばすことが難しく、スイッチ回数は6回、伝送距離300kmまでであった。電界吸収型光スイッチを用いた本実験では、16QAM多値変調信号に対して、従来比1.6倍以上となる世界最高のスイッチ回数（10回）および伝送距離（500km）で良好な結果を得ており、関東圏程度のバースト信号光ネットワークの構築が可能であることを実証した。また、16QAM多値変調信号に対する良好な結果より、400Gbps以上の光信号伝送に必要な多値変調光信号に対しても有効である可能性を見出した。本成果をECOC 2016にて発表した。 <p>また、ラインレートの異なるバースト光信号が時間的に多重された場合でも1台の受信機で受信可能にするマルチレートバースト光信号受信技術を初めて提案し、3種類のラインレートの異なる光信号が受信可能であることをシミュレーションにて実証し、本成果を国際会議 OECC/PS (OptoElectronics and Communications Conference / International Conference on Photonics in Switching) 2016にて発表した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・平成29年度は、32Gbaud多値変調信号(8PSK・QPSK)光スイッチング実験により電界吸収型(EA)高速光スイッチの位相変調方式に 	
--	---	--	--	--

			<p>無依存である事を実証し、400Gbps 級光信号 (32Gbaud、16QAM) に対する光スイッチング実現の見通しを得て、OFC2018 にて発表した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・平成 30 年度は、16QAM 多値変調方式のバースト光信号向けデジタル信号処理アルゴリズムの性能をシミュレーションにて評価した。 ・令和 2 年度は、16QAM 多値変調方式のバースト信号受信及び光スイッチングの実証実験を実施予定である。また、16QAM と比較して伝送容量を 25% 向上させる、32QAM 多値変調方式のバースト光信号送向けデジタル信号処理技術の開発を推進し、変調速度を 2 倍 (50Gbaud/s) に高速化し、合計で伝送容量を 2.5 倍向上させる予定である。 <p>○時間軸・波長軸に対するダイナミックな制御を瞬時に行う技術及び関連するハードウェアシステム技術として、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・平成 28 年度は、時間軸・波長軸ともに状態がダイナミックに変動するバースト光信号に対して、高速な光デバイスを用いて安定的に動作する光強度制御技術の研究開発に着手した。 ・平成 29 年度は、リンク障害時の光パスの時間軸・波長軸のダイナミックな挙動に対して、バーストモード光増幅器により強度変動を抑制し、光パスの超高速切替が可能であることを世界で初めて実証した。全国ネットワークモデルを用いた計算で、単一リンク障害がネットワーク全体の運用光パスの約 40% に悪影響を与えることを検証し、OFC 2018 にて発表した。 ・平成 30 年度は、複数光パスの高速制御を実現するための光強度変動抑制機能を有するフレキシブル光パスノードを提案した。本ノードは、一台で複数波長に対応可能な光強度変動抑制デバイスに波長数増減の影響を抑制する高線形バーストモード光増幅器や音響光学素子を用いた高速光強度制御器を導入した。3 波長の強度変調方式の光パスを対象として光強度制御の動作実証を行い、マイクロ秒オーダーの動作速度で光パスの光強度変動を一括して補償し、データ損失の抑制に成功した。複数光パス一括の経路切替を可能とし、高速動作化を実証した。本成果は、学術和文誌 電子
--	--	--	--

			<p>情報通信学会和文誌に掲載された。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・令和元年度は、音響光学素子をベースとした複数波長を同時に制御可能な高速光強度制御器を導入し、強度変動する4波長パスに対して500μ秒~2m秒での動作を実証した。また、平成30年度に構築したバーストモード光増幅器・高速光減衰器を導入した光強度変動抑制機能を有するフレキシブル光パスノードを用いて、最大8波長の複数光パス一括の経路切替時の通信品質保持に成功しECOC2019において発表した。 ・令和2年度は、ダイナミック光信号制御技術を導入したフレキシブルな運用を可能とする光ノードについて、テストベッドを用いてネットワーク的に実証し、複数波長の光パス切替や強度制御を実施し、光スイッチトランスポートノード基盤技術を確立する。 <p>○産学との連携により、大規模フラットネットワーク基盤技術として、以下を実施した。</p> <p>----- 28年度 -----</p> <ul style="list-style-type: none"> ・超高速光スイッチ基盤のモノリシック型4x4光スイッチチップ作製し約5dB程度の損失特性改善を得た。OSNR (Optical Signal to Noise Ratio) モニタサブシステムを適用したネットワーク制御方式の実証実験及び課題間連携実験に向けた、光ノードの一次試作、ネットワークノード間制御インターフェースを規定し、動作検証を完了した。 ・従来と同じハードウェアを利用した Grouped Routing とサブシステム構成ノードを適用したネットワークにて、検討した新たな制御手法が様々なサービスを経済的に実現可能なことを実証した。 ・弾力性のある光パスの波長/ファイバ割当・変更制御として、マルチコア EON (Elastic Optical Network) での RSA (Routing and Spectrum Assignment) 手法, 仮予約方式, 境界制御手法、複数経路設定手法及び、輻輳発生後の高速な経路切替手法を確立した。 <p>----- 29年度 -----</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高速スイッチ素子の大規模化検討、低損失化検討を行い、16x16規模のスイッチの実現において鍵となる3次元実装について実現 	
--	--	--	--	--

			<p>性を検討し、大規模ネットワーク制御、弾力パス制御を取り込んだ超高速光スイッチ機能を実現するシステム構成の詳細化を完了した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ROADM と超高速スイッチの組合せによるハイブリッド型ノード構成および制御を検討し、超高速スイッチサブシステムにおけるコントローラ仕様についても仕様を決定して試作に着手した。 ・OSNR (Optical Signal to Noise Ratio) モニタの集積化検討および試作ノードの大規模化検討を行い、コヒーレント受信技術に基づいた PDL (偏波依存損失) モニタおよびチャネル間隔モニタの実験実証、さらに新たな VDL (Virtual Direct Link) 技術によるネットワーク設計アルゴリズムを開発し、高信頼、高効率大規模フラットネットワーク有効性の実証実験を実施した。 <p>----- 30 年度 -----</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大規模超高速光スイッチの基盤技術の確立に向けて、大規模スイッチ半導体素子技術と半導体チップ同士のクロス配置の接合技術、ドライバ集積技術等のデバイス基盤技術を確立するとともに、16x16 級スイッチ等のさらなる高度化に向けた課題を明確化した。 ・弾力化制御技術とそれによりアシストされた高速スイッチネットワーク等を提案し、OPS (Optical Packet Switching) -OFS (Optical Flow Switching) のオフローディング等の有効性を示すとともに、連携実験により基本動作を実証した。 ・伝送品質モニタを用いた高いネットワーク収容効率を実現するネットワーク構成法として Transmission-Quality-Aware Online Network Design & Provisioning を提案するとともに、連携実験により有効性を実証した。 <p>○産学との連携により、光トランスポートネットワークにおける用途・性能に適応した通信処理合成技術として以下を実施した。</p> <p>----- 28 年度 -----</p> <ul style="list-style-type: none"> ・LSI、FPGA (Field Programmable Gate Array)、NP (Network 	
--	--	--	--	--

			<p>Processor)、CPU の特長を活かした、再構成可能通信処理モジュールの方式を提案し、検索振分けエンジンを FPGA で回路設計、シミュレーションにより、IP/MPLS/Ethernet のサービス、200Gbps の転送エンジンを収容可能であることを確認した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中間帯域リンクの状態監視方式を考案し、ハードウェア回路として設計、回路シミュレーション性能評価により、中間帯域リンク単位 (25Gbps 単位) での状態監視が可能であることを確認した。 ・主要クライアントとなる IP 網の光エッジ収容を前提とした検討を行い、光エッジ上の ARP (Address Resolution Protocol) キャッシュ参照、SDN コントローラ間上の分散ハッシュテーブル参照、全光エッジによるユーザーネットワーク問合せ、の段階的な参照応答によるブロードキャストトラヒックの削減および応答速度性能の向上を実現した。また、光エッジ仮想化およびリソースプール化を定義し、リソースプール管理におけるサービス割当アルゴリズムの設計要件を GUI シミュレータにより明確化した。 <p>----- 29 年度 -----</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 100Gbps を処理可能な転送エンジン LSI x 2 個と、検索エンジン LSI x 1 個とを結合した再構成可能通信処理モジュール (ボード) の試作を行い、現状 (100Gbps) と比較して転送性能が 2 倍、1 つの設備で提供する機能が 3 倍となり、6 倍の性能和が実現可能なことを実機にて確認した。その結果、本方式を拡張して、転送性能を 400G ビット/秒とすることで、10 倍を超える性能和が実現可能な見通しを得た。 ・ 25Gbps 粒度での中間帯域リンクの生成・状態監視が可能であることを FPGA (Field Programmable Gate Array) 評価ボードにて確認し、中間帯域リンクを Beyond100G 級 OTN (Optical Transport Network) フレームへ収容し、E2E (End to End) の中間帯域リンクの状態監視を可能とする方式を考案した。 ・ PC サーバ上の仮想マシンに Click モジュラールータを利用した再構成可能通信処理モジュールシミュレータと再構成可能サービス処理モジュールシミュレータを動作させ、モジュール間通信を 	
--	--	--	---	--

IP カプセリングで実現し静的設計において 6 テラ bps クラスのリソースプール連携の可能性を示した。

----- 30 年度 -----

- ・ 転送振分け処理のプロトタイプとして、100G インタフェースを持つ転送振分け FPGA (Field Programmable Gate Array)、及び、ボードを設計・試作して、再構成可能ハードウェア全体のアーキテクチャの方式検証を実施した。さらに、上記の方式検証結果をフィードバックして、再構成可能 400G ボードに搭載するための、400G 検索振分けエンジン FPGA と、400G 転送振分けエンジン FPGA の処理方式の検討と回路設計を行うことで、400Gbps までの領域で、複数の通信方式を収容可能な、従来比 10 倍を超える転送性能(一つの設備で提供する機能毎の性能の和)を達成可能な見通しを得た。

- ・ Beyond100G 級のハードウェア監視技術として、中長距離伝送も含めた End-to-End での中間帯域リンクの状態監視を実現する方式の検討ならびに実機検証を完了させた。また、ハードウェアならびに中間帯域リンクの監視情報に従い通信容量を再構成する方式の検討を完了させた。以上により、Beyond100G 級再構成可能インタフェースの構成技術、ならびに中長距離伝送路を含むリンクの状態監視を実現する監視技術の見通しを得た。

- ・ 再構成可能ハードウェアのリソースを監視しつつ適切なリソースを仮想的にスライシングしさまざまなサービス機能を実現するためのハードウェアリソース制御技術の研究を進め、光ネットワークリソースから再構成可能ハードウェア上で実現された仮想的リソースまで一貫した管理制御を実現する上で重要となるリソース制御アルゴリズムを完成させると共に、シミュレータとの連携動作検証、実機との連携制御プロトコル仕様の検討を実施した。

----- 令和元年度 -----

- ・ 400 ギガ bps 級再構成可能通信処理モジュールの FPGA(Field Programmable Gate Array)を設計・試作し、実機動作を確認した。400 ギガ bps 試作ボードを用い、再構成を行うことで、IP(Internet Protocol), MPLS(Multi Protocol Label Switching), Ethernet の各種プロトコルパケットに柔軟に対応可能なことを実機確認した。従来(100 ギガ bps)と

			<p>比較して、転送性能が4倍に、1つの設備で提供する機能が3倍になり、合計で12倍の性能和が実現可能な見通しを得た。また、机上検討により、FPGA部分をLSI(Large Scale Integration circuit)に置き換えることにより再構成可能通信処理モジュールが従来比30倍までの転送性能が実現できること、及び、パケットオプティカルノードの交換処理性能が6.4～16テラbpsのスケラビリティを持つことを確認した。今後、本技術を活用して、ネットワーク可視化(再構成可能ノードのセンサ化)機能等の実現を目指す。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中間帯域リンク監視制御統合回路を用いて、FlexE(FlexEthernet)マッピング方式の動的な変更による中間帯域の動的な増減速、またエラーの任意箇所への挿入をトリガーとした障害発生箇所の検出ならびにFlexEまたはOTN(Optical Transport Network)リンクにおける中間帯域の動的な再構成が可能であることを実証した。また、作製した中間帯域リンク監視制御統合回路を再構成可能通信処理モジュールならびにハードウェアリソース制御装置に接続し、JGNネットワークを経由した中長距離伝送におけるエンドツーエンド中間帯域リンクの状態監視／制御ができることを実証した。 ・再構成可能ハードウェアを組み合わせたプログラマブル光エッジノードアーキテクチャ提案し、100万加入者収容可能、6テラbpsクラスのリソースプール連携が可能となることをシミュレータ及び静的設計で実証した。ゆらぎ制御を用いたリソースプール制御の実証として、シミュレータと実機を組み合わせたエッジコンピューティングサービス基盤の実現性を確認し、100ノード規模のゆらぎ制御の実用性を提示した。 <p>○産学との連携により、高スループット・高稼働な通信を提供する順応型光ネットワーク技術として以下を実施した。</p> <p>----- 令和元年度 -----</p> <ul style="list-style-type: none"> ・機械学習を応用した光物理層モニタリング技術として、コヒーレント受信した信号から、マルチスパン光ファイバ伝送路の長手方向特徴量(パワープロファイル)を抽出する新規アルゴリズムを開発した。上記アルゴリズムについて、数値計算をベースに性能・距離分解能など、特性を詳細に検討した。上記アルゴリズムに適したデータを収集するため、データ収集実験系を改良した。 	
--	--	--	--	--

・順応型光パス制御技術として、スループット向上のための設定を決定するアルゴリズムを開発した。推定精度を上げるネットワーク状態収集手法を開発した。また、順応型パス自動制御技術の論理アーキテクチャと物理アーキテクチャを定義した。ベースプラットフォームへのパス収容設計機能を追加し、ベースプラットフォームとネットワーク制御用ソフトウェアの相互連携機能を追加した。

----- 令和2年度(見込み) -----

・機械学習を応用した光物理層モニタリング技術として、光送受信器への搭載を目指した評価実験を実施する。令和元年度に検討したデータ収集系を基にデータ収集実験系の構築を行う。数値計算を通じて実現可能性が確認できたアルゴリズムに対して、上記実験系で生成された学習用データセットを使い、学習の収束速度、モニタリング精度等について、実験評価を行い、実用化に向けた課題の抽出を実施する。

・順応型光パス制御技術として、アルゴリズムの改善と有効性の検証を実施する。前年度検討したアルゴリズムを再精査し、更なる改善を図る。また、アルゴリズムの有効性を確認するため簡易実験系または数値シミュレーションをベースにした検証系の検討/構築および簡易実験系または数値シミュレーションでの基本動作確認と効果検証を実施する。モニタ情報の収集および装置への最適パラメータを設定する機能などベースプラットフォームの更改および簡易実験系での基本動作確認を実施する。

(ウ)災害に強い光ネットワーク技術

平成 28 年度

・弾力的光スイッチング基盤技術の要素技術として一括モニタリング実現に向けて開発を開始した。具体的には、実用化導入が進行しつつあるデジタルコヒーレント方式に対応した波長多重化光パケットを、複数の指標で一括モニタリングするシステム設計を行った。また、動的波長資源制御方式として、光パケットのオフロード方式の比較評価により、管理負荷低減手法を提案・検証した。

・光ネットワークの応急復旧のために、制御層の有線/無線リンクを冗長化するアルゴリズム及び、光ネットワーク修復のための自律分散制御アルゴリズムを開発した。キャリア間相互運用を可能とする共用網利用モデルを構築、数値評価を行い、災害規模の拡

			<p>大に従って応急復旧コストが著しく低減することを見だし、モデルの有効性を実証した。</p> <p>平成 29 年度</p> <ul style="list-style-type: none"> ・動的な波長チャネル等化技術として、一括モニタデバイス制御システムを開発し、商用の波長選択スイッチと組み合わせ、光信号レベル調整を 0.2 秒で完了するサブシステムを開発した。 ・光パケットオフローディング技術として、光統合ネットワークにおいてフローレベルでの光パケットオフローディングの制御システムを開発し、災害地域－安全地域間巨大な重要通信トラヒックの効率転送（ロスなし）の制御を初めて可能にした。 ・光ネットワークの応急復旧に係る技術として、光ネットワークの生残情報の自律的確認及び収集機能を実装し、災害時損壊された光ネットワークの制御ネットワークの自己治癒機能、自己診断機能の動作実証を確認した。 ・年度計画に加え、災害対策技術における、ワイヤレスネットワーク基盤技術と連携した強靱な光ネットワーク制御技術の検討として、フォトニックネットワークの制御プレーンの一部に衛星通信や衛星通信と接続された「自律分散ワイヤレス自営網」を利用する検討を開始した。 ・断裂した光ネットワークの要所に配置することにより、ネットワークの状態に関する情報収集や復旧支援のための小型光ハブの実証実験において、公衆回線（LTE）や衛星リンクなどを用いた非常通信手段を活用して、優先的に制御層の復旧が可能である事を示し、異種ベンダ間相互接続やキャリア間相互接続の復旧計画立案に必要な情報収集機能を実証した。 <p>平成 30 年度</p> <p>動的な波長チャネル等化技術について、以下を実施し、計画通り進捗した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・複数の波長チャネル一括で高速な強度制御が可能な音響光学素子を新たに導入した。基本動作実証のためのサブシステム実験により、従来の光デバイスではミリ秒オーダーであった動作速度を $7\mu\text{s}$ 程度まで 	
--	--	--	---	--

			<p>高速化し、3 波長チャンネル一括で光強度変動の抑制が可能であることを実証した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・音響光学素子による複数波長チャンネルの強度制御に適したコントローラとして、周波数の異なる複数の電気信号を合成して出力可能な複数 RF(Radio Frequency)高速発生器の開発に着手した。 <p>オフローディングと波長資源管理の制御機構の統合化について、以下を実施し、計画通り進捗した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・光パケットオフローディング機能を光統合ネットワーク制御管理機構に組み込み、実証実験を行った。災害時の外部トラヒックの変化に応じて、光統合ネットワークが弾力的に運用できることを確認し、ECOC 2018 にて発表した。 ・MPLS (Multi-Protocol Label Switching) や OpenFlow など異なるトラスポートネットワーク間でシームレスに相互接続制御を行う技術を開発し、光統合ネットワークとの連携運用を実証した。 <p>光ネットワークの応急復旧に係る技術として、以下を実施し、計画以上の成果を得た。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・通信キャリア間での暫定共用パケット転送網の建設・自動制御のデータ層相互接続実験を、世界で初めて NTT コミュニケーションズ、KDDI 総合研究所と共に、国際会議 iPOP (International Conference on IP + Optical Network) 2018 の Showcase において実施し、機密情報漏洩なしの全自動制御を実現した。さらに、二次災害によりキャリア MPLS 網と暫定共用網での故障を自動的に識別・管理する機能の研究開発を行った。また、災害時のキャリア間連携を促進するために、インセンティブを明確にすべく、資源提供の対価に基づいたビジネスモデルの研究開発を開始し、キャリア連携の最適化設計方法を創出した。 ・物理層の応急復旧に資する小型光ハブの追加機能として、分断された局舎間の OSC (Optical Supervisory Data: 光監視チャンネル) の制御ソフトウェアを実装し、通信機器ベンダの従来機との連携実証実験を行った。 ・物理層の応急復旧に資する可搬型光増幅器を、通信キャリアの研修施設にて、マンホールや架空設置環境で長期の環境試験を行い、問題点をフィードバックした筐体の改装を行った。 	
--	--	--	---	--

- ・新規プロジェクトとして、「次世代メトロ光ネットワークの耐災害戦略」が、日米連携プロジェクト JUNO2 に課題採択され、今後の研究の基盤となる監視情報の管理およびオープンな API による情報提供プラットフォームの開発を行った。さらに無線通信資源などをも併用し、輻輳や接続状況等の情報を自動的に取得する光ネットワークテレメトリ収集機構の開発を行った。
 - ・新規プロジェクトとして、低速の LPWA (Low Power, Wide Area) と DTN (Delay Tolerant Networking) 対応の光制御ソフトウェアの連携による、応急復旧用の制御管理網における光ネットワーク制御の復旧原理実証実験を行った。
- 令和元年度
- ・令和元年度は、音響光学素子をベースとした複数波長を同時に制御可能な高速光強度制御器を開発し、強度変動する 4 波長パスに対して 500 μ 秒～2m 秒での動作を実証した。
 - ・災害時などに分断されたネットワークにおいて、MPLS、Ether、Openflow、IP 網等の異なるトランスポート技術間を応急的に中継するために、相互接続のオーケストレーション機能を開発し、相互接続実証実験を行った。
 - ・災害時のキャリア間連携の取り組みとして、第三者を仲介者として、資源を利用するキャリア側が、資源を提供するキャリアに対価を支払う 500k の観点を取り入れたキャリア間需給マッチングプラットフォームの開発と評価を行った。
 - ・日米連携プログラム JUNO2 を推進し、光ネットワークでの監視機能が喪失したユースケースに対し、応急復旧用ユニットなどによる、光監視機能回復機構の実装、およびそれらの情報を自律分散的に収集するテレメトリ収集機構を実装し、実証実験を行った。ECOC2019 においてセッションハイスコア論文として採択。
 - ・応急復旧ユニットの一部として、国内商用化されている波長帯を中継増幅可能な可搬型光増幅器の消費電力を半減するプロトタイプを開発し従来品と同等の利得及び雑音特性を実現しつつ、駆動電力を半減可能であることを実証した。
 - ・極低速リンクを構成する LPWA 網の活用形態として DTN 環境での光ネットワーク制御管理の自己修復実証実験を行った。
 - ・産業技術総合研究所、KDDI 総合研究所と連携した科研費プロジェクトにおいて光ネットワークのモデリングと全自動統合制御実験を行い、OFC2020 デモゾーンでの発表した。さらに、発展的な実験結果が同会

			<p>議の最優秀論文(通称ポストデッドライン論文)の特別セッションに採択された。</p> <p>・東北大学と連携した科研費プロジェクトにおいて、炎天下での毎秒1ギガビットの深紫外自由空間通信の実証実験を行った。また、従来のデバイス原理では説明できない高速応答性が見られることから、動作原理を検証した結果、自己組織化されたマイクロLEDによって得られた特性であることを確認し、光通信実験から半導体光物性への知見のフィードバックに成功した。</p> <p>○産業界との連携により、光ネットワーク物理層における障害復旧能力の抜本的向上に向けた装置種別集約と装置設定継承自動化に関する研究開発で、以下を推進した。</p> <p>令和2年度（見込み）</p> <p>今後さらに増加が見込まれる激甚災害、あるいは若年層人口の減少に対処していくために、ネットワーク機器に対しては、誰でもミスなく、容易に保守運用ができるような製品設計（ユニバーサルデザイン）と、柔軟なネットワーク構成の構築が可能な製品ラインアップの両立が課題である。このため、光ファイバ伝送路の損失毎にラインアップが細分化されている光ファイバ増幅器を内蔵している光中継伝送パッケージ機器などの品種集約のため、複数の異なる利得を持つ光増幅媒体を光スイッチを介して配置し、伝送路損失により切り替えることにより雑音指数の劣化を最小としつつ（雑音指数劣化量で従来比4dB以内）、光ファイバ増幅器の利得可変レンジを劇的に拡大（可変レンジ15dB→30dB以上）する見込みである。また、管理パッケージ機器交換時の再設定作業の簡略化のため、パラメータ設定を保持している箇所から、交換対象の管理パッケージ機器が持つ各種の装置設定を外部記憶にバッファリングし、必要に応じ設定内容のテーラリングを行った上で、交換後の管理パッケージ機器に、一括設定することで管理パッケージ機器交換時の架前での再設定を最小化（操作手順数で従来比90%減）する見込みである。</p>	
--	--	--	--	--

<p>○光アクセス基盤技術</p> <p>5Gを超えた世代において、伝送容量、伝送距離、収容ユーザー数及び電力効率性の面で世界最高水準の光アクセスネットワークを実現するための基礎技術並びに安定的な電波環境下のエンドユーザーに対する100Gbps(ギガビット/秒)級のデータ伝送及び高速移動体に対する10Gbps級のデータ伝送を可能とするための技術を確認するものとする。</p> <p>研究開発成果については、平成32年度までにテストベッドを用いてシステム検証するとともに、開発された各要素技術を基にした産学官連携による社会実証や国際展開、標準化等に取り</p>	<p>(4)光アクセス基盤技術</p> <p>5Gを超えた世代において大量な通信トラフィックを収容可能な光アクセス基盤を実現するため、光アクセスから光コアまでをシームレスにつなぐ光アクセス・光コア融合ネットワーク技術及びエンドユーザーへの大容量通信等を支えるアクセス系に係る光基盤技術に関する研究開発を行う。</p> <p>(ア)光アクセス・光コア融合ネットワーク技術</p> <p>消費電力の増大を抑制しつつ、伝送距離×収容ユーザー数を現在比100倍以上とする超高速・極低消費電力の光アクセスネットワーク(固定・バックホール等)に係る基礎技術として、光アクセスネットワーク延伸化及び多分岐化技術や空間分割多重光アクセスネットワーク技術に関する研究</p>		<p>(4)光アクセス基盤技術</p> <p>(ア)光アクセス・光コア融合ネットワーク技術</p> <p>○超高速・極低消費電力の光アクセスネットワーク(固定・バックホール等)に係る基礎技術として、光アクセスネットワーク延伸化及び多分岐化技術や空間分割多重光アクセスネットワーク技術に関する研究開発として、以下を実施した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・平成28年度は、アクセス用光増幅サブシステムとして、冷却不要でパターン効果の小さい量子ドット半導体を用いたQD-SOA(Quantum Dot Semiconductor Optical Amplifier)を開発し、既存の低消費電力バーストモードEDFA(Erbium Doped Fiber Amplifier)と組み合わせて、メーカー間合意規格(MSA: Multi Source Agreement)に準拠したサイズ(幅70mm×奥行90mm×高さ14mm)のPON(Passive Optical Network)中継用光増幅モジュールを試作した。また、多分岐化技術として、タイのチュラロンコン大学と共同で伝送距離62km(既存の約3倍)、分岐数(=加入者)256(既存の8倍)の10Gbpsアクセスネットワークを想定した伝送実証試験を実施、既存技術の最適化により現在比20倍以上の「伝送距離×収容ユーザー数」を実証した。さらにタイにおける産学連携を進め学生の人材育成にも力を入れ、国際会議OECC(OptoElectronics and Communications Conference)2016ではタイの大学院生の論文が東南アジアから唯一採択された。 ・平成29年度は、大容量・延伸化技術として、低コストのコヒーレント通信方式を確認した。パイロット信号を付けた12.5 GbaudのQPSK変調を用い、120 km以上の伝送を実証した。本成果は、学術論文誌IEEE Photonics Technology Lettersに掲載された。また、タイのチュラロンコン大学と共同で、伝送容量10 Gbps級のPONの延伸化に向けた信号増幅用新デバイスを開発した。XG-PONの上り・下り通信の規定波長域に対応した光増幅器の基本特性を評価し、国際会議International Conference on Photonics Solutions(ICPS2017)にて発表した。 ・平成30年度は、簡素な直接検波によりコヒーレント信号を復調するクラマース・クロニッヒ検波技術を応用したコヒーレント・空間モード多重信号検出技術を開発し、3モード光ファイバで30kmのモード多重伝 	<p>(4)光アクセス基盤技術</p> <p>【科学的意義】</p> <p>○ICTハードウェア基盤技術</p> <p>「パラレルフォトニクス」について、光通信デバイス分野において多くの世界トップレベルの研究開発成果を継続的に創出している。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・二次元受光アレイ素子を世界に先駆け開発し、マルチコア光ファイバを直接接合し世界最大級の800Gbps級大容量パラレルリンクを達成、空間光無線では4波長多重による大容量100Gbps伝送と光ビームのトレランス性能が非常に高い40Gbps級PAM信号伝送に世界で初めて成功した。 ・「異種材料融合(ヘテロジニアス)技術」を立ち上げ、広帯域波長可変量子ドット光源の超小型化に世界で初めて成功、超小型ミリ波シンセサイザ用二波長量子ドットレーザを世界に先駆け開発、さらに量子ドット光増幅器により世界最高級の温度60℃環境で80Gbaud信号の増幅に成功した。 <p>○「100Gアクセス」に係る基盤技術について、90GHz帯光ファイバ無線の高度化により、中長期計画を超える世界最大級容量の100Gbps超級の光・無線シームレス接続を達成する見込みである。</p> <p>等、科学的意義が大きい独創性、先導性に富んだ特に顕著な成果の</p>
---	--	--	---	---

<p>組むこととする。</p>	<p>開発を行う。また、超高速移動通信ネットワーク構成技術として、ネットワーク遅延最適化技術及び光・無線両用アクセス技術等に関する研究開発を行う。テストベッドを用いたシステム検証を行うことで、各要素技術を実証し、光アクセス・光コア融合ネットワークの基盤技術を確立する。</p> <p>(イ)アクセス系に係る光基盤技術</p> <p>小型・高精度な送受信機の実現を可能としつつ、光や高周波等の伝送媒体に制限されない光アクセスネットワークを実現する技術として、光と電磁波(超高周波等)を効率的に融合し、高密度かつ高精度な送受信・交換を実装するICTハードウェア基盤技術「パラレルフォトニクス」を研究開発する。また、アクセス系において、エンドユーザーに対する通信の</p>		<p>送実験を行い、伝送後の各モードの信号検出を世界で初めて実証した。簡素で安価な検出器構成により、将来のアクセスネットワークやデータセンタネットワークにおけるコヒーレント・空間モード伝送用受信器としての採用が期待できる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・令和元年度は、半導体光増幅器の2段構成による中継増幅器を用いて、1024 ユーザー収容(現在技術の32倍)、70kmのPONアップリンク(20Gbit/s PAM4)を想定した長距離・多分岐伝送に成功し、伝送距離×収容ユーザー数で現在技術(GPON)比の約100倍超を達成した。 また、短距離通信向けの高コア密度標準外径8コアファイバを導入し、1.3テラbps(32.5Gbaud, PAM8, 4波長, 4コア)の大容量短距離双方向伝送に成功し、光通信分野のトップカンファレンスであるECOC(European Conference on Optical Communication)2019において発表した。 ・令和2年度は、GPON比100倍超(1024ユーザー・70km相当)を収容しつつ、波長分割多重PON(WDM-PON)の導入により、ユーザー当たりの通信容量を8倍にするアップリンク伝送を実証する見込みである。また、GPUベースの簡素なコヒーレント受信機の開発及びそれを利用したマルチモード伝送を実証する見込みである。 <p>○超高速移動通信ネットワーク構成技術として、ネットワーク遅延最適化技術に関する以下の研究開発を実施した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・平成28年度は、ギガビット級の通信を円滑に行なうために、通信デバイスが接続する基地局を変更する際に、変更後の通信遅延が最小となるよう、基地局近傍にゲートウェイを置くネットワークを定義した。 <p>機構のテストベッド JGN 上のルータに、通信デバイスが基地局を跨いで移動しても通信遅延を最小に保つよう基地局にゲートウェイ技術を実装することを模擬し、JGN を用いた有線ネットワークを構築した。移動前後に通信を最短経路で実施できることを確認し、さらに、東京=大阪、名古屋=大阪間で1.5Gbps程度の通信ができることを検証した。</p>	<p>創出や将来的な成果の創出が期待される実績が得られた。</p> <p>【社会的価値】</p> <p>○「パラレルフォトニクス」について、マルチコアファイバの大容量伝送を支える光デバイスの開発、光給電による動作が可能な無バイアス動作 UTC-PD による100Gbps リアルタイムエラーレート測定に成功、さらに空間的な光検波を用いた新たな光同期検波方式で光位相回復技術を高度化し、高多値度に対応したキャリアレス光コヒーレント受信に世界で初めて成功した。</p> <p>○「100G アクセス」に係る基盤技術について、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・鉄道位置情報を基に、時速500kmを超える高速鉄道を光ネットワーク上で追跡しながら適宜20Gbps級大容量信号を配信することが可能であることを原理的に実証した。 ・伝送メディアの共用化により、90GHz ミリ波無線による50Gbaudと光無線による100Gbpsをハイブリッドで利用できる光・無線ハイブリッド通信技術の構築とその原理実証に成功した。 <p>○超高速・極低消費電力の光アクセスネットワーク(固定・バックホール等)に係る基礎技術として、現在比32倍のユーザー数を収容し、伝送距離×収容ユーザー</p>
-----------------	--	--	--	--

	<p>大容量化及び広帯域センシング信号の低遅延化等を実現する技術として、光と超高周波を融合した 100Gbps 級データ伝送等のシステム技術「100G アクセス」及び高速波形転送技術「SoF (Sensor on Fiber)」等を研究開発する。これらの研究開発成果に基づき、エンドユーザーに対する 100Gbps 級の高速データ伝送及び高速移動体等に対する 10Gbps 級のデータ伝送の産学官連携による社会実証を行うとともに、国際展開等にも取り組むことで、アクセス系に係る光基盤技術確立する。</p> <p>開発を行う。</p>		<p>ITU-T の Focus Group (FG) IMT-2020 において、上記のネットワークを有線に限定しつつも移動通信を模擬できるテストベッドとして寄書提出し、FG のネットワークソフト化文書最終報告書に組込まれた。</p> <p>様々な環境で多様なユーザーが、上記に関連する移動通信技術(ソフトウェア)を利用できるよう可搬型実験システムを構築した。Wi-Fi アクセスポイントが乱立し通信が不安定な南米の国際スポーツ競技大会で、アスリート支援スタッフや 9 種目 80 名が利用する映像配信システム等に、本システムを提供した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・平成 29 年度は、産学との連携により、将来の 100Gbps 級 RoF 技術をシーズとして複数リンクを効果的に選択し高速データ伝達を図る 100Gbps 級フロントホール網を設計した。 <p>機構のテストベッド JGN に昨年度構築したギガビット通信ができる有線ネットワークテストベッド(JGN 上のルータに、通信デバイスが基地局を跨いで移動しても通信遅延を最小に保つよう基地局にゲートウェイ技術を実装することを模擬)に、JOSE 上のサーバと接続できるようにし、長期的なビッグデータ収集・分析を目指して、無線接続するセンサデバイス群をクラウドから安全な追跡・制御を可能とする環境を整えた。</p> <p>平成 28 年度に ITU-T の Focus Group (FG) IMT-2020 においてネットワークソフト化文書最終報告書に組込まれた、移動通信を模擬できるテストベッド構築に関する記述が、IMT-2020 のネットワークソフト化に関する標準化とオープンソースに係る活動をまとめた ITU-T 補助文書 Y.sup44 に組込まれた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・平成 30 年度は、機構のテストベッド JGN、WiFi、移動通信(4G)、有線 LAN などを用いてエンドツーエンドのネットワークを構築した。 <p>○超高速移動通信ネットワーク構成技術として、光・無線両用アクセス技術に関する以下の研究開発を実施した。</p>	<p>数で現在の技術(GPON)比の 100 倍超を達成した。</p> <p>等、社会課題の解決や社会的価値の創出に貢献する顕著な成果の創出や将来的な成果の創出が期待される実績が得られた。</p> <p>【社会実装】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○産学連携のもと、リニアセルレーダシステムの社会実装につながると取り組みを実施 ・平成 28 年から成田国際空港滑走路に 4 台の異物感知レーダシステムを設置、滑走路上の 3cm 程度の金属円柱の検出に成功した。民間ビジネスの創成を目指し、同システムのプロモーションを実施した。 ・マレーシアのクアラルンプール(KLIA) 空港のレーダ設置プラン等を確定し、令和元年度から KLIA 空港でのフィールド試験を開始した。 <p>○産学連携のもと、高速移動体用光ファイバ無線技術の実証実験を実施し、時速 240km で走行する北陸新幹線とミリ波による 1.5Gbps の世界最大級の大容量伝送実験に成功した。</p> <p>○標準化の取り組み</p> <ul style="list-style-type: none"> ・光ファイバ無線の応用技術に関して、ITU-T SG15 等にて積極的に標準化活動を実施し、平成 30
--	--	--	--	--

			<p>・平成 28 年度は、光ファイバ無線のための大容量データ送受信技術の確立に必要な基盤技術として、光ファイバを介して遠方まで配信可能な高精度・高周波基準信号の生成技術である「ミリ波/THz 帯基準信号源」の動作実証に、高度光波制御技術と光コム生成技術を用いて成功した。また、光情報通信の大容量化のための空間多重化軸の開拓として、マルチモードを効率的に生成・制御するための光源や増幅等の光 ICT デバイス技術の開発に着手した。</p> <p>・平成 29 年度は、「光集積デバイス技術」と「光・高周波クロストーク制御技術」を基に、光ファイバ無線の大容量化に向けた変調技術として、高調波ノイズ発生抑制を目的として光信号から電気信号への変換における高い線形性を実現する変調デバイス技術の開発に着手した。</p> <p>・平成 30 年度は、28GHz 帯や 90GHz 帯の高周波におけるマルチパス伝送特性およびフェージング特性に関する基礎特性の評価を実施した。</p> <p>・令和元年度は、28GHz 帯信号の光ファイバ無線リレー技術に関する原理検証を実施し、面発光レーザを用いた高周波信号のリレーに成功した。</p> <p>○産学連携により、エラスティック光アグリゲーションネットワークの研究開発で、以下を実施した。 ----- 28 年度 -----</p> <p>・多様なサービスへのアクセスネットワークを支える従来の PON(Passive Optical Network)では、端末装置と局舎装置 OLT (Optical Line Terminal) が多対一のスター状に固定接続されており、光パス変更時に経路設定および通信設定に多大の時間を要する。本研究開発では光スイッチの低損失化・高速動作化、光送受信器の動的通信パラメータ変更技術、リソース制御方式を開発し、柔軟に帯域・経路変更が可能な光パスを駆使して、平時には効率性に優れ、災害時にも物理リソースを組み替えてライフライン維持に資するネットワークを提案した。さらに、これらの開発した技術を組み合わせた実験用ネットワーク(OLT,ONU(Optical Network Unit)、波長選択スイッチ、光送受信器、リソースコントローラ、光スイッチコントローラ等で構成)で実機実験を実施し、世界に先駆けてその有効性を実証した。</p>	<p>年に新勧告文書「G. 9803」が正式に合意され、令和元年度に「Radio over fiber systems」勧告の改訂版 (G. 9803Amd. 1) が成立した。</p> <p>等、社会課題の解決や社会的価値の創出に貢献する顕著な成果の創出や将来的な成果の創出が期待される実績が得られた。</p> <p>以上のことから、中長期目標期間を着実に達成した上で、顕著な成果の創出が認められた他、将来的な成果の創出が期待される実績も得られたため、評定を「A」とした。</p>
--	--	--	--	---

			<p>○産学連携により、エラスティック光通信ネットワーク構成技術として、以下を実施した。</p> <p>----- 28 年度 -----</p> <ul style="list-style-type: none"> ・エラスティック光通信ネットワークの柔軟性を最大限活用することにより、波長分割多重方式において、周波数間隔が決められている従来の固定グリッドに比較して、故障発生時の復旧に要する光パスの周波数利用効率において 50%以上の性能向上を実現する超高信頼化技術のフィージビリティ検証を実施した。商用 ROADM (Reconfigurable Optical Add/Drop Multiplexer) をベースとした、高信頼エラスティック光ノード実証実験ネットワークを構築し、開発した各要素技術の動作確認および、相互接続性の検証を行い、二重経路故障時においても、従来に比して、接続性救済率を 70%向上させた復旧動作を確認した。 <p>○産学との連携により、光・無線両用アクセス技術の実現に向けた耐環境性の高いキャリアコンバータ技術の研究開発として以下を実施した。</p> <p>----- 28 年度 -----</p> <ul style="list-style-type: none"> ・InP 系化合物半導体高電子移動度トランジスタ(HEMT)を試作し、原理検証実験を実施。また、シリコンフォトニクスによる波長可変フィルタを試作し、波長可変レーザーの動作を実証した。 ・ビーム制御機能つきミリ波伝送ユニットは、回路素子、アンテナ、放射素子などを試作し、基礎データ取得した。また、車載環境でのキャリアコンバータユニットの基本動作検証を実施し、取得データから改善点など課題を整理した。 <p>----- 29 年度 -----</p> <ul style="list-style-type: none"> ・光吸収層として UTC-PD(Uni-Traveling-Carrier Photodiode) 構造をソース側に集積した InP 系化合物半導体高電子移動度トランジスタ(HEMT) の試作を完了した。さらに、ミキサ後段にトランスインピーダンス増幅器をハイブリッド実装するモジュールの設計を完了した。 ・高速な波長切り替えが可能な直接通電型波長フィルタを試作し、波長切り替え動作を実証した。また接着剤を用いた SOA (Semiconductor Optical Amplifier) とシリコンフォトニクスチップとの簡易接合を実施し、良好な発振特性を持つ波長可変レーザーチップの試作に成功した。 	
--	--	--	--	--

・偏光における幾何学的位相を利用した OAM (Orbital Angular Momentum) ソーターを試作し、 $1.5 \mu\text{m}$ の光源に対してほぼ設計通りの特性を有することを確認した。

・キーデバイスとなる MMIC (Monolithic Microwave Integrated Circuits) とアンテナの開発において、必要な回路機能の検討とその単機能回路ブロックの試作/評価を行い、基本的な動作の確認を行った。同時に、トランジスタ等の素子単体でのデータを取得し、設計パラメータの確認と性能確認を行った。

・E バンド (80GHz 帯) 無線通信を車載し、インフラとの距離に対する受信電力、PER (Packet Error Rate) を評価可能な実験系を構築した。また、高解像度カメラ映像を約 1Gbps かつ非圧縮で伝送し、車影からの飛び出しをリアルタイムで注意喚起するデモを実施し、課題を導出した。

・キャリアコンバータ実証実験として、協力機関が開発した光変調器等を元に、今年度は E バンド (80GHz 帯) での実証実験を行った。

・従来 IC では高速化困難なデータ復調や情報処理を小型・低消費電力化する IC 技術開発課題検討として、デジタル下方変換の基本構成を検証した。

----- 30 年度 -----

・InP 系化合物半導体高電子移動度トランジスタ (HEMT) をベースとした光電子融合ミキサに関して、光吸収層として UTC-PD (Uni-Traveling-Carrier Photodiode) 構造を新たに導入し、UTC-PD 構造を導入していないミキサと比べミキシング性能の 34 dB の向上を果たした。さらに、ミキサ後段にトランスインピーダンス増幅器をハイブリッド実装するモジュールの試作を完了した。

・シリコンフォトニクスチップを外部共振器としたヘテロジニアス波長可変レーザにおいて直接通電加熱による 10 マイクロ秒程度の高速な波長切り替え動作を実証した。また光学接着剤を用いて簡易接合したヘテロジニアスレーザを内蔵したバタフライパッケージモジュールの試作に成功した。

・OAM (Orbital Angular Momentum) モード多重通信においてモード分解を行う素子 (OAM ソーター) の分解精度を著しく向上させる新規素子 (光波複製素子) を開発し、ほぼ設計通りの動作を実証した。

・キャリアコンバータシステムにおけるマイクロ波信号発生や光データ信号生成のキーデバイスである LN (ニオブ酸リチウム, LiNbO_3) 変調器の低駆動電圧化の中間目標を達成し、試作品を開発した。

・ビーム制御機能つきミリ波伝送ユニットに必要な要素技術の開発及びビームステアリング検証機の開発を行った。要素技術に関しては、E帯(80GHz帯)にて安定動作する位相器、ガラスエポキシ樹脂を用いた低損失で小型化可能な、アンテナ素子を開発した。検証機開発に関しては、8CH フェーズドアレーアンテナによるビームステアリング機能、自動方向調整アルゴリズムの動作検証を実施した。

・E帯無線通信システムを車載し、インフラとの通信距離 500m 以上を実現するための実験系を構築し、大地反射干渉対策、車両位置変化に追従する指向性制御アンテナ等の課題を導出した。また、高解像度カメラ映像の非圧縮伝送による車影からの歩行者飛び出し検知システムを構築し、大地反射干渉、アンテナ指向性不一致による映像瞬断や大型バスによる電波遮蔽等の課題を明らかにした。

・40GHz 対応高消光比光変調器にて E 帯キャリアコンバータ実証実験を行った結果、平成 29 度の光変調器から大幅な特性改善により 500m 相当の QPSK/1Gbaud 無線伝送を確認した。

・耐環境性実験を行い、バイアス制御対策により環境温度に対する通信品質の劣化はほぼ影響が無いことが判明した。

・従来 IC では高速化困難なデータ復調や情報処理を小型・低消費電力化する IC 技術開発課題検討として、新規考案オールデジタル高速 AD(Analog/Digital)変換方式の基本特性を検証した。

----- 令和元年度 -----

・UTC-PD 上部集積 HEMT に関して、UTC-PD 部のメサ面積の縮小によって出力強度を向上。また UTC-PD 上部集積型 HEMT と TIA 二段のハイブリッド実装に向け、専用デバイスチップとモジュールパッケージの設計を実施。ASK 変調光データ信号からミリ波データ信号への直接周波数下方変換実験に関して、W 帯(IF 周波数 92.5 GHz、帯域 17.5 Gbps)をターゲットと定め、ダブルミキシング実験系へ拡張された。

・シリコン導波路に直接通電加熱位相シフターを装荷した光スイッチにおいて、オーバードライブ制御を用いることで、1 マイクロ秒以下の非常に高速なスイッチング動作の原理検証に成功した。また、量子ドット SOA を用いた二波長可変レーザにおいて二波長の差周波に対応したミリ波の観測に成功した。

・偏光における幾何学的位相を利用した OAM ソーターの性能向上のため設計パラメータを見直して試作を進め、OAM モード選倍化装置の小型化のためサニャック干渉計型ではなく偏光回折素子を利用した新たな配置を考案し、ほぼ設計通りの性能を発揮することを確認した。

			<p>OAM ソーターと併せてほぼラックマウントサイズに統合可能である見通しを得た。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高周波特性で課題であった 60GHz 以上の特性劣化について要因を特定し、シミュレーション等で対応を検討した。その結果、特性劣化の抑制を図る設計を適用し、高周波域までスムーズな特性を有するミリ波帯変調器を実現した。 ・キーデバイスとなる MMIC においては、必要となる回路機能を集積化して、4 系統の送信アンテナの位相を制御する MMIC を試作・評価し、実際にプリント板に表面実装して、アンテナ部を含む動作特性を検証した。アンテナ素子においては、広角にわたって利得低下の少ないビームスキャンができる素子を試作・評価した。さらに、狭ビームにおける 2 次元ステアリングを機械的な追尾実験により、方向調整アルゴリズムが問題なく動作することが実証された。 ・前年度の実証実験の結果から出した車載アンテナの要件を満足させるアンテナの構造として、誘電体ホーンアンテナと 0 次アンテナの 2 タイプを提案した。両方ともアンテナ単体での特性は、シミュレーションと試作及び実測で、要件の周波数帯域と側面放射特性を満足することを確認した。誘電体ホーンアンテナは構造関連特許を出願した。 ・100GHz 対応高消光比変調器にて、E バンドキャリアコンバータ実証実験を行った。受信側について、昨年度は E バンドからダウンコンバート(搬送波 4GHz)後に光変調器を動作させていたが、今年度は E バンドのまま光変調器を動作させて QPSK/0.9GBaud を実現した。 ・実用に近い車載 LAN フォーマット及びベースバンド変調として、IEEE802.3ch で規定された PAM4 伝送方式を採用し、PHY モデルを開発した。 <p>電気は、本モデルを用いたシミュレーションにて、メタルハーネス (IEEE802.3ch 準拠 STP)、シングルペアでの 10Gbps 超の電気伝送を検証した。IEEE より入手した S パラメータの上限周波数 7.5GHz を Baud Rate に 13.3Gbps まで評価した範囲では劣化はみられず限界はさらに高いと考えられる。光は、電気伝送からのシームレスな置き換えを狙い、電気と同一の LAN フォーマット及びベースバンド変調を採用することとした。電気との差分である光モジュール及び光ファイバ部分のモデルを作成し、電気部と合わせたシステムシミュレーション環境を構築し、光での PAM4 伝送を検証した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・FPGA とディスクリートデバイス(ADC/DAC)で構成するプロトタイプを開発した。これを用いてメタルハーネス(STP)での初期性能評価を実施した。プロトタイプ装置の上限である 2.5Gbps 伝送の範囲では、メタ 	
--	--	--	---	--

ルハーネスの高周波特性劣化部は顕在化する事なくシステム要求である $BER < 1e-12$ を満足した。さらに電気/光変換デバイス、光モジュール、光ファイバからなる光リンク部のプロトタイプを構築し、初期性能評価を実施した。NRZ 方式での信号波形を取得し、開発した光モデルとの整合性を確認した。

----- 令和2年度(見込み) -----

100Gbps 級の光ネットワークと高周波モバイルネットワークを高効率でシームレスに接続することを実現する基盤技術として、UTC-PD 集積 HEMT デバイスの 100GHz 級動作、シリコンフォトニクスを用いた超小型波長可変レーザ、OAM ソーター自体のパターンの最適化・短焦点化による精度向上 110GHz 級 EO 変換技術の実現、アンテナ集積による 2 次元ステアリング技術、電気・光のメディアコンバージョン技術の検討等の、高い環境耐性を有するキャリアコンバータ技術を確立する。

○産学との連携により、多様なサービスに対応する有線・無線アクセスネットワークのプラットフォーム技術として以下を実施した。

----- 令和元年度 -----

- ・ネットワーク装置のオープン化技術として、オープンなアクセス機器とオープンソースソフトウェア(OSS)を活用し、光アクセス、無線アクセス、Wi-Fi アクセスの各ネットワーク基盤を設計、構築した。オープンなレイヤ2スイッチ機器、およびプログラマブルスイッチ機器と OSS を活用し、ファブリックネットワーク基盤を設計、構築した。
- ・ネットワーク仮想化基盤技術として、OSS を活用し、光/無線/Wi-Fi アクセスの各機能を Network Function Virtualization (NFV) 化するための設計、構築や、オープンネットワークコントローラ及び NFV コントローラの設計、構築を行った。
- ・ゼロタッチ制御技術として、光・無線ドメインごとに機器接続や起動をトリガとして各ドメインにおけるパスの簡易自動化制御を設計、構築した。
- ・エッジクラウドとネットワークの一体最適制御技術として、ネットワーク機能の低遅延化を可能とする仮想ブリッジ機能の調査・検討を行った。また、最適資源配備アルゴリズムのインプットとなる性能統計情報を収集、通知する機能の設計を行った。また、エッジサーバを含む開発プラットフォームの利用状況に応じて Multi-access Edge Computing (MEC)

			<p>サーバとクラウドを動的に使い分ける機能を導入し、実験評価によって本機能の有効性を示した。開発するプラットフォームで収集可能な情報を利用した一体最適資源利用技術を確立し、提案技術によって総処理遅延を最小化できることを示した。また、アプリケーションで使用する MEC サーバとクラウドを動的に使い分ける最適資源利用アルゴリズムを開発した。確立したアルゴリズムの性能をシミュレーションで評価し、本義実の実用性を示した。</p> <p>----- 令和 2 年度（見込み） -----</p> <p>・無線・有線アクセスネットワークの仮想化プラットフォーム基盤を確立するために、オープンなネットワーク機器を用いてアクセスネットワークの仮想化環境を構築し、ネットワーク機能仮想化、ハードウェア抽象化、論理パス、自動化設定、MEC 基盤技術、アプリケーションを開発する予定である。構築した仮想化環境および開発した技術の性能を実機実験によって評価する。仮想化環境は、現行の無線・有線アクセス装置やレイヤ2スイッチを使用し、汎用サーバと接続したネットワーク構成でオープンソースを使ったアクセスネットワークの仮想化環境を構築する、また、ネットワーク仮想化環境でネットワーク機器の接続検出/登録・論理パスの生成を自動化するゼロタッチ制御を開発し、新たなサービス導入の 1/10 短縮化とネットワーク帯域を従来比 1/100 を達成する見込みである。</p> <p>(イ)アクセス系に係る光基盤技術</p> <p>○光と電磁波(超高周波等)を効率的に融合し、高密度かつ高精度な送受信・交換を実装するICTハードウェア基盤技術「パラレルフォトンクス」の研究開発として、以下を実施した。</p> <p>[光送信技術(電気→光変換)] 光源技術</p> <p>・平成 28 年度に、高効率かつ高機能な超小型デバイスを開発するための ICT ハードウェア基盤技術として、異なる特性・機能を有する材料を適材適所に配置して高機能化する「異種材料融合(ヘテロロジニアス)技術」と超小型・高密度実装の「光集積デバイス技術」を立ち上げた。これらの技術を用い、従来テーブルトップサイズであった広帯域波長可</p>	
--	--	--	--	--

変量子ドット光源の超小型化(0.002cc)に世界で初めて成功し、超小型でありながら従来のCバンド(4THz)に比しておよそ倍の8THz(44nm)帯域の波長可変を達成した。このヘテロジニアス技術の成果は光通信分野のトップカンファレンスであるOFC (Optical Fiber Communications Conference) 2017の招待講演にも採択された。

・平成29年度は、ミリ波信号の光ファイバ伝送のために重要となる光・高周波融合デバイス技術として超小型ミリ波シンセサイザ用二波長量子ドットレーザを世界に先駆け開発に成功し、200GHz以上の周波数差に対応可能な二波長発生原理実証を達成した。また、光アクセスのコヒーレント信号伝送のために重要となる狭線幅・広帯域光源技術として、独自半導体結晶技術を駆使することで150°C以上の過酷環境下でも安定に動作する広帯域量子ドット光増幅チップの開発に成功した。これらの研究成果は著名論文誌の招待論文や招待講演等として採択された。

・平成30年度は、波長可変量子ドット光源に高精度・光結合実装技術を導入し、産学官連携のもと世界に先駆け高安定な光電気融合集積デバイスの構築に成功した。本技術を用い、従来の外部共振器構造を1000分の1程度まで小型化できることが示された。本デバイスの光集積化技術に関連する研究成果は、デバイス分野のトップカンファレンスCLEO (Conference on Laser and Electro-Optics)2018や、著名国際会議の招待講演に採択された。更に、研究成果を社会実装につなげる取組として、基礎的な材料研究で確立した量子ドットデバイス技術を産学官連携により高度化・広帯域化し、従来の半導体技術では困難であった新規波長帯域1100nmの光ゲインチップの開発に成功し、これを搭載した世界初の波長飛びの無い(モードホップフリー)の広帯域・波長可変量子ドット光源の製品化に成功した。

・令和元年度は、小型集積ヘテロジニアスデバイスの高機能化を目的として、C-band量子ドット光増幅器により世界最高級の温度60°C環境で80Gbaud信号の増幅に成功した。さらにヘテロジニアス光集積デバイスの温度安定化のために、内蔵温度センサーの基礎動作試験に成功した。これらのヘテロジニアス光集積デバイスの環境耐性に関連した研究成果は多数の招待講演や招待論文に採択された。令和2年度に向けて、温度等の環境耐性に強い超小型・広帯域波長可変光源の実現および、より情報通信に利便性が高く光・電波の周波数基準に重要な超小型多波長光源の実現が達成見込み。

			<p>光変調技術</p> <ul style="list-style-type: none"> ・平成 30 年度は、従来よりも高い性能指数を有する新型 EO ポリマー材料(機構が独自開発)を用い、世界初の超小型・高線形性・超高速光変調デバイスを開発し、その動作実証に成功した。本光変調器は一般的な誘電体 LN 光変調器の 1/5~1/10 程度の大きさで、60GHz を超える高速電気信号で動作することを実証した。本成果は、マイクロ波フォトニクス分野のトップカンファレンスである MWP (International Topical Meeting on Microwave Photonics) 2018 や著名な国際会議の招待講演に採択された。 ・令和元年度は、次世代変調方式に対応した擬似 4 値デジタル応答を持つ PAM4 デジタル・パラレル光強度変調モジュールを新規開発した。100Gbps 級 (50Gbaud、PAM4) のデジタル信号に対応可能な世界最高速 30GHz 帯域でのモジュール動作に成功した。電子情報通信学会の著名論文誌の招待論文に採択された。令和 2 年度には、光変調器の 100Gbps 信号の高ロバストな生成に有効な 50GHz 帯域以上の周波数特性の平坦化を実現する見込み。 <p>[光受信技術(光→電気変換)]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・平成 28 年度は、光ファイバ無線のための光・無線融合ハードウェア技術を発展させ、無バイアス(デバイス駆動電力線を必要としない)100GHz 級で動作し、デバイス構造最適化による光・電気変換の直線性向上を図った超高速・高効率光電気変換デバイスの開発に成功した。さらに同デバイスとマルチコアファイバ伝送技術を活用することで、100GHz 級高周波信号を伝送しつつ、デバイス駆動のためのエネルギーを同時に光ファイバで配信・配給する技術を世界に先駆け確立し、CLEO 2016 で最優秀論文(通称ポストデッドライン論文)の特別セッションに採択され、多数のメディアに取り上げられた。 ・平成 29 年度に、「光集積デバイス技術」の中で課題となっていた光・高周波クロストークに関して、その基礎的な制御技術を確認し、それを基にした一素子当たり 10GHz 以上の高速で動作する超小型・高集積 2 次元受光アレイ素子を世界に先駆け開発した。その新デバイスを活用し、25Gbaud 級の超大容量光空間通信の原理実証を世界で初めて成功し、OFC2018 で最多得点論文として採択された。 ・平成 30 年度は、超小型・高集積 2 次元受光アレイ素子の高速化、低クロストーク化を進め、世界初の 400Gbps 級 (25Gbps × 16ch) 大容量パラレルリンクを達成した。本成果は、ECOC2018 に採択された。これ 	
--	--	--	---	--

ら「光・高周波変換デバイス技術(パラレルフォトニクス技術)と光無線融合通信応用技術(100G アクセス技術)」の論文は、IEEE 著名論文誌の中で、世界の読者数の多い論文(ポピュラー論文)としてランクイン、学術的価値を示す成果を創出した。

- ・光・無線融合伝送システム等の通信サブシステムでは多数のアンテナ局への給電が問題になるが、その一つの解決策として、令和元年度に、光給電による動作が可能な無バイアス動作 UTC-PD による 100Gbps(50GHz 帯域の波形伝送相当)リアルタイムエラーレート測定に成功。この成果は光通信デバイス分野のトップカンファレンス CLEO2019 の最得多点論文に選出され招待講演に採択された。光と高周波クロストークが極度に抑圧された二次元アレイ受光デバイス・モジュールを世界に先駆け開発し、それをを用いた 19 コアを有するマルチコア光ファイバ直接接合により記録を更新し、世界最大級の 800Gbps 級(50Gbps×16ch)大容量パラレルリンクを達成した。この成果は MWP2019 に採択され、また関連する 2 次元アレイ受光デバイスを用いた空間光パラレルリンクの成果が OFC2018 のトップスコア論文として IEEE 著名論文誌に掲載された。さらに、高集積 2 次元受光アレイ素子を活用した空間光無線として、4 波長多重による 100Gbps 伝送、光ビームのトレランス性能が非常に高い 40Gbps 級 PAM 信号伝送に世界初成功し、OFC2020 にトップスコア論文として採択された。令和 2 年度には、2 次元アレイ受光を活用し、空間的なロバスト性の高い、大容量かつフレキシブルな空間光無線基盤技術を確立見込み。
- ・光位相に情報を乗せるコヒーレント光通信において、小型でシンプルな受信器に大きく貢献しうる新原理の研究を実施した。平成 30 年度は、独自に開発した 2 次元受光アレイ素子と位相回復信号処理アルゴリズムを用いた、新たな光コヒーレント受信方式の実証実験に世界で初めて成功し、OFC2019 の最優秀論文(通称ポストデッドライン論文)の特別セッションに採択された。
- ・令和元年度はさらに高多値度を受信することに成功し ECOC2019 に採択、また著名論文誌に招待論文として採択され、ECOC では、本技術に関連した“Optical Field Reconstruction”技術分野が新たな技術セッションとして設立された。令和 2 年度には、新規開発した位相回復信号処理アルゴリズムを高度化し、より周波数利用効率の高い変調信号への適用技術を確立見込み。

○光と超高周波を融合した 100Gbps 級データ伝送等のシステム技術「100G アクセス」及び高速波形転送技術「SoF (Sensor on Fiber)」等の

研究開発として、以下を実施した。

[光ファイバ無線関連技術]

・平成 28 年度は、光と高周波間での信号の相互変換技術として、高精度「ミリ波／THz 帯基準信号生成技術」を用いた光・無線・光ブリッジ伝送の動作実証に成功した。また、光・高周波融合に関する基盤技術として、従来の LTE や Wi-Fi 等のデータ信号を複数束ねてミリ波帯の高周波無線で伝送することを可能とする RoRoF (Radio on Radio over Fiber) 技術の開発に着手し、ミリ波帯光／高周波アナログ波形伝送による大容量無線信号等のミリ波帯への変換と複数信号のパッケージ化とそのミリ波無線伝送技術の実証に成功した。これらの実証により、第 5 世代移動通信システム (5G) 以降の光／無線融合アクセスネットワークの構築に重要となる基盤技術確立の端緒を開いた。光ファイバ通信と無線通信を融合する光ファイバ無線技術(Radio over fiber; RoF)を高度化し、空間多重伝送方式を実装した 90GHz 帯光ファイバ無線技術を開発した。

・平成 29 年度は、光⇄高周波相互変換による 20Gbps 以上のリンク形成に成功し、光通信分野のトップカンファレンスの招待論文として採択された。さらに、高速波形転送技術の要となるアナログ波形伝送に適した新型パラレル光変調デバイス構造の原理検証と高速 60GHz 超級の高線形電気光変換技術の開発に成功し、ECOC2017 に採択された。

・平成 30 年度は、中間周波数をサブキャリアとして多重化する伝送技術を用いた SISO (Single Input Single Output) による 40Gbps 超級の大容量光・無線シームレス伝送に世界に先駆け成功した。さらに、波長多重技術を用いた 100 波長チャンネル切り替え 10Gbps 級光ファイバ無線のアップリンクを達成し、アップ／ダウンリンクの双方向性を考慮した光と高周波無線を融合した大容量伝送のための基盤技術の構築に成功した。本成果は、ECOC2018 や OFC 2019、多くの招待講演に採択された。

・令和元年度は、高線形性かつ 100GHz 以上の広帯域の超高速 UTC-PD を用いることで大容量センサー等の波形伝送に対応した 50GHz 帯域リアルタイム一括伝送に成功した。この成果は CLEO2019 の最多得点論文に選出された(一部、パラレルフォトニクス研究と連携)。さらに光・高周波融合伝送の有線・無線ブリッジ技術や中間周波数光ファイバ無線技術等の 50GHz アナログ信号に対応可能なシンプルな光・高周波相互変換技術を用い、更に 2×2 空間多重等の多重化技術の高度化を図ることで 90GHz 帯光ファイバ無線により、年度計画

を超える世界最大級容量の 80Gbps 超の光・無線シームレス接続を達成した。関連する研究成果は光通信分野の著名国際会議 MWP2019 や ACP2019 の招待論文に採択された。令和 2 年度には中長期計画 100Gbps を超えた光・無線シームレス接続達成見込みである。

[光・高周波ハイブリッド技術]

- ・平成 28 年度、100G アクセス基盤技術として、20Gbps 級の無線信号を光ファイバへ重畳したネットワークにおいて、高速な波長切り替えが可能なレーザ光源を用いることで信号配信の 10 マイクロ秒以下の高速経路切り換えと、50 以上の遠隔装置へ送り届ける技術を世界に先駆け開発した。
- ・平成 29 年度は、鉄道位置情報を基にした予測ベースの信号配信・無線局活性化を行うことにより、あたかも無線基地局が高速鉄道に付随して移動しているように、移動中も接続が途切れない通信システムの構築ができることを実証した。これにより時速 500km を超える高速鉄道を光ネットワーク上で追跡しながら適宜 20Gbps 級大容量信号を配信することが可能であることを原理的に実証した。これらの成果により、第 5 世代移動通信システム (5G) 以降の光／無線融合アクセスネットワークの構築に重要となる基盤技術確立の端緒を開いた。本成果は OFC2018 最優秀論文 (通称ポストデッドライン論文) の特別セッションに採択された。
- ・光や高周波等の伝送メディアを意識させない伝送サブシステムの研究として、機構で培ってきた 100GHz 級光・高周波相互変換デバイスの基盤技術とパラレルフォトリクス技術を活用した超小型・高集積 2 次元受光アレイ素子を用い、平成 29 年度に、マルチコア・マルチモード空間多重光通信に成功した。
- ・平成 30 年度は、世界最高級 100Gbps (25Gbps × 4 チャンネル) の大容量空間光伝送の一括受信を実証した。本成果は、ECOC2018 に採択された。
- ・令和元年度は、光や高周波等の伝送メディアの共用化による無線区間の大容量化として、90GHz ミリ波無線による 50Gbaud と光無線による 100Gbps をハイブリッドで利用できる光・無線ハイブリッド通信技術の構築に成功し、ECOC2019 と INFOCOM (Demo Session) に採択された。令和 2 年度には、空間光無線とミリ波帯無線を組み合わせ、経路切り替えを可能とするようなフレキシブル光・無線シームレスリンク基盤技術を確立見込みである。

○エンドユーザーに対する 100Gbps 級の高速データ伝送及び高速移動体等に対する 10Gbps 級のデータ伝送のアクセス系に係る光基盤技術に関する、産学官連携による社会実証と国際展開等として以下を実施した。

[リニアセルレーダシステム]

産学連携のもとで、リニアセルレーダシステムの社会実装につながると取り組みを実施した。

- ・平成 28 年から、成田国際空港滑走路に 4 台の異物感知レーダシステムを設置、風雨等の耐候性検証も含めた連続運用フィールド試験を継続している。機構で開発した光基準信号配信装置を用いてレーダ・中央装置間を既設の光ファイバケーブル(長さ 5km 程度)を通して信号配送することで滑走路上に設置した世界最小級である大きさ 3cm 程度の金属円柱の検出に成功した。将来の商用展開をめざしたレーダ観測データを蓄積し、民間ビジネスの創成を目指し、同システムの開発技術・システムの学術会議や展示会等でのプロモーションを実施した。
- ・マレーシア工科大学等の研究者と連携し、平成 30 年度は、マレーシアのクアラルンプール空港やマレーシア工科大学構内において光ファイバ無線技術の実環境利用の検証を実施し、90GHz 帯電波の異物反射特性の解析などを実施し、クアラルンプール空港での空港滑走路監視システムの試験導入に向けた基礎データを取得した。
- ・令和元年度には、空港滑走路監視レーダシステムの社会展開として、産官連携のもとでクアラルンプール空港等と協議を重ね、ファイバネットワーク接続型レーダシステムの海外展開を推進し、レーダ設置プラン等を確定した。合わせてマレーシア KLIA 空港でのフィールド試験を開始した。光ファイバ無線を用いたリニアセル方式及び、波長切替による高速無線セル切替方式などを用いた、実際の高速鉄道路線を利用した光ファイバ無線システムのフィールド実験に成功し、その成果が著名論文誌に招待論文として採択された。令和 2 年度には、複数レーダ間の干渉を抑圧するためのアンテナ間の協調動作方法に関する知見を得る見込みである。

[高速データ伝送及び高速移動体用光ファイバ無線技術]

			<p>・エンドユーザーに対する高速データ伝送技術の社会実証として、中間周波数・大容量伝送技術と企業の高精度ビーム制御技術を組み合わせた産官連携により、100Gbps 級の光・無線ハイブリッド伝送システムの動作の実証に成功し、トップカンファレンス ECOC2019 に採択された。</p> <p>・高速鉄道通信への適用を目指したミリ波バックホールの利用検証として、ベトナム研究機関等と連携し、平成 28 年度はホーチミン市において複数のセルが直線的に配置されたリニアセルシステムの実験を行い、移動体通信における干渉の影響等の課題を明確化した。</p> <p>・平成 29 年度は、ベトナム郵電研究所(PTIT)、ホーチミン市情報通信部と連携し、建築中の実鉄道線路を用いた 90GHz 帯の高周波無線信号の伝搬と複数信号源の混信の原理検証を実施した。</p> <p>・平成 30 年度は、独自の 90GHz 帯光ファイバ無線技術を駆使することで、ハンドオーバーフリー・高速移動体用光ファイバ無線技術を開発し、20Gbps 級の高速セル切り替えを可能とする基盤技術確立し、この技術を以て産学官連携のもと時速 240km で走行する北陸新幹線とミリ波による 1.5Gbps の世界最大級の大容量伝送実験に成功した。また、本成果は光・無線の融合通信技術として高く評価され、OFC2018 の最優秀論文(通称ポストデッドライン論文)の特別セッションに採択された。</p> <p>[標準化／国際連携]</p> <p>・光ファイバ無線 (RoF: Radio over Fiber) を活用したレーダシステムや鉄道無線システムなどの応用技術に関して、標準化活動を実施している。</p> <p>・ITU-T SG15 において RoF システムに関するコエディタ(草案作成共同責任者)として精力的な活動を行っている。平成 30 年 11 月に新勧告文書「G.9803」(旧文章名: G.RoF) が正式に合意され、令和元年度に「Radiooverfibersystems」勧告の改訂版(G.9803Amd.1) が成立した。さらに同年度に光ファイバ無線を用いた無線・光・無線リレー方式に関する技術文章を ASTAP にて「Radio-over-fiber relay link for indoor communication systems」として寄稿した。</p> <p>・光アクセス基盤で培ってきた光集積回路技術、高精度光計測技術を基に、ASEAN 諸国との研究連携を強化し集積光デバイス技術の立ち上げ、高感度センシング技術の開発に成功し、著名国際会議での論文採択が達成された。令和元年度からタイを中心とした複数の研究機関で連携し、医療用光センサデバイスの共同研究開発を実施し、令和</p>	
--	--	--	---	--

			<p>2年度にセンサデバイスのプロトタイプを試作し、センシング動作の原理検証を実施する見込みである。</p> <p>○産学との連携により、Tバンド・Oバンドによる大波長空間利用技術として、以下を実施した。</p> <p>----- 28年度 -----</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大波長空間利用技術として、広帯域ゲインチップを試作し、再現性、広帯域化、高出力化の評価を実施。SOAモジュールを設計・試作した。 ・波長可変駆動方式の最適化と高速化を行い、波長切替時間の目標値を達成した。試作レーザーを製作し連続稼働試験を実施し、目標の高出力が可能であることを確認した。 ・低損失構造のアレイ導波路回折格子を設計試作した。1081chルーティング実験用の複数波長同時発信可能な光回路を試作し、3ミリ秒以下の応答速度で発振波長切り替え動作を実施した。 ・パワー損失補償技術の実機検証、シミュレーションの有効性の確認、波長ルーティング系の制御基盤を設計、および4K映像信号の伝送に成功した。 <p>----- 29年度 -----</p> <ul style="list-style-type: none"> ・波長帯(1050~1300nm)をカバーする帯域幅100nmの広帯域なゲインチップの作製に成功し、帯域幅140nmに近い目標値を上回る広帯域を得ることができた。同波長帯において、量子ドットゲインチップを搭載した4種類の波長可変光源を開発した。レーザ線幅500kHz以下を実現し、波長可変制御及びレーザ発振制御の最適化により波長切り替え時間200msを実現した。信号切り替え用狭帯域アレイ導波路回折格子構成技術として、同波長帯に渡って広帯域に動作する光回路を構築するための導波路パラメータを明らかにした。 ・ゲインチップ、波長可変光源、アレイ導波路回折格子を利用した、Tバンド・Oバンドの大波長空間1000チャンネル級高画質映像配信システムの開発に世界で初めて成功し、4K映像の配信および経路切替実験に成功した。この成果は、OFC2018等に採択され、報道発表も行い、多くのメディアに掲載された。 	
--	--	--	--	--

		<p>○産学との連携により、光周波数・位相制御光中継伝送技術として、以下を実施した。</p> <p>----- 28 年度 -----</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高精度光周波数安定化制御、スペクトル線幅狭窄制御、高速周波数スイッチング制御の連携による光源装置を開発した。離調範囲±100MHz からのヘテロダイン自動周波数 fuxa 引込を実現した。 ・PPLN (Periodically Poled LiNbO₃: 周期分極反転ニオブ酸リチウム)を用いた位相感応型光増幅器 (PSA: Phase Sensitive Amplifier) の中継増幅動作を実現した。小型偏波保持光増幅器を開発し、良好な特性を確認した。 ・和周波光発生を用いた励起光位同期ループ回路 (プロトタイプ) による位相感応光増幅に成功、原理的実証を実施した。 <p>----- 29 年度 -----</p> <ul style="list-style-type: none"> ・19 インチラックに収納可能なサイズの光源装置を試作し、位相同期光周波数安定制御において、周波数安定度が±1MHz 以内の高安定化外部基準光源に位相同期させることに成功、光周波数を±1MHz 以内の安定化を実現した。また、波長切り替え時スイッチング時間 76ms ~ 88ms を実現、位相同期により得られた光スペクトル線幅を 20kHz までに狭窄化されていることを確認した。 ・光パラメトリック増幅部、励起光生成部、励起光位同期部の一体動作により、位相感応型光パラメトリック増幅器のプロトタイプを完成させ、光増幅実験により原理を実証し、低雑音に増幅する偏波保持増幅を確認した。 <p>○産学との連携により、光信号の低コスト受信・モニタリングのための小型光位同期回路の研究開発として、以下を実現した。(以下、参考: H30 年度の実績)</p> <p>----- 28 年度 -----</p> <ul style="list-style-type: none"> ・狭線幅波長可変半導体レーザーの発振波長高速スイッチング回路および広帯域連続掃引回路を試作した。特性を改善した Ge/SiON 集積試作を開始した。Si 光導波路と集積した Ge による pin 型受光素子 Ge-PD (Photo Diode) で、受光効率 0.6 A/W 以上および暗電流 1 μA 以下 (動作温度 80°C) の当初目標を達成した。 	
--	--	--	--

			<p>----- 29 年度 -----</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高安定光 PLL (Phase Locked Loop) 技術の開発として、安定な位相同期動作を実証し、波長設定精度、設定時間、波長検出器の測定精度に関する課題を抽出した。C バンド全域で特性を同時に満足する波長可変レーザを実現し、狭線幅波長可変光源装置のプロトタイプを試作した。発振周波数の制御回路部、設定精度に関する課題を抽出した。 ・光信号モニタリングシステムの開発として、従来同等以上の性能が得られていることを確認し、性能的に組込可能であることを確認した。 ・光集積デバイスの開発として、デバイスの集積を開始した。発振を確認した。半導体レーザの狭線幅化は、レーザ回折格子の改善により達成見込み。電子集積デバイスの開発として、TIA (Transimpedance amplifier) 帯域 34GHz 以上、TIA 利得約 30dB を実現した。 ・光 PLL 用ゲルマニウムデバイスの開発として、Ge-PD (Photo Diode) の試作を終え、暗電流密度を低減する指針を明らかにした。応力印加技術を検討し実現の方向性を明らかにした。 <p>----- 30 年度 -----</p> <ul style="list-style-type: none"> ・広帯域 ADC を用いてビート信号をデジタル領域に変換し、平成 29 年度に提案したアルゴリズムに基づきビート信号の周波数が高精度に取得可能であることを示した。さらに、自立位相同期の実験系に組み込み、可変波長光源を制御する際の課題抽出を行った。また、高精度な発振周波数連続掃引機構を有する線幅 8 kHz, C+L 帯波長可変光源のプロトタイプを開発した。 ・光モニタリングシステムの開発として、4 台の DOPLL (Digital Optical Phase-Locked-Loop) を搭載可能なボードを設計した。FPGA を搭載し信号処理を行うマザーボードと、PLL の構成要素を搭載したドーターボードの 2 種のボード構成とした。4 台の DOPLL を 19 インチラックに収納可能な 2U サイズ (高さ約 88mm) の筐体に収納可能であることを確認した。 ・光集積デバイスの開発として、SiO_xNy-OH と GePD の集積プロセスを開始した。半導体レーザにおいては線幅を改善した他、新規に波長可変構成を提案した。電子集積デバイスの開発として、TIA 及びサンプリング回路を一体集積する集積回路設計を行い、IC 製造を開始した。 ・光 PLL 用ゲルマニウムデバイスの開発として、光導波路と集積した Ge-PD (Photodiode) を試作し、高効率 (> 1 A/W)、低暗電流 (< 1 μ 	
--	--	--	--	--

A)、高周波応答 (> 30 GHz) の特性を得た。検討してきた応力印加技術により、L 帯で Ge 層の光吸収が増加する特性を得た。
 ・産学官連携の研究推進を目的とし、光アクセス基盤技術関連の特許で出願 4 件、登録 3 件がなされた。

-----令和元年度 -----

・高安定光 PLL 技術として、光波長計と高速広帯域 ADC を組み合わせることにより自律位同期方式の動作検証を行い、有効性を確認。検出、疎調整・微調整から同期まで実測値 8 秒程度であったが、原理的には 6 秒以下で実現可能である。さらに、運用中に同期はずれが生じた場合にこれを自動検出して、自律的に波長を可変することにより同期状態を回復する機能を実装して長期動作試験を行い、その有効性を確認した。

・波長可変狭線幅 LO 光源として、波長可変光源の発振周波数の安定性の向上として①レーザ共振器部の温度制御パラメータの見直し、②出力光ファイバを含むレーザ共振器部の防振の強化及び③共振器への戻り光の抑制の強化を実施した。これらの改善により、短期(平均時間 10 s)及び長期的(1 時間)な周波数変動をそれぞれ約 2 MHz、48 MHz に抑制することに成功した。

・光信号モニタリングシステムとして、4 台の光 PLL システムを高さ 2U の 19 インチラックサイズの筐体に組み込むことに成功した。光 PLL システムを基板に実装することによりシステム面積を 1/12 以下へと集積化することに成功した。また、ループ長は約 30cm の短尺化がなされた。それらの知見よりループ長の全長を 5cm 以下にする指針を得た。50 Gbps の QPSK 信号に対して光 PLL を適用し、コンスタレーション、Q 値そして EVM を 1 秒以内で表示するモニタ動作を確認した。さらに Q 値をリアルタイムにモニタリングすることで、信号品質の劣化および伝送路寸断などの異常を検出する機能を実現した。

・光集積デバイス技術として、SiO_xN_y 光導波路プラットフォーム、シリコン、およびゲルマニウムのモノリシック集積プロセスを構築し、SiO_xN_y 導波路、Si-OH、GePD 一体光集積回路を実現した。本光集積回路の面積は 0.02 cm² と小型化を実現した。Si 基板上への LO 光源集積については、線幅 20kHz の単一モード発振を実現した。シリコン光導波路に位相シフタ機能を付加し、キャリア密度を動的に制御することで、可変波長動作を確認した。

・電子集積デバイスについては、TIA・サンプリング一体集積回路では、TIA とサンプリング回路の一体動作を確認し、40GHz 以上の 3dB 帯域

が得られることを確認した。また、TIA では 75GHz 以上の 3dB 帯域が得られることを確認した。フロントエンド実装については、サンプリング回路単体モジュールおよび受信フロントエンドモジュールを試作しシステム検証実験に提供した。受信フロントエンドについては、光集積デバイスと電子集積デバイスをハイブリッド集積し、光ハイブリッドからサンプリング回路出力までの信号伝搬方向の長さを 7mm まで小型化できることを実証した。

・光 PLL 用ゲルマニウムデバイスとして、40 GHz 以上で動作する Ge-PD と光ハイブリッドをモノリシック集積したデバイスを実現し、電子回路と一体化した集積回路を作製した。また、動作波長範囲の L バンド側への拡大に関して、SOQ (Si-on-Quartz) ウエハ上へ形成した Ge 層を用いて、Si 光導波路と集積した Ge PD を作製した。SOQ 上 Ge 層が 0.38% の二軸引っ張りひずみを有し、L 帯での光吸収係数の増大が得られることを明らかとし、1460 nm から長波長へ向かうにつれて受光効率が増加していく傾向が見られ、光吸収端の長波長化を反映した特性が得られた。

○産学との連携により、Beyond 5G に向けたモバイル収容大容量光アクセスインフラの研究開発として、以下を実現した。

----- 令和元年度 -----

・100 Gbps 級広帯域光・電子融合周波数分離デバイス技術として、28Gbps 広帯域 A/D 変換から出力される膨大なデータをデジタル領域で高速デシメーション処理する新たなデジタルダウンコンバージョン方式の開発において、デジタル回路を設計した。本デジタル回路は、14GHz の帯域を有する高周波電気信号をサンプリングレート 28Gsps、量子化ビット数 8bit の A/D 変換器(ADC)を用いて、デジタル信号として取り込み、入力信号をデジタル領域でダウンコンバージョンして 4 ユーザー以上の信号に分割する機能を有する。ユーザー毎の帯域分割を行うため、周波数シフト部、FIR(Finite Impulse Response)フィルタ部、デシメーション部の多段構成によるデジタル回路を設計し、大規模 FPGA1 石に実装した。また、20Gsps 以上の広帯域 ADC で課題となるダイナミックレンジを改善するため、マルチチャネル ADC 方式を考案し、デジタル回路の設計を行った。

・上り無線信号の高密度多重処理技術として、ADC/DAC、FPGA を用いて、中心周波数 500MHz、帯域幅 800MHz の OFDM 信号を最大 10

チャンネル多重可能な周波数多重化機器の試作開発した。デジタル処理で周波数の異なるIFを5チャンネル生成し、ダイプレクサでそれらの信号を周波数多重する構造とし、さらに、LO、ミキサを用いたアップコンバージョン、ダイプレクサを用いた周波数多重化で、最大10チャンネルの周波数多重信号を生成可能とした。試作機器単体の性能評価試験により、機器の処理遅延を10マイクロ秒以下にできることを確認した。

- ・無線・光信号変換デバイス技術として、電気・光相互変換デバイスにおける電気・光変換部の光学及び高周波設計を行い、周波数特性と光出力特性の評価を実施した。その結果、高速信号を電気・光変換速度で動作するために十分な3dB帯域として28GHz以上の周波数特性が得られることを確認した。また、光出力特性については変調速度20GBaud以上においてSSPRQ (Short Stress Pattern Random Quaternary)パターンを用いた電気波形を入力し、十分に受信可能なアイ開口率を有する光出力波形が得られることを確認した。
- ・光・無線融合アンテナ技術として、アンテナのレベルダイヤグラム、及びアンテナ素子配置の仕様に関する検討を完了した。具体的には、フォトダイオードの出力パワーからアンテナ素子までの所望出力パワーを計算し、RFアンプを2段組する構成をベースとしたレベルダイヤグラムとした。またアンテナ素子の配置に関して、一つのPDの出力を8個以上のパッチアンテナ素子に供給することで、十分にシャープなビームパターンを得られることを確認した。従って、アンテナの最小単位を一つのPD+1×8アンテナ素子とし、これをユーザー数(ビーム数)に応じて増やす仕様とした。
- ・双方向光・無線伝送システム技術として、商用の100GbE用TOSAモジュールを用いて、下りリンク向け400MHz帯域幅の256QAM信号を40チャンネル伝送することに成功した。物理層の伝送レートは128Gbpsであり、100Gbps級のIFoF伝送に成功した。また上りリンクも同様の構成で信号多重度を16QAMに低減することで、50Gbps級IFoFを容易に達成できる見込みを得た。中継局とアンテナサイト間の短距離伝送(SMF 1km以下)において、RoF、IFoF(周波数変換用のLOをアンテナサイトに設置、またはIF信号に周波数重畳して中継局側からアンテナサイトに伝送)各方式の伝送特性を評価した。その結果、いずれの方式でも、64QAM、800MHz帯域幅のOFDM信号をEVM8%の信号品質で伝送できる見込みを得た。
- ・適応的空間電波周波数割り当て技術として、無線区間の品質情報を表すチャンネル品質信号(Channel quality indicator: CQI)という指標と、IFoF/RoF区間の光伝送路の品質モニターする手法を組み合わせた、

			<p>適応的な無線リソース割り当て技術の検討を完了した。具体的には、上り信号からの CQI をセンター局で抽出し、光伝送区間で計測した品質情報と合わせて、総合的に最適なりソース配分を行うアルゴリズムを用いることで、無線システム全体の品質を向上させられる見込みを得た。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・フルコヒーレント RoF 伝送技術として、コヒーレント QAM 光信号を 60 GHz 帯へ周波数変換するためのキャリアコンバータの設計に取り組んだ。光注入同期回路により位相同期した LO 光と QAM データ信号を合波し、帯域 70 GHz の PD を用いたヘテロダイン検波により、60 GHz 帯へのフルコヒーレント変換の基本動作を実証した。また、フルコヒーレント変換回路を用いて、シンボルレート 4 Gbaud、多値度 16~256 のコヒーレント QAM 光信号をヘテロダイン検波し、フルコヒーレント変換した IF 信号の復調を実現した。これにより、光周波数から 60 GHz 帯へのダウンコンバートによる光・無線融合フルコヒーレント伝送システム実現の見込みを得た。 <p>----- 令和 2 年度(見込み) -----</p> <ul style="list-style-type: none"> ・100Gbps 級広帯域光・電子融合周波数分離デバイス技術ではデジタルダウンコンバージョン方式のデジタル回路とアナログフロントエンドを組合せた性能評価を実施する。 ・上り無線信号の高密度多重処理技術では試作開発した周波数多重化機器と、IFoF 伝送技術とを連携させた IFoF 伝送システムを構築し、上り伝送の実現性を実験で確認する。 ・双方向光・無線伝送システム技術では、80GHz 以上の RF 信号を想定し、アンテナサイト向け下り伝送およびアンテナサイトからの上り伝送について、RoF および IFoF 伝送方式を実験で比較評価する。 	
--	--	--	---	--

<p>○衛星通信技術</p> <p>衛星搭載ミッションの高度化・多様化に伴い必要となる衛星通信ネットワークの高速化・大容量化を実現するため、国全体の宇宙開発利用に係る政策を踏まえつつ、10Gbps程度の光データ伝送を実現するための衛星搭載機器の開発等によって衛星通信ネットワークの基盤技術を研究開発するものとする。</p>	<p>(5)衛星通信技術</p> <p>地上から宇宙に至るまでを統合的に捉えて、平時はもとより災害時における通信ネットワークを確保するため、国全体の宇宙開発利用に係る政策を踏まえつつ、高速化・大容量化を実現するグローバル光衛星通信ネットワーク基盤技術及び広域利用を可能とする海洋・宇宙ブロードバンド衛星通信ネットワーク基盤技術に関する研究開発を行う。</p> <p>(ア)グローバル光衛星通信ネットワーク基盤技術</p> <p>衛星通信の大容量化への期待の高まりや周波数資源逼迫の解決に応えるため、10Gbps級の地上～衛星間光データ伝送を可能とする衛星搭載機器の研究開発を行うとともに、通信品質向上等の研究開発を行う。また、海外の宇宙機関等とのグローバルな連</p>	<p>(5)衛星通信技術</p> <p>(ア)グローバル光衛星通信ネットワーク基盤技術</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本中期計画期間中に、静止衛星から地上間で10Gbps級の世界初の伝送速度を実現する、衛星搭載用の超高速先進光通信機器(HICALI)を完成させる予定。次期中期計画中に、技術試験衛星9号機に搭載して打ち上げ、軌道上実証を行い、光ファイダリンクの基礎技術を確立する見込み。 ・国内外のメーカーや研究機関(東北大学、SONY CSL/JAXA、キヤノン電子、独DLR等)と共同で衛星～地上間の光衛星通信実験を推進し、特に小型衛星から地上間の光衛星通信技術を実証する予定。将来的には、小型地球観測衛星で取得したデータの地上への伝送や、衛星コンステレーションにおける、衛星～衛星間や衛星～地上間の光通信に活用できる見込み。特に、国際宇宙ステーションに搭載したSOLISSと、小金井1.5m光地上局間での双方向光通信実験の成功については、令和2年4月23日に、NICT/SONY CSL/JAXA 3者共同でプレスリリースを発表した。 ・NICTの光地上局に超電導単一光子検出器(SSPD)技術を応用した超高感度検出器を準備し、深宇宙通信に資する光送受信実験の準備を完了。まずは低軌道の小型衛星を用いた送受信実験を実施し、その有効性を試験する見込み。 ・光衛星通信技術の応用として、デブリの位置をレーザーの散乱光を用いて把握するための基礎実験や、廃棄された衛星の光度変化や軌道を決定する実験を、国際共同研究や委託研究の一環として実施した。これらの技術は、宇宙状況把握(SSA)に活用することが可能。 ・光衛星通信に関して、国内標準化委員会や宇宙データシステム諮問委員会(CCSDS)に参加し、NICTがエディタとなりグリーンブック(解説資料)「リアルタイム気象と大気特性データ」(CCSDS 140.1-G-1)を出版し、マジェンダブック(推奨実践規範)「光回線運用のための大気特性把握と予測」を完成し出版手続き中であり、標準化文書作成へ寄与。 ・小金井1m光地上局用に、上りと下り両方の回線に対応した、大気揺らぎの影響を軽減するための「補償光学システム」を開発し、その有効性を試験する見込み。 ・以上により、次期中期計画期間中に実施する技術試験衛星9号機による超高速光衛星通信実験に向けて、衛星搭載光通信機器の製作が本中期期間中に完了する目処が付いたこと、国内外の機関と連携した小型衛星と地上間の光衛星通信実験が広がりを見せていること 	<p>(5)衛星通信技術</p> <p>【科学的意義】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・世界初の10Gbps級の伝送速度の衛星搭載用超高速通信機器を開発し、SOTAと光地上局間で光子レベルの量子通信実験に世界で初めて成功して、Nature Photonics誌に論文が掲載(SOTAプロジェクトをエクストラサクセスにて完了)された。VSOTAで世界初のボディーポインティング追尾方式での光衛星通信を実証見込みであり、超小型衛星で簡易な光衛星通信の実現に寄与している。またISSに搭載した光通信端末SOLISSとNICT小金井の1.5m光地上局との間で、双方向の光衛星通信に成功したことも、今後の光衛星通信技術の普及につながるものと考えられる。RF/光ハイブリッド衛星通信システムの効率的運用方式提案等の論文誌採択、OSA Advance Photonicsでの招待講演、OFC2020での招待講演等、着実に成果を上げている。 ・国内外の機関と連携して光衛星通信の実験を進めており、送受信技術をはじめ、国内的に本分野のデータ取得、解析をリードしている。光衛星受信についてNICTが今後国内のテストベッド的な役割を果たすことも期待できる。 ・上りと下り両方の回線に対応した光衛星通信補償光学技術は、今後の衛星～地上間の高速光衛
--	--	---	--

	<p>携を行うとともに、世界に先行した宇宙実証を目指すことで国際的優位性を確保しつつ、グローバル光衛星通信ネットワークの実現に向けた基盤技術を確立する。</p> <p>(イ)海洋・宇宙ブロードバンド衛星通信ネットワーク基盤技術</p> <p>ユーザーリンクにおける通信容量としてユーザー当たり100Mbps(メガビット/秒)級の次期技術試験衛星のためのKa帯大容量衛星通信システムを実現するため、非常時の地上系通信ネットワークの輻輳・途絶地域及び海洋・宇宙空間に対して柔軟・機動的にブロードバンド通信を提供する地球局技術や広域・高速通信システム技術の研究開発を行う。これにより、平成33年以降に打上げ予定の次期技術試験衛星による衛星通信実験の</p>		<p>から、グローバル光衛星ネットワークの実現に向けた基盤技術が確立できる見込み。</p> <p>(イ)海洋・宇宙ブロードバンド衛星通信ネットワーク基盤技術</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ユーザー当たり100Mbpsの新たなブロードバンド、フレキシブルかつKa帯/光のハイブリッド衛星通信システムの概念設計を完了。概念設計に基づき技術試験衛星9号機の固定ビーム搭載通信機器の開発を代表研究機関として受託、製造・試験を完了するとともにユーザー実験に役立つビーコン送信機器(共通部)の開発を完了見込み。 ・広域・高速通信システム技術として高効率な運用制御アルゴリズム、フレキシブルペイロードのDBFアレー給電部の誤差校正方式を開発し有効性を確認。 ・地球局技術として技術試験衛星9号機への適用を想定したネットワーク統合制御地球局とGW地球局の基本設計、IoT/センサネットワークの低速モデムの要素試作を完了。 ・災害時対応として熊本地震(28年4月)へ対応し、高森町にナーヴネット等と連携したWINDS回線を開設し災害時の通信確保に貢献。各地の防災訓練にも参画し、意見交換とシステム向上を図った(耐災害ICT研究センターとの連携)。 ・技術試験衛星9号機の利用推進の取組として衛星通信と5G/Beyond 5Gの連携を推進し、国内検討会を開催し成果を文書化して公開した。 ・ITU-RやAPTにおいて、移動衛星通信と地上網の統合MSSシステムや、次世代アクセス技術統合化及び伝搬等の標準化に貢献し報告書※を完成。 ※ITU-R M.2398-0、APT/AWG/REP-57(Rev1) APT/AWG/REP-89、ITU-R WP3J 3J/272-E ・以上により、次期中期計画に実施する技術試験衛星9号機による海洋・宇宙ブロードバンド衛星通信実験に向けた取組が計画通り完了したことから、海洋・宇宙ブロードバンド衛星通信システムの実現に向けた基盤技術を確立する見込み。 	<p>星通信において不可欠なものとなることが期待できるだけでなく、大気状態の安定した高地以外にも光地上局を設置可能とし、さらなる光衛星通信の普及に貢献することも期待できる。</p> <p>等、科学的意義が大きい独創性、先導性に富んだ顕著な成果の創出や将来的な成果の創出が期待される実績が得られた。</p> <p>【社会的価値】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・衛星通信と5G/B5Gの連携について国内19機関による検討会を立ち上げ、ユースケース、技術課題等を検討した。 ・衛星-5G/B5G連携検討会の開催、ESAと連携した衛星5Gトライアルの立案は、衛星5Gに向けた具体的な取り組みである。 ・ETS-IX搭載用10Gbps級超高速光通信ターミナルおよびビーコン送信機器の研究開発を評価する。 ・SOTAを用いた世界初の衛星-光地上局間の光子レベルでの送受信実験の成功など、今後の衛星量子通信の実用化に資する成果を上げた。 ・光衛星通信に携わる世界の研究開発機関が集まるICSOS国際会議をシリーズ開催し、コミュニティ形成に成功した。700gの超小型光衛星通信搭載機器の開発、打ち上げ実証により超小型衛星への光通信適用性を実証し
--	--	--	--	---

	<p>ための、海洋・宇宙 ブロードバンド衛星 通信システムの実 現に向けた基盤技 術を確立する。</p>			<p>た。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 無人航空機中継システム (ICAO)、IoT への衛星通信応用標準化方式 (APT-AWG)、光衛星通信の CCSDS でのグリーンブック策定およびマジェンダブック策定など、複数の標準化に成功しており、開発成果を広く社会展開する見込みが得られた点は大きな成果である。 ・ 熊本地震の際に WINDS 回線を開設して被災地との通信確保に貢献し、衛星通信技術が災害時の通信確保手段として有効であることを実証した。 ・ 本来社会的価値の高い研究テーマであり、進捗している。 <p>等、社会課題の解決や社会的価値の創出に貢献する顕著な成果の創出や将来的な成果の創出が期待される実績が得られた。</p> <p>【社会実装】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ETS-IX を想定したネットワーク統合制御地球局と GW 地球局の基本設計を実施した。 ・ 衛星-5G/B5G 連携検討会をきっかけに幅広い連携をしようとしている。 ・ 光衛星通信の実用化の気運を高めた。特に NICT 主導で光衛星通信に関する CCSDS グリーンブック出版、マジェンダブックの完成で出版見込みにより、NICT の開発技術が宇宙機に搭載される可能性が高まった。
--	--	--	--	--

				<ul style="list-style-type: none"> ・ 小型衛星搭載向け技術の開発、実験を進めている。 ・ 静止衛星搭載用超高速先進光通信機器を開発している。 ・ ITU-R や APT において、衛星技術の次世代アクセス技術への統合などの標準化に貢献した。 ・ B5G 時代も踏まえ、衛星通信と地上 5G 網の連携を推進するための国内検討や標準化に取り組んでいる。 <p>等、社会実装につながる成果の創出や将来的な成果の創出が期待される実績が得られた。</p> <p>以上のことから、中長期目標期間を着実に達成する成果の創出が認められた他、将来的な成果の創出が期待される実績も得られたため、評定を「B」とした。</p>
--	--	--	--	---

なお、この自己評価に関しては、国立研究開発法人情報通信研究機構の研究活動等に関する外部評価委員会（総括評価委員会）において、以下のような意見をいただいている。

1. 開催日

令和 2 年 5 月 15 日(金) 15 時～18 時

2. 委員名簿

酒井 善則	委員長	東京工業大学	名誉教授
安浦 寛人	委員	九州大学	理事・副学長
國井 秀子	委員	芝浦工業大学	客員教授
安藤 真	委員	東京工業大学	名誉教授
渡辺 文夫	委員	Fifth Wave Initiative	代表
有川 節夫	委員	放送大学学園	理事長

松井 充	委員	三菱電機株式会社 開発本部 役員技監
太田 勲	委員	兵庫県立大学 学長
飯塚 久夫	委員	株式会社ぐるなび 常勤顧問

3. 委員長及び委員からの意見

- ・全体として、自己評価の評点をもう少し上げて良いのではないか。

例えば、大項目については、センシング基盤分野については、見込み・単年度共に A となっているが、いくつかの S クラスの成果が含まれており、本分野についても S クラスにかなり近いと思う。統合 ICT 基盤分野については、見込み・単年度共に B となっているが、A に近いと思う。フロンティア研究分野については、見込み・単年度共に A となっているが、かなり S クラスの研究が含まれている。オープンイノベーション分野については、見込み・単年度共に B だが、非常に良い部分もある。

- ・(統合 ICT 基盤分野について) 中項目のワイヤレスネットワーク基盤技術の単年度は A、フォトニックネットワーク基盤技術の見込みは S、衛星通信技術の見込みは A に相当するような成果をあげていると思う。ワイヤレスネットワーク基盤技術では、海中で電波をきちんと使えるようにするという事は、世の中を大きく変えるものであり、もっとアピールをしつつ評価をしてよいと思う。フォトニックネットワーク基盤技術に関しては、非常に競争の激しい技術分野であるが、その中で世界新記録を多く出しており、この事実だけで相当評価されるべきと考える。衛星通信技術では、NICT が行っている光衛星通信の実証について、光衛星通信の実現に近づいているという点を評価すべきと思う。

(全体を通して)

- ・社会実装という評価軸は科学的意義とは異なり評価されづらい。しかも、これからの世の中で重要になってくるので、このためしっかりと評価し、モチベーションの維持等を含めて、頑張って社会実装に取り組んでもらいたい。
- ・それぞれの技術分野で、様々な社会的課題に対して研究を行っており、技術分野だけでなく、社会課題別の視点でのアピールなど、多面的なまとめ方で情報発信を行うことが重要ではないか。
- ・コロナ騒動の中で、世界が一気に社会構造や産業構造、経済活動が大きく変化していく中で、新しい社会の在り方を NICT から描いていただきたい。
- ・全体の印象として、とても大きな成果を上げている。基礎研究の分野では、様々な賞を受賞しており、科学技術的に大変意義のある成果を達成している。

国立研究開発法人情報通信研究機構 第4期中長期目標期間評価(見込評価) 項目別自己評価書(No.3 データ利活用基盤分野)

1. 当事務及び事業に関する基本情報			
中長期目標の当該項目	Ⅲ. -1. -(3) データ利活用基盤分野		
関連する政策・施策	—	当該事業実施に係る根拠 (個別法条文など)	国立研究開発法人情報通信研究機構法第14条第1項第一号
当該項目の重要度、難易度	重要度:高	関連する研究開発評価、政策評価・行政事業レビュー	行政事業レビューシート ****

2. 主要な経年データ												
主な参考指標情報				主要なインプット情報(財務情報及び人員に関する情報)※2								
	基準値等 (前中長期目標期間最終年度値)	28年度	29年度	30年度	元年度	2年度		28年度	29年度	30年度	元年度	2年度
査読付き論文数	—	187	128	112	174		予算額(百万円)	6,096	11,849	13,571	14,453	
論文の合計被引用数 ※1	—	541	696	548	739		決算額(百万円)	6,059	6,064	7,148	13,574	
実施許諾件数	41	47	67	77	96		経常費用(百万円)	7,079	6,564	7,124	10,787	
報道発表件数	10	12	8	8	4		経常利益(百万円)	△199	45	63	247	
標準化会議等への寄与 と文書数	19	14	4	0	2		行政サービス実施 コスト(百万円)	8,194	6,831	6,792	11,521	
							従事人員数(人)	42	42	44	48	

※1 合計被引用数は、当該年度の前3年度間に発表した論文についての、クラリベイト・アナリティクス InCites Benchmarking に基づく被引用総数(当該年度の3月調査)。

※2 予算額、決算額は支出額を記載。人件費については共通経費分を除き各業務に配賦した後の金額を記載。従事人員数は、常勤職員の本務従事者数。

3. 中長期目標、中長期計画、主な評価軸、業務実績等、中長期目標期間評価に係る自己評価				
中長期目標	中長期計画	主な評価軸(評価の)	法人の主な業務実績等	自己評価

		視点)、指標等			
1. ICT分野の基礎的・基盤的な研究開発等		<p><評価軸></p> <ul style="list-style-type: none"> ● 研究開発等の取組・成果の科学的意義(独創性、革新性、先導性、発展性等)が十分に大きなものであるか。 ● 研究開発等の取組・成果が社会課題・政策課題の解決につながるものであり、または、それらが社会的価値の創出に十分に貢献するものであるか。 ● 研究開発等の成果を社会実装につなげる取組(技術シーズを実用化・事業化に導く等)が十分であるか。 <p><指標></p> <ul style="list-style-type: none"> ● 具体的な研究開発成果(評価指標) ● 査読付き論文数(モニタリング指標) ● 論文の合計被引用数(モニタリング指標) ● 研究開発成果の移転及び利用の状況(評価指標) ● 研究開発成果の移 		評点	S
				<p>1-3. データ利活用基盤分野</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 本分野としては、音声翻訳・対話システム高度化技術については、音声認識、音声合成、自動翻訳の各分野で世界最先端の実用的な技術を開発し、大規模なコーパスの構築と併せて、世界と競争できる自動音声翻訳システムを実現した。自動翻訳は、Google 翻訳などが世界に普及し、競争が激しい分野であるが、日本語を介した翻訳や個別の分野に特化した翻訳において高い性能を実現し、GAFAに負けない価値を維持し続けた。 ● 社会知解析技術については、膨大な Web ページの情報をを用いて、雑談、質問応答を行う、世界的にみても前例のない博学な次世代音声対話システム WEKDAの研究開発を推進し、この研究用無償ライセンスと実証実験用 API を民間企業に提供した。また、世界にも類の 	

		<p>転及び利用に向けた活動件数(実施許諾件数等)(モニタリング指標)</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 報道発表や展示会出展等を受けた各種メディア媒体の反響状況(評価指標) ● 報道発表や展示会出展等の取組件数(モニタリング指標) ● 共同研究や産学官連携の状況(評価指標) ● データベース等の研究開発成果の公表状況(評価指標) ● (個別の研究開発課題における)標準や国内制度の成立寄与状況(評価指標) ● (個別の研究開発課題における)標準化や国内制度化の寄与件数(モニタリング指標) <p>等</p>		<p>ない高齢者の健康状態チェック等を行う音声対話システムを開発して実証実験でその有効性を確認した。さらに、SNS 上の対話システム／チャットボットを防災対策に応用し、実災害時に自治体等によって、活用された。これまでに開発し、また、災害時に自治体等での利用実績のある、防災対策のための自然言語処理システム DISAANA/D-SUMM に関してビジネスライセンスを複数民間企業と締結した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 実空間情報分析技術については、xData プラットフォームの開発とグラフクラスタリング手法を開発した。また、光化学オキシダント注意報予測支援システムを構築した。更に、SAR データ分析チャレンジを開催した。 ● 脳情報通信技術については、脳情報解読技術、fMRI や BMI を利用した脳活動計測技術、脳の情報処理メカニズムの解明など脳情報に関する幅広い分野で高い研究成果を上げ続
--	--	---	--	--

				<p>け、トップレベルの学術誌で論文を発表している。シンポジウム開催など様々な活動を通じて企業等の関心を喚起し、資金受入型共同研究などで外部資金を集めて、社会的価値のある成果を生み出す研究等を拡大している。脳情報解読技術を応用したニューロマーケティング技術や語学学習のためのニューロフィードバックトレーニング技術を民間に技術移転し、企業からの資金受入れ型共同研究を多数実施している。</p> <p>以上のことから、中長期計画を着実に達成した上で、特に顕著な成果の創出が認められた他、将来的な成果の創出が期待される実績も得られたため、評定を「S」とした。</p> <p>個別の評定と根拠は、以下の各項目に記載のとおりである。</p>
<p>(1)データ活用基盤分野 世界最先端のICTにより新たな価値創造や社会システムの変革</p>	<p>1-3. データ活用基盤分野 真に人との親和性の高いコミュニケーション技術や知的機能を持つ先端技術の開発により、国民生活の利便性の向上や豊かで安心な社会の構築等に貢献することを目指して音声</p>		<p><主要な業務実績> (評価と関連が深い主な業務実績及び将来の成果の創出の期待等について具体的かつ明確に記載する)</p>	

<p>をもたらすためには、「社会(価値)を創る」能力として、人工知能やビッグデータ解析、脳情報通信等の活用によって新しい知識・価値を創造していくための基礎的・基盤的な技術が不可欠であることから、【重要度:高】として、以下の研究開発等に取り組むとともに研究開発成果の普及や社会実装を目指すものとする。</p>	<p>翻訳・対話システム高度化技術、社会知解析技術、実空間情報分析技術及び脳情報通信技術の研究を実施する。これにより、人と社会にやさしいコミュニケーションの実現及び生活や福祉等に役立つ新しいICTの創出を目指す。</p>			
<p>○音声翻訳・対話システム高度化技術 音声翻訳・対話システムにより世界の「言葉の壁」をなくすため、旅行、医療、防災等を含む生活一般の分野について実用レベルの音声翻訳・対話を実現するための技術及び長文音声に対応した自動翻訳を実現するための</p>	<p>(1)音声翻訳・対話システム高度化技術 音声コミュニケーション技術及び多言語翻訳技術に関する研究開発を行い、これらの技術の社会実装を目指すとともに、平成32年以降の世界を見据えた基礎技術の研究開発を進めることで、言語の壁を越えた自由なコミュニケーションの実現を目指す。 (ア)音声コミュニケーション技術 2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会での社会実装に向けて10言語の実用的な音声認識技術を実現する。そのための研究開発として、①日英中韓の4言語に関して2000時間程度の音声コーパス、その他の言語に関しては500時間程度の</p>		<p>(1)音声翻訳・対話システム高度化技術 ※ 以下でGC10言語とは日、英、中、韓、タイ、ベトナム、ミャンマー、インドネシア、スペイン、フランスの各言語、拡張5言語とはブラジルポルトガル、フィリピン、ネパール、クメール、モンゴルの各言語とする。 (ア)音声コミュニケーション技術 2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会に向けて以下の研究開発を行った。 ● GC10言語に関して、音声認識精度向上のためコスト削減によりR2年度末までに合計16,000時間の音声コーパスを構築した。 ● ブラジルポルトガル語、フィリピン語を含む拡張5言語に関して合計2700時間の音声コーパスを構築した。 ● GC10言語に関して合計284万語の多言語辞書を構築した。 ● 拡張5言語に関して合計74万語の多言語辞書を構築し</p>	<p>(1)音声翻訳・対話システム高度化技術 【科学的意義】 ● 10言語の音声認識精度、自動翻訳精度とも海外の有力企業を上回る性能を実現させて、多言語音声翻訳の実用性を飛躍的に向上させた。 ● これらの成果の根幹となる音声処理技術及び自動翻訳技術の論文を難関国際学会で多数発表する等、アカデミアに貢献する大きな学術的成果を</p>

<p>技術等を研究開発するものとする。さらに、産学官の幅広いネットワーク形成や情報の収集・蓄積・交換、産学官のシーズとニーズのマッチング、共同研究の実施、研究成果・社会実装事例の蓄積、人材交流等を推進するための産学官連携拠点を積極的に運営するものとする。</p> <p>また、2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会を世界に情報発信する機会として活用するとともに、訪日外国人観光客の急増に対応するため、平成32年度(2020年度)までに10言語に関して、生活一般分野について実用レベルの音声翻訳システムを社会実装するものとする。</p>	<p>音声コーパスの構築、②言語モデルの多言語化・多分野化、③音声認識エンジンの高速化・高精度化、を行う。音声合成技術の研究開発に関しては、10言語の実用的な音声合成システムを実現する。</p> <p>一方、平成32年以降の世界を見据えた研究開発として、世界のあらゆる音声コンテンツをテキスト化する技術の実現を目指して、公共空間等雑音・残響のある環境下で言語の異なる複数人が発声した音声を認識する技術及び多言語の混合言語音声対話技術の研究開発を行う。</p>		<p>た。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● GC10 言語の音声認識技術に関して、日英の2言語ではどのような発話であってもストレスなく認識できるレベル、GC10 言語中その他の言語では、ほとんどの発話でストレスなく認識できるレベルの認識精度を実現し、商用ライセンスを開始した。 ● 拡張5言語の音声認識に関して、ブラジルポルトガル語とクメール語で細かい誤認識はあるが、実用上は問題がないレベルの認識精度、フィリピン語とネパール語で寛容の精神をもって使えば、一応使えるレベルの認識精度を実現した。モンゴル語の音声認識システムを試作した。 ● GC10 言語の音声合成技術に関して、GC10 のうち日英の2言語では、読み誤りが少なく、ほとんどのテキストを明瞭かつ自然に読み上げるレベル、その他の6言語では、読み誤りが多少あるが、明瞭性・自然性は実用上問題ないレベルの音質を実現し、商用ライセンスを開始した。 ● 拡張5言語の音声合成に関して、ブラジルポルトガル語とフィリピン語で読み誤りが多少あるが、明瞭性・自然性は実用上は問題ないレベル、ネパール語とクメール語で読み誤りがあるが、明瞭性は許容範囲で内容の理解は可能であるレベルの音質を実現した。モンゴル語の音声合成システムを試作した。 <p>令和2年以降の世界を見据えて以下の研究開発を行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 音声認識の耐雑音性に関して対応SNRを15dBから5dBに改善した。 ● 音声認識の耐残響性を改良した。 ● 話者分類およびセグメンテーションの研究を行った。 ● 言語の識別技術を開発し、GC10 言語に関して話頭の平均1.06秒のレイテンシー(話頭から結果出力までの時間)で識別精度92.4%を達成し、商用ライセンスを開始した。商用ライセンスを受けた民間企業1社が日英中韓4言語の駅案内ロボットを開発し、京王電鉄新宿駅等で試験運用を行った。 	<p>創出した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 同時通訳(漸次化)プロトタイプを構築した。 <p>等、科学的意義が大きい独創性、革新性に富んだ特に顕著な成果の創出や将来的な成果の創出が期待される実績が得られた。</p> <p>【社会的価値】</p> <ul style="list-style-type: none"> ● GC10 言語について、計画を上回る規模の音声コーパスと多言語辞書を構築するとともに、拡張5言語についても大規模な音声コーパス等を構築した。 ● 10言語を対象に言語識別精度92.4%、レイテンシ1.05秒のプログレッシブ言語識別技術を開発した。 ● 開発した多言語音声翻訳技術について、様々な分野における実証実験を通じて改良を重ね、多くの企業に技術移転したことでサービスが商用化され、訪日外国人対応等の社会課題の解決に貢献した。 ● 多言語音声翻訳スマ
---	---	--	---	---

	<p>(イ)多言語翻訳技術 自動翻訳の多言語化、多分野化技術を研究開発しつつ、並行して大規模な対訳データを収集し、多様な言語、多様な分野に対応した高精度の自動翻訳システムを構築する。特に、(ア)(ウ)と連携して、訪日外国人観光客の急増に対応するため、生活一般での利活用を目的として、10言語に関して、旅行、医療、防災等の分野に対応した実用レベルの音声翻訳システムの社会実装を目指した研究開発を行う。</p> <p>一方、平成32年以降の世界を見据えた研究開発として、翻訳処理の漸次化等同時通訳システムの基盤技術を確認するための基礎技術の研究開発を行う。また、自動翻訳システムの汎用化を妨げている対訳データ依存性を最小化するため、同一分野の対訳でない異言語データを利活用する技術と同義異形の表現を相互に変換する技術の研究開発を進める。</p> <p>(ウ)研究開発成果の社会実装 2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会に向けて(ア)(イ)の研</p>		<p>(イ)多言語翻訳技術 世界最大規模(かつ多言語・多分野)の話し言葉の対訳コーパスを実現し、これに基づいた話し言葉の高精度の自動翻訳システムを構築し、民間に技術移転し、スマートフォンのアプリや専用端末の形態での音声翻訳ソリューションとして広く販売された。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● GC10言語に関して、世界最大規模(GAFAMの行動に準じてデータ量非公開)構築完了。拡張5言語に関してブラジルポルトガル語、フィリピン語は構築完了、ネパール語は部分構築。 ● 前記大規模対訳コーパスと旧SMTから新NMTへのアルゴリズムの革新によって自動翻訳は全分野・全言語対で実用レベルのシステムを構築。日本語と日本語以外のGC10言語の間の翻訳で誤訳率20%未満という高精度を全分野・全言語で達成した。 ● GC10言語、拡張5言語(R2年度増量分まで)に関してVoiceTra・TexTraへの実装と技術移転) ● 翻訳バンクの多分野化を推進(自動車、IR・金融等に進出、製薬で連携先大幅拡大)。この活動が評価されて「ビッグデータでAI翻訳を高精度化し翻訳産業に革命を起こす翻訳バンク」で第2回オープンイノベーション大賞総務大臣賞受賞(2020年2月10日) ● 自動翻訳にかかる高速化・省メモリ化・並列化の研究として、マルチノード訓練の並列化法を創出し9倍の高速化を実現(特許出願) ● 翻訳時の語順の並べ替えのモデル化手法を創出し、難関国際会議で採択(特許出願) <p>令和2年以降の世界を見据えた研究開発として、</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 入力の途中で翻訳する同時通訳(漸次化)プロトタイプを構築し、次期中長期の研究の足場を確保。 ● 国際学会に多数採択されておりアカデミアへの貢献は大(自動翻訳の論文数の世界ランクで2位と7位に入る。難関国際会議へのコンスタントな貢献)。 ● 対訳データ依存性を最小化する技術で貢献(世界的な自動翻訳評価コンペWMTで1位。少資源言語対を活用したニューラル機械翻訳のための「多段階モデル洗練法」 	<p>ートフォンアプリのVoiceTraが持続的にダウンロードされており、多言語音声翻訳技術の社会的価値の高さを確認した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 少資源言語対のニューラル機械翻訳の研究開発を行い、翻訳精度の高度化を実現させ、機械翻訳の対応言語の拡大を加速させる事が可能となる等の機械翻訳技術の普及促進に繋がる成果を創出した。 <p>等、社会課題の解決や社会的価値の創出に貢献する特に顕著な成果や将来的な成果の創出が期待される実績が得られた。</p> <p>【社会実装】</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 翻訳バンクの多分野化を推進し、翻訳分野や製薬分野、自動車分野の多くの民間企業と連携することで、様々な分野での機械翻訳技術の社会実装を実現させた。 ● 常に最新の多言語翻訳技術を搭載したVoiceTraは、研究開発の進捗に伴い翻訳精度が向上することで、
--	--	--	---	---

	<p>究開発成果を効果的・効率的に社会実装できるようにするために、協議会や研究センター等の産学官連携拠点の積極的運営により、①音声データや対訳データ、辞書等のコーパスを収集・蓄積・交換する仕組みの確立とコーパスの研究開発へのフィードバック、②社会実装に結びつくソフトウェアの開発、③社会実装に向けた特許等の知的財産の蓄積、④産学官のシーズとニーズのマッチングの場の提供、⑤人材交流の活性化による外部連携や共同研究の促進等に取り組み、研究開発成果の社会実装のための技術移転の成功事例を着実に積み上げることを目指す。</p>		<p>を創出し、難関国際会議に採択)。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● アジア諸外国の研究機関と連携しアジア言語に関する自然言語処理の研究・開発を推進。基盤となるアジア言語のアノテーション付き対訳コーパスALTを構築し公開している。また、応用研究として、アジア言語入力ソフトウェアを開発している。 <p>委託研究 No.180「自治体向け音声翻訳システムに関する研究開発」(H32-R1)において以下の研究開発を行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 子育て・年金対訳コーパス(英語、ベトナム語、中国語、ブラジルポルトガル語各 15 万文)、住民登録・国保対訳コーパス(英語、ベトナム語、中国語、ブラジルポルトガル語、韓国語、タイ語、インドネシア語、ミャンマー語、フィリピン語各 8 万文)を構築した。 ● 自治体用語対訳辞書(英語、ベトナム語、中国語、ブラジルポルトガル語、韓国語、タイ語、インドネシア語、ミャンマー語、フィリピン語各 5005 語)を構築した。 ● 構築した対訳コーパスと辞書を用いて自治体用ニューラルネット翻訳モデルを構築し、ほぼ全言語対について目標翻訳精度(意味が通じる文の比率が 80%以上)を達成した。 ● カウンター越しの対話に適したユーザインタフェース、用語説明機能など自治体窓口業務に向けた仕様の音声翻訳アプリを開発した。 ● 全国の 42 自治体(平成 29 年度～令和元年度の延べ数)と連携して窓口業務に音声翻訳システムを利用する実証実験を行った。 ● 研究開発成果を外国人研修生の生活に展開するために、NhaTra(ベトナム語)、SaramaTra(フィリピン語)の実証実験用音声翻訳アプリを開発し、公開した。 ● 研究開発の成果である自治体用音声翻訳モデルの商用ライセンスを受けて受託者(凸版印刷株式会社)が同社の商用サービス VoiceBiz を自治体向けにカスタマイズし、全国 31 の公共団体に販売した。また、14 の公共団体に試用中、73 の公共団体に導入検討中となっている。 <p>委託研究 No.197「深層学習によるマルチモーダル文脈理解</p>	<p>高い評価を得ており多くの一般ユーザがダウンロード(2020年3月末現在、シリー累計約612万ダウンロード)して手軽に無料で使える高精度な多言語コミュニケーションスマートフォンアプリとしての地位を確立した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● VoiceTra を活用して自治体・警察・企業等おける実証実験を 100 件以上積み重ねることで NICT の多言語音声翻訳技術の価値が広く認められ、60 件を越える企業への技術移転を実現した。 ● 複数企業からの高精度な多言語音声翻訳プラットフォームサービス提供や商用音声翻訳システムの販売による音声・機械翻訳技術を用いた多言語翻訳ビジネスを創出し、さらに拡大させる等、社会実装を高いレベルで実現した。 <p>等、社会実装につながる特に顕著な成果、将来的な成果の創出が期待される実績が得られた。</p> <p>以上のことから、中長期</p>
--	--	--	--	--

		<p>と機械翻訳の高度化」において以下の研究開発を実施した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 対話対訳コーパス 15.8 万文(内 R1に 4 万文)を構築。上記で開発したコーパスを対象に適切な翻訳を出力する上で必要となる文脈情報を分析。 ● 新聞日英対訳コーパス 165 万文(内 R1に 22 万文)構築。自動翻訳評価コンペ WAT で 1 位)。 ● 要約文の長さを制御できる新手法を確立。日本語・英語の両言語において最高性能を達成。多言語音声翻訳コンテスト等で API を提供)。 ● Flickr30K Entities データセットの英語キャプションを日本語に翻訳(画像中の領域と語句の対応関係を保持、日英では世界初) <p>(ウ)研究開発成果の社会実装</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 産学官連携拠点として、グローバルコミュニケーション開発推進協議会(206 会員(令和 2 年 3 月末時点))の事務局を運営し、協議会会員を主な対象として、産学官のシーズとニーズのマッチングの場としてのビジネスマッチング会合、及び、人材交流を活性化する場としての、総会、シンポジウム、観光や医療等の各種分野別ワーキンググループ、実用化促進部会、研究開発部会などの各種会合を開催し、外部連携や共同研究を促進した。民間企業と共同で推進した事業化共同推進ワーキンググループの活動が、多言語音声翻訳プラットフォーム等を通じた多言語音声翻訳エンジン活用サービスのビジネス化に多大な貢献をしたと評価され、令和元年、「情報通信月間」総務大臣表彰を受けた。共同研究は 40 件に拡大し、実用化に至った事例も生まれた。例えば、京浜急行電鉄(株)、(株)ブリックス、(株)日立製作所、(株)日立ソリューションズ・テクノロジーとの共同研究の成果を活用した新たな鉄道向け多機能翻訳アプリが平成 30 年 7 月に京浜急行電鉄(株)の全駅(泉岳寺駅を除く)に導入された。消防関連では、消防研究センターと共同で VoiceTra に定型文機能を追加した救急隊用多言語音声翻訳アプリ「救急ボイストラ」を開発した。このアプリは 47 都道府県の 726 本部中 507 本部(69.8%)の消防本部で活 	<p>計画を着実に達成した上で、特に顕著な成果の創出が認められた他、将来的な成果の創出が期待される実績も得られたため、評定を「S」とした。</p>
--	--	---	---

			<p>用された(令和2年1月1日時点)。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● リオデジャネイロジャパンハウスや東京マラソンの救護所での実証実験、自民党本部や CeBIT での展示会、東京国際ユース(U-14)サッカー大会における文化交流・選手交流の場での実証実験、ANA ウインドサーフィンワールドカップ横須賀大会における選手との交流の場での実証実験、CEATEC JAPAN、G20 観光大臣会合サイドイベントでの展示など、VoiceTra 及びその技術を活用した実証実験や展示・説明会を 111 件行った。さらにパンフレットやホームページ、コンテストを活用した情報発信も積極的に行った。音声翻訳エンジンの API を開放し、それらを用いて言葉の壁をなくすアイデアや試作品の良さを競うコンテストを実施し、音声翻訳技術活用の裾野を広げる試みも行った。これらの広報活動により、音声翻訳システムの利用は報道発表の件数で 349 件超確認された。警察関連での VoiceTra の試験的利用は 29 都府県の県警に広がった。そのうち、岡山県警や沖縄県警、警視庁、警察庁などでは、独自のサーバ・アプリを使った本格運用も行われた。警察庁については、NICT 開発の多言語音声翻訳機能を搭載したスマートフォン及びタブレットが、全国 47 都道府県警に合計 5 万台配備され、利用可能となった。 ● これらの外部連携等を通じて辞書・コーパスを収集し、研究開発にフィードバックした。辞書・コーパスの提供組織は 69 者となった。収集した辞書等は VoiceTra の基盤となる音声翻訳エンジン・サーバで活用された。 ● 社会実装に結びつくソフトウェアの開発を加速するために、研究開発成果の検証の場として、多言語音声翻訳アプリ VoiceTra、及び、聴障者と健聴者とのコミュニケーション支援アプリ SpeechCanvas の公開・改良を行うとともに、その基盤となる音声翻訳エンジン・サーバの高速化、安定化や、定型文を登録・利用する機能、言語識別機能の実装を行った。特にアプリ側の高速化を行い海外で利用した場合のレスポンスタイムを 6 秒から 2 秒に短縮した。VoiceTra はシリーズ累計で約 620 万件(令和 2 年 5 月末時点)ダウンロードされており、1 日の利用数は平均約 30 万発話である。VoiceTra は、民間企業や警 	
--	--	--	--	--

			<p>察、消防、自治体などにおける 100 件超の実証実験(覚書を締結)にも活用された。SpeechCanvas は平成 29 年 3 月に(株)フィートに技術移転され、運用されている。また、近未来のコンセプトモデルとしてのイヤホン型多言語音声翻訳システムや同時通訳プロトタイプシステム、自動字幕付与システム、多言語インタビュー字幕システムの開発とイベント展示も行った。さらに、音声翻訳エンジンの利用環境としての音声翻訳 SDK (Software Development Kit)を開発及び整備し、外部連携先 24 者へ提供した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 技術移転に向けて、知的財産を所管する部門との連携を強化するなど、研究開発成果を特許等の知的財産として蓄積する体制の整備を進め、71 件超の特許出願を行った。特許登録は 51 件超となった。研究開発成果であるソフトウェアやデータベースの直接ライセンスの実績は 65 件(51 者)超に拡大した。技術移転先の(株)みらい翻訳が、多言語音声翻訳プラットフォームのサービス提供と音声翻訳ソフトウェアのライセンス事業を開始した。凸版印刷(株)の音声翻訳アプリ「TabiTra」やカスタマイズ可能な音声翻訳アプリ「VoiceBiz」、日本電気(株)の多言語音声翻訳サービス、パナソニック(株)の多言語音声翻訳サービス「対面ホンヤク」、(株)ログバーのオフライン翻訳機「ili/iliPRO」、シリーズ累計出荷台数 70 万台を突破したソースネクスト(株)のクラウド型音声通訳機「POCKETALK W/POCKETALK S」、コニカミノルタ(株)の医療通訳タブレット「MELON」やハイブリッド式多言語通訳サービス「KOTOBAL」、電話通訳と自動音声翻訳を組み合わせた(株)ブリックスのサービス「ネイティブ heart」、東芝デジタルソリューションズ(株)が特許庁に導入した機械翻訳サービスなど NICT の技術を活用した商用製品・サービスの提供や実用/試験サービスが 66 件超生まれた。さらに、凸版印刷(株)のサービスが日本郵便の全国約 20,000 局に「郵便局窓口音声翻訳」として導入され、また、神奈川県綾瀬市の自治体など 27 公共団体への導入が決まるなど、音声翻訳技術の利用が拡大した。 	
--	--	--	--	--

<p>○社会知解析技術 社会に流布している膨大な情報や知識のビッグデータ(「社会知」)を情報源として、有用な質問の自動生成やその回答の自動提供等を行うことにより、非専門家でも専門的知識に容易にアクセスすることを可能とし、かつ、利用者の意思決定において有用な知識を提供するための技術を研究開発するものとする。さらに、インターネット上に展開される災害に関する社会知について、各種の観測情報とともにリアルタイムに分かりやすく整理し、利用者に提供するための基盤技術を研究開発するものとする。</p>	<p>(2)社会知解析技術 ネット上のテキスト、科学技術論文、白書等多様なタイプの文書から、社会に流通している知識(「社会知」)を解析する技術を開発し、社会の抱える様々な課題に関して、非専門家でも専門的知識に容易にアクセスでき、各種の意思決定において有用な知識を得ることのできる手段を実現する。 このため、社会における問題の自動認識技術をはじめとして、それらの問題に関する有用な質問の自動生成技術、自動生成された質問に対して回答や仮説を発見する技術、回答や仮説等得られた情報を人間が咀嚼しやすいよう適切に伝える技術等、極めて知的な作業を自動化する社会知解析技術の確立を目指す。 また、インターネット上に展開される災害に関する社会知をリアルタイムに解析し、分かりやすく整理して提供するための基盤技術の確立を目指す。さらに、実世界の観測情報を統合して、より確度の高い情報を提供する枠組みを確立する。 加えて、これらの技術を実装したシステムを開発し、より適切な意思決定が短時間で可能となる社会の実現に貢献する。また、機構外の組織とも連携し、開発した技術の社会実装を目指す。</p>		<ul style="list-style-type: none"> ● PDF を含めた多様な Web テキスト 300 億ページを収集し、そのうちから社会の抱える様々な課題の記述を抽出、その解決法の記述を抽出する深層学習ベースの技術を開発した。 ● 社会に関する課題に関する専門的知識も含め、多様な知識に容易にアクセスできる手段として次世代音声対話システム WEKDA を開発した。この WEKDA は、音声で入力された「何」型(例:「スーパー台風で何が起きる?」)、「なぜ」型(例:人工知能が進化を遂げたのはなぜ?)、「どうなる」型(例:人工知能が進化するとどうなる?)、「どうやって」型(例:地球温暖化はどうやって解決する?)等様々な質問に、深層学習ベースの新規技術によって Web40 億ページに記載された知識を元にして、回答や仮説を音声で提供できる他、質問の形を取らない入力に関しては、その入力に関連の深い質問を自動生成し、その回答を元に自然な応答を生成することができる。これによって、一般ユーザでも高度な知識に容易にアクセスすることが可能になった。このように40億ページ規模の Web 文書の知識を用いて、「どうなる」型、「どうやって」型、「なぜ」型を含めた音声の質問に、文もしくは長いフレーズで回答するシステムは世界的にみても他に存在せず、また、質問の形を取らない入力に対しても、やはり、40億ページ規模の知識をもとに応答を生成するシステムは世界的にみても例がなく、その科学的価値はもとより、日本の人工知能技術の遅れが指摘される中で社会的価値も極めて高い。 ● 上記 WEKDA には、上述の新規質問応答技術の他に、質問の自動生成技術、仮説生成技術、文中の省略を補完する文脈処理技術、長い回答を人間が咀嚼しやすいように簡潔に要約する技術等の新規開発した深層学習ベースの自然言語処理技術が組み込まれている。これらも世界初の技術が多数含まれ、また、日本語に関してこうした技術を実際に大規模データに適用できるのは当機構だけであり、科学的意義、社会的価値のいずれも高い。 ● WEKDA および、これまでに述べてきた技術で大規模な Web ページに適用するため、前中長期計画で開発した並列化ミドルウェア RaSC に自動最適化機能を追加した。ま 	<p>(2)社会知解析技術 【科学的意義】</p> <ul style="list-style-type: none"> ● Web40 億ページの情報を元に雑談、質問応答を行う、世界的にみても前例のない博学な次世代音声対話システム WEKDA を開発した。WEKDA に組み込むため、独自技術、独自学習データと BERT 等の最先端の深層学習技術を組み合わせ、雑談対話技術、文脈処理技術、質問応答技術、因果関係の連鎖に関する推論技術等、世界初も含めた高度な技術を開発・高精度化した。さらに、これらの研究開発の成果を、ACL, AAAI, EMNLP, WSDM 等のトップカンファレンスで継続的に発表した。 ● 巨大ニューラルネットワークを自動で分割し、並列化する世界で類を見ないミドルウェア RaNNC を開発した。 ● SNS 上で、被災者と自律的にやりとりを行なって情報の収集、周知を行う防災チャットボットというコンセプトを提案した。
---	--	--	--	---

			<p>た、近年、自然言語処理で広く使われるようになってきた巨大ニューラルネットワークの学習を複数枚の GPU で効率よく実施するため、ミドルウェア RaNNC を新規開発した。これは一枚の GPU に格納するのが困難な巨大ニューラルネットワークを自動的に分割し、並列に学習、推論を行うものである。実際に、500 枚以上の GPU を使用した分散学習により、数十億パラメータ(BERT-large の 10 倍以上の規模)のネットワークの学習を行い、精度向上に貢献した。なお、RaNNC、RaSC 共にフリーソフトウェアとして公開した他、学習した BERT モデルも一般公開した。(見込み) 現在、巨大ニューラルネットワークの研究、特に学習はほぼ、GAFA 等、一部の民間企業でしか行われていないが、RaNNC により、その裾野が広がると考えられ、また、世界的にみても巨大ニューラルネットワークを自動で分割し、並列化する技術も他にないことから、その科学的意義、社会的価値は特に高い。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● これまでに述べてきた技術、およびその関連技術は ACL、EMNLP、AAAI、IPDPS、MedInfo 等の自然言語処理、人工知能、並列処理等のトップカンファレンスで発表された。その科学的意義が認められたものと考えられる。 ● これらの技術の一部は、前中長期計画時に公開された WISDOM X に組み込まれ、一般に公開された。(見込み) また、WEKDA 全体に関して、民間企業と研究用ライセンスを締結した他、実証実験用に API 提供を実施した。こうした試みは他の公的研究機関ではおこなわれておらず、その社会的価値は極めて高い。 ● SIP 第 2 期で実施しているプロジェクト「Web 等に存在するビッグデータと応用分野特化型対話シナリオを用いたハイブリッド型マルチモーダル音声対話システムの研究」は在宅介護モニタリングと呼ばれる、高齢者の健康状態チェックを行う面談の一部をマルチモーダル音声対話システムで代替することが目標であり、KDDI 株式会社、NEC ソリューションイノベータ株式会社、株式会社日本総合研究所との共同プロジェクトである。在宅介護モニタリングの際には、WEKDA を活用して雑談も実施し、高齢者に飽きられることがなく、また、様々なアイデアや知識も 	<ul style="list-style-type: none"> ● SIP 第二期で高齢者介護用マルチモーダル音声対話システム MICSUS を開発。実証実験により高い意味解釈精度を達成した。 ● 社会知解析技術全般に対して志田林三郎賞、対災害情報分析システム DISAANA/D-SUMM に関して、文部科学大臣表彰科学技術賞を受賞した。 <p>等、科学的意義が大きい独創性に富んだ顕著な成果の創出や将来的な成果の創出が期待される実績が得られた。</p> <p>【社会的価値】</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 高精度化した深層学習ベースの質問応答技術を WISDOM X に搭載し、一般公開した。 ● Twitter 上の災害情報を分析する情報分析システム DISAANA、D-SUMM の一般公開、改善を実施した。 ● ミドルウェア RaNNC を用いて巨大ニューラルネットワークの学習が可能であることを示すことで巨大ニューラルネットワークの学習に関する研
--	--	--	---	---

			<p>提供し、高齢者の生活をより豊かにし、また、その社会的孤立を防ぐことも狙う。これらのゴールは、日本の今後を左右しかねない、高齢化の問題の解決に挑戦するものであり、その社会的価値は極めて高く、また、ビジネス化までの道のりが長いことが予想されることから、まさに公的研究機関が少なくともその開発の一部を担うべき技術である。これまでに、まず、健康状態チェックを行う対話シナリオを構築し、それに沿った対話が行えるマルチモーダル音声対話システムを実際に構築し、高齢者介護事業者と連携して、複数回の実証実験を行って課題を洗い出し、まだその洗い出された課題に関して改善を重ねた。この結果、実証実験の対象となった、要支援・要介護の高齢者の大多数より、「使える」という高い評価をいただいている。この対話システムの実装に際し、NICTでは、全体アーキテクチャの策定に参加し、1) ユーザ発話の意味解釈を行うユーザ発話意味解釈モジュール、2) 人間の作業者が書いた対話シナリオを自動的により完備なものにする対話シナリオ自動拡張モジュールを開発した。特にユーザ発話意味解釈モジュールに関しては、人間の作業者が書いた対話シナリオに即したユーザ発話の意味解釈に必要な学習データ合計 200 万件以上を整備した。(見込み)</p> <ul style="list-style-type: none"> ●平成 31 年 4 月に奈良先端科学技術大学院大学との連携講座を開設。2019 年 11 月現在4名の大学院生を指導。AI 人材の枯渇は極めて重大であり、その社会的価値は非常に高い。 ●前中長期計画にて開発した質問応答を通して求める情報を網羅的かつピンポイントに提供する耐災害 SNS 情報分析システム DISAANA、ならびに災害関連情報を自動的に抽出し、分かりやすくコンパクトに整理して提供する災害状況要約システム D-SUMM の開発および改善を進め、2015 年 4 月から公開していた DISAANA に続き 2016 年 10 月に D-SUMM の試験公開を開始した。公開後、大きなトラブルも無く 4 年以上(見込み)継続して運用し、実災害時に活用された点は社会的価値も高く、また常に試用できるという点で社会実装を大きく進展させた。 	<p>究の裾野を拡大するなど社会的ニーズに直結した成果を上げた。RaNNC のソフトウェアをフリーソフトウェアとして一般公開するとともに、学習した BERT モデルも一般公開した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●D-SUMM を試験公開し、自治体等の防災訓練に多数参加することを通して、実災害時に実活用され重大事象発見に貢献できることを示し、社会的課題解決に役立つことを示した。 ●また、SIP 第二期で開発している防災チャットボット SOCDA も同様に、神戸市での一般市民 1 万人を対象とするものも含め、多数の自治体の訓練で活用した。 ●同じく、SIP 第二期で開発している高齢者介護用マルチモーダル音声対話システム MICSUS の実証実験を高齢者介護事業者と連携しつつ、高齢者を対象として、複数回行い、着実に各種処理の精度向上や対話の質向上を達成し、高齢者
--	--	--	---	---

		<ul style="list-style-type: none"> ● D-SUMM の高速化(検索速度を 3 倍)、高精度化(災害情報抽出の平均精度 13%向上)といった性能向上、公開されたシステムを実際に活用した公的機関からの要望に従って、操作をミニマムにする UI の実装を通してインターネット上の社会知をリアルタイムに分かりやすく整理して提供する技術を確立した。これらの科学的意義、社会的価値は高い。 ● 上記の性能向上の実現および D-SUMM の開発を進めるにあたり 20 万件の新規学習データ、意味分類辞書(2,846 万件)における 432 万件の単語に対しより詳細な意味分類を付与した。災害対応を目的としてこうした大規模な言語資源を整備した例はなく、科学的意義は高い。 ● 試験公開中の DISAANA が 2016 年 4 月の熊本地震の際に内閣官房にて活用された。2017 年 7 月の九州北部豪雨の際には、大分県の災害対策本部において、DISAANA・D-SUMM が活用され JR の鉄橋の流失をいち早く発見するなど大きな成果を挙げた。その他、実災害時には公的機関からのアクセスが多数あった。社会的価値ならびに社会実装における効果は極めて高い。 ● インターネット上の社会知と実世界の観測情報を統合し、より確度の高い情報を提供するシステムを実装した(見込み)。物理的センサー等による情報と、人間が感じてテキストとして表現した情報とを融合して新たな価値を生み出すという点で科学的意義は高い。 ● 社会実装は着実に進捗しており、DISAANA・D-SUMM のソフトウェアを研究開発用に民間企業等にライセンスし(3 件)、その後さらに有償ビジネスライセンス契約を民間企業と 3 件締結した。今後これらのソフトウェアを活用した商業サービスが開始される見込みである。社会実装という点での価値は極めて高い。 ● SNS 等の上で自発的に発信された社会知のみを対象とするのではなく、SNS 上で、いわゆるチャットボットを經由して、被災者等と双方向で情報をやりとりし、自律的に情報を収集したり配信したりすることで網羅的な情報収集や、適切な避難を促すことが可能な防災チャットボットというコンセプトを提案し、SIP 第 2 期にて 2018 年度より(国研)防災科学技術研究所、株式会社ウェザーニューズを 	<p>より実際に高い評価を受けた。</p> <p>等、社会課題の解決や社会的価値の創出に貢献する特に顕著な成果や将来的な成果の創出が期待される実績が得られた。</p> <p>【社会実装】</p> <ul style="list-style-type: none"> ● WEKDA に関し、民間企業への研究用無償ライセンスや実証実験用 API を提供した。 ● D-SUMM が実災害時に実活用され、重大事象発見に貢献出来ることを実証した。 ● SOCDA が令和元年台風第 19 号の際に実利用されるなど、高い実用性を示し、重大事象発見に貢献できることを示した。 ● 前中長期計画期間中に開発した DISAANA および今中長期計画期間中に公開した D-SUMM のソフトウェアについて複数民間企業と有償でのビジネスライセンス契約を締結した。 ● 社会知解析技術全般に関して、情報通信月間推進協議会会長表彰「志田林三郎賞」を
--	--	---	--

		<p>共同研究機関、LINE 株式会社と一般社団法人情報法制研究所を協力機関とする体制にて防災チャットボット SOCDA の実現を目指す提案が採択され研究開発を開始した。これが実現されれば、被災者に問いかけをすることで、一方向のコミュニケーションが主体である通常の SNS に比べてより網羅的に情報を収集することができ、また、深掘りをする質問をすることで、情報の確度を上げることもできる。さらにはデマと思しき情報が見つかった場合に周辺にいる被災者等に問い合わせをすることでそのデマの真偽性の確認をすることも可能になる。また、避難等に資する情報を、ニーズを持つ被災者にピンポイントで伝えることもでき、その社会的価値は極めて高い。さらには、類似の枠組みは世界的にみても存在せず、その科学的意義は非常に大きい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● SOCDA の研究開発プロジェクトでは、全体の枠組み、アーキテクチャを提案し、プロジェクト組成に貢献した他、DISAANA・D-SUMM の技術を応用し、収集した情報を分析するエンジン、ならびに分析結果を表示するための PC およびスマホ等のモバイル端末向けユーザインタフェース(UI)および、SOCDA への投稿や手動での通知をとりまとめる管理画面 UI 等の研究開発を担当し、プロジェクトの推進に貢献した。災害に関する種々雑多な情報を地図上にコンパクトに表示するなど、より効率的に災害時の素早く正確な意思決定を支援するインタフェースを検討することは科学的意義、社会的価値ともに大きい。 ● 防災チャットボット SOCDA 等の社会実装を推進するため、関係機関と調整を行い民間企業 7 社、国研等 4 者、18 自治体、省庁等 8 者が参画する AI 防災協議会が設立され(2019 年 6 月)、社会実装を継続的に推進する体制が整備された。 ● 地方自治体や自衛隊、海上保安庁における防災訓練および国民保護訓練等にて DISAANA・D-SUMM・SOCDA が活用された(合計 29 件; 2020 年 1 月時点)。これらの訓練等を通して技術的検証ならびに社会実装における課題の検討を実施した。特に SOCDA については、神戸市において、市民向けと消防団における活用の半年以上の長期にわたる実証実験を実施し、長期間の運 	<p>受賞し、NHK スペシャル等のテレビ報道、新聞一面を含めて、合計 260 件(新聞報道 122 件、Web 掲載 120 件、テレビ放映 18 件)の報道がなされた。</p> <p>等、社会実装につながる特に顕著な成果や将来的な成果の創出が期待される実績が得られた。</p> <p>以上のことから、中長期計画を着実に達成した上で、特に顕著な成果の創出が認められた他、将来的な成果の創出が期待される実績も得られたため、評定を「S」とした。</p>
--	--	---	---

			<p>用を通した様々な知見を得た。また、2020年には神戸市において実際に市民1万人を対象とする大規模実証実験を成功裏に実施した。各自治体は非常に協力的であり、今後、さらに社会実装を進める。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 令和元年台風19号では、防災チャットボットSOCDAが神戸市、三重県、伊勢市にて実活用され（2019年10月12日）、特に三重県では高く評価され、社会実装に弾みがついた。 ● 上述の通り、LINE株式会社、(国研)防災科学技術研究所、ウェザーニューズ株式会社、KDDI株式会社、NECソリューションイノベータ株式会社、株式会社日本総合研究所他、多数の民間企業、自治体等の公的機関、高齢者介護事業者等と連携し、研究開発、社会実装を推進し、ビジネスライセンスの締結も行なった。 ● DISAANA、D-SUMMの研究開発に対して、文部科学大臣表彰科学技術賞(研究部門)等を受賞した。 <p>以上に述べた社会知解析技術全般に関して、情報通信月間推進協議会会長表彰「志田林三郎賞」を受賞し、NHKスペシャル等のテレビ報道、新聞一面を含めて、合計260件(新聞報道122件、Web掲載120件、テレビ放映18件)の報道がなされた。</p>	
--	--	--	--	--

<p>○実空間情報分析技術</p> <p>各種の社会システムの最適化・効率化を実現するため、センサー等のIoT機器から得られたデータを整理した上で横断的・統合的に分析することによって、高度な状況認識や行動支援を可能にするための技術を研究開発するものとする。また、平成32年度までに、研究開発成果を踏まえた社会システムの最適化・効率化のための支援システムを開発・実証するものとする。</p>	<p>(3)実空間情報分析技術</p> <p>ゲリラ豪雨や環境変化等、社会生活に密接に関連する実空間情報を適切に収集分析し、社会生活に有効な情報として利活用することを目的としたデータ収集・解析技術の研究開発を行う。また、高度化された環境データを様々なソーシャルデータと横断的に統合し相関分析することで、交通等の具体的社会システムへの影響や関連をモデルケースとして分析できるようにするデータマイニング技術の研究開発を行う。さらに、これらの分析結果を実空間で活用する仕組みとしてセンサーやデバイスへのフィードバックを行う手法及びそれに有効なセンサー技術の在り方に関する研究開発を行うことで、社会システムの最適化・効率化を目指した高度な状況認識や行動支援を行うシステムを実現するための基盤技術を創出し、その開発・実証を行う。</p>		<p>(3)実空間情報分析技術</p> <ul style="list-style-type: none"> ● Society 5.0 による SDGs 達成に貢献するデータ活用基盤を構築すべく、高度化された環境データを交通・健康等様々な分野のデータと連携させ、環境変化による社会生活リスクを予測できるようにする基盤技術の研究開発に取り組んだ。センシングデータから抽出した実空間のイベント情報を対象に、従来のビジネスビッグデータを対象とした相関ルール発見や機械学習の手法を拡張し、時空間的な局所性や連続性を考慮した相関パターンを拡張性高く発見・予測できるようにした。局所的に頻出し有用性が高い (spatial high utility) 相関ルールを高速に発見するデータマイニング手法 SHUIM を開発し、これを環境データに対する相対交通リスク予測に応用した全天候型道路混雑予測モデル (VEENA) を実装した。降雨レーダーデータと渋滞統計データを用いた豪雨時の渋滞発生事例を対象とした評価実験で、39,873 件のトランザクションを対象に 80% の予測精度をあげつつ、メモリ使用量 5 割、処理速度 9 割削減し (対 EFIM (naive)、1.5GHz GPU・4GB メモリ)、処理性能の大幅な改善を達成した。また、CRNN 深層学習方式により時空間的な連続性を考慮したイベント情報間の相関予測モデルを生成し、かつユーザ収集データを用いた追加学習 (Decoder Transfer Learning) で予測モデルをカスタマイズ可能にする相関学習・予測手法 DTL-CRNN を開発し、これを大気汚染や気象変化による健康への影響を示す AQI・EQI 等の環境品質短期予測モデルに応用した。越境汚染事例を対象に、国内や東アジア沿岸部の環境基準測定局データを用いた AQI 短期予測 (1~12 時間後) で 70~90% の予測精度を達成した。また、環境基準測定局データを用いた地域メッシュ (5 次、250m 四方) 単位の AQI 短期予測を、ウォーキングや車両運転中に収集したデータを用いてルート単位の予測にカスタマイズする実験で、一般的な測定局データの空間補完法 (IDW) に比べ予測精度を 15~37% (SMAPE 値比) 改善した。 <p>さらに、異なるセンシングデータを重畳化した時空</p>	<p>(3)実空間情報分析技術</p> <p>【科学的意義】</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 異分野の実空間情報を対象に、局所的に有用性が高い相関ルールを効率よく発見するデータマイニング手法 (SHUIM) を開発し、異常気象時の交通障害リスク予測の性能改善を実現したこと、データ間の時空間的な連続性を考慮した相関学習・予測手法 (DTL-CRNN) を開発し、越境汚染等の環境品質短期予測とユーザ収集データによる予測のカスタマイズを精度高く実現したこと、これら基盤技術の研究開発成果がトップカンファレンスでの論文採択や論文賞受賞に繋がったこと。等、科学的意義が大きい革新性に富んだ成果の創出や将来的な成果の創出が期待される実績が得られた。 <p>【社会的価値】</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 基盤技術を API 実装し 11 分野 25TB (令和元年度時点) の実空間情報の横断的利活用を
--	---	--	--	---

		<p>間ラスタ画像を生成し、複合イベントを示す画像パターンを発見・予測する深層学習方式 3D-CNN を開発した。画像認識技術を用いた他に類を見ない複合イベント発見手法であり、環境、交通、SNS データを対象とした評価実験で、従来の統計予測モデル（自己回帰和分移動平均など）に対し 13%(MSE 値比)の予測精度向上を達成した。様々なイベント情報を組み合わせ有意な複合イベントを発見する視覚的分析ツールとして、xData プラットフォームに実装した（見込）。</p> <p>これらの成果により、データ連携に基づき環境変化による社会生活リスク（環境品質）の予測分析を行うデータサイエンスの基盤技術を確立した。また、これらの成果は、IEEE BigData, SSDBM, PAKDD 等、ビッグデータやデータマイニング分野のトップカンファレンスに論文採択され、論文賞受賞 3 件など、学術的意義が高く評価された。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● データ連携による環境品質予測分析を行うデータサイエンスのフレームワークを設計し、これに基づくデータ利活用プラットフォームの構築に取り組んだ。様々な分野のセンシングデータから実空間のイベント情報を抽出・収集し、横断的に利活用可能な形式でアーカイブするイベントデータウェアハウスと、そこから関連データセットを発見するための関連マイニングや関連データを学習・予測するため API を、基盤技術に基づき実装した xData プラットフォーム を、NICT 総合テストベッド上に構築した。NICT リモートセンシングデータを始め、環境、交通、健康等の様々なセンシングデータから抽出した 11 分野・25TB（令和元年度時点）のイベント情報を利活用可能にし、環境品質予測分析のオープンデータサイエンス活動や実証実験向けに公開したことは、社会的価値の高い成果である。 ● xData プラットフォームによる環境品質予測分析を用いて、環境変化による様々な社会生活への影響を予測し、スマートサービスによる行動支援を高度化することで地域の環境問題等の課題解決に貢献すべく、様々な 	<p>可能にした xData プラットフォームを開発し、地域住民や技術者を対象としたデータソンやハッカソン等によるモデルケース開発や、研究者を対象とした環境品質予測分析のベンチマーキングタスク等によるオープンデータサイエンス活動への展開を経て、国内の自治体や ASEAN 地域のスマートシティ等での実証実験に到達した。</p> <p>等、社会課題の解決や社会的価値の創出に貢献する成果や将来的な成果の創出が期待される実績が得られた。</p> <p>【社会実装】</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 自治体における環境測定監視事業者による光化学オキシダント注意報予測支援や ASEAN 地域と連携したスマートシティ実証実験など国内外で幅広く社会展開を実施していること。 ● xData プラットフォームを活用した環境品質短期予測や異常気象時の交通障害リスク予測を、ベトナム・
--	--	---	--

		<p>社会展開活動を行った。研究者を対象としたオープンデータサイエンス活動を通し、基礎となる環境品質予測分析モデルの開発と改善を図るべく、MediaEval 国際ワークショップにおいて、xData プラットフォーム上に実装した環境品質予測分析モデルを用いたベンチマーキングタスクを実施した。令和元年度は、欧州、中国、東南アジア等から 11 チームが参加し、xData プラットフォーム上のデータセットを用いて AQI 短期予測モデルを改善する手法を開発し予測性能を競い合うタスクを、約半年間かけて行った。GBDT と LSTM に基づく優れた手法などが提案され、xData プラットフォームの AQI 短期予測モデルの改良に役立てた。実例に基づく異分野データ連携の予測分析が特徴あるとして、タスク自体も国際ワークショップ主催者から特別表彰を受け、令和 2 年度も継続して実施した（見込）。</p> <p>また、環境問題意識の高い ASEAN 諸国（シンガポール、ブルネイ、フィリピン、ベトナム）の研究機関と連携し（ASEAN IVO プロジェクト、令和 2～3 年）、越境汚染による健康リスク予測などを対象に、地域間で環境品質予測分析モデルを共有・転送・カスタマイズする分散協調開発システムを xData プラットフォーム上に構築し、地域ごとのモデル開発の効率化を実現した（見込）。これらの国際的なオープンデータサイエンス活動は、科学的意義と社会的価値の高い成果である。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● また、これらの活動で改良された環境品質予測モデルを、国内の環境基準対策支援に応用し、自治体等が設置した環境基準測定局のデータを用いて、光化学オキシダントが数時間以内に注意報発令レベルに達するかを予測し、監視要員の待機や待機解除の早期判断に活用するアプリケーションを、環境基準測定監視業者と共同で開発した。千葉県 11 地域を対象に、101 箇所の測定局の過去 3 年分のデータを用いた評価実験で、6 時間後の注意報発令レベル予測で 60%～93%（再現率）の精度を達成し、発令漏れの少ない予測を実現した。このアプリケーションを用いて、自治体の注意 	<p>ダラット市スマートシティにおける環境・交通・観光データを活用したスマートサービスの実証に応用したこと。</p> <p>等、社会実装につながる成果や将来的な成果の創出が期待される実績が得られた。</p> <p>以上のことから、中長期計画を着実に達成する成果の創出が認められた他、将来的な成果の創出が期待される実績も得られたため、評定を「B」とした。</p>
--	--	---	--

			<p>報発令業務支援を対象とした実証実験を行い、アンケート調査等を通じ有用性を検証した（見込）。</p> <ul style="list-style-type: none">● xData プラットフォームによる環境品質予測を活用するモデルケースを開発すべく、地域住民やサービス開発者らが参加し、環境品質予測を活用したスマートサービスを提案・試作するハッカソンを実施した。より良い環境でのウォーキングを支援するマップ作成やサービス提案を行うデータソン（データ収集も行うハッカソンの一種）を平成 29 年度と平成 30 年度に福岡市で実施し、一般住民や学生、ランニング団体などのべ 80 名が参加した。”カラダにうれしい空気”をテーマに、グループに分かれた参加者が、小型の環境センサー（名古屋大学との共同研究）やライフログカメラ、活動量計などを持って市内を歩き、健康に良いと思われる場所の環境品質を取得データから xData プラットフォームのツールを使って分析・可視化しマップ上にプロットしウォーキングマップを作成するタスクや、環境品質予測の結果をスマートフォンの地図アプリケーションで確認しながら、より良い環境の中でより多くのウォーキングを行い、結果をポイント化して競い合うタスクを行い、環境品質予測のウォーキング支援への有用性を検証した。参加者へのアンケート調査では、こうした活動は大変面白く是非また参加したいという回答が大半を占め、特により良い環境を意識した活動を通じ街の魅力の再発見につながったり、ウォーキングを楽しむ動機となったなどの意見から、ウォーキング支援への有用性が確認された。また、作成したマップを活用し、ポイントサービスなどと連携しながら環境品質の良い場所で運動することを促進するサービスや、環境品質の予測結果から美容や活動に関する情報推薦を行うサービスなどが提案され、社会実装の具体的なアイデアが得られた。● さらに、異常気象による交通障害リスクの予測データを用いて、ルート案内アプリを開発するハッカソン（Smart Sustainable Mobility ハッカソン）を、平成 31 年 2 月に東京都で実施した。ITS 関係の技術者ら 20 名が参加し、豪雨や豪雪に伴う交通障害のアラ-
--	--	--	--

		<p>トや運転リスクを通知し、それらを回避するルート案内や運転支援を行うカーナビアプリケーションを試作し、運転シミュレーターを使ったデモを行った。参加者へのアンケート調査では、アイデアを迅速に形にできたことが高く評価され、新聞報道でも、交通リスクデータ活用をテーマにソフト開発を競うハッカソンを通じ企業の垣根を超えカーナビを考える活動として紹介された（日刊自動車新聞 平成 31 年 2 月 27 日）。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● ハッカソン等を通じで開発した環境品質予測分析のモデルケースを社会実装につなげるべく、環境問題意識の高い ASEAN のスマートシティを対象に、情報ポータルデータのデータを用いて xData プラットフォーム上の環境品質予測分析モデルをカスタマイズし、現地のスマートサービスで活用する実証実験に取り組んだ。ベトナム ダラット市のスマートシティでは、ダラット大学や地元企業と共同で、情報ポータルに収集された環境、観光、交通に関するデータを連携させ、観光エリアの環境品質や交通公害リスクの予測モデルを開発し、これらをモバイル観光アプリケーションにおける快適な観光プラン推薦に活用したり、スマート交通システムにおける交通公害アラート通知に活用した（見込）。また、この活動は、日本とベトナムのスマートシティに係る協力活動を強化する取り組みとして、総務省日ベトナム ICT 同作業部会（第 3 回）でも取り上げられた。また、フィリピン カウアヤン市では、イザベラ州立大学と共同で、情報ポータルに収集された環境データや蚊の発生状況データ、健康管理データを連携させ、デング熱を対象とした環境保健衛生リスクの予測分析モデルを開発し、現地のデング熱早期警戒システムで活用した（見込）。これらの実証活動を通じ、地域の環境に関する課題解決のために、現地の大学や企業が、現地のデータを用いて xData プラットフォーム上の環境品質予測分析モデルをカスタマイズし現地のスマートサービスで活用する形態を確立し、社会実装を加速した。 ● データ利活用からセンシング技術へのフィードバック 	
--	--	--	--

			<p>ク手法に関し、環境品質予測結果の利活用に即して、ライフログカメラ等で取得したユーザの周辺環境の画像データから、画像認識技術を用いて有用な環境情報を抽出し、物理センサーにより取得した環境データを補完・拡張することで、予測モデルを目的最適化するマルチメディア(MM)センシング技術の開発に取り組んだ。ウォーキングや車両運転中に収集した環境データをライフログデータを用いて AQI 予測を行う手法を開発。スマートフォンの世界的な普及を背景に、測定局や観測網の整備が遅れていた物理センサーが入手できない等の理由で不足している環境データを、MM センシングを用いたクラウドセンシングにより補完することに活用することが期待されることから、ベトナム国家大学ホーチミン校と基盤技術の共同研究を実施するとともに、ベトナム ダラット市の実証実験などでバイク等による収集データを用いた交通公害リスク予測に活用し、有効性を検証した（見込）。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● NICT リモートセンシングデータを活用し高度な状況認識や行動支援を行うシステムの開発・実証に取り組み、フェーズドアレイ気象レーダを用いたゲリラ豪雨対策支援システムの実証実験（神戸市）を実施した。短時間での 3 次元観測が可能なフェーズドアレイレーダの特徴を生かし、30 秒毎の 3 次元降雨観測により地上で局地的大雨が降る前にゲリラ豪雨を早期探知する手法を開発し、50mm/h 以上の強雨が 10 分以上継続すると予測されるエリアをリアルタイムに地図表示してハザードマップを統合し、危険箇所を地図上で把握したり、警戒情報をメール配信する実験システムを開発した。神戸市と覚書を締結し、消防局（親水河川対策）、建設局（下水道ポンプ場試運転、道路冠水対策）、危機管理室（豪雨災害対策全般）、神戸県民センター（兵庫県）（河川管理）など、合計 227 名が参加する実証実験を実施し（H28 年 8 月～10 月）、パトロール先の絞り込みや下水ポンプ準備等での有用性をアンケート調査等で確認した。その成果は、読売新聞（大阪）「局地豪雨 前兆つかみ減災」（H28. 7. 29 	
--	--	--	--	--

			<p>朝刊)、NHK ニュースホット関西『雲』の発生捉え 予測」(H28. 7. 8)等で報道された。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● xData プラットフォーム上に構築した SAR データ GIS 分析ツールを公開し、NICT Pi-SAR データから洪水・土砂崩れ領域等の GIS データを抽出し災害マップを生成する SAR データ分析チャレンジを、平成 31 年(令和元年)4～5 月に東京都内で開催した(NICT Open Challenge として実施、電磁波研究所と連携)。大学、GIS・IT、建設・土木等の研究者、技術者、学生など 30 名が参加し(好評につき当初予定から倍増)、SAR データ分析プログラムのオンライン学習とチャレンジ課題コンペを実施した。チャレンジ課題では、東日本大震災と熊本地震の際に取得された航空機 Pi-SAR のデータを用いた分析を行い、「農地の被害状況の把握マップ(最優秀賞)や土砂崩壊地の危険木マップ(優秀賞)など、実用性の高いマップが作成された。参加者が開発したプログラムや災害マップを公開(GPL v2)し再利用を促進した。参加者へのアンケート調査では、SAR データ分析の具体的な方法を学ぶことができたことや、SAR データを活用した災害マップのアイデアを形にできたなどが高く評価された。 ● 異分野データ連携による社会システムの最適化・効率化を目指したシステムの整理体系化や技術の普及促進に向けた活動として、スマート IoT 推進フォーラム異分野データ連携プロジェクトを、H28 年 9 月に産学官 21 機関 37 名のメンバーで発足させ、異分野データ連携のユースケースや技術アーキテクチャの策定、実証実験を通じた技術検証(委託研究(課題 178、201)と連携)などを実施した。また、これらの成果に基づき、異分野データ連携技術の整理体系化や提言をまとめた技術報告書を公開・出版した(H29 年 6 月出版など)。 	
--	--	--	---	--

<p>○脳情報通信技術</p> <p>人の脳内表象や脳内ネットワークの解析を行い、人の認知・行動等の機能解明を通じて、高齢者/障がい者の能力回復、健常者の能力向上や脳科学に基づいた製品やサービスの新しい評価方法の構築等に貢献するため、脳型情報処理技術等を研究開発するものとする。また、高精度な脳活動計測や計測装置の軽量小型化、脳情報に係るデータの統合・共有・分析を実現するための技術を研究開発するものとする。さらに、人の音声・動作・脳情報等から脳内の状態を解析・推定し、人の心に寄り添うロボット等を実現するための技術を研究開発するものとする。</p>	<p>(4)脳情報通信技術</p> <p>生活の向上や福祉等に役立つ新しいICTを創出するためには、情報の送受信源である人間の脳で行われている認知や感覚・運動に関する活動を高精度で計測する技術や、得られた脳情報をデコーディングやエンコーディングに効率的に活用する技術の確立が不可欠である。このため、以下の技術の研究開発に取り組む。また、社会展開を目指した研究開発成果の最大化のために、産学官連携により脳情報通信連携拠点としての機能を果たし、脳情報通信技術の創出に資する新たな知見獲得を目指す。</p> <p>(ア)高次脳型情報処理技術</p> <p>子供から高齢者、健常者及び障がい者も含めた多様な人間のポテンシャルを引き出すために、脳内表象・脳内ネットワークのダイナミックな状態変化を捉える解析や脳機能の解明を進め、これを応用した情報処理アーキテクチャの設計、バイオマーカの発見等を行う。また、認知・行動等の機能に係る脳内表現・個人特徴の解析を行い、個々人の運動能力・感覚能力を推定・向上させる技術のみならず、社会的な活動能力を向上させる技術の研究開発を行う。さらに、製品やサービスの新しい評価方法等に活用可能な脳情報に基づく快適性・安全性の評価基盤の研究開発を行う。加えて、人の心に寄り添うロボット等の実現に貢献するために、視覚・聴覚情報等の変動による人の反応や脳情報の変化を記述する環境・反応データを収集し、環境変動による脳内の</p>		<p>(4)脳情報通信技術</p> <p>(ア)高次脳型情報処理技術</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 高齢者のポテンシャルを引き出すためにワーキングメモリの脳内ダイナミクスの解明を進めレスティング状態の脳内ネットワークとワーキングメモリの脳内ネットワークが相補的に働いていることを明らかにするとともに、ブレインマシンインタフェース(BMI)の実現と高度化のための技術開発として、多点高密度神経電極とLSIとの統合システムやUWBによる体内外無線通信システムの試作に成功した。委託研究(大阪大学他)との連携により皮質脳波BMI用完全埋込脳波計の臨床レベルのモデルを完成させた。 ● 脳機能を応用した情報処理アーキテクチャとして、神経細胞のスパイクによる情報通信を模した通信プロトコルの設計に成功し、省電力による通信の実現に成功した。 ● また、個々人の運動能力を向上する技術開発の一環として、加齢に伴う運動機能劣化のバイオマーカを明らかにし、この機能劣化を改善できるトレーニング法を企業と共同で開発するとともに、独自開発の筋骨格モデル技術を企業にライセンス供与した。 ● また、個々人の感覚能力を推定する技術として外国語のリスニング能力を推定できる脳内表現を特定し、ニューロフィードバックトレーニングによる英語リスニング能力の向上に成功した。 ● 動画視聴中の脳情報の解読技術を意味認知全般に発展させるとともに、同技術を企業にライセンス供与し、ニューロマーケティング技術の商用サービス応用に貢献した。さらに機械学習・人工知能技術と脳活動モデルの融合利用を行い、ヒト脳活動から知覚内容を解読する技術の開発と高度化、より多様な課題中のヒト脳のモデル構築等を行った。 ● またヒトの知覚と行動間の特性解明を進め、それに基づくインタフェースの開発を開始した。 ● 視覚や聴覚などの多感覚情報の相互作用の解析を進め、脳における感覚情報処理や情動処理の特性を解明 	<p>(4)脳情報通信技術</p> <p>【科学的意義】</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 動画視聴中の脳情報の解読技術を意味認知全般に発展させた。 ● 7T-fMRIの0.6ミリ角までの高分解能活動計測や脳組織分離法による計測の高速化に成功した。 ● 脳情報解読技術、fMRIやBMIを利用した脳活動計測技術、脳の情報処理メカニズムの解明など脳情報に関する幅広い分野で高い研究成果を上げ続け、トップレベルの学術誌で論文を発表していること。 <p>等、科学的意義が大きい独創性、革新性に富んだ特に顕著な成果の創出や将来的な成果の創出が期待される実績が得られた。</p> <p>【社会的価値】</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 多様な脳計測データの総合的解析等に有用なデータ管理及び解析用プラットフォームを構築するとともに、脳情報解析技術を民間にライセンス供与した。 ● 独自に開発した筋骨
--	---	--	--	--

<p>る。 以上の取組に際しては、産学官の幅広いネットワーク形成や情報の収集・蓄積・交換、共同研究の実施、標準化活動、人材交流等を推進するための産学官融合研究拠点を積極的に拡充・運営するものとする。</p>	<p>状態変化を解析・推定する基盤技術の研究開発を行う。 (イ)脳計測技術 脳情報通信研究の推進に不可欠な脳計測技術の高度化のため、超高磁場MRI(Magnetic Resonance Imaging:核磁気共鳴画像法)、MEG(Magnetoencephalography:脳磁図)を用いた計測の時空間分解能の向上に取り組み、脳機能単位といわれるカラム構造の識別等を可能とする世界最高水準の脳機能計測技術及び新しい計測法の研究開発を行う。また、実生活で利用可能な軽量小型の計測装置等の研究開発を行う。 (ウ)脳情報統合分析技術 多様な計測システムから得られた脳計測データを統合・共有・分析し、単独機器による計測データだけでは実施できない統合的な脳情報データ解析を実現するために、計測データを蓄積してデータベースを構築するとともに、ビッグデータ解析法等を用いた統合的・多角的なデータ分析を行う情報処理技術の研究開発を進める。また、得られた成果を活かして分析作業の効率化に資する情報処理環境の構築を目指す。 (エ)脳情報通信連携拠点機能 社会展開を目指した研究開発成果の最大化のために、脳情報通信技術を中心とした産学官の幅広いネットワークの形成・拡充に取り組む。大学等の学術機関との連携を強化するために、大学からの学生等の受入れ、共同研究を推進する。また、標準化活動を含めた産業界との連携について</p>		<p>した。 ●社会的な活動能力を向上させる技術の研究開発として、扁桃体の脳活動パターンからうつ病傾向の予測に関する研究を進め、予測精度の高度化を実現するとともに、攻撃行動(いじめ)に関連する脳活動の解析を行い、個人が他者の攻撃行動に加担する程度はその人の社会的不安と相関し、扁桃体・側頭・頭頂連結部の脳結合強度がこの相関関係を説明することを発見した。 (イ)脳計測技術 ●MRIやMEGを用いた脳活動計測の時空間分解能の向上に取り組み、0.6ミリの空間分解能でMRIの機能画像取得に成功した。また、7T-MRIで撮像した高解像度(0.5-0.7mm)の構造画像から灰白質や白質の脳組織を分離するアルゴリズムを開発し、従来法比で同程度以上の分解能と10-100倍の高速化を実現した。また水拡散現象を利用した新たな脳計測法を応用し、立体視の能力により視覚情報伝達経路に違いが見られることを解明した。さらに細胞内酸素濃度を反映する計測法の開発を進めている。 ●実生活で利用可能な小型軽量の脳波計の開発を進め、無線によりマイクロ秒の精度で同期が可能な時刻同期脳波計の開発に成功し、複数人の脳活動の高精度同時計測を実現した。 (ウ)脳情報統合分析技術 ●多様な計測法による脳活動計測データの統合、共有、分析をより効率よく進め、さらにオープン化へとつなげるためのデータ活用プラットフォームを構築、運用するとともに、オープン化までのプロセスを明確にした。 ●脳の知覚認知に関する活動モデルを大規模なデータの分析から確立し、従来の情報処理技術の精度を向上させることに成功した。 (エ)脳情報通信連携拠点機能 ●社会展開を目指した研究開発成果の最大化のために、主に企業研究開発担当者を対象にし、東京では、応用</p>	<p>格モデル技術を開発させ、企業にライセンス供与したこと。 ●扁桃体の脳活動パターンからうつ病傾向を高精度に予測する手法を開発したこと。等、社会課題の解決や社会的価値の創出に貢献する特に顕著な成果や将来的な成果の創出が期待される実績が得られた。 【社会実装】 ●脳情報解読技術の企業へのライセンス供与により、ニューロマーケティング技術の商用サービス応用に貢献したこと。 ●脳波のニューロフィードバックトレーニングによる英語リスニング能力の向上を実現し、民間企業との共同研究で英語学習アプリを開発したこと、民間企業と連携して実生活で利用可能な小型軽量の脳波計の開発を進めたこと。等、社会実装につながる特に顕著な成果、将来的な成果の創出が期待される実績が得られた。</p>
---	--	--	---	--

	<p>も、共同研究や研究員の受入れ等による知的・人的交流を通して積極的に行う。さらに、協議会の開催等を通じて研究推進に必要な情報の収集・蓄積・交換や人材交流の活性化を図り、脳情報通信技術を中心とした産学官融合研究拠点としての機能を果たす。</p>		<p>脳科学コンソーシアムにおける CiNet ワークショップを、大阪では、CiNet の研究を紹介する金曜サイエンスサロンを毎年実施した。また、CiNet 研究者が企画する国際会議 (CiNet Conference) や CiNet の研究成果を広く一般に紹介するための CiNet シンポジウム (東京、大阪で毎年交互) を実施した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 大阪大学をはじめとした多くの大学・研究機関と共同研究を実施し、大学院学生も受け入れた。企業との共同研究も積極的に進め、多数の資金受入れ型共同研究を実現した。 	<p>以上のことから、中長期計画を着実に達成した上で、特に顕著な成果の創出が認められた他、将来的な成果の創出が期待される実績も得られたため、評定を「S」とした。</p>
--	---	--	---	--

なお、この自己評価に関しては、国立研究開発法人情報通信研究機構の研究活動等に関する外部評価委員会（総括評価委員会）において、以下のような意見をいただいている。

1. 開催日

令和2年5月15日(金) 15時～18時

2. 委員名簿

酒井 善則	委員長	東京工業大学	名誉教授
安浦 寛人	委員	九州大学	理事・副学長
國井 秀子	委員	芝浦工業大学	客員教授
安藤 真	委員	東京工業大学	名誉教授
渡辺 文夫	委員	Fifth Wave Initiative	代表
有川 節夫	委員	放送大学学園	理事長
松井 充	委員	三菱電機株式会社	開発本部 役員技監
太田 勲	委員	兵庫県立大学	学長
飯塚 久夫	委員	株式会社ぐるなび	常勤顧問

3. 委員長及び委員からの意見

- ・全体として、自己評価の評点をもう少し上げて良いのではないか。

例えば、大項目については、センシング基盤分野については、見込み・単年度共に A となっているが、いくつかの S クラスの成果が含まれており、本分野についても S クラスにかなり近いと思う。統合 ICT 基盤分野については、見込み・単年度共に B となっているが、A に近いと思う。フロンティア研究分野につ

いては、見込み・単年度共に A となっているが、かなり S クラスの研究が含まれている。オープンイノベーション分野については、見込み・単年度共に B だが、非常に良い部分もある。

- ・（データ活用基盤分野について）中項目の実空間情報分析技術の見込み・単年度共に A に相当するような成果をあげていると思う。本分野は全般的に、相当立派な仕事を行っていると思うので、自己評価 S は妥当と考える。

（全体を通して）

- ・社会実装という評価軸は科学的意義とは異なり評価されづらい。しかも、これからの世の中で重要になってくるので、このためしっかりと評価し、モチベーションの維持等を含めて、頑張って社会実装に取り組んでもらいたい。
- ・それぞれの技術分野で、様々な社会的課題に対して研究を行っており、技術分野だけでなく、社会課題別の視点でのアピールなど、多面的なまとめ方で情報発信を行うことが重要ではないか。
- ・コロナ騒動の中で、世界が一気に社会構造や産業構造、経済活動が大きく変化していく中で、新しい社会の在り方を NICT から描いていただきたい。
- ・全体の印象として、とても大きな成果を上げている。基礎研究の分野では、様々な賞を受賞しており、科学技術的に大変意義のある成果を達成している。

国立研究開発法人情報通信研究機構 第4期中長期目標期間終了時見込評価 項目別自己評価書(No.4 サイバーセキュリティ分野)

1. 当事務及び事業に関する基本情報			
中長期目標の当該項目	Ⅲ. -1. -(4)サイバーセキュリティ分野		
関連する政策・施策	—	当該事業実施に係る根拠 (個別法条文など)	国立研究開発法人情報通信研究機構法第 14 条第 1 項第一号
当該項目の重要度、難易度	重要度:高	関連する研究開発評価、政策評価・行政事業レビュー	行政事業レビューシート ****

2. 主要な経年データ												
主な参考指標情報							主要なインプット情報(財務情報及び人員に関する情報)※2					
	基準値等 (前中長期目標期間最終年度値)	28 年度	29 年度	30 年度	元年度	2 年度		28 年度	29 年度	30 年度	元年度	2 年度
査読付き論文数	—	45	49	48	65		予算額(百万円)	1,526	2,617	2,877	2,360	
論文の合計被引用数 ※1	—	50	84	133	177		決算額(百万円)	1,465	1,601	2,746	1,785	
実施許諾件数	12	9	9	10	10		経常費用(百万円)	1,660	1,609	1,977	2,073	
報道発表件数	5	2	4	5	5		経常利益(百万円)	△13	1	△7	△1	
標準化会議等への寄 与文書数	12	19	22	17	19		行政サービス実施 コスト(百万円)	3,926	3,468	1,986	2,201	
							従事人員数(人)	20	21	22	23	

※1 合計被引用数は、当該年度の前3年度間に発表した論文についての、クラリベイト・アナリティクス InCites Benchmarking に基づく被引用総数(当該年度の3月調査)。

※2 予算額、決算額は支出額を記載。人件費については共通経費分を除き各業務に配賦した後の金額を記載。従事人員数は、常勤職員の本務従事者数。

3. 中長期目標、中長期計画、主な評価軸、業務実績等、中長期目標期間評価に係る自己評価

中長期目標	中長期計画	主な評価軸 (評価の視点)、指標等	法人の主な業務実績等	自己評価	
<p>1. ICT分野の基礎的・基盤的な研究開発等</p> <p>(4)サイバーセキュリティ分野</p> <p>世界最先端のICTにより新たな価値創造や社会システムの変革をもたらすためには、「社会(生命・財産・情報)を守る」能力として、急増するサイバー攻撃から社会システム等を守るサイバーセキュリティ分野の技術の高度化が不可欠となっていることから、【重要度:高】として、以下の研究開発等に取り組むとともに研究開発成果の普及や社会実装を目指すもの</p>	<p>1-4. サイバーセキュリティ分野</p> <p>サイバー攻撃の急増と被害の深刻化によりサイバーセキュリティ技術の高度化が不可欠となっていることから、サイバーセキュリティ技術、セキュリティ検証プラットフォーム構築活用技術及び暗号技術の各研究開発に取り組む。これにより、誰もが情報通信ネットワークをセキュリティ技術の存在を意識せずに安心・安全に利用できる社会の実現を目指す。さらに、サイバーセキュリティ分野での機構に対する社会的要請に応えるため、研究開発体制の強化に向けて必要な措置を講ずる。</p>	<p><評価軸></p> <ul style="list-style-type: none"> ● 研究開発等の取組・成果の科学的意義(独創性、革新性、先導性、発展性等)が十分に大きなものであるか。 ● 研究開発等の取組・成果が社会課題・政策課題の解決につながるものであり、または、それらが社会的価値の創出に十分に貢献するものであるか。 ● 研究開発等の成果を社会実装につなげる取組(技術シーズを実用化・事業化に導く等)が十分であるか。 <p><指標></p>		自己評価	S
				<p>本分野としては、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・リフレクション型 DDoS 攻撃観測技術等の確立をはじめ、商用 ISP ネットワーク環境下における世界初の IoT マルウェア感染機器のユーザー通知・マルウェア駆除に関する実証研究。 ・IoT マルウェアの機械学習による自動分類の高精度化の研究等機械学習との融合研究強化。 ・データ開示せずに協調深層学習可能なプライバシー保護深層学習方式の開発・実証。 <p>等、科学的意義のみならず社会・政策課題の解決にも直結する成果を創出した。</p> <p>さらに、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・STARDUST で攻撃者を追跡することによって得られた情報をサイバー攻撃解析分科会で情報共有し、社会全体のサイバーセキュリティ強化に向けた取組に貢献していること。 ・また、STARDUST のサイバー攻撃に関する分析結果を逸早く NIRVANA 改の検知ロジックに反映させる連携機能のプロトタイプ開発、脆弱性管理の効 	

<p>とする。 なお、急増するサイバー攻撃への対策は国を挙げた喫緊の課題となっており、サイバーセキュリティ分野での機構に対する社会的要請が高まりつつあることから、研究開発体制の強化に向けた措置を講ずるとともに、研究開発成果を実用化や技術移転につなげるための取組（技術シーズを実用化・事業化に導く等）を行うものとする。</p>		<ul style="list-style-type: none"> ● 具体的な研究開発成果（評価指標） ● 査読付き論文数（モニタリング指標） ● 論文の合計被引用数（モニタリング指標） ● 研究開発成果の移転及び利用の状況（評価指標） ● 研究開発成果の移転及び利用に向けた活動件数（実施許諾件数等）（モニタリング指標） ● 報道発表や展示会出展等を受けた各種メディア媒体の反響状況（評価指標） ● 報道発表や展示会出展等の取組件数（モニタリング指標） ● 共同研究や産学官連携 		<p>率化に資する「NIRVANA 改式」の開発と実証。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「DAEDALUS」による継続的な無償アラート提供。 ・サイバー演習へ可視化エンジン提供。 ・CRYPTREC で「量子コンピュータ時代に向けた暗号のあり方検討会」を立ち上げ報告書発行。 ・小型衛星・小型ロケット用暗号方式の打ち上げ実証。 <p>等、社会・政策課題の解決や社会的価値を創出する実績を達成した。</p> <p>加えて、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ユーザー参加型 Web 媒介型サイバー攻撃対策プロジェクト「WarpDrive」を開始し、参加ユーザー数はスマートフォン向けを含め1万名以上達成。 ・「NIRVANA 改」の技術移転を継続的に進め「NIRVANA 改式」を機構内 CSIRT へ導入。 ・サイバー演習環境支援や可視化エンジンの提供。 ・金融機関の実データを用いた不正取引検知の実証実験を開始。 <p>等、社会実装につながる実績を達成した。</p> <p>以上のことから、中長期計画を着実に達成した上で、特に顕著な成果の創出が認められた他、将来的な成果の創出が期待され</p>
---	--	--	--	--

<p>○サイバーセキュリティ技術 政府及び重要インフラ等への巧妙かつ複雑化したサイバー攻撃に対応するための攻撃観測技術や分析支援技術等を研究開発するものとする。また、サイバー攻撃のパターンは多様化していることから、攻撃に関する情報を集約・分析することで対策を自動で施す技術を確認するものとする。さらに、研究開発成果を機構自らのサイバー攻撃分析能力の強化のために適用して技術検証を行うことにより、研究開発成果の速やかな普及</p>	<p>(1)サイバーセキュリティ技術 巧妙かつ複雑化したサイバー攻撃や今後本格普及するIoT等への未知の脅威に対応するためのアドバンスト・サイバーセキュリティ技術の研究開発を行う。また、無差別型攻撃や標的型攻撃等多様化したサイバー攻撃の情報を大量に集約・分析しサイバー攻撃対策の自動化を目指すサイバーセキュリティ・ユニバーサル・リポジトリ技術の研究開発を行う。さらに、研究開発成果を機構自らのサイバー攻撃分析能力の強化のために適用することにより、研究開発における技術検証を行い研究開発成果の速やかな普及を目指す。 (ア)アドバンスト・サイバーセキュリティ技術 政府機関、地方公共団体、学術機関、企業、重要インフラ等におけるサイバー攻撃対処能力の向上を目指し、より能動的・網羅的なサイバー攻撃観測技術、機械学習等を応用した通信及びマルウェア等の分析支援技術の高度化、複数情報源を横断解析するマルチモーダル分析技術、可視化駆動によるセキュリティ・オペレーション技術、IoT機器向けセキュリティ技術等の研究開発を行う。 (イ)サイバーセキュリティ・ユニバーサル・リポジトリ技術</p>	<p>の状況(評価指標) ● データベース等の研究開発成果の公表状況(評価指標) ● (個別の研究開発課題における)標準や国内制度の成立寄与状況(評価指標) ● (個別の研究開発課題における)標準化や国内制度の寄与件数(モニタリング指標) 等</p>	<p><主要な業務実績> (ア) アドバンスト・サイバーセキュリティ技術 ・ インターネットの根幹をなすサーバ群 (DNS、NTP 等) を踏み台として攻撃通信を増幅させるリフレクション型サービス不能攻撃 DRDoS (Distributed Reflection DoS) を迅速に検出するハニーポット「AmpPot」を開発し難関国際会議 RAID2016 (採択率 25%) にて発表、さらに AmpPot によって DRDoS 攻撃早期アラート情報を発報するシステムを提案、有効性を実証し情報処理学会論文誌にて誌上発表し平成 28 年度情報処理学会論文賞 情報処理学会特選論文を受賞した (平成 28 年度)。 ・ マルウェアが囚の動的解析装置 (Sandbox) であることを検知する解析回避性能評価技術を世界で初めて開発し、実際の製品を含むマルウェア解析装置の性能評価を行い、結果をサイバーセキュリティ難関国際会議 RAID2016 (採択率 25%) にて発表した(平成 28 年度)。 ・ 能動的サイバー攻撃観測分析技術としてアクティブスキャン応答データと NICTER 観測とを組み合わせ分析 (マルチモーダル分析) して攻撃元の IoT 機器を機械学習により自動判別する技術のプロトタイプ開発を行い、有効性の実証に初めて成功、情報処理学会論文賞を受賞し、さらに招待論文として掲載された (平成 29 年度)。 ・ 国内外の大学及び欧州の ISP と連携し、商用 ISP ネットワーク環境下における IoT マルウェア感染機器のユーザー通知及びマルウェア駆除に関する実践研究を行い、感染機器のユーザーを検疫ネットワークに誘導する方法がマルウェア駆除に最も効果的であることを明らかにし超難関国際会議 NDSS 2019 (採択率 17%) にて Distinguished Paper Award を受賞した (平成 30 年度)。 ・ サイバー攻撃統合分析プラットフォーム NIRVANA 改は機能強化を重ね機構内 CSIRT でも継続的に運用されており、世界最先端の相互接続実証イベント Interop において毎年セキュリティ・オペレーションを行い、Best of</p>	<p>る実績も得られたため、評定を「S」とした。 個別の評定と根拠は、以下の各項目に記載のとおりである。 (1)サイバーセキュリティ技術 <科学的意義> ・ アドバンスト・サイバーセキュリティ技術として、リフレクション型 DDOS 攻撃観測技術 (RAID2016 に 2 件採択)、IoT 機器に対する能動的アクセス・分析手法を確立するとともに、IoT マルウェア感染機器のユーザー通知実証実験を実施 (NDSS2019 に 採 択 、 Distinguished Paper Award を受賞)した。 ・ 併せて、機械学習とサイバーセキュリティの融合研究について、セキュリティアラートを Isolation Forest で削減や、Android マルウェアを多層パーセプトロンで検出等の成果を上げた。 ・ サイバーセキュリティ・ユニバーサル・リポジトリ技術として、サイバーセキュリティ関連の各種情報を集約・分析するセキュリティ情報融合基盤の CURE を開発・試験運用を行い、IoT マルウェアの機械学習による分類を実施 (AsiaJCIS2018 に採択、Best Paper Award 受賞)。加えて、可視化エンジンを実装し、Interop で動態展示を行った。</p>
---	--	---	--	---

<p>を目指すものとする。</p>	<p>サイバーセキュリティ研究及びセキュリティオペレーションの遂行に不可欠な各種通信、マルウェア、脆弱性情報、イベント情報、インシデント情報等のサイバーセキュリティ関連情報を大規模集約し、安全かつ利便性の高いリモート情報共有を可能とするサイバーセキュリティ・ユニバーサル・リポジトリ「CURE(Cybersecurity Universal Repository)」を構築するとともに、CUREに基づく自動対策技術確立する。また、CUREを用いたセミナー・オープン研究基盤を構築し、セキュリティ人材育成に貢献する。</p>		<p>ShowNet Award 受賞（平成 28 年度）、脆弱性管理プラットフォーム「NIRVANA 改式」を開発（平成 30 年度）、技術移転も進め政府省庁含めた導入実績が広がっており、NIRVANA 改の研究開発と社会展開の業績により第 63 回前島密賞を受賞、東京オリンピック・パラリンピックに向けた研究協力も前倒して開始した（平成 29 年度）。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ NICTER の観測網に基づく対サイバー攻撃アラートシステム「DAEDALUS」(Direct Alert Environment for Darknet And Livenet Unified Security: ダイダロス)により、機構から地方自治体への無償アラート提供を継続し、国立研究開発法人協議会（国研協）からの協力要請に基づき、利用申し入れのあった 3 研究機関を皮切りに国研協研究機関への無償アラート提供を開始した（平成 29 年度）。 ・ 急増する IoT マルウェアの機械学習による自動分類のため、逆アセンブルしてコマンドの類似度を特徴量として抽出する新方式の有効性を実証し (Asia JCIS 2018 Best Paper Award)、当該方式による IoT マルウェアの自動分類・識別の評価結果が複数の CPU アーキテクチャにおいて 99%以上の精度、適合率、再現率を達成した (ICMU2018)。増大し続けるスマホアプリのセキュリティ対策を強化すべく、多層パーセプトロン (MLP : Multilayer perceptron) を用いて不正なスマホアプリを機械学習により正解率 99.8%のかつ高効率に自動検出可能な方式を開発し国際会議 The ACM Symposium on Applied Computing (SAC 2019、採択率 24.2%)に発表した (令和元年度)。 ・ セキュリティオペレータにとって負担となる大量のセキュリティアラートの優先順位付けを支援するため、ラベル無し異常検出アルゴリズム (isolation forest) に基づいて実時間でアラートを絞り込む手法を開発し、機構内 CSIRT で収集された特定のセキュリティ機器からの 10 ヶ月間 (約 50 万) のアラートの内、優先度の低い 87.4%を誤りなく自動除去する実証に成功した。成果を国際会議 The 26th International Conference on Neural Information Processing (ICONIP2019)において発表した (令和元年度)。 	<p>等、科学的意義が大きい獨創性、先導性に富んだ顕著な成果の創出や将来的な成果の創出が期待される実績が得られた。</p> <p><社会的価値></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ NIRVANA の機能強化や IoT マルウェア対策技術の開発などを進めていること。 ・ アドバンスド・サイバーセキュリティ技術として、NIRVANA 改のアラート管理・可視化機能強化 (Interop ShowNet Award 受賞) や、国産 OSS 脆弱性スキャナと連動した NIRVANA 改式を開発し、組織内の攻撃監視だけでなく脆弱性の管理のためのプラットフォーム化を進めるとともに、IoT マルウェア感染機器のユーザー通知実験 (NDSS2019 に採択、Distinguished Paper Awardを受賞)等を実施したこと。 ・ 機械学習とサイバーセキュリティの融合研究を強化し、セキュリティアラートを Isolation Forest で削減や、Android マルウェアを多層パーセプトロンで検出等の成果を上げたこと。 ・ サイバーセキュリティ・ユニバーサル・リポジトリ技術として、NICTER Web 公開、CURE データ公開、IoT マルウェア感染機器のユーザー通知効果実証、WarpDrive のユーザー参加型実証などにより、開発技術の有効性を広く社会に示したこと。
-------------------	---	--	---	---

			<ul style="list-style-type: none"> ・マルウェア活動の早期検知のため、NICTER 観測データにおいてボットネットから届くスキャンパケットの協調関係を検知するオンライン処理可能機械学習アルゴリズムを開発しマルウェア活動の実時間かつ自動検知実証に成功、成果を国際会議 IEEE TrustCom2019 に発表。さらにオープンイノベーションによる本検知技術の検証と社会展開のため、当該 NICTER 観測データの解析結果を Web 上にて公開（令和元年度）。 ・音声アシスタントシステムに対する未知の攻撃及び対処を明らかにするため、音声コマンドを超音波帯の搬送波と側帯波に分離して標的となる音声アシスタントシステム近傍で交差させることにより、周囲の人間には気づかれない形で伝送する攻撃（Audio Hotspot Attack）を早稲田大学と連携して初めて実証に成功、情報処理学会主催のコンピュータセキュリティシンポジウム 2018（CSS2018）にて最優秀論文賞（184 件から選定）を受賞した（平成 30 年度）。さらに攻撃成功率の距離及び環境雑音依存性を明らかにするとともに対策技術も提案し成果をまとめ学術誌 IEEE Transaction on emerging topics in computing に発表した（令和元年度）。 ・委託研究「Web 媒介型攻撃対策技術の実用化に向けた研究開発」（略称、WarpDrive: Web-based Attack Response with Practical and Deployable Research Initiative）において、悪性サイトをブロックするプラグインエージェントによるユーザー参加型の大規模実証実験を開始し（平成 30 年度）、1 日平均約 1200 万 Web アクセスを観測可能にして参加ユーザー数は 9,500 名を超え（令和元年度末時点）、1 日あたり 390 件以上もの未知の悪性サイトを発見し続けている。さらにスマートフォン（Android 端末）向けの実証実験も開始し参加ユーザー数は開始直後の令和元年度末時点で約 1400 名となった。 ・委託研究「サイバー攻撃ハイブリッド分析実現に向けたセキュリティ情報自動分析基盤技術の研究開発」において、IoT マルウェアの亜種間の機能差分を自動的に抽出するため、IoT マルウェアを逆アセンブルした結果から実行順序を考慮した上で関数呼び出し命令を抽出し 	<ul style="list-style-type: none"> ・NICT が収集したサイバーセキュリティ関連の情報や開発した技術を積極的に開示して、国内外の研究者や実務者と連携し、我が国におけるサイバーセキュリティ研究の中核的な役割を果たしていること。 ・SECCON や MWS に必要なツールやデータセットを提供し、セキュリティ人材の育成に貢献したこと。 ・NICTER 技術を中心として、深刻化していくサイバー空間内のセンシングおよび分析システムのベースとして有効に働いていること。 ・国立研究開発法人としての NICT であるから取り扱うことのできる質、量ともにレベルの高いデータを基礎にして、社会的に価値の高い成果を創出していること。 ・ユーザー参画型のプラットフォームによる検証は、研究開発の質を高めるとともに社会的認知度を広範囲に同時に上げていく効果もあり、推進スタイルとして優れていること。 <p>等、社会課題の解決や社会的価値の創出に貢献する特に顕著な成果の創出や将来的な成果の創出が期待される実績が得られた。</p> <p><社会実装></p> <ul style="list-style-type: none"> ・サイバーセキュリティ研究室の
--	--	--	---	--

有向グラフ化する手法を九州大学と連携して提案した。21,311 件の検体を 549 種類のユニークな形状のグラフで表現し検体間における関数呼び出しシーケンスの追加や変更・削除を可視化することに成功した。成果をまとめ暗号と情報セキュリティシンポジウム SCIS2020 に発表した。

(イ) サイバーセキュリティ・ユニバーサル・リポジトリ技術

・セキュリティ・インテリジェンス情報を集約した CURE の全データベースの Web API 整備を完了し、機構内 CSIRT での試験運用を開始（平成 29 年度）、セキュリティ・オペレーション効率化のため、様々な情報源から提供される脅威情報を自動収集し横断的な検索を行うことを可能にする Web アプリケーションとして開発したサイバー脅威情報集約システム EXIST (EXternal Information aggregation System against cyber Threat) を、国内外セキュリティ・オペレーション支援のためオープンソースとして公開（平成 30 年度）、さらに EXIST において収集されるサイバー脅威情報を、インシデント分析センター NICTER による無差別型攻撃情報、サイバー攻撃誘引基盤 STARDUST による標的型攻撃情報、サイバー攻撃統合分析プラットフォーム NIRVANA 改による組織内のアラートやエンドポイント情報とともに CURE に集約して CURE の高度化と自動対策技術のプロトタイプ開発を進め、機構内 CSIRT (研究室 解析チーム) における CURE の集約データ間の突合分析を含む試験運用を継続、「Interop Tokyo 2019」にて展示会全体のセキュリティ・オペレーションの動態展示を行った（令和元年度）。

・ IETF96 会合で、研究室メンバが Co-Chair（共同議長）を務める Managed Incident Lightweight Exchange Working Group (MILE WG) にて、異なる組織の CSIRT (Computer Security Incident Response Team) 間でインシデント情報を効率的に自動交換するためのデータ

解析能力と情報発信能力が強化された点及び、セキュリティコミュニティへ貢献したこと。

・ DAEDALUS、NIRVANA 改などの成果が、公共性・社会的重要性の高い分野を含め、実際のサイバーセキュリティ対策において多く用いられていること。

・ アドバンスド・サイバーセキュリティ技術として、NIRVANA 改の機能強化を図り、東京オリンピック・パラリンピックに向けた研究協力を前倒しで開始するとともに、Web 媒介型サイバー攻撃対策プロジェクトである WarpDrive においてスマートフォン向けのユーザー参加型実証実験も開始したこと。

・ 地方自治体への DAEDALUS 導入、NIRVANA 改の東京オリンピック・パラリンピックに向けた研究協力を前倒しで開始、WarpDrive の参加ユーザー数はスマートフォン向けを含め 1 万名以上達成など、実用レベルで社会貢献したこと。

・ 研究開発から実装までを一貫して実践的に進めており、ユーザーと技術のインタフェースの充実等も含め、社会実装のポイントを押さえた推進がなされており、結果が伸びていること。

・ 変化するサイバーセキュリティ上の脅威にタイムリーに対応する課題設定がなされており、

モデルである IODEF (Incident Object Description Exchange Format) の利用方法に関するガイドラインを RFC (Request For Comment) 8274 として発行した(平成 29 年度)。

- ・CURE と機構が保有する NICTER の観測情報を、遠隔から安全に研究利用できる仮想環境 NONSTOP (NICTER Open Network Security Test-out Platform) により集約データの外部利用延べユーザー数は 100 (企業ユーザーが過半) を超え、機構のセキュリティ人材育成施策 SecHack365、情報処理学会マルウェア対策研究人材育成ワークショップ(MWS)への提供を行い、また SECCON 2018 や海外大学でのサイバー演習へ可視化エンジンを提供する等、国内外のセキュリティ人材育成の今中期期間に亘り継続的な支援を行った。

- ・NICTER Web での NICTER 観測情報の一部一般公開 (NICTERWeb) に加えて、年間観測結果をまとめた「NICTER レポート」を平成 28 年度版から、また最新のマルウェア分析結果を適時的確に公開する NICTER Blog を開始 (平成 29 年度)、情報発信を強化した。

- ・NICTER 観測データに基づき、特定ベンダの IoT 機器(Wi-Fi ルーター)の残存する脆弱性について (平成 29 年度)、また Android Online ゲーム等を PC 上でエミュレートするツールの脆弱性により意図せずに仮想通貨採掘アプリがインストールされてしまうことを明らかにし(平成 30 年度)、外部サイバーセキュリティ関連組織と連携して脆弱性情報の調査・共有を行い対策とともにベンダの脆弱性対処の実施を経て、脆弱性被害の拡大防止に貢献すべく協調的な脆弱性情報公開 (coordinated disclosure) を実施し、NICTER Blog にも公開した。

- ・毎年初頭に NICTER の観測・分析結果が多数報道されており、機構のサイバーセキュリティに関する報道は、平成 28 年度 644 件 (新聞誌掲載 88 件含む)、平成 29 年度 1,133 件 (新聞誌掲載 240 件含む)、平成 30 年度は 1,168 件 (新聞誌掲載 173 件含む)、令和元年度は 655 件 (新聞誌掲載 122 件含む) であった。

また、関連業界等との緊密な連携のもとで推進することで時宜にかなったテーマの設定と結果の検証等が行われており、社会的な受け入れを促進し実装を進めるプロセスとして有効に働いていること。

等、社会実装につながる特に顕著な成果の創出や将来的な成果の創出が期待される実績が得られた。

以上のことから、中長期計画を着実に達成した上で、特に顕著な成果の創出が認められた他、将来的な成果の創出が期待される実績も得られたため、評定を「S」とした。

<p>○セキュリティ検証プラットフォーム構築活用技術</p> <p>安全な環境下でのサイバー攻撃の再現や新たに開発した防御技術の検証のために不可欠なセキュリティ検証プラットフォーム構築に係る技術を研究開発するとともに、模擬環境を活用したサイバー攻撃及び防御技術の検証を行うものとする。</p>	<p>(2)セキュリティ検証プラットフォーム構築活用技術</p> <p>サイバーセキュリティ技術の研究開発を効率的に行うために、サイバー攻撃の安全な環境下での再現や新たな防御技術の検証等を実施可能なセキュリティに特化した検証プラットフォームの構築・活用を目指す模擬環境・模擬情報活用技術及びセキュリティ・テストベッド技術の研究開発を行う。</p> <p>なお、平成 29 年度補正予算(第 1号)により追加的に措置された交付金については、生産性革命の実現を図るために措置されたことを認識し、サイバー攻撃活動の早期収集や未知の標的型攻撃等を迅速に検知する技術等の実証を行う研究開発環境の整備のために活用する。</p> <p>(ア)模擬環境・模擬情報活用技術</p> <p>政府機関、地方公共団体、学術機関、企業、重要インフラ等におけるサイバー攻撃対処能力の向上を目指し、模擬環境及び模擬情報を用いたアトリビューション(原因特定)技術等の研究開発を行う。</p> <p>(イ)セキュリティ・テストベッド技術</p> <p>サイバーセキュリティ技術の検証及びサイバー演習等を効率的に実施するためのセキュリティ・テストベッドを構築する。また、物理ノードや仮想ノードを含む模擬環境構築運用基盤技術、模擬情報生成技術、模擬環境上のサイバー攻撃に関連したトラヒック等を観測及び管理するためのセキュリティ・テスト</p>		<p>(2) セキュリティ検証プラットフォーム構築活用技術</p> <p>(ア) 模擬環境・模擬情報活用技術</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 標的型攻撃の攻撃者を企業サイズの模擬環境に誘い込み、長期に亘り攻撃手段を観測・分析可能なサイバー攻撃誘引基盤 (STARDUST) に関して、攻撃者を誘引する企業サイズの模擬環境を 60 組織並列で生成する性能を実現するとともに、StarDust を集中制御する StarDust Web を開発した (平成 28 年度)。非公開で研究開発を進めてきたが特許出願を行うとともに報道発表を行い、Interop Tokyo 2017 において攻撃者誘引の動態展示に成功した (平成 29 年度)。参画する外部連携組織数は延べ 12 組織となり (令和元年度)、STARDUST の外部利活用を継続的に拡大した。さらにサイバー攻撃解析分科会を定期開催し機構内外の専門家と参画研究機関との定期的な情報共有を行った。 ・ ITU 本部にて開催された国際標準化会合 ITU-T SG17 (セキュリティ) のワークショップ “ITU Workshop on Advanced Cybersecurity Attacks and Ransomware” にて、STARDUST の概要と観測事例について招待講演を行った (平成 30 年度)。 ・ 攻撃者長期誘引に成功し攻撃者の振舞分析の結果得られた新たな知見と攻撃誘引環境の高度化などの成果を CSS2017 および SCIS2018 において多数発表し、情報処理学会ワークショップではベストプラクティカル賞を受賞した (平成 29 年度)。 ・ 模擬環境の並列化を進め、延べ約 250 検体の誘引実験を行った。また 11 並行ネットワークにおいて 100 検体以上のアトリビューション実証実験を実施した (令和元年度末)。 ・ 平成 29 年度補正予算を受けて、引き続きこれらを用いてサイバー攻撃活動の早期収集や未知の標的型攻撃等を迅速に検知する技術等の実証を推進した。 <p>(イ) セキュリティ・テストベッド技術</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 攻撃者に模擬環境であると気づかれずに挙動観測を継続するためのステルス性の高いトラヒック解析基盤 (SF-TAP) 及び標的想定組織独特の環境を短時間に構 	<p>(2) セキュリティ検証プラットフォーム構築活用技術</p> <p><科学的意義></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ サイバー攻撃誘引基盤 STARDUST を構築し、攻撃者を誘引する企業サイズの模擬環境を 60 組織並列で自動生成する性能を実現するとともに、改良を続け、セキュリティ・テストベッド技術の高度化を図るため、STARDUST と NIRVANA 改の連携機能を開発し、エンドポイントでの情報収集・分析技術、ホワイトリスト生成技術開発の機能拡張を行っていること。(MWS2017 でベストプラクティカル研究賞受賞。また、CSS2018、AsiaJCIS2018、SCIS2019 や CyberHunt2019 にて研究成果を発表) ・ STARDUST によって先導的成果を得られる貴重なデータを収集し続けており、実際に攻撃者を追跡してサイバー攻撃に関する情報収集を実現していること。 <p>等、科学的意義が大きい獨創性、先導性に富んだ顕著な成果の創出や将来的な成果の創出が期待される実績が得られた。</p> <p><社会的価値></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ STARDUST を用いた攻撃者誘引実験を開始し、また、外部利活用促進 (12 機関) しているこ
--	--	--	--	---

	<p>ベッド観測管理技術、サイバー演習支援技術等の研究開発を行う。</p>		<p>築する模擬環境構築システム (Alfons) 技術等の開発を行い国際会議 Tridentcom2016 にて発表した (平成 28 年度)。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ STARDUST の分析結果を逸早く NIRVANA 改の検知ロジックに反映させる連携機能として、STARDUST の環境構成をモデル化し観測事例ごとの偏りを排除し本来のデータの意味を損なわずに正規化する技術を開発、さらに、ホスト (エンドポイント) で生成されるプロセス生成パターンを収集し低負荷で異常プロセスを検知する方式を開発し、機構内の 498 ホストで異常プロセス (マルウェア) 検知実証に成功 (国際会議 AsiaJGIS2018 で発表) した (平成 30 年度)。STARDUST と NIRVANA 改との連携機能は令和 2 年度末までにプロトタイプ実装見込。 ・ 今中期期間中において、STARDUST の要素技術である模擬環境構築システム (Alfons) を、サイバー防衛演習環境として機構内のサイバー人材育成事業 (CYDER)、機構外の実践的セキュリティ人材育成コース (enPiT-Security : SecCap)、堅牢化技術競技 (Hardening) や SECCON 等へ提供し、機構内外のセキュリティ人材育成の支援を行った。 ・ 平成 29 年度補正予算を受けて、引き続きこれらを用いてサイバー攻撃活動の早期収集や未知の標的型攻撃等を迅速に検知する技術等の実証を推進した。 	<p>と。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ STARDUST の要素技術である模擬環境構築システム (Alfons)を開発 (TRIDENTCOM 2016 に採択)し、さらにサイバー人材育成事業 (CYDER)、実践的セキュリティ人材育成コース (SecCap)におけるセキュリティ防衛演習環境として提供され、幅広くサイバーセキュリティ人材育成にも貢献し、なおかつ、データ駆動型の好循環モデルを構築していること。 ・ STARDUST で攻撃者を追跡することによって収集したサイバー攻撃に関する情報をサイバー攻撃解析分科会で情報共有し、社会全体のサイバーセキュリティ強化に向けた取組に貢献していること。 ・ サイバーセキュリティ対応の方法の多様化や、人材育成のためのプラットフォームなど、社会的な視点でセキュリティ対応のレベルアップを図っていること。 <p>等、社会課題の解決や社会的価値の創出に貢献する特に顕著な成果の創出や将来的な成果の創出が期待される実績が得られた。</p> <p><社会実装></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ NICT 内外でのサイバー演習支
--	---------------------------------------	--	---	---

				<p>援を継続的に行っており（CYDER、Hardening）、価値の社会還元が進んでいること。</p> <ul style="list-style-type: none">・STARDUST で攻撃者を追跡することによって収集したサイバー攻撃に関する情報をサイバー攻撃解析分科会で情報共有し、社会全体のサイバーセキュリティ強化に向けた取組に貢献していること。・サイバー攻撃対処能力の向上が社会実装の出口であり、STARDUST 外部利用拡大等のテストベッドの提供、サイバー演習の支援等も通じて、この業界の技術力、人材の底上げに貢献していること。 <p>等、社会実装につながる特に顕著な成果の創出や将来的な成果の創出が期待される実績が得られた。</p> <p>以上のことから、中長期計画を着実に達成した上で、顕著な成果の創出が認められた他、将来的な成果の創出が期待される実績も得られたため、評定を「A」とした。</p>
--	--	--	--	--

<p>○暗号技術 安心・安全なICTシステムの構築を目指しつつ、IoTの展開に伴って生じる新たな社会ニーズに対応するため、暗号・認証技術や新たな機能を備えた暗号技術の研究開発を進めるとともに、新たな暗号技術の安全性評価、標準化を推進し、国民生活を支える様々なシステムへの普及を図るものとする。また、パーソナルデータの利活用を実現するためのプライバシー保護技術の研究開発や適切なプライバシー対策を技術支援する活動を推進するものとする。</p>	<p>(3)暗号技術 IoTの展開に伴って生じる新たな社会ニーズに対応するため、新たな機能を備えた機能性暗号技術や軽量暗号・認証技術の研究開発に取り組む。また、暗号技術の安全性評価を実施し、新たな暗号技術の普及・標準化に貢献するとともに、安心・安全なICTシステムの維持・構築に貢献する。さらに、パーソナルデータの利活用に対するためのプライバシー保護技術の研究開発を行い、適切なプライバシー対策を技術面から支援する。</p> <p>(ア)機能性暗号技術 従来の暗号技術が有する暗号化や認証の機能に加え、今後新たに生じる社会ニーズに対応する新たな機能を備えた暗号技術である機能性暗号技術の研究開発を行う。具体的には、暗号化したまま検索が可能な暗号方式、匿名性をコントロール可能な認証方式、効率的でセキュアな鍵の無効化や更新方式等の研究開発を行う。</p> <p>また、安心・安全で信頼性の高いIoT社会に貢献するため、コスト、リソース、消費電力等に制約のあるIoTデバイスにも実装可能な軽量暗号・認証技術に関する研究開発を行い、IoTシステムのセキュリティ・プライバシー保護に寄与する。</p> <p>(イ)暗号技術の安全性評価 日々進化する暗号技術に対する脅威に対抗するため、電子政府システムをはじめ国民生活を支える様々なシステムで利用されている</p>		<p>(3) 暗号技術 (ア) 機能性暗号技術</p> <ul style="list-style-type: none"> ・暗号化したデータの中身を見ることなく、データのプライバシーを保護しつつ解析対象外データの混入を防ぐ解析手法を開発。コンピュータセキュリティ分野の国内最大会議 CSS2016 の最優秀論文賞受賞。国際会議 AsiaCCS2017 採録。2017 年度山下記念研究賞受賞。さらに医療データに対する実証実験を行い、JST・筑波大学と共同プレスリリース(平成 30 年 7 月)。デモシステムを実装。 ・個人情報を含むデータ提供者の匿名性を担保しつつ、異常データ提供者のみを特定可能とするプライバシー保護異常検知フレームワークを提案、2017 年 PWS 論文賞受賞。(理研との共同研究) ・クラウドサービスなどでデータ提供側のプライバシーを保護しつつデータ利活用を可能とする暗号化方式を提案し、J. Concurrency and Computation(2018) に採録。 ・ネットワーク上でのデータの送受信に対して、属性暗号を用いてデータの秘匿性を確保しながら、データの閲覧権限のある受信元へのデータの伝搬を実現できる方法を提案し、IEEE Communications Magazine(2018) に採録。 ・選択暗号文攻撃に耐性がある準同型暗号方式を産総研、NHK と提案し、論文誌 Designs, Codes and Cryptography(2018)に採録。 ・検索可能暗号における公開鍵暗号との併用時安全性向上技術を東海大学と提案し国際会議 ISPEC 2018 に採録、そのジャーナル版が論文誌 Journal of Medical Systems(2019)に採録。 ・転職支援のパーソルキャリア株式会社 ミイダスカンパニーのデータ活用事業に対し、暗号化したままデータを解析する手法の技術支援を実施した(平成 31 年 2 月 1 日お知らせ)。 ・データ利活用の促進に向けて、KPMG Ignition Tokyo, EAGLYS とともに準同型暗号を用いた秘密計算ハッカソンを開催(令和元年度)。 	<p>(3) 暗号技術 <科学的意義></p> <ul style="list-style-type: none"> ・機能性暗号技術の成果及び、暗号技術の安全性評価に関する成果を創出したこと。 ・NewSpace 時代の小型衛星・小型ロケット用機能性暗号を開発して提供することで、新たな企業の宇宙ビジネスへの参入を大いに促進していること。 ・秘匿協調学習 DeepProtect の研究開発などで著名な論文誌に採択されるなどの成果を上げた。 ・復号せずに解析可能な暗号技術の開発、群構造維持暗号技術の提案等の研究成果を上げ、トップカンファレンスにおける論文採録、論文賞の受賞、標準化への貢献等、科学的意義の高い研究成果を創出し続けていること。 ・ロケットの安全という物理空間内の安心安全、秘匿データの安全な取り扱いといったサイバー空間内の社会の安心安全に不可欠になっていく技術など、NICT が優位性を持つ暗号技術をコアにした科学的技術の深化と応用を進めていること。 ・耐量子計算機暗号について、今後急速に進展すると考えられる量子計算を見越した対応として科学的先端性をもって取り組んでいること。
---	--	--	--	--

	<p>暗号方式やプロトコルの安全性評価を継続して実施し、システムの安全性維持に貢献する。また、今後の利用が想定される新たな暗号技術に対しても安全性評価を実施し、その普及・標準化及びICTシステムの長期にわたる信頼性確保に貢献する。</p> <p>(ウ)プライバシー保護技術</p> <p>個人情報及びプライバシーの保護を図りつつ、パーソナルデータの利活用に貢献するために、準同型暗号や代理再暗号化技術等を活用し、データを暗号化したまま様々な解析を可能とする技術等の研究開発を行う。また、パーソナルデータ利活用におけるプライバシー保護を技術支援するため、ポータル機能の構築等の活動を行う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・暗号化通信に対するキャッシュ技術を TIS 社と共同開発し、特許出願(令和元年度)。さらに、暗号化キャッシュシステムに対する耐量子計算機暗号の適用。 ・パーソルキャリア株式会社の転職求人サービス「ミイダス」にプライバシー保護機能を実現するための秘密計算技術を提供(令和元年度)。 ・Intel SGX を用いた検証可能関数型暗号方式を東海大、筑波大と提案、SCIS2020 にて発表。 ・安全で利便性の高い機能性暗号技術を容易に構成可能な群構造維持暗号系の技術について、市村学術賞(功績賞)を受賞(「相互接続を実現する群構造維持暗号系に関する先駆的研究」)。 ・ペアリングに基づく暗号方式を構成する際、代数的構造のシンプルな対称ペアリング上で設計を行い、実装効率の優れた非対称ペアリングに最適な変換を行う技術を提案し、暗号分野の世界最高峰の国際会議 CRYPTO 2016 に採録。 ・安全で利便性の高い機能性暗号技術をモジュール的に構成できる群構造維持暗号系の技術を提唱し、暗号分野の世界最高峰の国際会議 CRYPTO2017 に採録。高い安全性と相互接続性を両立する群構造維持デジタル署名を実現。NTT、カールスルーエ工科大と共同プレスリリース(平成 29 年 7 月)。 ・群構造維持デジタル署名について、世界最小の署名サイズとなる方式を提案、暗号分野世界 3 大会議の国際会議 Asiacypt2018 に採録。 ・検証可能準同型署名を用いた電子取引における公平な情報交換方式を Myongji University、NTT と提案、論文誌 International Journal of Information Security (2018) に採録。 ・言語限定のゼロ知識証明および群構造維持署名についてモジュール的な構成が可能な機能を有した世界最小の証明/署名サイズの方式を提案。暗号分野世界 3 大会議の国際会議 Asiacypt 2019 に採録。 ・ISO/IEC 20008-2 で標準化されている匿名署名に関し、具体的な攻撃の提示とパッチ方式の提案を行い、国際 	<p>等、科学的意義が大きい独創性、先導性に富んだ特に顕著な成果の創出や将来的な成果の創出が期待される実績が得られた。</p> <p><社会的価値></p> <ul style="list-style-type: none"> ・耐量子計算機暗号(PQC)の安全性評価において、世界記録を複数回達成したこと。 ・耐量子計算機暗号 LOTUS の提案・安全性評価、CRYPTREC で「量子コンピュータ時代に向けた暗号のあり方検討会」立ち上げおよび注意喚起情報の発行、小型衛星・小型ロケット用暗号方式の打ち上げ実証など、社会的に求められている成果を上げていること。 ・新規開拓領域となる宇宙飛行環境下での機能性暗号の動作確認に成功したこと。 ・我が国における新しい暗号技術の開発・普及において中核的な役割を果たしていること。 ・それらなしには安心で安全な未来社会があり得ない Society5.0 社会において緊急性の高い、各テーマについて、暗号技術をベースに取り組んでいること。 <p>等、社会課題の解決や社会的価値の創出に貢献する特に顕著な成果の創出や将来的な成果の創出が期待される実績が得られた。</p>
--	--	---	--

会議 AsiaCCS 2019 に採録。ISO/IEC 20008-2 に修正案を提示。

- ・暗号アプリのモジュール的構成を容易にする群構造維持署名について秘密鍵の機能性を強化した方式を提案。論文誌 Journal of Cryptography (2019) に掲載。
- ・ブロックチェーンシステムにおけるアドレスの信頼性確認のための手法を筑波大学と提案し、CSS2019、SCIS2020 にて発表。
- ・署名内容に依存して匿名性を制御可能な匿名署名方式を提案し、論文誌 Security and Communication Networks (2019) に採録。
- ・機構提案の鍵共有方式 (KEM) FACE が公開鍵暗号国際標準 ISO/IEC 18033-2 (AMD) に採用され、平成 29 年 11 月に国際標準として発行された。エディタ貢献による国際規格開発賞受賞。
- ・効率的な鍵失効機能を有する ID ベース暗号の提案を行い国際会議 RSA Conference Cryptographers' Track (CT-RSA2017) に採録。また、アイデンティティ ID のプライバシーを守る ID ベース暗号方式について、漏洩耐性を持つ方式がジャーナル Des. Codes Cryptogr. (2017)、コンパクトな暗号文を実現した方式が IJACT (2017) に採録。
- ・鍵失効可能な属性ベース暗号方式の一般的構成を東工大、産総研と提案、国際会議 ESORICS 2017 に採録、そのジャーナル版が IEICE トランザクション (2018) に採録。
- ・署名鍵の有効期限を設定することで効率的に鍵失効が可能な匿名署名方式を提案し、国際会議 AsiaCCS 2017 に採録、そのジャーナル版が当該分野世界最高峰の論文誌 IEEE Transactions on Dependable and Secure Computing (2020) に採録。
- ・署名者が他人の鍵失効に影響を受けない匿名署名について、東工大、産総研と鍵漏洩耐性を持つ方式を提案、国際会議 SCN2018 に採録。
- ・階層構造を持つ鍵の非対話更新による鍵漏洩耐性を持つ ID ベース暗号方式を提案。論文誌 Designs, Codes and Cryptography (2018) に採録。

<社会実装>

- ・秘匿協調学習 DeepProtect の社会実装のために、民間企業とも連携し、ユーザー（銀行等）を巻き込んで社会実装に近い状態まで進んでいること。
- ・秘匿協調学習のシステムを構築し、金融機関の不正送金検知に適用するために多くの金融機関と実証実験を行っており、社会実装に向けて着実に進んでいること。
- ・プライバシー保護技術（秘匿協調学習）について、システムを構築するとともに、複数企業と連携して実取引データに対し実証実験を行ったこと。
- ・実装に向けたユーザーとの協調活動が進んでおり、今後、何段階にも亘ってユーザーとの協調による実装段階のレベルアップが続いていくものと思われる、着実性があること。

等、社会実装につながる顕著な成果の創出や将来的な成果の創出が期待される実績が得られた。

以上のことから、中長期計画を着実に達成した上で、特に顕著な成果の創出が認められた他、将来的な成果の創出が期待される実績も得られたため、評定を「S」とした。

- ・鍵失効可能な匿名認証方式について、標準的な計算量仮定の下で最も効率的な方式を提案し、国際会議 ISC2018 に採録、そのジャーナル版が IEICE トランザクション (2020) に採録。
- ・ID を利用する暗号方式で課題となる鍵生成サーバが全ての暗号文を復号できてしまう問題を解決し、鍵生成サーバの権限を抑えられる優位点を持つ方法論を提案。国際会議 ESORICS 2019 に採録。
- ・異なる鍵での復号を防ぐ ID ベース暗号について非対称ペアリングを用いた方式の実装評価を東海大学と行い、国際会議 CANDAR2019 に採録。
- ・鍵失効可能な匿名認証方式について、最も効率的な方式を提案し、IEICE トランザクション (2019) に採録。
- ・タイヤ空気圧センサにおけるプライバシー保護技術として軽量暗号を用いた認証付き暗号プロトコルの動作検証を行った結果が国際会議 ISITA2016 に採録。
- ・車載センサーデータのセキュリティ・プライバシーを守るための軽量暗号に関する講演を Cyber Secure Car2016 および ITU/TTC Workshop にて行うほか、日本初の自動車セキュリティハッカソンの審査委員長を務めるなど、IoT/自動車セキュリティにおける機構のプレゼンス向上に寄与した。軽量ハッシュ関数の国際規格 ISO/IEC 29192-5 の出版に Editor として寄与した。本規格には 機構 の委託研究で開発されたハッシュ関数 Lesamnta-LW が採用されている。
- ・演算の正しさを保証できる乗算可能な秘密分散方式に関する成果が、情報理論的安全性に関する国際会議 ICITS 2017 に採録。
- ・スマートメータ等で利用可能な、公開検証可能なプライバシー保護時系列データ統計計算方式が国際会議 ACISP 2017 に採録、その実装に関する発表が国際会議 IWSEC 2017 ベストポスター賞を受賞、ジャーナル版が The Computer Journal (2018) に採録。
- ・期間に依存した匿名性を実現可能な軽量グループ署名を提案。路車間通信における応用を示した。論文誌 IEEE Transactions on Vehicular Technology (2017) に採録。
- ・IoT 時代に軽量暗号の利用促進をはかるため、軽量暗

号を選択・利用する際の技術的判断に資する軽量暗号ガイドライン(日本語・英語版)を発行し、CRYPTREC より公開。CRYPTREC シンポジウム(2017)にて NIST 招待講演を実施。

- ・ペアリングを用いた暗号方式の処理速度を擬似コードレベルで評価可能なツールを NTT と連携し提案し、暗号分野国内最大会議 SCIS2018 にてイノベーション論文賞を受賞。
- ・3枚のカードを用いたセキュアな多数決投票プロトコルを提案、情報理論分野で優れた成果を出した若手に送られる IEEE Information Theory Society Japan Chapter Young Researcher Best Paper Award(2018)を受賞。
- ・小型衛星・小型ロケット用通信セキュリティ技術を開発。実験回路を観測ロケット MOMO3 号機に搭載し、宇宙への飛行環境下での動作確認に成功。インターステラテクノロジズ、法政大学と共同プレスリリース (2019.7)。実験により得られた飛行時データを基にした異常系の分析を実施。
- ・IoT デバイス間で安全な情報処理を可能にし、情報開示量を自由に制御するとともに頑強性を最適化する情報理論的安全な秘密分散方式を大阪大、法政大と連携し提案。情報理論分野の世界最高峰の論文誌 IEEE Transactions on Information Theory(2019)に2本採録され、暗号分野の世界トップ論文誌 Design, Codes and Cryptography (2018)に1本再録された。
- ・漏洩耐性を持つ暗号方式を実装し、IWSEC2019 の最優秀ポスター賞を受賞。

(イ) 暗号技術の安全性評価

- ・電子政府システムをはじめ国民生活を支える様々なシステムで利用されている暗号方式やプロトコルの安全性評価を継続して実施するために、総務省、経済産業省、IPA と連携して行っている電子政府推奨暗号評価プロジェクト CRYPTREC (Cryptography Research and Evaluation Committees) において下記の活動(i)から

(v)を実施した。(令和 2 年度のもの実施見込みである。)(i)平成 28 年度から令和 2 年度にかけて、RSA 暗号及び楕円曲線暗号の鍵長を設定する根拠資料を毎年度作成し、技術報告書として CRYPTREC のホームページで公開している。(ii)令和 28 年度に楕円曲線暗号に対する新たな解読手法の動向調査を行い、現時点では脅威とはならない結論に至ったことを技術報告書にまとめ、CRYPTREC のホームページで公開した。(iii)令和 28 年度に、衝突発見が報告されたハッシュ関数 SHA1 に関して CRYPTREC Web ページにて SHA-1 の安全性低下及び SHA-256 等より安全なハッシュ関数への移行を推奨する速報を公開した。また、令和 30 年度に SHA-1 のガイドラインを公開した。(iv)令和 2 年度に、量子コンピュータが共通鍵暗号に与える影響について調査を実施し、技術報告書として CRYPTREC のホームページで公開する。(v)令和 2 年度に、ディスク暗号化などの利用用途で広く社会に広まりつつある XTS モードについて CRYPTREC 暗号リストとしての条件を満たすか実装性能調査・評価を実施し、技術報告書として CRYPTREC のホームページで公開する。

- ・島根大学との共同研究において、令和元年度に楕円曲線暗号への 4 種のサイドチャネル攻撃に対しても安全な演算法を提案し、国際ワークショップ WIGS2019 に採録された。
- ・令和元年度に、ISO/IEC 標準であるハッシュ関数 RIPEMD-160 に対する新たな攻撃方法を提案し、CRYPTO2019 で採録された。さらに、提案した攻撃方法を改良し、FSE2020 で採録された。
- ・格子暗号は耐量子計算機暗号として今後の利用が想定される新たな暗号技術である。平成 28 年度にドイツの Darmstadt 工科大学が主催する、格子暗号の安全性を評価する国際的なコンテスト (Ideal lattice Challenge) において解読の世界記録を更新した。さらに、格子暗号の安全性評価に必要な正確な解読時間評価とそれを評価する際の世界最高の計算速度を両立したアルゴリズムを開発し、Eurocrypt2016 に採録された。令和 29 年度に、格子暗号の安全性評価において、解析が不十分

だった Random Sampling アルゴリズムの再評価に成功し、Eurocrypt2017 に採録された。平成 30 年度に、格子暗号の安全性評価について厳密な計算量評価を行った結果が Asiacrypt2018, CRYPTO2018 で採録され、NIST PQC 標準化に貢献するとともに長期的な運用に向けたパラメータ設定を可能にした。令和元年度に格子暗号の解読アルゴリズムについて執筆。近代科学社より教科書として出版した。

- ・平成 29 年度に格子暗号である LOTUS を提案し、NIST 耐量子計算機暗号標準化プロジェクトに応募した。本プロジェクトには世界中から 82 件の応募があり、書類選考を通過した 69 方式の 1 つに選ばれた。令和元年度に ISO/IEC JTC1 SC27 WG2 Standing Document 8 (SD8) へ貢献した。
- ・多変数公開鍵暗号 (MPKC) は耐量子計算機暗号として今後の利用が想定される新たな暗号技術である。令和元年度に MPKC の安全性を評価のために解読アルゴリズムを提案し、MPKC の安全性を評価する国際的なコンテスト (Fukuoka MQ Challenge) において解読の世界記録を達成した。本成果をプレスリリースで公開、さらに本成果は国際会議 IWSEC 2019 で採録され、Best Paper Award 受賞した。
- ・情報理論的安全な暗号は耐量子計算機暗号として今後の利用が想定される新たな暗号技術である。令和 2 年度にインターステラテクノロジズ(株)、法政大学との共同研究において、小型宇宙機通信への利用が想定される情報理論的安全な暗号の実装評価に向け、実験により得られた宇宙への飛行時データを基にした要件分析を実施した。
- ・耐量子計算機暗号は今後の利用が想定される新たな暗号技術であり、その安全性評価に関する活動として CRYPTREC において下記(vi)から(viii)の活動を実施した。(vi)量子コンピュータ時代に向けた暗号の在り方検討 TF を立ち上げた。(vii)令和元年度に耐量子計算機暗号の技術報告書を CRYPTREC のホームページで公開し、世界動向と主要な技術の特徴・具体的構成法を国内に展開した。(viii) 令和元年度に、現在の量子コンピュー

タによる暗号技術の安全性への影響に関して CRYPTREC Web ページにて CRYPTREC 暗号リスト記載の暗号技術が近い将来に危殆化する可能性は低いと判断した速報を公開した。

(ウ) プライバシー保護技術

- ・ AI を活用したプライバシー保護データ解析技術として、複数の参加者が持つデータセットを互いに秘密にしたまま深層学習を行うプライバシー保護深層学習システム(DeepProtect)の社会実装を進め、銀行 5 行と実証実験(初期フェーズ)を行った。
- ・ DeepProtect に関わる学術論文 2 件が IEEE Transaction on Information Forensics & Security に採録された。また、Naive Bayesなどをベースとしたプライバシー保護型データ解析技術に関しても、3 件のジャーナル、6 件の国際会議で採録された。
- ・ 代理再暗号化技術の応用として、暗号化した状態でセキュリティレベルの更新と演算の両方ができる準同型暗号方式を設計した。
- ・ さらに、フィンテックに代表される金融技術の高度化に対応するための準同型暗号等の高機能暗号の金融分野への適用の課題と対策を議論した論文が、情報処理学会コンピュータセキュリティ研究会優秀研究賞を受賞した。
- ・ 個人情報を含むデータの収集およびその分析を行う上で、データ提供者が異常データを提供しない限り匿名性が担保される汎用的なプライバシー保護フレームワークを提案し、情報処理学会コンピュータセキュリティシンポジウム 2017 にて、PWS2017 優秀論文賞を受賞、国際会議 WPES2017 で採択された。
- ・ 改正個人情報保護法の施行に合わせ、匿名加工技術の有用性指標、安全性指標の設計及び開発を行い、提案した指標を情報処理学会 Privacy Workshop 匿名加工・再識別コンテスト(PWSCUP 2017)に導入し、同コンテストのルール及びシステムの設計・運用に貢献して有効性を実証した。また、プライバシーリスク評価システムを

作成し、オープンハウス等で発表した。本システムでは、少ない情報で個人が特定され、多くの情報漏洩が起きるケースがないかを評価でき、安全な匿名加工処理の支援となる。

- ・プライバシーポリシーの理解が難解であるという現状を踏まえ、ユーザーを支援するツールを構築し、評価等を行った。実現のために、アクセス数の多い Web サイトをベースとした教師データの作成、また、プライバシーポリシーを読む際の理解度及び表示形式の検討を行った。
- ・DeepProtect のシステム化に関しては、ユーザーが容易に利用できるテスト環境を構築した。

なお、この自己評価に関しては、国立研究開発法人情報通信研究機構の研究活動等に関する外部評価委員会（総括評価委員会）において、以下のような意見をいただいている。

1. 開催日

令和 2 年 5 月 15 日(金) 15 時～18 時

2. 委員名簿

酒井 善則	委員長	東京工業大学 名誉教授
安浦 寛人	委員	九州大学 理事・副学長
國井 秀子	委員	芝浦工業大学 客員教授
安藤 真	委員	東京工業大学 名誉教授
渡辺 文夫	委員	Fifth Wave Initiative 代表
有川 節夫	委員	放送大学学園 理事長
松井 充	委員	三菱電機株式会社 開発本部 役員技監
太田 勲	委員	兵庫県立大学 学長
飯塚 久夫	委員	株式会社ぐるなび 常勤顧問

3. 委員長及び委員からの意見

- ・全体として、自己評価の評点をもう少し上げて良いのではないか。

例えば、大項目については、センシング基盤分野については、見込み・単年度共に A となっているが、いくつかの S クラスの成果が含まれており、本分野についても S クラスにかなり近いと思う。統合 ICT 基盤分野については、見込み・単年度共に B となっているが、A に近いと思う。フロンティア研究分野につ

いては、見込み・単年度共に A となっているが、かなり S クラスの研究が含まれている。オープンイノベーション分野については、見込み・単年度共に B だが、非常に良い部分もある。

- ・(サイバーセキュリティ分野について) 本分野の自己評価 S は妥当である。国研だからこそできること、国研だからこそ期待されていることをしっかり実行している。今後もサイバーセキュリティ分野で国を守るという高い意識を持って取組を続けて行ってほしい。

(全体を通して)

- ・社会実装という評価軸は科学的意義とは異なり評価されづらい。しかも、これからの世の中で重要になってくるので、このためしっかりと評価し、モチベーションの維持等を含めて、頑張るって社会実装に取り組んでもらいたい。
- ・それぞれの技術分野で、様々な社会的課題に対して研究を行っており、技術分野だけでなく、社会課題別の視点でのアピールなど、多面的なまとめ方で情報発信を行うことが重要ではないか。
- ・コロナ騒動の中で、世界が一気に社会構造や産業構造、経済活動が大きく変化していく中で、新しい社会の在り方を NICT から描いていただきたい。
- ・全体の印象として、とても大きな成果を上げている。基礎研究の分野では、様々な賞を受賞しており、科学技術的に大変意義のある成果を達成している。

国立研究開発法人情報通信研究機構 第4期中長期目標期間終了時見込評価 項目別自己評価書(No.5 フロンティア研究分野)

1. 当事務及び事業に関する基本情報			
中長期目標の当該項目	Ⅲ. -1. -(5)フロンティア研究分野		
関連する政策・施策	—	当該事業実施に係る根拠 (個別法条文など)	国立研究開発法人情報通信研究機構法第14条第1項第一号
当該項目の重要度、難易度	重要度:高	関連する研究開発評価、政策評価・行政事業レビュー	行政事業レビューシート ****

2. 主要な経年データ												
主な参考指標情報							主要なインプット情報(財務情報及び人員に関する情報)※2					
	基準値等 (前中長期目標期間最終年度値)	28年度	29年度	30年度	元年度	2年度		28年度	29年度	30年度	元年度	2年度
査読付き論文数	—	127	106	90	96		予算額(百万円)	3,055	2,793	2,650	7,627	
論文の合計被引用数 ※1	—	1,485	1,614	2,149	2,667		決算額(百万円)	2,444	2,785	2,427	2,774	
実施許諾件数	11	17	13	12	14		経常費用(百万円)	2,809	2,652	2,734	2,939	
報道発表件数	7	13	3	10	9		経常利益(百万円)	44	28	11	95	
標準化会議等への寄与文書数	15	17	15	22	44		行政サービス実施コスト(百万円)	3,560	3,136	2,686	3,518	
							従事人員数(人)	39	38	36	38	

※1 合計被引用数は、当該年度の前3年度間に発表した論文についての、クラリベイト・アナリティクス InCites Benchmarking に基づく被引用総数(当該年度の3月調査)。

※2 予算額、決算額は支出額を記載。人件費については共通経費分を除き各業務に配賦した後の金額を記載。従事人員数は、常勤職員の本務従事者数。

3. 中長期目標、中長期計画、主な評価軸、業務実績等、中長期目標期間評価に係る自己評価

中長期目標	中長期計画	主な評価軸（評価の視点）、指標等	法人の主な業務実績等	自己評価	
<p>1. ICT分野の基礎的・基盤的な研究開発等</p> <p>(5)フロンティア研究分野</p> <p>世界最先端のICTにより新たな価値創造や社会システムの変革をもたらすためには、「未来を拓く」能力として、イノベーション創出に向けた先端的・基礎的な技術が不可欠であることから、【重要度：高】として、以下の研究開発等に取り組むとともに研究開発成果の普及や社会実装を目指すものとする。</p>	<p>1-5. フロンティア研究分野</p> <p>トラヒックや消費電力の爆発的増大、より一層困難になる通信や情報処理における安全性確保等の課題を抜本的に解決し、豊かで安心・安全な未来社会を支えるICTの基礎となる新概念や新たな枠組みを形作ることを目指す。このため、究極の原理に基づく量子情報通信技術、新しい原理や材料に基づく新規ICTデバイス技術、数十億年の歴史を持つ生物に学ぶバイオICT等のフロンティアICT領域技術の各研究課題において、先端的・基礎的な研究開発を行う。</p>	<p><評価軸></p> <ul style="list-style-type: none"> ● 研究開発等の取組・成果の科学的意義（独創性、革新性、先導性、発展性等）が十分に大きなものであるか。 ● 研究開発等の取組・成果が社会課題・政策課題の解決につながるものであり、または、それらが社会的価値の創出に十分に貢献するものであるか。 ● 研究開発等の成果を社会実装につなげる取組（技術シーズを実用化・事業化に導く等）が十分であるか。 <p><指標></p> <ul style="list-style-type: none"> ● 具体的な研究開発成果（評価指標） ● 査読付き論文数（モニタリング指標） ● 論文の合計被引用数（モニタリング指標） ● 研究開発成果の移 		<p>評点</p>	<p>A</p>
					<p>1-5. フロンティア研究分野</p> <p>本分野としては、量子鍵配送プラットフォーム技術について、世界最先端の研究レベルを維持し、QKD秘密分散ストレージネットワーク技術を世界に先駆けて確立した。</p> <p>また、酸化ガリウムデバイスについても、深紫外LEDについても、世界トップレベルの研究成果を上げて、世界的にこれらの分野の研究開発をリード。</p> <p>さらに、世界最高レベルとなるEOポリマーの耐熱性の成果とテラヘルツ無線テストベッドに向けた基盤技術に関する成果をあげた。</p> <p>以上のことから、中長期計画を着実に達成した上、顕著な成果の創出が認められ</p>

		<p>転及び利用の状況 (評価指標)</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 研究開発成果の移転及び利用に向けた活動件数(実施許諾件数等)(モニタリング指標) ● 報道発表や展示会出展等を受けた各種メディア媒体の反響状況(評価指標) ● 報道発表や展示会出展等の取組件数(モニタリング指標) ● 共同研究や産学官連携の状況(評価指標) ● データベース等の研究開発成果の公表状況(評価指標) ● (個別の研究開発課題における)標準や国内制度の成立寄与状況(評価指標) ● (個別の研究開発課題における)標準化や国内制度化の寄与件数(モニタリング指標) <p>等</p>		<p>た他、将来的な成果の創出が期待される実績も得られたため、評定を「A」とした。</p> <p>個別の評定と根拠は、以下の各項目に記載のとおりである。</p>
<p>○量子情報通信技術</p> <p>通信ネットワークのセキュリティを確保し、さらに超低損失・省エネルギー化を安定的に達成する量子光ネットワークの実現に向けた基盤的技術を研究開発するものとする。また、研究成果を基に平成 32 年度までに量子鍵配送の実運用試験及びテストベッドにおける量子光伝送技術原理実証を実現するものとする。</p>	<p>(1)量子情報通信技術</p> <p>光や電子の量子力学的性質を利用し、既存のICTでは実現不可能な絶対安全で高効率な量子暗号通信等の量子光ネットワーク技術や、従来理論による情報通信容量の限界を突破する超高効率ノード処理を実現し、光通信、量子暗号通信等のネットワーク機能を向上させる量子ノード技術等、未来のICTに革新をもたらす量子情報通信技術の研究開発を行う。</p> <p>(ア)量子光ネットワーク技術</p> <p>高い伝送効率・エネルギー効率を有し、将来にわたり盗聴・解読の危険性が無い安全性を確保する量子光ネットワークの実現に向けて、量子鍵配送で共有された暗号鍵を伝送装置からネットワークルーター、ユーザー情報端末までネットワークの各階層に安全に供給する量子鍵配送プラットフォーム構築・活用技術、伝送効率と安全性のバランスを適応的に設定可能な量子光伝送技術等の研究開発を行う。また、量子鍵配送プラットフォームを現在の通信インフラと融合させ、フィールド試験等により総合的なセキュリティシステムとしての実用性を検証する。さらに、光空間通</p>	<p>転及び利用の状況 (評価指標)</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 研究開発成果の移転及び利用に向けた活動件数(実施許諾件数等)(モニタリング指標) ● 報道発表や展示会出展等を受けた各種メディア媒体の反響状況(評価指標) ● 報道発表や展示会出展等の取組件数(モニタリング指標) ● 共同研究や産学官連携の状況(評価指標) ● データベース等の研究開発成果の公表状況(評価指標) ● (個別の研究開発課題における)標準や国内制度の成立寄与状況(評価指標) ● (個別の研究開発課題における)標準化や国内制度化の寄与件数(モニタリング指標) <p>等</p>	<p>(1)量子情報通信技術</p> <p>(ア)量子光通信ネットワーク技術</p> <ul style="list-style-type: none"> ・量子鍵配送プラットフォーム技術については、量子鍵配送及び現代セキュリティ技術である秘密分散を活用した、情報理論的安全な伝送・保管・認証およびデータの完全性を担保できる分散ストレージシステムの原理実証に世界で初めて成功した。また、同システムを顔認証やスポーツカルテのデータ運用・管理など実際のユーザーと協業した実証実験に成功した。さらに、鍵管理や秘密分散等、同システムの要素技術を活用し、広域的な秘密分散ネットワークを構築、実医療データを用いた実証実験に成功した。さらに、耐量子 - 公開鍵暗号とのインターフェースを開発し、量子鍵配送ネットワークをクローズしたデータベースとして機能させた場合のアクセス制御やデジタル署名を耐量子 - 公開鍵暗号で実施するシステムの実証実験にも世界で初めて成功した。これらの成果のほとんどは産学連携で進めたものであり、企業の量子鍵配送技術実用化の促進に貢献した。また、量子鍵配送技術の国際標準化活動に積極的に取り組み、特に ITU-T において、同分野に関する初の勧告 “ITU-T Y.3800 Overview on networks supporting quantum key distribution” の成立に主導的に寄与した。また、新たな融合領域である「量子セキュリティ」分野を切り拓くべく、研究開発、その技術的検証、人材育成、社会実装を総合的に推進するため、量子セキュリティ拠点の整備に向け、拠点となる新棟を建設、さらに量子暗号通信の社会実装に向けた長期運用実験を開始した。 ・量子光伝送技術については、小金井本所 - 電通大間に距 	<p>(1)量子情報通信技術</p> <p>【科学的意義】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・超伝導量子回路人工原子系における従来比 100 倍の巨大な光シフトの観測・制御に成功した。 ・非 AI 系窒化物超伝導量子ビット作成に世界初成功し、高い成果を上げた。 ・量子光ネットワーク技術については、QKD 秘密分散ストレージネットワーク技術を世界に先駆けて確立、世界で初めて光空間通信における物理レイヤ暗号のフィールド実証に成功、超小型衛星と光地上局の間で量子通信の基礎実験に成功。 ・量子ノード技術に

信テストベッドにおいて量子光伝送技術の原理実証を行う。

なお、令和元年度補正予算(第1号)により追加的に措置された交付金については、未来への投資と東京オリンピック・パラリンピック後も見据えた経済活力の維持・向上の実現のために措置されたことを認識し、量子セキュリティ技術に関する社会実装研究のために活用する。

(イ)量子ノード技術

データセンターネットワーク等におけるノード処理の多機能化や超低損失・省エネルギー化をもたらす量子ノード技術を実現するための基礎技術として、光量子制御技術、量子インターフェース技術、量子計測標準技術等の研究開発を行う。光量子制御回路の高度化・小型化基盤技術及び量子計測標準による精密光周波数生成・評価技術を確立するとともに、量子インターフェースの原理実証を行う。

離約 7.8km の光空間通信テストベッドを構築した。同テストベッドを用いて、空間光通信における物理レイヤ暗号の実証実験に世界で初めて成功し、さらに同報型鍵配送の実装にも初めて成功した。また、宇宙通信研究室と連携し超小型試験衛星 SOCRATES により、超小型衛星では世界初となる量子通信の基礎実験に成功した。これらの技術開発を背景として、総務省委託研究「衛星通信における量子暗号技術の研究開発」が開始され、機構も参画し実用的な衛星量子通信技術の開発促進につながった。また将来の衛星量子暗号への発展を用意とするため、空間光量子暗号の送受信システムの開発を進めると共に、見通し通信を前提とした合理的仮定の下、量子暗号よりも桁違いに高速に鍵共有を可能とする物理レイヤ暗号の実験・実証においても世界に先駆ける成果を得るに至っている。

(イ)量子ノード技術

・光量子制御技術について、通信ノード間で量子もつれを共有する際に必須となる量子もつれ交換プロトコル高度化のための取り組みを推進した。具体的には、量子もつれ光の持つ非局所性（ベルの不等式の破れ）について、パラメトリック下降変換と光子検出器を用いた方式としては、従来の10倍以上強い非局所性を観測できる新たなパラメータ領域を発見し、その一部について実験実証に成功した。次に、この量子もつれ光の非局所性を増幅できるプロトコルの原理実証実験に成功した。さらには、同プロトコルの成否が確率的に決まり、単位時間当たりの成功回数を増やすには試行回数を増やす必要があることから、量子光源高速化の取り組みを進めた。具体的には、従来型と比較して100倍以上高い10GHz オーダーの繰り返し周波数を持つ励起光源や、自由空間の Sagnac 干渉計に PPLN 光導波路を組み込んだハイブリッド型の量子光源、さらには複数の単一光子検出器を並列動作させる多重型の単一光子検出系を開発し、伝令付き単一光子生成において世界で初めて10MHz を超える検出レートを実現した。

については、世界最高速の量子光源の実現、イオントラップ技術を応用した量子通信基礎実験の成功。

等、科学的意義が大きい先導性、発展性に富んだ特に顕著な成果の創出や将来的な成果の創出が期待される実績が得られた。

【社会的価値】

- ・インジウムイオン光周波数確度を従来の10分の1に改善、可搬型周波数標準技術を確立した。
- ・QKD 鍵管理技術を応用した広域分散バックアップネットワークを構築、実医療データを用いてその有用性を実証見込である。
- ・超小型衛星と光地上局との間での量子通信の基礎実験の成功。
- ・国際標準化活動に積極的に取り組み、初のQKDネットワークに関する

			<p>・量子計測標準技術では、イオントラップ技術を電磁波研究所時空標準研究室に提供することにより、インジウムイオン光周波数確度の従来比1/10への改善と国際度量衡局の諮問会議（CCTF）での標準周波数更新採用に大きく貢献した。従来型単一イオン光周波数標準の弱点であった安定度限界を克服する複数イオン光周波数標準の原理実証動作を確認し、安定度評価を完了する見込み。単一イオンから発生した単一光子の量子周波数変換・長距離伝送を実証し、イオンによる量子インターネット基盤技術の一つを実現した。</p> <p>・量子インターフェース技術について、マイクロ波と量子ビットの量子レベルでのコヒーレントな結合に必須となる超伝導量子回路の設計試作および量子コヒーレンス測定評価法についての取り組みを進めた。さらに量子インターフェース技術を従来の強結合領域を超えて超強結合（深強結合）領域へ拡張するスキーム及びそこで必要となる量子状態測定法の開発に着手した。超伝導人工原子-マイクロ波光子間の桁違いに強い相互作用を利用し、全く新しい光・物質相互作用系の基底状態を生成することに成功した。一般にエンタングルメントは励起状態で形成されるがこの深強結合系では基底状態でエンタングルメントが形成されていると考えられており、量子技術の新たなリソースとなる可能性がある。さらに深強結合系において光子数個の場合、従来報告値の100倍超の量子acシュタルクシフトおよび真空揺らぎによる巨大なラムシフトの観測と制御に成功した。また、マイクロ波共振器と強結合した非アルミニウム型NbN窒化物超伝導体量子ビット（0接合、π接合）の作製に成功し、量子コヒーレンス評価法を確立した。</p> <p>また、量子情報通信技術分野全般に関して、日本全体の産学官連携、及び研究開発と実用化戦略の議論を促進するためのフォーラム形成を進め、一般社団法人「量子ICTフォーラム」の設立（令和元年度）に大きく寄与した。</p>	<p>ITU-T 国際勧告の成立に主導的役割を果たしたこと、量子ICTフォーラムの設立を推進し、量子通信に関するコミュニティでリーダーシップを発揮していること。</p> <p>等、社会課題の解決や社会的価値の創出に貢献する特に顕著な成果や将来的な成果の創出が期待される実績が得られた。</p> <p>【社会実装】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ITU-Tにおける各種QKD関連標準の成立に主導的役割を果たした。 ・一般社団法人「量子ICTフォーラム」の設立は展開に向けたコミュニティ形成の1つとして重要な成果である ・QKD技術を応用下分散データバックアップシステムの構築と実医療データでの実証。 <p>等、社会実装につながる成果や将来的な</p>
--	--	--	--	---

				<p>成果の創出が期待される実績が得られた。</p> <p>以上のことから、中長期計画を着実に達成した上で、特に顕著な成果の創出が認められた他、将来的な成果の創出が期待される実績も得られたため、評定を「S」とした。</p>
<p>○新規ICTデバイス技術 酸化ガリウム等の新半導体材料の優れた物性を活かした電子デバイスに関する基盤技術を研究開発するとともに、研究開発成果の移転を図ることで、高効率パワーデバイスや極限環境で使用可能な情報通信デバイスの実用化を目指すものとする。 また、情報通信から殺菌、工業、安全衛生、</p>	<p>(2)新規ICTデバイス技術 革新的なICTデバイス技術により、ICT分野に留まらず幅広い分野に大きな変革をもたらすため、酸化物半導体や深紫外光等を利用した全く新しいICTデバイスの研究開発を進めるとともに、研究開発成果の普及や社会実装に向けた取組を行う。 (ア)酸化物半導体電子デバイス 地球上の更に幅広い場所で快適にICTを活用できる社会や、電力のこれまで以上の効率の制御による省エネルギー社会の実現を目指し、酸化物を中心とする新半導体材料の開拓に積極的に取り組み、その優れた材料特性を活かした新機能先端的電子デバイス(トランジスタ、ダイオード)を実現する。酸化ガリウムを利用した高効率パワーデバイス、高周波デバイス、高温・放射線下等の極限環境におけるICTデバイス等の基盤</p>		<p>(2)新規ICTデバイス技術 (ア)酸化物半導体電子デバイス 酸化ガリウムトランジスタ、ダイオードの基盤技術研究開発を、パワーデバイス応用、高周波無線通信応用、極限環境応用の3つの分野で、産学外部機関と緊密な連携、協力のもと推し進めてきた。パワーデバイス開発の主な成果としては、世界初の耐圧1kV超ショットキーバリアダイオード、窒素イオン注入p型ドーピング技術、オールイオン注入プロセスによる縦型トランジスタ等のマイルストーンキー技術、デバイス実証が挙げられる。また、高周波応用の可能性を探るための微細ゲートトランジスタ開発においては、今後の実用可能性を探る物性、基礎データの取得に成功し、優れた高周波デバイス特性を実現する横型微細ゲートGa₂O₃MOSFETを開発した。さらに、極限環境デバイス開発においては、主に放射線下での酸化ガリウムデバイスの動作信頼性、劣化等についての調査を行い、その材料的堅牢性、更には極限環境という半導体デバイス未踏の領域での高い実用の可能性を確認した。</p>	<p>(2)新規ICTデバイス技術 【科学的意義】 ・耐圧性能の高い実用的な酸化ガリウムダイオードやトランジスタの開発、イオン注入ドーピング技術などの実際の生産に適したプロセス技術の開発で世界初となる高い研究成果を上げて、世界的にこの分野の研究開発を牽引している。2017年にAppl. Phys. Lett. で出版された全論文中、被引用回数第1位など学術的にも極</p>

<p>環境、医療分野に至るまで幅広い分野に技術革新をもたらすことを目指し、従来の可視・赤外半導体技術では達成できない機能を備えた深紫外光ICTデバイスの実現に向けた基盤技術を研究開発するものとする。</p>	<p>技術の研究開発を行うとともに、民間企業に研究開発成果の移転を図るなど実用化を目指す。</p> <p>(イ)深紫外光ICTデバイス</p> <p>従来の可視・赤外半導体技術では達成できない機能を備え、情報通信から殺菌、工業、安全衛生、環境、医療分野に至るまで、幅広い生活・社会インフラに画期的な技術革新をもたらす深紫外光ICTデバイスの実現に必要な基盤技術の研究開発を行う。さらに、従来に無い水銀フリー・低環境負荷かつ高効率・高出力な深紫外小型固体光源を実現するための技術や、その社会実装に必要な技術の研究開発を行う。</p>		<p>成果物としては、学術論文 35 編、国際会議招待講演 77 件（内 基調講演 9 件）、特許登録 27 件（国内 17 件、国外 10 件）などを達成した。また、機構から報告した酸化ガリウム関連論文の被引用回数は、2016 年の約 500 回から単調に増加し、2019 年は約 1,500 回を記録した。（注：2020/03/31 現在。招待講演に関しては R02 年度予定も込み）</p> <p>平成 27 年 6 月に、機構からの技術移転ベンチャー企業として設立された（株）ノベルクリスタルテクノロジーは、順調にその業績を伸ばしてきた〔売上実績：H27 年度 1,300 万円、H28 年度 6,900 万円、H29 年度 1.6 億円、H30 年度 2.6 億円、R01 年度 3.2 億円〕。</p> <p>このように、酸化ガリウムデバイスにおいては、将来的に様々な応用が期待され、社会に向けて環境・産業の両面での大きな波及効果が見込まれる。</p> <p>(イ)深紫外光ICTデバイス</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 深紫外発光ダイオード(DUV-LED)の世界最高出力を大幅に更新する光出力 520mW 超を達成した(発光波長 265nm、シングルチップ、室温・連続駆動)。光取出し効率、量子効率、電流拡散特性等を大幅に改善するナノ光構造技術、新規デバイス・パッケージ構造の開発に成功した。これらの成果は Applied Physics Letters 誌(2017 年)や応用物理学会機関紙「応用物理」2019 年 10 月号等に掲載された。Applied Physics Letters 誌においては、Photonics and Optoelectronics 領域で最も引用、最もダウンロードされた論文の一つとして Top Articles に選出された。また「応用物理」においては、その表紙を飾った。またこれら一連の成果が高く評価され、独創性を拓く 先端技術大賞 フジサンケイビジネスアイ賞を受賞した(2018 年 7 月)。 ・ NICT の深紫外 LED 成果技術(特許 8 件)を国内電機メーカーに技術移転し、実施契約を締結(2018 年 12 月～)。ナノ光構造を搭載した量産デバイスの製品化に成功した稀有な事例となった。また、さらなる高出力深紫外 LED の社会実装へ向け、業界最大手メーカーと資金受入型共同研究契約を締結した(2019 年度 8 月～)。 	<p>めて高い評価を得ている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 深紫外領域での初の光制御用高性能高集積な光アイソレータ素子の創出。 ・ 水銀ランプに替わる深紫外 LED の実現に向けて、世界最高の光出力 520mW 超のシングルチップの開発、新規・透明コンタクト材料の開発、世界最高となる電流駆動中の内部量子効率 77%を達成など着実に高い研究成果を出し続けていること。 <p>等、科学的意義が大きい独創性、先導性に富んだ特に顕著な成果の創出や将来的な成果の創出が期待される実績が得られた。</p> <p>【社会的価値】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ オールイオン注入プロセスで作製した世界初の縦型ノーマリーオフ酸化ガリウムトランジスタを実現した。
---	--	--	--	---

			<ul style="list-style-type: none"> ・ 深紫外 LED 内部の光吸収等の性能抑制要因を解決するため、深紫外領域の新たな透明コンタクト材料の開発を行った。六方晶窒化ホウ素(h-BN) / AlGaN ヘテロ構造の作製技術確立に成功した。バンド構造を定量化することにより、h-BN が深紫外 LED に対する新規・透明 p 型コンタクト層として有望であることを世界で初めて実証した。これらの成果は Applied Physics Letters 誌(2019 年)に掲載された。 ・ 深紫外 LED において、電流駆動中の内部量子効率(IQE)と電流注入効率(CIE)を世界で初めて定量化することに成功した。実駆動中の内部量子効率として世界最高値となる77%を達成した。これらの成果は、Optics Express 誌(2017 年)に掲載され、本領域における優れた研究成果として、ハイライト論文に選出された。 ・ 深紫外光 ICT デバイスの創出に向け、深紫外領域における新たな光アイソレータデバイスを開発した。金属メタマテリアル構造を用いて巨大磁気カイラル効果を発現することにより、極めて大きな光非相反特性を実証した。従来に無い深紫外光制御用の高性能・高集積な光アイソレータ素子の創出に貢献する成果である。これらの研究成果は、Physical Review A 誌(2018 年)に掲載された。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 酸化ガリウムについて、高温、放射線下など極限環境への応用可能性を明らかにした。 ・ 環境上の配慮から、水銀ランプの使用規制は厳しくなっており、殺菌用の水銀ランプに代替する技術である深紫外 LED の開発は社会的価値が高い。センターでは、世界最高出力の深紫外 LED チップを実現しており、最も実用に近い研究成果を実現している。 <p>等、社会課題の解決や社会的価値の創出に貢献する顕著な成果や将来的な成果の創出が期待される実績が得られた。</p> <p>【社会実装】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 酸化ガリウムデバイス基盤技術の民間企業への技術移転により製品化に成功した。 ・ 深紫外 LED 成果技術を民間企業に技術移転しデバイス
--	--	--	---	--

				<p>製品化に成功し、特許実施契約を締結した。</p> <p>等、社会実装につながる顕著な成果や将来的な成果の創出が期待される実績が得られた。</p> <p>以上のことから、中長期計画を着実に達成した上で、特に顕著な成果の創出が認められた他、将来的な成果の創出が期待される実績も得られたため、評定を「S」とした。</p>
<p>○フロンティアICT領域技術</p> <p>通信速度や消費電力、感度等に係る課題に対してブレークスルーとなるデバイスの創出を目指して、高機能デバイスに関する技術を開発するものとする。</p> <p>また、ミリ波及びテラヘルツ波を利用した100Gbps級の無線通信システム</p>	<p>(3)フロンティアICT領域技術</p> <p>将来の情報通信システムにおいて想定される通信速度やデータ容量、消費電力の爆発的増大等の課題の抜本的な解決に向け、新規材料やその作製手法の研究開発及び高度な計測技術等の研究開発を行うことにより、革新的デバイスや最先端計測技術等の実現を目指す。また、ICT分野で扱う情報の質や量を既存の枠組みを越えて拡張し、新しい情報通信パラダイムの創出につなげるために、生物が行う情報通信を計測・評価・模倣するための基礎技術の研究開発を行う。</p> <p>(ア)高機能ICTデバイス技術</p> <p>高速・大容量・低消費電力の光通信システムや広帯域・高感度センシ</p>		<p>(3)フロンティアICT領域技術</p> <p>(ア)高機能ICTデバイス技術</p> <p>・データセンター等で需要が急増する光インターコネクト用の超高速光変調器の開発に向けて、Oバンド（1310nm帯）で高性能なE0ポリマーの開発を行い、性能指数7.3倍の分子開発に成功した（特許出願）。さらに、安価なSiディテクタが使用できる1100nm以下の短波長化に向けた検討を行い、980nm～640nmの短波長領域でもCバンドと同等以上の変調が可能なE0ポリマーの開発に成功した。また、E0ポリマーの実用性能として耐熱性の向上に取り組み、ガラス転移温度205℃の超高耐熱E0ポリマーの開発に成功した（特許出願）。本特許をライセンスし、E0ポリマーを日米で販売し、E0ポリマーデバイス研究の振興に寄与している。小型超高速光変調器の実用化に向けて、「Si/有機ポリマハイブリッド超高速光変調器の実用化技術開発」が科学技術振興機構の研究成果最適展開支援プログラム（A-STEP）に採択され研究開発を推進、E0ポリマーやSi単</p>	<p>(2)フロンティアICT領域技術</p> <p>【科学的意義】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・超高耐熱E0ポリマーの開発に成功し、実用レベルの長期安定性を実現した。 ・SSPDとSFQチップを組み合わせることで光子の位置情報をデジタルで読み出すことに成功した。 ・細胞内に導入した人工ビーズの周囲に膜構造の人工形成に成功した。 ・窒化物超伝導体を

<p>ムを実現するための技術を研究開発し、産学官連携や国際標準化に寄与することで、未踏周波数領域の開拓に貢献するものとする。</p> <p>さらに、QOL (quality of life) の向上を目指し、生物の感覚受容システムを利用したセンシングシステム、生体や細胞における情報伝達・処理を模倣したシステム及び生体材料が示す応答を計測・取得するシステムに関する技術を開発するものとする。</p>	<p>ングシステム等を実現するため、原子・分子レベルでの構造制御や機能融合等を利用してICTデバイスの新機能や高機能化を実現する技術の研究開発を行う。また、小型超高速光変調器等の実用化に向け、超高速電子-光変換素子等の動作信頼性及び性能を飛躍的に向上させる基盤技術の研究開発を行う。さらに、超伝導単一光子検出器の広範な応用展開を目指し、可視から近赤外の波長帯域で80%以上の検出感度を実現するための技術や、更なる高速化に必要な技術の研究開発を行う。</p> <p>(イ)高周波・テラヘルツ基盤技術</p> <p>ミリ波及びテラヘルツ波を利用した100Gbps級の無線通信システムの実現を目指したデバイス技術や集積化技術、計測基盤技術等の研究開発を行う。また、テラヘルツ帯等の超高周波領域における通信等に必要不可欠である信号源や検出器等に関する基盤技術の研究開発を行う。これらの研究開発成果を基に、テラヘルツ帯における無線通信技術及びセンシング技術の実用化を目指した標準化活動の推進に貢献する</p> <p>(ウ)バイオICT基盤技術</p> <p>生体の感覚に則したセンシングを実現し、ヒトを取り巻く化学物質等の影響の可視化・知識化を通してQOL (quality of life) の向上につなげるため、分子・細胞等の生体材料が持つ優れた特性を活かして化学物質等に付随した情報を抽出・利用するための基礎技術の研究開発を行う。具体的には、情報検出システムの構築の</p>		<p>独の光変調器 ($V\pi L=4$) よりも高効率の光変調 ($V\pi L=0.81$) を確認した。この成果は、クラウドやAI、IoTなどのデータ利活用システムのボトルネック解消への寄与が見込まれる。高耐熱E0ポリマーを用い配向処理済E0ポリマーと難接着性材料を圧着転写する技術を開発した(特許出願)。この技術を用いてTHz低吸収材料をクラッドとした有機E0ポリマー導波路の作製に成功し、小型・低出力のフェムト秒ファイバーレーザーを用いたTHz波発生を世界で初めて実証した(Optics Express 誌掲載)。加えてTHz波検出において、シュタルク効果(電場により吸収係数が変化)を用いた新規THz波検出方法を考案し、既存のE0サンプリング法(電場により屈折率が変化)よりも、簡便な光学系で広帯域検出が可能であることを実証した(特許出願、JJAP 誌掲載)。転写法を用いてE0ポリマー導波路THz検出器を試作し、90GHz電磁波による直接光変調を世界で初めて実証した。この技術は、次世代高速無線通信(Beyond 5G/6G)へ向けたToF(THz over Fiber)技術基盤となる。高ガラス転移温度E0ポリマーと化学安定性向上技術、電荷注入抑制技術などを用いて、狭ピッチ化したE0ポリマー光フェーズドアレイ(OPA)を試作し、最大偏向角22.5度と100kHzの世界最高速動作の実証に成功した(MRS Spring 2018、Photonics West 2019で招待講演)。この成果は、自動運転に不可欠なLiDARや3次元情報取得カメラ、高速大容量空間光通信など広範な応用が期待される先駆的な取組みであると評価され、映像情報メディア学会映像情報メディア未来賞フロンティア賞を受賞した。超高速OPAの可視光動作と最大偏向角拡大に向けて、可視光用導波路とのハイブリッド化に着手し、E0ポリマー導波路から可視光用導波路への光結合を確認した。また、OPAのさらなる高速動作の実証に取り組み、従来比20倍の高速動作を確認し、世界最速動作を更新した(レーザー学会で招待講演)。</p> <p>・超伝導単一光子検出器(SSPD)の広範な応用展開を目指し、広波長帯域化、高速化、高機能化に取り組んだ。可視から近赤外域における任意の光波長で高い光吸収率を</p>	<p>用いた強磁性ジョセフソン結合を実現などの成果を創出した。</p> <p>・テラヘルツ無線テストベッドに向けたテラヘルツベクトル信号発生技術及び検出技術を開発したこと、テラヘルツ無線計測に向けた広帯域スペクトル計測基盤技術を開発したこと、テラヘルツ帯材料の精密特性評価技術の研究開発を推進した。</p> <p>等、科学的意義が大きい革新性、先導性に富んだ顕著な成果の創出や将来的な成果の創出が期待される実績が得られた。</p> <p>【社会的価値】</p> <p>・Si/有機ポリマハイブリッド超高速光変調器の開発を進め、高効率光変調を確認した。</p> <p>・VSOTA用SSPDを開発し、80%以上の検出効率を実現した。</p> <p>・細胞内の情報分子の位置決定のため</p>
---	---	--	---	---

	<p>ため、生体材料を用いて情報検出部を構成する技術やその機能の制御・計測・評価に必要な技術の研究開発を行う。また、情報処理システムの構築のため、生体材料の応答を的確に処理・解析する信号処理アルゴリズムの構築法の研究開発を行う。</p>		<p>実現するために、誘電体多層膜上に超伝導ナノワイヤを配した構造及びその設計手法を開発し、実素子においてその有効性を確認した(Scientific Reports 誌掲載)。高速化、高機能化においては、極低温環境で動作する単一磁束量子(SFQ)信号処理回路を用いて64ピクセル SSPD アレイの完全動作を実証した(Optics Express 誌掲載)。以上の基盤技術をベースに SSPD の新たな応用展開として宇宙通信への応用を目指し、VSOTA 用 900-1100nm SSPD を開発、80%以上の検出効率を実現した。今後、地上局にシステムを搭載してダウンリンク実証実験を実施する見込み。また、SSPD 技術の技術移転を前提として企業との資金受入型共同研究を開始した。NICT のコア技術である窒化物超伝導デバイスの新たな応用として、長いコヒーレンス時間を持つ超伝導量子ビットの実現を目指し、そのための基盤技術の開発を行った。これまでに、世界初の強磁性ジョセフソン接合の実現(Physical Review Applied 誌掲載)、TiN 薄膜を用いた超伝導共振器においては薄膜が超低損失であることを示す 9×10^9 を超える内部 Q 値を実現、NbN/AlN/NbN 接合を用いた超伝導量子ビットで $1 \mu\text{s}$ を超えるラビ振動の観測等の成果を創出した。</p> <p>(イ)高周波・テラヘルツ基盤技術</p> <ul style="list-style-type: none"> シリコン CMOS によるワンチップ 300GHz 送受信集積回路を実現、100Gbps を超える無線伝送に成功した。これらの成果により、世界最高峰の国際会議 IEEE ISSCC に前中長期計画時の H27 年に続き2回採択の快挙、国際会議 IEEE RFIT で最優秀 Award 受賞、集積回路分野における最高峰の論文誌 IEEE JSCC に2本掲載。300GHz トランシーバの開発と無線伝送実験の成果について、前島密賞を受賞。 GaN 系および InSb 系 HEMT において、遮断周波数 f_r もしくは最大発振周波数 f_{max} で 300 GHz 超を達成する結晶/デバイス構造、試作プロセスに関する基盤技術を確立。特に InSb 系 HEMT は低電圧(0.5 V)駆動時の相互コンダクタンス(g_m)が世界最高水準となる 1.1 S/mm を達成。 超高周波領域での通信・計測システムに適用可能な高安定光源の研究開発を行い、集積化に適した窒化シリコン微 	<p>の色収差補正法を改良することで、超解像顕微鏡法や共焦点顕微鏡法などを用いた生体情報分子の可視化精度の向上に貢献していること。</p> <ul style="list-style-type: none"> 275GHz 以上の周波数についての国際標準化活動を積極的に行い、IEEE の関連国際標準規格の成立や ITU-R 世界無線会議(WRC-19)におけるテラヘルツ周波数帯の移動業務及び固定業務応用への特定化に貢献し、多くの賞を受賞した。 <p>等、社会課題の解決や社会的価値の創出に貢献する顕著な成果や将来的な成果の創出が期待される実績が得られた。</p> <p>【社会実装】</p> <ul style="list-style-type: none"> 超高耐熱 E0 ポリマーの開発に成功し、日米での技術移転やサンプル提供を開始した。 SSPD 技術の浜松ホトニクスへの技術
--	--	--	---	--

			<p>細加工技術を適用した共振器で 10^6 を超える Q 値を達成した。この共振器を用いておよそ 100GHz 間隔の光周波数コムの生成を実現した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・テラヘルツ帯で動作可能な広帯域ベクトル信号発生・検出技術の研究開発を行い、また、広帯域ヘテロダイン検出を駆使したテラヘルツ帯スペクトル計測基盤技術の研究開発を行った。 ・コミュニティ形成や標準化活動に関し、テラヘルツシステム応用推進協議会やテラヘルツテクノロジーフォーラムの運営に積極的に参加すると共に ARIB の活動にも積極的に関与した。また、副議長としての IEEE802.15 Technical Advisory Group THz (TAG THz) への貢献や、WRC-19 へ向けた ITU-R 議題 1.15 (275GHz 以上の利用検討) に関する寄書の入力などを行った。これらの貢献により、ITU 協会賞功績賞と日本規格協会 産業標準化事業表彰経済産業大臣表彰を受賞した。 <p>(ウ) バイオICT基盤技術 情報検出システムの構築に関し、以下の成果を得た。</p>	<p>移転を本格化した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ InSb 系や GaN 系 HEMT において、300GHz 超を達成する試作プロセス等に関する基盤技術を確立した。 ・ バイオ ICT 基盤技術では、微生物の化学物質検知能力の応用研究で民間企業との共同研究を実施したこと。 <p>等、社会実装につながる成果や将来的な成果の創出が期待される実績が得られた。</p> <p>以上のことから、中長期計画を着実に達成した上で、顕著な成果の創出が認められた他、将来的な成果の創出が期待される実績も得られたため、評定を「A」とした。</p>
--	--	--	--	--

			<ul style="list-style-type: none">・ 生体分子が持つ優れた特性を活かした人工素子を構築するために、自然界にある分子モジュールを組み合わせて新しい機能を持つ人工分子を創出する手法の提案を行い、その機能計測と性能評価を遂行した。まず、所望の機能を持つ生体素子構築法の検討と設計に関し、自然界にある分子モジュールから新規分子素子を創製することに成功した (Nature Nanotech. 誌掲載) (H28 年 7 月 28 日報道発表)。次に、新たに構築した DNA と相互作用する新規機能を持つ生体分子素子について、DNA 上を移動する世界最速の人工素子であること、DNA 形状を制御することで運動性が大きく変化することを確認した。さらに、この生体分子素子を DNA カーゴによってシステム化し、DNA 経路上を長距離滑走できる分子トランスポータを構築することに成功し、トランスポータの種類に特異的な経路を認識することを確認した (BBRC 誌掲載 及び論文投稿中)。この一連の成果に関連し、文部科学大臣表彰科学技術賞 (令和 2 年度 研究部門賞) を受賞した。また、タンパク質分子集団の相互作用によるネットワーク構築と、その数理モデル化に成功した。(Biophysical J. 誌掲載) (H28 年 11 月 15 日報道発表)。	
--	--	--	--	--

			<p>・細胞が持つ優れた特性を活かした素子を構築するために、細胞の部品を人為的に構成し、その機能を制御するための基礎技術としての細胞内微小空間構築技術の研究開発をすすめ、これを用いて細胞の応答を計測・評価することで細胞内における情報検出分子機構に関する知見を得た。まず、情報を選別する役割を担う分子に関して、先に同定した情報選別に関わる分子(p62)を除去すると、外来 DNA 導入の効率が向上することを見出した (FEBS letters 誌掲載) (H28 年 7 月 6 日報道発表)。さらに、この外来 DNA 導入効率に関与する p62 分子が、オートファジー (自食作用) を制御する因子であることを解明した (FEBS Open Bio 誌掲載)。細胞内微小空間構築技術に関して、生きた培養細胞の中に核膜孔構成因子の一つを結合させた人工ビーズを導入することで、核膜に似た膜構造で囲まれた微小空間をビーズ周囲に人為的に形成できることを示した (Genes to Cells 誌掲載)。さらに、DNA 結合ビーズをマウス受精卵細胞の中に導入することで、ビーズ周囲に細胞核膜構造を人為形成させることに成功した (Sci. Rep. 誌掲載) (R1 年 6 月 11 日報道発表)。また、ヒトがん細胞 (培養細胞) を用いた細胞内微小空間構築技術の高度化に関して、ビーズ表面に結合させる生体分子の種類を変えることで、望みの性質を持つ生体膜構造体を人為形成させることに成功した (投稿準備中)。</p> <p>これらにより、生体材料によって情報検出部を構成し、機能を制御・計測・評価するための技術基盤を構築した。</p> <p>情報処理システムの構築に関し、以下の成果を得た。</p>	
--	--	--	--	--

			<ul style="list-style-type: none">・生体材料の応答を高精度に計測し、的確に処理・解析するための顕微鏡技術の研究開発をすすめるとともに、得られた顕微鏡技術を用いて、生きた細胞における情報処理機構の分子基盤に関する知見を得た。まず、超解像顕微鏡法において必須となる色収差補正法を開発し、Sci. Rep. 誌に発表した。公開したソフトウェアの改良を進め、補正法の詳細について、JoVE 誌に掲載決定した。さらに、この方法を応用して生細胞内の高精度距離計測に成功した (Plos Genet 誌掲載)。また、超解像顕微鏡法の改良を進め (Nature Protocols 誌掲載)、光学収差による影響を低減し、従来法の 1.3 倍程度の分解能を達成した (見込み)。生きた細胞における情報処理機構の分子基盤に関して、大小 2 つの細胞核をもつテトラヒメナ細胞において、分子分配の要となる細胞核の核膜孔複合体構成タンパク質を網羅的に同定した (J. Cell Sci. 誌掲載)。また、細胞核種特異的分配シグナルを同定し、テトラヒメナ細胞における核タンパク質の分配機構を解明した (Genes to Cells 誌掲載)。さらに、分裂酵母細胞を用いて、染色体上に形成された RNA-タンパク質複合体が、液-液相分離したドロップレットの相互認識を介することで、染色体間の相互認識を担っていることを明らかにした。 (Nat. Commun. 誌掲載) (報道発表、R1 年 12 月 10 日)。・昆虫脳の応答を的確に計測・解析・制御する手法の研究開発として、昆虫脳での記憶形成モデルの構築をすすめるとともに、神経興奮を外部から制御するシステム及び細胞レベルで記憶時の変化を実時間観察するシステムを構築した。また、昆虫脳における性差創出の分子機構に関して、Lola29 タンパク質の N 端ドメインの除去が脳の雄性化を阻害することを実証した (Nat. Commun. 誌掲載)。	
--	--	--	--	--

			<p>・生体材料の応答を的確に処理・解析して化学物質に付随した情報を抽出するための手法の設計、評価に関して、化学物質に対するバクテリア出力波形の処理法を検討し、種々の化学物質に対して細胞が発生する複雑な応答を、幾何学的な特徴に注目した直線の集合として数値化する手法を開発した（特許出願：特願 2018-001682）。また、バクテリア細胞の化学物質への応答を機械学習で予測する手法を開発した（Front. Bioeng. Biotechnol. 誌掲載）。さらに、バクテリアセンシングの化学物質混合物に対する識別能の評価を実施し、成分が未知の混合化学物質を有意に識別できることを実証した。一連の活動に関し、企業との共同研究において、味質評価への応用に関する検討・評価を実施した。これらで用いたバクテリアによる分析技術に関する特許が登録された（特許第 6631771 号 「微生物分析装置および微生物分析法」）。</p> <p>これらにより、生体材料の応答を的確に処理・解析して情報を抽出する信号処理法の基盤を構築した。</p>	
--	--	--	---	--

なお、この自己評価に関しては、国立研究開発法人情報通信研究機構の研究活動等に関する外部評価委員会（総括評価委員会）において、以下のような意見をいただいている。

1. 開催日

令和 2 年 5 月 15 日(金) 15 時～18 時

2. 委員名簿

酒井 善則	委員長	東京工業大学 名誉教授
安浦 寛人	委員	九州大学 理事・副学長
國井 秀子	委員	芝浦工業大学 客員教授
安藤 真	委員	東京工業大学 名誉教授
渡辺 文夫	委員	Fifth Wave Initiative 代表
有川 節夫	委員	放送大学学園 理事長
松井 充	委員	三菱電機株式会社 開発本部 役員技監
太田 勲	委員	兵庫県立大学 学長
飯塚 久夫	委員	株式会社ぐるなび 常勤顧問

3. 委員長及び委員からの意見

- ・全体として、自己評価の評点をもう少し上げて良いのではないか。

例えば、大項目については、センシング基盤分野については、見込み・単年度共に A となっているが、いくつかの S クラスの成果が含まれており、本分野についても S クラスにかなり近いと思う。統合 ICT 基盤分野については、見込み・単年度共に B となっているが、A に近いと思う。フロンティア研究分野については、見込み・単年度共に A となっているが、かなり S クラスの研究が含まれている。オープンイノベーション分野については、見込み・単年度共に B だが、非常に良い部分もある。

- ・（フロンティア研究分野について）中項目のフロンティア ICT 領域技術の単年度は A に相当するような成果をあげていると思う。社会実装について、社会実装が今、直接できていないという観点から自己評価は低く付けられているが、社会実装できる技術が既にできており、それに向けた取り組みも積極的に行っていることから、もっと評価しても良いと思う。

（全体を通して）

- ・社会実装という評価軸は科学的意義とは異なり評価されづらい。しかも、これからの世の中で重要になってくるので、このためしっかりと評価し、モチベーションの維持等を含めて、頑張って社会実装に取り組んでもらいたい。
- ・それぞれの技術分野で、様々な社会的課題に対して研究を行っており、技術分野だけでなく、社会課題別の視点でのアピールなど、多面的なまとめ方で情報発信を行うことが重要ではないか。
- ・コロナ騒動の中で、世界が一気に社会構造や産業構造、経済活動が大きく変化していく中で、新しい社会の在り方を NICT から描いていただきたい。
- ・全体の印象として、とても大きな成果を上げている。基礎研究の分野では、様々な賞を受賞しており、科学技術的に大変意義のある成果を達成している。

国立研究開発法人情報通信研究機構 第4期中長期目標期間終了時見込評価 項目別自己評価書(No.6 研究開発成果の最大化)

1. 当事務及び事業に関する基本情報			
中長期目標の当該項目	Ⅲ. ー2. 研究開発成果を最大化するための業務		
関連する政策・施策	—	当該事業実施に係る根拠 (個別法条文など)	国立研究開発法人情報通信研究機構法第 14 条第 1 項第7号、附則第8条第2項
当該項目の重要度、難易度		関連する研究開発評価、政策評価・行政事業レビュー	行政事業レビューシート ****

2. 主要な経年データ												
主な参考指標情報							主要なインプット情報(財務情報及び人員に関する情報)※5					
	基準値等 (前中長期目標期間最終年度値)	28 年度	29 年度	30 年度	元年度	2 年度		28 年度	29 年度	30 年度	元年度	2 年度
機構内外のテストベッドの利用件数	79	102	127	140	178		予算額(百万円)	8,233	10,195	10,208	15,029	
機構外との共同研究数 ※1	—	429	510	559	582		決算額(百万円)	5,550	10,040	8,776	8,788	
機構外との研究者の交流数 ※1、※2	—	589	665	671	610		経常費用(百万円)	6,188	8,363	8,930	9,750	
産学官連携の案件数 ※1、※3	—	—	27	27	30		経常利益(百万円)	27	△169	△47	△183	
標準化会議等への寄与文書数	287	242	208	229	211		行政サービス実施コスト(百万円)	7,176	9,927	8,791	10,928	
実践的サイバー防御演習の実施回数	—	39	100	107	105		従事人員数(人)	68	71	71	63	
実践的サイバー防御演習の受講者数 ※4	—	1,539 (1,170)	3,009 (3,000)	2,666 (3,000)	3,090 (3,000)							

※1 参考指標情報として平成 29 年度から追加。

※2 機構外からの協力研究員、研修員及び招へい専門員並びに機構が連携大学院制度に基づき派遣した教員の総数。

※3 耐災害 ICT 研究センターにおける実績。

※4 ()内に、総務省との契約において定められた目標値を記載。

※5 予算額、決算額は支出額を記載。人件費については共通経費分を除き各業務に配賦した後の金額を記載。従事人員数は、常勤職員の本務従事者数。

3. 中長期目標、中長期計画、主な評価軸、業務実績等、中長期目標期間評価に係る自己評価				
中長期目標	中長期計画	主な評価軸（評価の視点）、指標等	法人の主な業務実績等	自己評価
<p>2. 研究開発成果を最大化するための業務</p> <p>機構の研究開発成果を最大化するためには、研究開発業務の直接的な成果を実用化や標準化、社会実装等に導くための取組が不可欠である。このため、1. の「ICT分野の基礎的・基盤的な研究開発等」の業務と連携し、研究開発成果の普及や社会実装を常に目指しながら、以下の取組を一体的に推進するものとする。また、機構の研究開発により創出される直接的な成果の創出に加えて、我</p>	<p>2. 研究開発成果を最大化するための業務</p> <p>ICT分野における厳しい国際競争の中で、我が国のICT産業の競争力を確保するためには、研究開発から社会実装までの加速化を図ることが重要である。このため、従来のリニア型の研究開発ではなく、基礎研究段階の研究開発と同時に研究開発成果の検証も行うことにより研究開発成果の早期の橋渡し、市場投入を目指した技術実証に一体的に取り組み、一気に研究開発成果の実用化やビジネスモデルを踏まえたシステム化を目指すことが必要になっている。</p> <p>一方、社会経済の分野において世界最先端のICTを活用した新たな価値創造を実現するためには、機構の研究開発成果について、実用化前に異分野・異業種の利用者を利用してもらうことで広範なオープンイノベーションを創発することが必要であり、そのための社会実証の取組も重要となっている。</p>	<p><評価軸></p> <ul style="list-style-type: none"> ● ハイレベルな研究開発を行うためのテストベッドが構築されているか。 ● 機構内外の利用者にとりテストベッドが有益な技術実証・社会実証につながっているか。 ● 取組がオープンイノベーション創出につながっているか。 ● 取組が耐災害ICT分野の産学官連携につながっているか。 ● 取組が標準化につながっているか。 ● 取組が研究開発成果の国際 	<p><主要な業務実績></p> <p>(評価と関連が深い主要な業務実績及び将来の成果の創出の期待等について具体的かつ明確に記載する)</p>	<p>2. 研究開発成果を最大化するための業務</p> <p>この分野では次の活動を含む業務を行った。</p> <p>「2-1. 技術実証及び社会実証を可能とするテストベッド構築」においては、既存のテストベッドを統合し、IoT ゲートウェイを導入してユーザーのデバイスから容易にテストベッドを利用できる環境を整備するなどした。「2-2. オープンイノベーション創出に向けた取組の強化」においては、地域実証型研究開発の成果を社会実装に結び付けるための取組を強化し、いくつか成功事例が出てきつつある。「2-3. 耐災害ICTの実現に向けた取組の推進」においては、地域 ICT オープンプラットフォームを用いて、地方の課題解決にむけた実証を進めるなどした。「2-4. 戦略的な標準化活動の推進」においてはテラヘルツ帯の割当に向けた標準化活動を推進し、WRC-19 で決定に至るなどできた。「2-5. 研究開発成果の国際展開の強化」においては、日米・日欧の国際</p>

<p>が国のICT産業の競争力確保も念頭に置いた戦略的・総合的な取組も推進するものとする。</p> <p>なお、本業務に係る評価については、取組の性格・内容等に応じて別紙2から適切な評価軸及び指標を用いて実施する。</p>	<p>また、機構の目的である研究開発成果の最大化という観点からも、産学官連携の強化等によるオープンイノベーションの一層の推進を図り、研究開発成果を実用化や標準化、国際展開、社会実装等に導くために取り組んでいくことが必要である。</p> <p>このため、1. の「ICT分野の基礎的・基盤的な研究開発等」の業務と連携し、研究開発成果の普及や社会実装を常に目指しながら以下の取組を一体的に推進する。また、機構の研究開発により創出される直接的な成果の創出に加えて、我が国のICT産業の競争力確保も念頭に置いた戦略的・総合的な取組も推進する。</p>	<p>的普及や日本企業の国際競争力強化につながっているか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 取組が最新のサイバー攻撃に対応できるものとして適切に実施されたか。 ● 取組がIoT機器のサイバーセキュリティ対策の一環として計画に従って着実に実施されたか。 <p><指標></p> <ul style="list-style-type: none"> ● 標準や国内制度の成立寄与状況（評価指標） ● 標準化や国内制度化の寄与件数（モニタリング指標） ● 国際展開の活動状況（評価指標） ● 演習の実施回数又は参加人数（モニタリング指標） ● 調査したIoT機器数（モニタリング指標） ● IoT機器調査に 	<p>共同研究で新分野（計算論的神経科学等）を開始したほか、アジアでは台湾との共同研究を開始し、ASEAN IVO の活動を全10か国約60機関の活動へと拡大などした。「2-6. サイバーセキュリティに関する演習」においては、CYDERとサイバーコロッセオを計画通りに実施した。「2-7. パスワード設定等に不備のあるIoT機器の調査」においては、実施計画にしたがい、また総務省等とも調整のうえで、適切に実施できた。</p> <p>以上のことから、中長期目標期間を着実に達成する成果の創出が認められた他、将来的な成果の創出が期待される実績も得られたため、評定を「B」とした。</p> <p>個別の評定と根拠は、以下の各項目に記載のとおりである。</p>	<p>共同研究で新分野（計算論的神経科学等）を開始したほか、アジアでは台湾との共同研究を開始し、ASEAN IVO の活動を全10か国約60機関の活動へと拡大などした。「2-6. サイバーセキュリティに関する演習」においては、CYDERとサイバーコロッセオを計画通りに実施した。「2-7. パスワード設定等に不備のあるIoT機器の調査」においては、実施計画にしたがい、また総務省等とも調整のうえで、適切に実施できた。</p> <p>以上のことから、中長期目標期間を着実に達成する成果の創出が認められた他、将来的な成果の創出が期待される実績も得られたため、評定を「B」とした。</p> <p>個別の評定と根拠は、以下の各項目に記載のとおりである。</p>
<p>(1)技術実証及び社会実証のためのテストベッド構築</p> <p>ICT分野における厳しい国際競争の中で、我が国のICT産業の競争力を確保するためには、研究開発から社会実装までの加速化を図ることが重要である。このため、従来のリニア型の研究開発ではなく、基礎研究</p>	<p>2-1. 技術実証及び社会実証を可能とするテストベッド構築</p> <p>機構内外におけるICT関連研究開発成果の技術実証及び社会実証を推進するためのテストベッドを構築する。また、機構内外からのテストベッドの利活用を促進し、広範なオープンイノベーションを創発する。これらを実現するため、具体的には以下のような取組を行う。</p> <p>機構が有する研究開発テストベッドネットワーク、ワイヤレステストベッド、大規模エミュレーション基盤、複合サービス収容基盤等のテストベッドを融合し、IoTの実証テストベッドと</p>	<p>的普及や日本企業の国際競争力強化につながっているか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 取組が最新のサイバー攻撃に対応できるものとして適切に実施されたか。 ● 取組がIoT機器のサイバーセキュリティ対策の一環として計画に従って着実に実施されたか。 <p><指標></p> <ul style="list-style-type: none"> ● 標準や国内制度の成立寄与状況（評価指標） ● 標準化や国内制度化の寄与件数（モニタリング指標） ● 国際展開の活動状況（評価指標） ● 演習の実施回数又は参加人数（モニタリング指標） ● 調査したIoT機器数（モニタリング指標） ● IoT機器調査に 	<p><主要な業務実績></p> <p>2-1. 技術実証及び社会実証を可能とするテストベッド構築</p> <p>超高速研究開発ネットワークテストベッド(JGN)、大規模エミュレーションテストベッド(StarBED)、大規模IoTサービステストベッド(JOSE)、広域SDNテストベッド(RISE)等の各テストベッドの運用管理を統合し、「NICT 総合テストベッド」としてサービスを展開することにより、エミュレーションから実基盤まで、様々なIoT実証実験に対応し、技術実証と社会実証の一体的推進可能なテストベッドを構築し、運用を開始した。</p> <p>テストベッドの機構内外の利活用の活性化、融合利用、統合管理として、以下を実施した。</p>	<p>2-1. 技術実証及び社会実証を可能とするテストベッド構築</p> <p><テストベッド構築></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 既存のテストベッド(JGN/JOSE/RISE/StarBED)を統合し、IoTゲートウェイを導入してユーザーのデバイスから容易にテストベッドを利用できる環境を整備し、技術実証と社会実証を同時に進めることができる総合テストベッドを構築するという困難なプロジェクトを計画的に推進して実現し、ユーザーの利便性を向上させたこと、並びに、IoTゲートウェイ、キャラバンなどの整備とIoT推進フォーラムテストベッド分科会の活動で、多く

<p>段階の研究開発と同時に研究開発成果の検証も行うことによって研究開発成果の早期の橋渡し、市場投入を目指した技術実証に一体的に取り組み、一気に研究開発成果の実用化やビジネスモデルを踏まえたシステム化を目指すことが必要になっている。</p> <p>一方、社会経済の様々な分野において世界最先端のICTを活用した新たな価値創造を実現するためには、機構の研究開発成果について、実用化前に異分野・異業種の利用者にも利用してもらうことで広範なオープンイノベーションを創発することが必要であり、そのため社会実証の取組も重要となっている。</p> <p>したがって、機構の研究開発成果を最大化するため、これまでのテストベ</p>	<p>しての利用を含め、技術実証と社会実証の一体的推進が可能なテストベッドとして運用する。</p> <p>また、テストベッドの円滑な利用促進を図る観点から、運営面において、機構内にテストベッドや施設等を集中的に管理する体制を整備し、テストベッド等の利活用を円滑に進めるためのテストベッド等に係る利用条件の整備や手続きを検討するとともに、広く周知広報を行うなどにより、利用手続処理を確実に実施し、テストベッド等の利活用を活性化させる。</p> <p>社会実証の推進においては、機構内にプライバシーのような社会的な課題、社会的受容性等の検証への対応方策等について検討する体制を整備し、社会実証の実施に当たって留意すべき事項に関するガイドライン等を作成する。</p> <p>さらに、最先端のICTを実基盤上に展開して実現性の高い技術検証を行う大規模実基盤テストベッドと、模擬された基盤を一部組み合わせることで多様な環境下での技術検証を行う大規模エミュレーション基盤テストベッドを構築するとともに、それらを相互に連携運営することにより、機構内外におけるICT関連研究開発成果の技術実証を推進する。</p> <p>大規模実基盤テストベッドでは、超高速通信環境において多様な通信に対応したネットワーク制御や大容量高精細モニタリング、分散配置されたコンピューティング資源及びネ</p>	<p>関する業務の実施状況(評価指標)</p> <p>等</p>	<ul style="list-style-type: none"> • JGNについては、SINET5との相互接続点を増加(2地点→5地点)し、全国各地の大学からJGNにアクセスしやすいネットワーク構成とした。また、SINET5経由の利用申請手続を整備することにより、円滑な手続を可能とした。 • 申請・相談窓口を一元化しユーザーの利便性を高め、融合利用を加速した。様々な実証ニーズに対応するため、統合環境においてユーザー側をネットワーク設定作業から解放するIoTゲートウェイ、スマートIoT推進フォーラムテストベッド分科会内によりお試し利用環境を提供するNICT総合テストベッド活用研究会等の新たな仕組みや外部連携体制の導入、アジア初となる東京、香港、シンガポール間の100Gbps回線による広帯域国際実証環境をSingAREN、NSCC(ともに、シンガポールの組織)と共同で構築した。 • 計画より2年前倒して平成29年度からサービスを開始したIoTゲートウェイを活用することにより、IoTデバイスからクラウドまで一気通貫のIoT実証環境を構築し提供を開始した。具体的には、ユーザーが開発したIoTサービスとNICT総合テストベッドにおける複数のクラウドをユーザーによる設定の手間を省いて連携させる環境を構築し、ユーザーの利便性を格段に向上させた。 • IoTゲートウェイに加え、スマートIoT推進フォーラムテストベッド分科会が提案したキャラバンテストベッド、LPWAテストベッド、活用研究会を新たに実現することによって、技術実証と社会実証の一体的推進を可能とする環境を構築し提供を開始した。キャラバンテストベッド、LPWAテストベッド、活用研究会の提供により新たに計17のプロジェクトを創出した。 • 総務省のSCOPEにおける活用促進に向けた総合通信局との連携や各種説明会・展示会におけ 	<p>の潜在的利用者に魅力あるものになったことを高く評価した。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 4つのテストベッド(JGN/JOSE/RISE/StarBED)に加えIoTゲートウェイ、M2Mクラウド基盤、キャラバン、LPWA、超高精細モニタリングを融合したことや、P4テストベッド試作により次世代SDNのテスト環境を整備している点を評価した。 • IoTゲートウェイを早期に展開したことを評価した。 • 大規模実基盤テストベッド/大規模エミュレーション基盤テストベッドを定常的に利用可能としたことを、高く評価した。 • IoTデバイス模倣基盤のAOBAKO、シミュレーションとエミュレーションの連携基盤Smithsonian、IoTテストベッドをより容易に利用できるUI機能などを開発してStarBEDに実装し、幅広いIoT検証に対応できるようにしたことを評価した。 • Smithsonianを用いて、人の移動と災害状況を踏まえた減災オープンプラットフォームARIAを構築したように、複数のシミュレータとエミュレータの連携は今後の研究分野として重要である。 <p>等、成果の創出や将来的な創出が期待される実績が得られるハイレベルな研究開発を行うためのテストベッドが構築された。</p> <p><実証></p> <ul style="list-style-type: none"> • 様々なサービスやシステムの商品化
--	---	----------------------------------	---	---

<p>ッドに係る取組を一層強化し、上記の技術実証及び社会実証に対応したテストベッドの構築及び運営に取り組むものとする。</p> <p>なお、テストベッドを用いた社会実証の実施に当たっては、社会実証におけるプライバシー等のような社会的な課題、社会的受容性等の検証への対応方策等について検討する仕組みを機構内の体制に位置づけるものとする。また、テストベッドを機構内外の利用者に円滑に利用させるためには、テストベッドに係る利用条件の整備や利用方法の周知広報、利用手続の処理等の業務が必要であることから、機構全体として、これらの業務を集中的に管理するものとする。</p> <p>さらに、ICT分野の急速な技術革新に伴いテストベッド自体が新技術に迅</p>	<p>ットワーク資源の統合化等の実証基盤技術を確立する。</p> <p>大規模エミュレーション基盤テストベッドでは、従来のICT機器に加え、IoT時代の基盤となるセンサーや情報端末、移動体を物理的・論理的に模擬することを可能とする実証基盤技術を確立する。</p> <p>なお、テストベッドの構築においては、フォーラムや研究会等の活動を通じ、外部利用者の実証ニーズを踏まえるとともに、機構内の他の研究開発の実証にも対応する。また、海外の研究機関等と連携し、テストベッド基盤の相互接続により国際的な技術実証を推進する。</p>		<p>る情報発信・広報活動等を積極的に実施し、周知活動の強化を図った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・優良事例をホームページに掲載し、テストベッドの利活用事例、効果等を対外的に発信することによって、テストベッドの更なる利活用を推進した。 ・令和元年度には、開発した IoT 大容量高精細モニタリングを JGN に接続し、JGN 基幹ネットワーク上の実トラフィックを対象に動作する定常サービスを開始し、利用者のトラヒックやアプリケーションの挙動解析支援に貢献できるようにした。 ・サーバ・ネットワーク資源の保守・運用等に関わる効率化を下記のとおり実現した。 ・NICT 総合テストベッドとは別に運用していた IoT データ収集・分析基盤である M2M クラウド基盤の機能を、大規模 IoT サービステストベッド JOSE に統合した。 ・AI データテストベッドを NICT 総合テストベッドに組み入れて一元管理を開始し、テストベッドの統合管理をさらに推進した。 ・NICT 総合テストベッドが管理する計算機システムに約 40 件の機構内研究部署によるプロジェクトのシステムを収容した。 <p>構築した NICT 総合テストベッドは、その過程で、ローカルおよびメトロポリタンネットワークの最新の動向を広く議論する伝統的な国際会議 IEEE LANMAN 2017 (第 23 回 IEEE International Symposium on Local and Metropolitan Area Networks) における基調講演、クラウドコンピューティングと先進ネットワークの融合について広く議論する国際会議 IEEE CloudNet 2018 (第 7 回 IEEE International Conference on Cloud Networking) 特別招待セッションなどの講演で世界に広くアピールした。</p> <p>以上の取組により、中長期計画の主要参考指標</p>	<p>や実運用化に繋がる実証を推進した点を評価した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各種説明会・展示会における情報発信等の周知活動の強化などにより、テストベッド利用件数・利用者が増えたことを評価した。また、機構側の責任の所在を明らかにしたり、申請・相談窓口の一本化により利用者の利便性を向上するなどの改善を評価した。 ・スマートIoT 推進フォーラム テストベッド分科会と連携し、IoT キャラバンテストベッドや LPWA テストベッドなどの新たなサービスを打ち出し、新たな案件を拡大していることを評価した。 ・ケーブル SDN の実証、交通安全サービス、高齢者/子供見守りサービス、タクシー乗客発見支援サービスなど、企業や自治体を巻き込んだ形で実施したことを評価した。 <p>等、機構内外の利用者にとりテストベッドが有益な技術実証・社会実証につながる成果の創出や将来的な成果の創出が期待される実績が得られた。</p> <p><イノベーション創出></p> <ul style="list-style-type: none"> ・様々なサービスやシステムの商品化や実運用化の実証を支援した点を評価した。 ・ARIA が社会的に高い評価を得た。SDN 応用ケーブルテレビ高度化(塩尻市)の実験成功、IoT 無線ルータの商用化(見込み)、省電力 GPS モジュールや WiWi アラートの技術移転、実用化検討開始、タクシー会社の 24 時間乗客発見サービスのテスト運用開始
---	---	--	--	---

速かつ柔軟に対応する必要があることから、ネットワーク技術に係るテストベッド及び大規模エミュレーションを可能とするテストベッドに関する実証基盤技術を研究開発するものとする。実証基盤技術の研究開発に際しては、機構内の研究開発課題のための実証に的確に対応するとともに、技術実証及び社会実証の外部利用のニーズも十分に踏まえるものとする。また、外国の研究機関等とのテストベッドの相互接続によって国際的な研究環境を整備することにより、機構の研究開発成果の国際展開を一層推進するものとする。

である1年間の「テストベッド利用件数」を、平成28年度以降着実に増加（102件→178件）させ、期間累計は257件となった。また、「商品化+実運用化」の期間累計（予定を含む）は52件となった。

テストベッド利用状況データ

		平成 28年度	平成 29年度	平成 30年度	令和 元年度
◆利用状況 <small>注：分類は重複を含んでいるため、合計は利用件数にならない。</small>	テストベッド利用件数	102	127	140	178
	新規ユーザー	7	10	12	10
	社会実証	19	21	32	40
	IoT関連	46	58	64	73
	複数テストベッド利用	36	46	37	41
	SINET経由	19	21	24	32
	国際回線利用	8	13	14	16
◆広報活動	総合テストベッド周知活動	95	105	110	112
	内外のイベント参加数	10	15	16	21
◆国際連携	共同研究	1	1	1	1
	MoU	9	11	12	13
	国際的な技術実証テーマ	8	14	15	18
◆ユーザーによる成果 ユーザーアンケート による集計結果	商品化数(含む予定)	11	5	11	11
	実運用化数(含む予定)	22	7	15	19
	論文数(掲載+掲載決定)	89	15	30	52
	国際会議	72	48	66	75
	外部発表数	200	86	111	79

テストベッドの効果の定量化については、具体的な試算方法を検討し、直近の効果を試算することにより、NICT 総合テストベッドの社会的有用性について予備的に検証した。

テストベッド利活用の実験や優良事例の発信として、例えば、以下を実施した。

(産学官連携した全国規模の実証実験)

- 機構が主催となり、さっぽろ雪まつりで、JGNを用い、産学官の連携により、全国規模の非圧縮 8K 映像伝送の実証実験を行った。平成 30 年 2 月に、49 組織と共同で、100Gbps を超える 8K 非圧縮映像および多チャンネルハイレゾ音声を、JGN を含む複数の 100Gbps 回線を用いてマルチパス分割伝送する世界初の実証実験に成功した。令和 2 年 2 月に 57 組織が連携す

など、地域課題解決に繋がる新しい試みが実用化に繋がる見込みが出てきたことを評価した。

- 外部ニーズを踏まえた改良やお試し利用環境の提供の開始などで利用バリアを下げ新たな利用の拡大を実施している点を評価した。
- テストベッドの利活用事例を取りまとめて HP で発信していることを高く評価した。
- 地域実証の実施による関連企業の新規ビジネスへの着手を評価した。
- 千曲市あんずプロジェクトで関係機関と連携し地域課題解決実証実験から地域での自走につなげる取り組みを積極的に実施していることを評価した。
- 今中長期計画期間中のテストベッド利用件数は累計 257 件となり、累計 52 件の商品化又は実運用化を達成していることを評価した。
- 公衆網整備途上環境においてコネクテッドカーを実現するため、車車間通信と狭帯域モバイル通信をハイブリッドで利用する DTN 制御アルゴリズムを開発し、実車走行実験を実施している点を評価した。
- StarBED 上に実装した実証基盤技術を活用し、IoT デバイス模倣基盤の AOBako、減災オープンプラットフォームの ARIA、JAianなどを大学と連携して開発し、デモ展示で高い評価を得て、各種の賞を受賞していることを評価した。

等、オープンイノベーションにつながる成果の創出や将来的な成果の創出が

			<p>ると共に、大容量高精細モニタリングの100Gbps実装の基本機能、性能の検証を行った。</p> <p>(企業や自治体と連携した地域実証実験)</p> <ul style="list-style-type: none"> 仮想化技術SDN (Software Defined Networking)を応用して、ケーブルテレビ用パケット中継装置を開発した。さらに、その装置を用い、長野県塩尻市において、塩尻市、ケーブルテレビ事業者及び通信基盤構築事業者と共同で、塩尻市において、JGN、JOSEに加え、実際のケーブルテレビ基盤も用いる技術実証環境を構築し、ケーブルテレビ基盤の高度化のための実証実験を実施した。 長野県千曲市において、IoT地域実証実験として、LoRaを用いた市内全域通信環境実験を行った。この結果に基づき、千曲市、大学および民間企業6社との間でLPWA実験に関する覚書を交わし、環境・教育・防災等の社会実装を視野に入れた実験(千曲市あんずプロジェクト)を開始した。IoT型地域実証実験として、千曲市において、住居エリア全域をカバーする10か所のLoRa中継局を設置した。中継局に機構独自開発の映像IoTカメラシステムを設置し、AIを用いた降雪自動検出アプリケーションの性能検証を開始した。また、同中継局に気象センサーを設置し、市内の詳細な気象環境のモニタリングを開始し、令和元年台風19号接近時の市内各地での風向風速が異なること、データを用いた被害評価が可能であることを確認した。 <p>(有効情報の一般提供に関する取組)</p> <ul style="list-style-type: none"> オープンイノベーション創出に向けた取り組みとして、JGNを活用した、気象衛星ひまわりデータのフル解像度でのリアルタイム可視化Webを用いた気象情報提供や耐災害利用システムの社会実装を進めた。特に、総合テストベッドを用いた生活者への普及活動に繋がる取組として、大手気象予報会社が技術移転済みの同Webを 	<p>期待される実績が得られた。</p> <p><国際展開></p> <ul style="list-style-type: none"> アジア初の国際回線100Gbps化を実現し、海外機関と連携して100Gbps以上の全世界的な回線接続環境を整備した。また、SuperComputing、さっぽろ雪まつりでの8K映像伝送実験、Data Mover Challenge、ひまわりリアルタイムWebのアジア展開等、計18件の国際的な技術実証に活用されたことを評価した。 APR、AER形成などの新しい国際テストベッド構築と国内外の研究教育機関との連携強化に努めていることを高く評価した。 SINETとも連携しつつ海外回線の効率化を進めていることを評価した。 SC、SCAsiaへの出展と実証実験により研究開発成果の国際的なアピールに努めていることを評価した。 ひまわりリアルタイムWebのアジア展開などが機構の研究開発成果の国際的普及につながっていることを評価した。 <p>等、研究開発成果の国際的普及や日本企業の競争力強化につながる成果の創出や将来的な成果の創出が期待される実績が得られた。</p> <p>以上のことから、中長期目標期間を着実に達成する成果の創出が認めら</p>
--	--	--	--	--

			<p>ベースとした天気予報番組をオンライン配信した(ほぼ毎日)。また、大型台風接近時には TV 報道機関が同 Web 映像を用いて台風報道を行い、その結果台風 19 号時は 50 万を超えるアクセスがあった。令和元年の年間を通しては、300 万を超えるアクセスがあった。</p> <p>(JOSE に展開した M2M クラウド基盤を活用したオープンイノベーション創出につながる取組)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ <u>“データの地産地消”概念に基づいた携帯電話網に頼らない地域 IoT サービス基盤を設計・開発</u> <p>携帯電話網に頼ることなく、様々な地域の IoT サービスを提供可能とするネットワーク基盤として、“データの地産地消”概念を提案し、同概念に基づいたネットワーク基盤の構成要素となる Wi-SUN と多様な無線技術を融合活用する IoT デバイスやシステムの開発と実用化活動を推進した。</p> <p>Store-Carry-Forward 原理による“すれ違い通信”ネットワークの有効性を理論・シミュレーション双方の視点から再確認した。Wi-SUN モジュール搭載タクシー 26 台の“ながら”すれ違い情報配信実証実験を行い、12 時間で 400 km² を超えるエリアにおける見守り等に関わる地域情報の収集能力を確認できた。</p> <p>地域モビリティや一般家屋を含めた様々な地域に散在するに固定拠点到に搭載すれば、地域の見守り情報などに関わる情報の配信や収集を効率的に行うことが可能となり、また家庭のスマートメータ基盤ともつながる機構知財が活用された“すれ違い IoT 無線ルータ”を 1 万円台で商用化できる目処がたった。</p> <p>位置情報を活用した見守りや交通安全のサービス向けデバイスとして開発した省電力 GPS モジュールが電子機器メーカーに技術移転され、ロケーショントラッカー製品としての開発・</p>	<p>れた他、将来的な成果の創出が期待される実績も得られたため、評定を「B」とした。</p>
--	--	--	---	--

			<p>販売準備に至った。また、開発と実証実験を行った同 GPS モジュールと Wi-SUN 通信機能を統合利活用する交通安全システム (WiWi-Alert) の実用性に興味を示したロボット事業を支援するシステムインテグレーション事業者が、移動物体の相互位置検出と衝突回避の基礎技術として実用化の検討を開始した。</p> <ul style="list-style-type: none"> 東京墨田区を中心とした営業中の飲料自動販売機、タクシーに“すれ違い IoT 無線ルータ”を搭載して地域レベルでの社会実証エリアを展開 大手飲料メーカーの協力を得て、東京都墨田区内に設定中の営業中飲料自動販売機 50 台～100 台と、同区内に事業所をもつタクシー会社の営業中タクシー65 台に Wi-SUN を活用した IoT 無線ルータや無線試験電波発信機を搭載し、これらが相互に無線で情報を共有する“データの地産地消”ネットワークの技術的動作検証を行い、また交通安全サービスや、高齢者/子供見守りサービスの他、タクシー乗客発見支援サービスといった IoT サービスとしての実用性を検証するための実証実験を実施した。その内容は報道発表(平成 29 年 5 月)を実施すると同時に、多数の新聞・雑誌・TV での紹介があるなどの社会的な反応が得られた。また、CEATEC2018 における上記サービスに関わる展示を実施した際には 360 名分のアンケートを取得し、“データの地産地消”ネットワークに企業や個人として参画し、地域の安心安全に貢献することの受容性等に関わる社会の反応を多数収集した。 <p>また、上記大手飲料メーカーは、上記活動の成果を踏まえ、機構が開発した“すれ違い IoT 無線ルータ”を搭載した飲料自動販売機による塾生見守りサービスの自ら運用を想定したアプリケーション開発に着手した(令和元年度)。併せて、上記墨田区内タクシー会社が 24 時間稼働の乗客発見支援サービスのテスト運用を開</p>	
--	--	--	--	--

			<p>始した(令和元年度)。</p> <ul style="list-style-type: none"> 富山県黒部市で、車輻に“すれ違い IoT 無線ルータ”を搭載し、見守り対象高齢者(20 世帯)の外出減少を、周辺を走行中の地域車輻で見守るサービスの社会的受容性に関する実証実験を実施 <p>富山県黒部市社会福祉協議会およびシステム開発企業と、「地域福祉分野における ICT 利活用の研究及び、くろベネット事業での ICT 活用実験に関する協定」を締結し(平成 31 年 4 月)、富山県黒部市における実高齢者世帯 20 世帯を対象として、外出減少中の世帯に福祉協議会スタッフ等が迅速かつ効率的に気づくことを可能とする見守り実証実験を実施した。実証実験では、協力高齢者世帯 20 世帯の家屋内に機構が開発した屋内設置用すれ違い IoT 無線ルータを設置すると同時に、社会福祉協議会が運用するバス 2 台・事業用車両 4 台に加え、更に同市内のゴミ収集事業社の協力も得ることで、ゴミ収集用トラック 4 台・業務用車両 4 台に車載用すれ違い IoT 無線ルータを搭載し、高齢者世帯の外出減少状況を効率的に見守ることが可能であることが確認できた。</p> <p>黒部市社会福祉協議会は実証実験結果に基づく社会的受容性の調査研究成果報告書を作成した(令和元年度末)。</p> <p>上記実証実験の実施については報道発表(令和元年 9 月)を行い、多数の新聞等での反応が得られた。また、CEATEC2019(令和元年 10 月)では、これら実証実験に関わるシステム展示も行い、サービスの社会的受容性に関するアンケート取得(360 名)を通じて、90%以上の一般市民が地域社会への貢献のために機構開発の IoT 無線ルータを家庭に設置することに合意すると回答するなど、社会的受容性に関わる反応を収集した。</p> <p>(大学との共同実証研究の利用)</p> 	
--	--	--	--	--

			<ul style="list-style-type: none">• 大学との共同実証研究を通じて、パーソナルデータ利活用の合意形成手法を作成・評価し、社会的受容性を得られる範囲や方法論の明確化に貢献した。また、廉価・単機能な IoT センサー網に適した安全対策技術として、攻撃をネットワーク機器上のトラヒックパターン分析により検出・防御するシステムを提案し、検知時間 3 秒以内で切断・接続・ポートスキャンを検知できることをシミュレーションにより確認した <p>機構内にパーソナルデータ取扱研究開発業務審議委員会を設置し、機構が関与する研究開発においてパーソナルデータを取り扱う前にプライバシー侵害のリスクを判定し、リスクが高いと判定した研究開発課題についてリスク低減策を検討して対応する等の体制を整備し運用を行った。また、適正なパーソナルデータの取扱いを定めたマニュアルを機構内の通知として制定した。</p> <p>大規模実基盤テストベッドでは、IoT テストベッドとして利便性向上と高機能化を図る下記 2 つの実証基盤技術を開発、総合テストベッドで定常サービスとした。</p> <ul style="list-style-type: none">• IoT ゲートウェイ IoT デバイス等が設置されるユーザサイトの各種資源と、既存テストベッドのユーザスライスの統合管理を実現するため、SDN 機能を有するゲートウェイを用いた接続方法を開発し、ゲートウェイと既存テストベッドの管理運用システムを統合した。全体として管理運用コストの増加なくユーザーの IoT 実証基盤構築の設定負荷を軽減するサービスを提供した。 IoT ゲートウェイとして計画を 2 年前倒して平成 29 年度に NICT 総合テストベッドに早期導入した。令和元年度末時点で 6 件の実証実験に活用された。• 大容量高精細モニタリング	
--	--	--	---	--

			<p>理論的に 400Gbps に対応可能な並列パケットキャプチャハードウェア並びにパケット蓄積および実時間解析のための OSS (Open Source Software) ベースの分散アーキテクチャを開発した。</p> <p>100Gbps プログラマブル NIC 上に汎用 IP コアをベースに実装したキャプチャ部と、サーバクラスタ上の蓄積解析部の連携動作を実証するとともに、JGN 基幹ネットワーク上の実トラフィックを対象に動作する定常サービスを令和 2 年 2 月に開始した。</p> <p>さらに、次期中長期に向けた新しいテストベッド機能の検討を開始し、次世代 SDN データプレーンプログラミング言語 P4 により実装されたシステムの検証が可能なテストベッド環境を試作し、ノードを国内拠点に展開しサービス試行を令和 2 年 3 月に開始した。</p> <p>また、新規 IoT への取組として、機構の分散コンピューティング基盤技術を応用し、公衆網整備途上環境においてコネクテッドカーを実現するための、車車間通信と狭帯域モバイル通信をハイブリッドに用いる DTN (Delay Tolerant Network) 制御アルゴリズムを開発した。この方式の特徴は、帯域が小さく不安定な公衆網のもとでアドホック通信と路側エッジ設備を活用して自律分散的にデータ転送・処理し安定的に通信を行うことができる。この成果を IEEE Computer Society が主催する計算機とそのソフトウェアおよびアプリケーションに関する伝統的な国際会議 IEEE COMPSAC 2019 (採択率 24.5%) で発表した。また、実車走行実験を開始した(令和元年度)。テレマティクスカー向けエッジプラットフォームとして、エミュレーションと組合せ実用性を実証(令和 2 年度見込み)。</p> <p>大規模エミュレーション基盤テストベッドでは、幅広い IoT 検証に対応させるため、下記の3つの基盤技術を開発完成し、StarBED に実装した。</p>	
--	--	--	--	--

			<ul style="list-style-type: none"> <p>• IoT デバイスのソフトウェアの動作検証を効率よく行うための IoT デバイス模倣基盤</p> <p>実験の規模や目的に応じて多量の IoT センサーを柔軟かつ管理可能な形で検証環境上に導入する為、ソフトウェアを用いセンサーを模倣する IoT デバイスエミュレータ(2種類)を開発した。また、多くの IoT センサーが無線通信により接続されていることを考慮し、これまで開発を進めていた WiFi などの無線エミュレータを拡張し、50 台規模の検証を可能とする無線エミュレータを開発した。さらに、BLE (Bluetooth Low Energy)エミュレータ BluMoon を開発し、様々な IoT デバイスソフトウェアの検証に対応させるとともに、BluMoon を活用し、デモンストレーションとしてエミュレーション環境と同様の電波環境を模倣した IoT 検証システム AOBako を開発した。StarBED 上に構築されたエミュレーション環境を可視化しながら、実際の電波を使った効率的な検証環境を実現した。</p> <p>• 物理量場等を含めた IoT 技術検証のために影響を持つ人の挙動や災害状況等、シミュレータとエミュレータの連携基盤</p> <p>複数の異なる対象を模倣するシミュレータをリアルタイムにエミュレータと連携させ、複雑な事象を発生させるエミュレーション・シミュレーションの連携基盤 Smithsonian を構築した。Smithsonian を活用し、実際の地理的環境の中での人の移動、災害状況の変化、ICT 環境が連携して動作する減災オープンプラットフォーム ARIA を構築した。Smithsonian のエミュレーション連携により、非常時の ICT サービスの挙動検証を可能とした。さらに、IoT センサーなどからの実データをリアルタイムに入力することで災害時に近未来の被災予測を行い、実際の避難警報などの発令への活用を検討した。</p> <p>• IoT テストベッドをより容易に利用できる UI 機能</p> <p>StarBED で利用されている検証環境構築支</p> 	
--	--	--	---	--

			<p>援システム SpringOS のアーキテクチャを見直し、IoT テストベッドに必要な各要素を制御できるミドルウェアを開発。提供機能を容易に利用できるユーザインタフェースを提供した。</p> <p>また、高速な経路変更及び、高速なログ情報保存のためのストレージ高速化技術を開発。応用例としてトポロジ上の任意の位置のログ情報を 10Gbps 超の速度で取得・保存できるログ配信/記録システム JAIan を開発した。</p> <p>さらに、セキュリティ人材育成として、ナショナルサイバートレーニングセンター、サイバーセキュリティ研究所と連携し、StarBED 設備の提供による演習環境の構築とその運営補助等を実施した。隔離環境上に実環境に近い環境を模倣し、実践的な演習を実現した。</p> <p>これらに成果により、下記の特筆すべき受賞をした。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ AOBako に関して、G 空間 EXPO2018 で測量新技術賞（北陸先端大と共同受賞）。 ・ JAIan に関して、Interop Tokyo 2018 Best of Show Award デモンストレーション部門グランプリ（北陸先端大と共同受賞）。 ・ ARIA に関して、DICOMO2019 で野口賞、情報処理学会デジタルコンテンツクリエイション研究会でデジタルコンテンツ制作発表会 優秀賞「インタラクティブ部門」、G 空間 EXPO2019 で防災・減災賞（名古屋大、北陸先端大と共同受賞）。 ・ AOBako、ARIA について、それぞれ、ユビキタスコンピューティングに関するトップカンファレンス ACM UbiComp 2018, 2019 にてデモ採択された。 <p>スマート IoT 推進フォーラムテストベッド分科会と連携し、外部ニーズを踏まえつつ IoT 等の実証を促進するテストベッドの要件を把握し、利用促進策を</p>	
--	--	--	--	--

			<p>検討し実施した。</p> <p>その結果、下記の3つ新たなサービスを打ち出し、従来のテストベッドでは検証できなかった範囲をカバーすることによって、新規利用を計 17 件創出した。</p> <ul style="list-style-type: none"> • IoT のラスト 1 マイルをサポートする可搬型の IoT キャラバンシステムテストベッド • 複数方式の LPWA 通信を試験・確認できる実証フィールド「横須賀ハイブリッド LPWA テストベッド」((株)横須賀テレコムリサーチパークと共同提供) • NICT 総合テストベッドの利用を容易化する活用研究会 <p>アジア初の国際回線 100Gbps 化を実現し、この回線により、アジア・太平洋地域で 100Gbps 高速回線によるリング(APR)及びアジア-欧州間研究・教育用ネットワーク(AER)に関する覚書を国内外の機関と締結した。</p> <p>これにより、アジアのみならず欧米も含めた 100Gbps 以上の帯域を利用可能な全世界的な回線接続環境を整備し、国際研究・教育用ネットワーク間での回線相互バックアップ及び国内外研究・教育機関との協力関係を強化した。この JGN 国際回線を利用し以下の実験を推進した。</p> <ul style="list-style-type: none"> • SC(SuperComputing)に関して、SC2016 において、SINET、WIDE プロジェクト、TransPAC、Pacific Wave、Internet2 等の国内外の研究機関との連携により、日米間における 8K 非圧縮映像セキュア伝送に成功した。 • SC2017 では、日本と米国の間で 3 つの国際 100Gbps 回線による国際実証環境を構築し、国立情報学研究所と共同で最大 270Gbps の超高速ファイルデータ伝送実証実験に成功した。 • SC2018 では、委託研究で研究開発した再構成可能通信処理プロセッサ(RCP) の 90Gbps 国際伝送実験および実トラヒックの解析処理実験 	
--	--	--	---	--

			<p>に成功し、研究開発成果の国際的なアピールに貢献した。</p> <ul style="list-style-type: none"> • SC2019 において、JGN アジア 100Gbps 回線を含むアジア太平洋地域および欧州が連携する研究・教育ネットワーク APR および AER を活用し、日米間で 5 つの国際 100Gbps 回線による国際実証環境を構築し、国立情報学研究所と共同で最大 416Gbps の超高速ファイルデータ伝送実証実験に MMCFTP を用いて成功した。 • SCAsia 2019(シンガポール、平成 31 年 3 月)の高速大容量データ共有技術コンテスト Data Mover Challenge に supporting partner として日本から唯一参画し、シンガポール(NSCC)、米国(StarLight、Internet2、Pacific Wave)、オーストラリア(NCI/AARnet)、韓国(KISTI)の太平洋地域の主要学術ネットワーク機関と連携し、機構が提供した JGN アジア 100Gbps 回線および特殊サーバーノードを含むデータ伝送実証環境を構築提供し、日本からの 2 チームを含む参加チームらの実証実験をサポートし、成功に導いた。 • SCAsia 2020(令和元年度)の Data Mover Challenge では挑戦者として参加し、独自開発の通信プロトコル HpFP(High-performance and Flexible Protocol)により約 40Gbps を達成し、その性能と柔軟性が評価され Experimental Excellence Award を受賞した。 • JGN 回線と民間企業に技術移転した高速データ通信技術とを活用し、ひまわりリアルタイムミラーサイトをタイ、フィリピン、台湾に設置しサービスを開始した。令和元年の Web ページビューは 300 万超で、提供を開始した平成 28 年と比較し 2 倍に増加した。特に、海外アクセス数が平成 30 年に全体の 50%を超え(令和元年は全体の 43%)、アジア各国および米国への気象ビッグデータのリアルタイム提供を本格化した。 • さっぽろ雪まつり 2018 では、日本とシンガポ 	
--	--	--	--	--

			<p>ルの間で 2 つの 100Gbps 回線による国際実証環境を構築し、産学官の約 50 団体と共同で、マルチパス上での非圧縮 8K 映像マルチキャスト配信実験等に成功した(プレスリリース実施)。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 素粒子実験データの国際共有プロジェクト LHCONE に、SINET と連携し、アジア 100Gbps 回線を活用して日本とアジア間のデータ共有ネットワークを構築し国際協力した。 <p>また、以下の NICT 総合テストベッドを利用した国際実験を推進した。</p> <ul style="list-style-type: none"> • タイの NECTEC および EGAT と共同でダム遠隔モニタリングシステムの SDN 制御による耐障害性向上技術の開発プロジェクトをアジア・太平洋電気通信共同体 (APT : Asia-Pacific Telecommunity) の支援により実施、プロトタイプ実装および機能検証を行い、実システムへの展開の課題を整理した。 • 東南アジアの地域社会への貢献として、泥炭湿地林のモニタリングのための IoT ベースのソリューションを展開した。IoT ベースの泥炭湿地森林モニタリングシステムを使用した情報の収集、展開、分析、及び普及に関する研究開発を行った。NECTEC (タイ) 等と協力してチェンマイの地滑りフィールドに設置して画像処理による地滑りモニタリングを開始した。また、太陽光発電量リアルタイム及び予測システムを活用する自立型の LoRa 通信システムの開発に着手した。ブルネイ工科大学等とスマートツーリズムプロジェクトを立ち上げ、ブルネイ、タイ、ミャンマーからの映像伝送性能検証を行っている。フィリピン・ASTI に PTZ (パン・チルト・ズーム) 型のカメラを設置し遠隔地からの制御試験を進めている。 • 機構、総務省、そして欧州委員会 (EC) が共同で推進する「日欧共同研究」において、FESTIVAL プロジェクトが、大規模 IoT サービステストベッド (JOSE) をリアルタイムセンサー情 	
--	--	--	---	--

			<p>報蓄積提供システムとして活用した。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 機構と米国 NSF が推進する JUNO2 プログラムにおける日米共同研究”Resilient Edge Cloud Designed Network”では、九州工業大学、StarBED、シアトルを結び、その上に RISE による OpenFlow ネットワークによる日米間グローバルテストベッドを構築し実証実験を行っている。 	
<p>(2)オープンイノベーション創出に向けた産学官連携等の強化</p> <p>機構の研究開発成果をICT分野のイノベーション創出につないでいくためには、産学官が幅広いネットワークを形成することで共同研究等を総合的・一体的に推進することが有効である。特にICT分野では技術革新が急速に進展しているため、我が国が国際競争力を確保していくためにも、様々な分野・業種との連携を実現しながら、各プレーヤーが保有する技術やノウハウを結集することで研究開発から社会実装の実現までを加速</p>	<p>2-2. オープンイノベーション創出に向けた取組の強化</p> <p>社会の潜在的ニーズを発掘するとともに最終的な成果を想定し、研究開発から社会実装までを一貫して戦略的に立案し、オープンイノベーションを目指した持続的な研究開発を推進する体制を整備する。これまでの組織体制の枠組みを越えて研究開発成果の融合・展開や外部連携を積極的に推進するため、機構内に「オープンイノベーション推進本部」を設置し、オープンイノベーション創出に不可欠なプロジェクトの企画や推進、フォーラムの運営等の業務を一元的に行う。</p> <p>研究開発成果の最大化に向けて、機構が中核となってオープンイノベーションの創出を促進するため、テストベッド等を核としつつ、様々な分野・業種との連携や、研究開発拠点における大学等との連携強化を図る。そのため、産学官の幅広いネットワーク形成や産業界、大学等の研究ポテンシャルを結集し、委託研究、共同研究等の多面的な研究開発スキームにより外部の研究リソースを有効に活用し、戦略的</p>		<p>2-2. オープンイノベーション創出に向けた取組の強化</p> <ul style="list-style-type: none"> • 研究開発から社会実装までを一貫して戦略的に立案し、オープンイノベーションを目指す体制として、平成 28 年度にオープンイノベーション推進本部を設置した。その下で、研究開発課題の企画と推進を行う司令塔として機能する戦略的プログラムオフィスと、社会実装に直結するテーマに取り組む研究開発推進センター等のセンター体制組織と、イノベーション創出に必要な内部手続きを行う 3 つの部門とからなる組織を有機的に連携させ一体的に取り組んだ。また、サイバーセキュリティに携わる人材を育成するナショナルサイバートレーニングセンター及び IoT 機器等の安全な普及に資するナショナルサイバーオペレーションセンターをそれぞれ平成 29 年度及び平成 30 年度に設立するとともに、最先端 AI データテストベッドの整備、知能科学技術の研究開発を推進するため、知能科学融合研究開発推進センターを平成 29 年度に設立し、社会的ニーズに対応した。 • 機構の研究者が研究開発成果や専門的知識を活かして、企業等との連携(共同研究や技術移転など)を広げるために技術相談制度を創設した(平成 30 年 3 月)。平成 30 年度に運用を開始して以来、17 件(うち、令和元年度 6 件)の相談に対応し 	<p>2-2. オープンイノベーション創出に向けた取組の強化</p> <p><イノベーション創出></p> <ul style="list-style-type: none"> • 技術相談制度の創設、NICT シーズ集の作成、アイデアソン・ハッカソンの開催、地域実証型研究開発の実施、大学とのマッチング研究支援など産学官の課題・ニーズの発見と連携のための積極的な取組、イノベーションコーディネーター創設、FFPA 活動などの成果を上げた点を評価した。 • 地域実証型研究開発の成果を社会実装に結び付けるための取組を強化し、いくつか成功事例が出てきつつあることを評価した。 • 環境 × 健康データ連携によるヘルスケア支援に関するユーザ参加型実証実験、NICT SAR データから GIS データを抽出し災害マップを開発する SAR データ分析チャレンジ等のデータソン・ハッカソンを実施し、企業・大学・地域社会等との人材交流を促し、データ活用・データ分析に関する人材育成に取り組んだ点を評価した。 • AI ICT 分野の研究開発等に利用可能なデータを 7 ジャンル 43 件公開。また、AI データテストベッド公開基盤に

<p>化することが求められている。</p> <p>このため、研究開発成果を最大化するため、機構が中核になり、産学官の幅広いネットワーク形成や共同研究の実施、機構の研究開発拠点における大学との連携強化、産学官連携の取組としての協議会の設立・運営、社会実装事例の蓄積等に取り組むことで、利用者・企業・大学・地域社会等の出会いの場を形成し、オープンイノベーション創出を目指すものとする。また、グローバルな視点でのオープンイノベーションの促進も重要であり、国際的な連携にも積極的に取り組むものとする。</p> <p>具体的には、我が国として新たな知識・価値を創出し、社会・経済システムの変革につなげていくためには、ビッグデータ、人工</p>	<p>に研究開発を促進する。また、ICT関連分野における産学官連携活動を推進するため、学会、研究会、フォーラム、協議会等の活動に積極的に取り組むとともに、機構自らがこのような活動を推進する。さらに、地域ICT連携による自治体や民間等への技術の社会実証・実装等の取組を通じて研究開発成果の社会実装事例を蓄積するとともに、オープンイノベーションの拠点として企業・大学・地域社会等の様々な分野・業種との人材交流を促し、幅広い視野や高い技術力を有する人材の育成・提供に取り組むことにより、オープンイノベーション創出につなげる。</p> <p>なお、平成 28 年度補正予算(第2号)により追加的に措置された交付金については、「未来への投資を実現する経済対策」の一環として 21 世紀型のインフラ整備の推進のために措置されたことを認識し、多様な経済分野でのビジネス創出に向けた最先端人工知能データテストベッドの構築のために活用する。</p> <p>グローバルな視点でのオープンイノベーションの促進に取り組むため、連携関係のある海外の研究機関や大学等からなる研究ネットワークを形成し、多角的な国際共同研究を実施するためのプラットフォームの構築を図る。また、日欧共同公募、日米共同公募等のスキームにおけるグローバルな視点でのオープンイノベーションを目指すプロジェクトの創出や、国際標準等の成果</p>		<p>た。また、新たな価値の創出や課題の解決に役立てるために、NICT の研究開発成果等を紹介する NICT シーズ集を作成した(外部への提供可能な技術等 42 件を掲載)。ダウンロード数約 2400 件(令和 2 年 3 月末時点 重複含む)。電子ブックとしても機構 Web ページに掲載した。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 大学や産業界などの経験者に、地域連携課題の掘り起こし、NICT 研究開発成果の社会実装や国際展開のためのコーディネータ役としてイノベーションコーディネーター制度を平成 28 年度に創設した。平成 30 年、令和元年は 6 名、令和 2 年は 7 名を登録し、地方での研究テーマの形成、NICT 技術の移転先、共同研究先の発掘等を実施した。 • 地域実証型研究開発として、平成 30 年度から、データ活用による新たな価値創造を重視しつつ、地域の課題解決のための社会実証実験に関する委託研究を実施した。厳正な評価を経て平成 30 年度、令和元年度、および令和 2 年度で各 10 件の研究課題を採択し、合計 30 件の研究課題を推進した。産学の協力のもと、社会実証を強く意識し研究課題に取り組んだ。また、同様に機構自らが実施する地域実証型研究開発として平成 30 年度に 3 課題、令和元年度に 4 課題を実施した。これら地域実証型研究開発は地方総合通信局の協力を得て、各地域の自治体、民間企業、大学等との連携体制を構築し、地域への ICT 技術の実証・実装も重要な目的とした。 • 機構自らが実施する地域実証型研究開発として、平成 30 年に長野県千曲市において、LoRa を用いた市内全域通信環境実験を行った。この結果に基づき、千曲市、大学および民間企業 6 社の間で LPWA 実験に関する覚書を交わし、環境・教育・防災等の社会実装を視野に入れた実験(千曲市あんずプロジェクト)を行った。IoT 型地域実証実験として、千曲市において、住居エリア全域をカバーする 10 か所の LoRa 中継局を設置し 	<p>あいまい検索機能を追加した点を評価した。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 事業分野セグメント毎の主要パートナーとの翻訳バンク推進によるイノベーション実現を評価した。 • 翻訳バンクプロジェクトへの参加募集について積極的に取り組み、多くの参加者を集めたことを評価した。 • 共同研究、資金受入型共同研究、大学とのマッチング研究支援事業等により産学官での新規アイデア発掘や研究開発促進に寄与している点を評価した。 • 外部への働きかけにより、資金受入型共同研究の資金受入額が大幅に増加したこと、大学とのマッチング研究支援事業で多くの外部資金獲得に繋がったことを評価した。 • 複数の無線機が混在する環境下での協調制御技術(SRF 無線プラットフォーム)の国際標準化、普及促進を目的とする FFPA を創設し、製造現場での無線ユースケースや通信要件をまとめた IEEE-SA レポートの作成を主導したことを高く評価した。 • SRF 無線プラットフォームに関して IEEE802.1 にレポート入力し改訂提案中であることや、FFPA を国際連携体制で設立および欧州 5G-ACIA との連携推進での貢献を評価する。 • 5G の産業ネットワークへの展開を目的とする国際アライアンス 5G-ACIA と連携を開始している点を評価した。 • ASEAN-IVO などの活動を継続実施し ICT 技術の社会導入を促進した点を高く評価した。
--	---	--	--	---

知能(AI)、IoT、ロボット、高度道路交通システム(ITS)等のICT分野の技術が重要な役割を果たすこととなるため、これらの分野のオープンイノベーション創出に向けた産学官連携に積極的に取り組むものとする。

特に、研究開発をより効果的かつ効率的に進めていく観点から、政府の方針を踏まえつつ、他の国立研究開発法人等との連携協力を一層強化する。

さらに、機構内の異なる研究分野間の研究開発成果(研究開発成果によって生成されるデータや情報を含む。)を統合・融合・解析する研究開発を実施することによって、研究開発成果を潜在的な利用ニーズに結びつけられる可能性がある。このため、社会・産業・科学等における利用ニ

の国際展開に取り組む。

特に、ビッグデータ、AI、IoT、ロボット、ITS等の分野については、将来新たな価値を創造し、社会の中で重要な役割を果たすことが期待されるため、オープンイノベーション創出に向けた産学官連携に積極的に取り組む。

この際、特に、研究開発をより効果的かつ効率的に進めていく観点から、政府の方針を踏まえつつ、他の国立研究開発法人等との間で研究開発成果の最大化を図れるよう、連携協力の一層強化に努める。

健康・医療・介護・防災・減災等の分野をはじめとする社会・産業・科学等における利用ニーズや地域の活性化等の社会課題を戦略的に分析するとともに、様々な分野における研究開発成果として機構が保有する技術的な強みやデータ等を結集し、分野横断的・産業横断的な統合・融合によって相乗効果を発揮させる新たなシステムの創発に基づくサービス基盤の研究開発を行う。また、機構の研究開発成果を利用ニーズ等に結び付け、社会的受容性等を検証するための取組として、想定されるサービスの利用者や提供事業者と協同して社会実証実験等を実施し、そこで得られた知見を研究開発成果のテストベッド環境にフィードバックする。

た。中継局に機構独自開発の映像IoTカメラシステムを設置し、AIを用いた降雪自動検出アプリケーションの性能検証を開始した。また、同中継局に気象センサーを設置し、市内の詳細な気象環境のモニタリングを開始し、令和元年台風19号接近時の市内各地での風向風速が異なること、データを用いた被害評価が可能であることを確認した。

- 機構の地方拠点等を活用しつつ、オープンイノベーション創出につながる人材交流・育成及び地域課題の発見を目的としたアイデアソンやハッカソンを開催した。(平成30年度4回(塩尻市、北九州市、金沢市、仙台市)。令和元年2回(金沢市、仙台市))。ここでは地域で活動している企業、大学、法人、NPO等に、参加者としてだけでなく、メンターやアドバイザーとして参加してもらうことで、様々な技術やノウハウを結集・融合させるとともに、機構との連携の強化を図った。
- 産業界、大学等の研究リソースを有効活用する観点から、以下のとおり多面的な研究開発スキームによる多くの研究課題を実施した。

研究開発の実施状況(契約数)

	H28年度	H29年度	H30年度	R元年度
共同研究	429	610	599	582
資金受入型共同研究(内数)	35	42	42	29
施設等利用協力研究(内数)	5	14	16	9
委託研究(課題数)	26	20	32	36
受託研究	167	203	218	226

- 外部研究資金の獲得に向けたフィージビリティ

・ASEAN IVOを順調に拡大してきたことを評価した。

等、オープンイノベーションにつながる成果の創出や将来的な成果の創出が期待される実績が得られた。

以上のことから、中長期目標期間を着実に達成する成果の創出が認められた他、将来的な成果の創出が期待される実績も得られたため、評定を「B」とした。

ニーズや社会課題を戦略的に調査分析しつつ、異なる研究開発成果の相乗効果を能動的に発揮させる研究開発を行うことで、機構の研究開発成果を利用ニーズ等に結びつけていく取組を行うものとする。

イ・スタディの促進のため、大学と包括協定を締結しマッチング研究支援事業を実施した。連携先は、東北大学(平成 24 年 1 月協定締結)、早稲田大学(平成 22 年 2 月協定締結)、九州工業大学(平成 30 年 12 月 1 日協定締結)の 3 大学である。

マッチング研究実施状況(件)

	H28 年度	H29 年度	H30 年度	R 元年度
東北大学	13	10	10	11
早稲田大学			4	4
九州工業大学				4

- ICT 関連分野における産学官連携活動を推進するため、国内外の主要な学会や影響力の大きな研究会で先端的な研究開発成果を発表(査読付き論文数 116 件のうち、インパクトファクター 5.0 以上の発表は 2 件。口頭発表は、261 件。)した。
- 産学連携して研究開発した新しい無線通信技術を応用し、製造現場の IoT 化を促進するため、民間企業とともにフレキシブルファクトリパートナーアライアンスを設立し、積極的に通信方式の規格化、標準化及び普及促進の活動を行った。FFPA 技術仕様 Ver. 1 を令和元年 9 月に完成させ、公表した。ユーザグループ(VoC Community)を構成し、加盟者が 32 社に増加した(令和元年末)。FFPA 技術仕様に基づく認証プログラムに向けた検討の場を設置し、令和 2 年度中に導入予定である。IEEE において、製造現場での無線通信の課題を提起し、ユースケースや通信要件をまとめた IEEE-SA レポート(IEEE Standards Association Industry Connection Report Flexible Factory IoT)の作成を主導し、令和 2 年 4 月 17 日に発行した。また、これと並行して、FFPA 技術仕様 Ver. 1 との協調のため IEEE802 無線規格の一部拡張を提案中である。

- 5G の産業ネットワークへの展開を目的とする国際アライアンス 5G-ACIA (5G Alliance for Connected Industries & Automation) と MoU を締結(令和 2 年 4 月 8 日)し、工場における無線 IoT のユースケースや要求条件の情報共有を実施した。
- 平成 28 年度補正予算(第 2 号)により追加的に措置された交付金を活用して整備した AI 関連データ共同利用設備・実証環境である AI データテストベッドを令和元年 5 月から運用開始し、AI 及び ICT 分野の研究開発等に利用可能な 7 ジャンル、43 件のデータセットを公開基盤から公開した。(令和 2 年 1 月末現在)。併せてデータへのアノテーション付与及びあいまい検索機能等の追加による機能改修を実施した。
- 総務省と連携し、オールジャパン体制で翻訳データを集積する「翻訳バンク」を運用し、各府省庁からも翻訳データを集積した。
- 「人間中心の AI 社会原則」検討会議の構成員として同原則を策定した(平成 31 年 3 月:統合イノベーション戦略推進会議決定)。
- AI 関係府省連携の一環として、平成 29 年度から 30 年度において産業技術総合研究所情報人間工学領域と「情報通信分野における連携・協力の推進に関する協定」に基づく共同研究を実施した。
- AI 戦略 2019(令和元年 6 月:統合イノベーション戦略推進会議決定)等に基づく AI ステアリングコミッティー等に参画した。
- スマート IoT 推進フォーラムでは、同フォーラムの事務局として IoT 分野における産学官連携の中心的な役割を果たしつつ、複数の分科会での議論をリードして産学官連携活動を積極的に推進した。また、フレキシブルファ

			<p>クトリパートナーアライアンスを設立したほか、第5世代モバイル推進フォーラム、次世代安心・安全 ICT フォーラム、グローバルコミュニケーション開発推進協議会等、機構が設立に関与したフォーラムや協議会を最大限に活用して、産学官連携を促進した。</p> <ul style="list-style-type: none"> • オープン・スマートシティを実現するソーシャル・ビッグデータ利活用・還流基盤等の実証的な委託研究を実施し、受託者の連携交流会において課題の分析や解決案の検討を行った。また、地域における課題の解決や異分野における ICT 利活用を促進する社会実証に向けて実施した、各地域の状況調査結果を踏まえ、新たな地域実証研究計画を取りまとめ、研究公募を経て委託研究を実施した。 • 異分野データ連携プラットフォームを活用した社会課題解決のモデルケースとして、環境×交通データ連携によるモビリティ支援や環境×健康データ連携によるヘルスケア支援に関するユーザ参加型実証実験（福岡市、東京都等）や、NICT SAR データから洪水・土砂崩れ領域等の GIS データを抽出し災害マップを生成するプログラムを開発する SAR データ分析チャレンジを実施し、地域の事業者や団体と協力した社会実証実験を積極的に推進した。 • 技術実証と社会実証の一体的推進が可能なテストベッド利活用パイロットプロジェクトとして、JOSEに展開した M2M クラウド基盤を活用して、オープンイノベーション創出につながる下記の活動を実践した。“データの地産地消”概念に基づいた携帯電話網に頼らない地域 IoT サービス基盤を設計・開発その構成要素となる Wi-SUN と多様な無線技術を融合活用する IoT デバイスやシステムの開発と実用化活動を推進した。Store-Carry-Forward 原理に 	
--	--	--	--	--

			<p>よるすれ違いネットワークの有効性を理論・シミュレーション双方の視点から再確認した。Wi-SUN モジュール搭載タクシー26台の”ながら”すれ違い情報配信実証実験を行い、12時間で400 km²を超えるエリアにおける見守り等に関わる地域情報の収集能力を確認できた。地域モビリティを活用して、地域の見守りなどに関わる情報配信や情報収集を行うことが可能な地域 IoT サービス基盤の構築が可能で、かつスマートメータ基盤ともつながる機構知財が活用された“すれ違いIoT無線ルータ”を1万円台で商用化できる目処がたった。位置情報を活用した見守りや交通安全のサービス向けデバイスとして開発した省電力GPSモジュールが電子機器メーカーに技術移転され、位置トラッカー製品としての開発・販売準備に至った。また、開発と実証実験を行った同GPSモジュールとWi-SUN通信機能を統合利活用する交通安全システム(WiWi-Alert)の実用性に興味を示したロボット事業を支援するシステムインテグレーション事業者が、移動物体の相互位置検出と衝突回避の基礎技術として実用化の検討を開始した。</p> <ul style="list-style-type: none">• 東京墨田区を中心とした営業中の飲料自動販売機、タクシーに”すれ違いIoT無線ルータ”を搭載して地域レベルでの社会実証エリアを展開。高齢者/子供見守りサービスとタクシー乗客発見支援サービスの実証実験を実施した。報道発表(平成29年5月)に対する新聞・TV等の反応、及びGEATEC2018展示におけるアンケート取得360名分など、社会の反応を多数収集した。また、大手飲料メーカーが、NICTが開発した”すれ違いIoT無線ルータ”を搭載した飲料自動販売機による塾生見守りサービスの自ら運用を措定したアプリケーション開発に着手した(令和元年度)。大手飲料メーカーが、塾生見守りサービスの実用化/商用化
--	--	--	---

			<p>に向けてアプリケーション開発に着手した(令和元年度)。</p> <ul style="list-style-type: none"> • また、都内タクシー会社が24時間稼働の乗客発見支援サービスのテスト運用を開始した(令和元年度)。 • 富山県黒部市の社会福祉協議会及び同市ゴミ収集事業者の車輛に、“すれ違いIoT無線ルータ”を搭載し、見守り対象高齢者(20世帯)の外出減少を、周辺を走行中の地域車輛で見守るサービスの社会的受容性に関する実証実験を実施した。同市社会福祉協議会は実証実験結果に基づく社会的受容性の調査研究成果報告書を作成した(令和元年度末)。上記実証実験の実施については報道発表(令和元年9月)を行い、多数の新聞等での反応が得られた。また、CEATEC2019(令和元年10月)では、これら実証実験に関わるシステム展示も行い、サービスの社会的受容性に関するアンケート取得(360名)を通じて、90%以上の一般市民が地域社会への貢献のために機構開発のIoT機器を家庭に設置することに合意すると回答するなど、社会的受容性に関わる反応を収集した。 • ASEAN域内の研究機関や大学等とのバーチャルな研究連携組織として2015年2月に機構が主導して設立したASEAN IVO(ICT Virtual Organization of ASEAN Institutes and NICT)のスキームにより、東南アジア諸国共通の社会的課題に対して機構の研究開発成果や研究開発課題関連のICTを適用する共同研究開発プロジェクトを累計29件創出・推進し、実証実験を実施した。その一部は次のステップとして外部資金(アジア太平洋電気通信共同体(APT)やJST)に応募するなどし、7件を実施した(うち4件は技術移転先企業も参画し、ビジネス化を推進)。 • 日欧の国際共同研究については、欧州委員会 Horizon 2020の下で第3弾(4件)及び第4弾(2 	
--	--	--	--	--

			<p>件)を開始し、第6弾に向けた調整を実施。また、プロジェクトの調整や方向性の共有のための日欧国際共同研究シンポジウムを計3回開催(見込み含む)。</p> <ul style="list-style-type: none"> 日米の国際共同研究については、米国国立科学財団(NSF)と合同で、ネットワーク領域のJUNOプログラムを終了し、後継のJUNO2を新規開始するとともに、計算論的神経科学領域を対象とする多国間共同研究フレームワークCRCNSに参画して研究を開始した。 台湾の国家実験研究院(NARLabs)との間で共同研究プログラムを新設し、令和元年に2件のプロジェクトを開始した。 	
<p>(3)耐災害ICTの実現に向けた取組の推進 世界最先端のICTにより新たな価値創造や社会システムの変革をもたらすためには、「社会(生命・財産・情報)を守る」能力として、地震、水害、火山、津波、台風等の災害から国民の生命・財産を守るための技術が不可欠であることから、機構の耐災害ICTに係る研究開発成果の普及や社会実装に取り組むものとする。</p>	<p>2-3. 耐災害ICTの実現に向けた取組の推進 研究拠点機能及び社会実装への取組を更に強化するため、耐災害ICTに係る基盤研究、応用研究及びこれらの研究成果に基づく社会実装に向けた活動を連携して取り組む体制を整備する。また、耐災害ICTに係る研究開発の着実な推進及び研究拠点機能の強化に向けて、大学・研究機関等との共同研究等を通じて、外部研究機関との連携を強化する。さらに、研究開発成果の社会実装に向けて、地方公共団体を含めた産学官の幅広いネットワーク形成、耐災害ICTに係る知見・事例の収集・蓄積・交換、研究成果・技術移転等の蓄積及び地方公共団体等の利用者ニーズの把握のため、耐災害ICTに係る協議会等の産学官連携活動に積極的な貢献を行う。</p>	<p>2-3. 耐災害ICTの実現に向けた取組の推進</p> <ul style="list-style-type: none"> 耐災害ICTに係る基盤・応用研究及びその成果の社会実装に連携して取り組む耐災害ICT研究センターの体制の元、以下のような研究と社会実装の連携が行われた。 <ul style="list-style-type: none"> 対災害 SNS 情報分析システム DISAANA、D-SUMM の開発・公開。防災チャットボット SOCDA の開発及び実証実験や実災害での実活用。 地域分散ネットワーク NerveNet の低コスト化に向けたナブネット機能の全ソフトウェア化、小型・省電力の LPWA 搭載型装置の研究開発と、科学情報(地震計情報)観測における通信実利用や地域課題解決型研究での活用。 災害時のユースケースを想定した可搬型 EDFA(光増幅器)の通信キャリア研修施設での耐環境評価、光通信ノードが損壊した場合の応急復旧装置の機能検証。 大学等との共同研究等を通じた外部研究機関 	<p>2-3. 耐災害ICTの実現に向けた取組の推進 <実証></p> <ul style="list-style-type: none"> 地域 ICT オープンプラットフォームを用いて、地方の課題解決にむけた実証が進んだ点を評価した。 自治体等と連携した地道な実証を進められており、この種の分野の推進の継続性をしっかりと実現されている取り組みを評価した。 防災チャットボット SOCDA においては連携を進めて実利用にまで至っている点を評価した。 DISAANA、D-SUMM は、企業への技術移転を実施した他、東京都、大分県をはじめとする様々な地方自治体で防災訓練での利用が行われるとともに、各地の豪雨災害等でも災害状況把握等で実利用されていることを評価した。 DISAANA、D-SUMM、SOCDA が様々 	

<p>そのため、耐災害ICTに係る研究開発成果の最大化のためには、地方公共団体を含めた産学官の幅広いネットワーク形成や情報の収集・蓄積・交換、共同研究、標準化、社会実装、研究成果・技術移転事例の蓄積等を推進するための産学官連携拠点としての機能を果たすことが重要であることから、仙台における拠点を中心として、我が国全体の耐災害ICT分野の社会実装も対象にしつつ、これらの取組を積極的に行うものとする。また同時に、産学官連携の場の活動にも活発に寄与するものとする。</p> <p>また、災害発生時の円滑な災害医療・救護活動に貢献するため、関係機関との共同研究等を行うことにより、災害時を想定したICTシステムの</p>	<p>加えて、耐災害ICTに係る研究開発成果を活用した実証実験の実施、地方公共団体が実施する総合防災訓練等における研究開発成果の活用・展開及び災害発生時の円滑な災害医療・救護活動等に貢献するためのICTシステムの標準モデルやガイドラインの策定に関する取組等を通じて、耐災害ICTに係る研究開発成果の社会実装の促進を図る。</p>		<p>との連携の強化として、耐災害 ICT 研究センターで総計 35 件（含見込）の東北大学との共同研究に取り組んだ他、R1.4 に設立された東北大学タフサイバーフィジカル AI 研究センターとの覚書の締結や連携ラボラトリーの設立に参画し、タフロボティクス×タフ IoT の研究として、災害時を含む厳しい環境下における群ロボット制御用無線通信技術の研究開発を実施した。基盤研究として膨大な数のノードの情報が流通する Massive Connect IoT 環境における高密度・高信頼ネットワーク制御における高密度・非直交多元接続技術（NOMA）の適用を数値シミュレーションで検討すると共にソフトウェア無線機を用いたハードウェア実装・評価を実施した（見込み）。</p> <ul style="list-style-type: none"> LPWA 搭載型小型・省電力無線通信端末を東北地域の課題解決型研究を推進するための地域 ICT オープンプラットフォームとして整備し、これを用いて東北地域の大学との交流会等の開催や地方自治体との意見交換等を通じて抽出された課題（農業・漁業、地域情報発信・観光、交通・気象、等）の解決に向けた研究開発が進んだ。 大学・企業の研究者・技術者と連携し、南海トラフ地震などの広域で発生する大規模災害時に通信ネットワーク・情報処理技術を活用して遠隔地から被災地を支援するためのコミュニティを形成・主催し、研究ワークショップを 9 回（見込み 4 回含む）開催し遠隔支援技術の研究開発に向けた議論を重ねると共に課題抽出・技術実証に向けた防災訓練を 2 回（見込み 1 回含む）実施した。 東南アジア地域の大学・研究機関と連携し、AESEAN-IVO プロジェクト（3 件）、APT プロジェクト（4 件：見込み含む）として、地滑り早期警報システム（スリランカ）、ダム監視ネットワークの耐災害性強化のフェージビリティ 	<p>な自治体の防災訓練で利用され、平成 29 年の九州北部豪雨災害等の実際の災害時にも災害状況把握のために利用された。</p> <ul style="list-style-type: none"> DISAANA、D-SUMM、SOCDA と技術開発の進展に合わせた自治体と連携した実証実験を評価した。 災害に強い情報通信ネットワーク導入のガイドラインの適時の見直しを評価した。 光ネットワークの応急復旧技術の実現に向け、可搬型 EDFA や応急復旧装置の機能検証を通信キャリアや通信機器ベンダーの施設で実施したこと、平成 28 年の熊本地震の際、被災地に衛星通信と無線通信システムによる安定したインターネット接続環境を提供したことを評価した。 立川地区の中央省庁災害対策本部設置準備訓練において、ナーブネットを用いた自営無線回線環境を実装し、実利用化した。ナーブネットの小型 LPWA 搭載装置を開発して、地震計情報等の通信実証実験を行い、更にこの装置を活用した地域 ICT オープンプラットフォームを整備して、東北地域の大学等と連携した地域課題解決の実証実験に活用された。これらを評価した。 <p>等、機構内外の利用者にとり有益な技術実証・社会実証につながる顕著な成果の創出や将来的な成果の創出が期待される実績が得られた。</p> <p><産学官連携></p>
---	--	--	---	---

<p>具体的な標準モデルやガイドラインの策定等を通じて社会実装を促進するものとする。</p>			<p>スタディ(タイ)、ルーラル地域の ICT 活用による教育支援と運用(カンボジア・ミャンマー)、異種ネット融合によるスマートコミュニティ・スマートシティ(タイ・マレーシア)養殖池水質管理高度化(タイ他3カ国)等の現地実証実験等を実施して NerveNet や LPWA センサネットワーク技術の有用性が確認され、同地域への国際展開が進んだ。</p> <ul style="list-style-type: none"> 協議会活動等の産学官連携活動の積極的な貢献として、当センターが事務局として耐災害 ICT 研究協議会の総会等を定期的に開催し、耐災害 ICT 研究に関する産学官連携・協力に基づく研究開発の促進・成果展開や、情報収集、意見交換、情報発信に努めると共に、H26 に策定された「災害に強い情報通信ネットワーク導入ガイドライン」の技術の進展に伴う改訂(H30:第2版、R2:第3版(見込み))を行い公表することで、自治体等の活用の促進に努めた。また、慶應義塾大学、防災科学技術研究所の協力の下で「人工知能を用いた災害情報分析の訓練ガイドライン」の策定(H29)に参画し、災害時対応の指針を提示すると共に、AI 防災協議会(設立:R1.6)に参画し、SNS 等を用いた災害情報の分析に関する情報収集、意見交換、情報発信に努めた。ITU-D SG2 の活動への貢献として、Q5/2(災害対応)の早期警戒システムの報告書に、DISAANA やナープネットを用いた中央省庁災害対策本部設置訓練等の技術・取組が記載された(見込み)。 実証実験、実利用、社会実装推進、訓練・展示等への参加として、平成28年4月の熊本地震の際、被災現場に研究者を派遣して搬入した衛星通信と無線通信システムの設営を行い、通信が不安定な状況の中、安定した通信ができるインターネット接続環境を被災地の自治体と住民に提供した。また、DISAANA に 	<ul style="list-style-type: none"> 耐災害 ICT 研究協議会の総会等を定期的に開催し、同分野の研究開発の促進・成果展開や情報収集、意見交換を行うとともに、導入ガイドラインを策定したことを評価した。 産との連携では、光ネットワーク技術のキャリアとの連携は評価できる。社会知の技術移転も良い取り組みとして評価した。 地方自治体での防災訓練に参加、地域 ICT オープンプラットフォームによる東北地域の大学との連携などの成果を上げている。また、遠隔地からの被災地支援のためのコミュニティ形成、ワークショップ開催などの成果も上げられる。東北大学との新たな連携への取り組みとして、タフロボティクス・タフIoTに関する連携を立ち上げ、今後に期待できる。 地域 ICT オープンプラットフォームを活用した東北地域の大学との連携による課題解決に向けた研究開発の進展を評価した。 平成28年から開始した東北大学とのマッチング支援事業で計35件の共同研究を実施し、東北大学タフサイバーフィジカル AI 研究センターとの覚書の締結や連携ラボラトリーの設立に参画し、厳しい環境下における群ロボット制御用無線通信技術の研究開発等を推進したことを評価した。 大学及び企業の研究者等と連携して、大規模災害発生時に通信ネットワーク・情報処理技術を活用して遠隔地から被災地を支援するためのコミュニティを主催し、研究ワークショップ及び課題抽出・技術実証に向けた防災訓
--	--	--	--	---

			<p>よる災害情報分析、Pi-SAR による被災地観測画像の提供等も行った。本経験を通じて実災害時の耐災害 ICT 提供に関するノウハウを蓄積すると共に、基盤研究を充実化した。</p> <ul style="list-style-type: none"> • SIP 課題「レジリエントな防災・減災機能の強化」の「⑥災害情報の配信プロジェクト」を当センターの研究者が研究責任者として推進した。その中で H29、30 年度には、首都圏直下地震災害での実利用を想定した立川地区での中央省庁災害対策本部設置準備訓練に参画し、災害時に公衆回線が使えない場合を想定して、ナードネット技術を用いて各府省の災害対策本部間（東京都立川地区：9 拠点）通信の自営無線回線環境を整備した。その結果、公衆回線に依存せず各府省の災害対策本部間の通信の確保ができるシステムが実装され利用可能となった。 • 衛星通信及びナードネットの組み合わせによる静岡県 DMAT などと連携した大規模地震時医療活動訓練 (H28. 8) や、衛星通信による三重県伊勢志摩での DMAT（災害派遣医療チーム）訓練 (H29. 7)、群馬県太田市の緊急消防援助隊地域ブロック合同訓練 (H29. 10) を実施した。さらに、H29. 11 には光通信の高知県情報ハイウェイや JGN と NerveNet などの無線通信で高知医療センターを結ぶなどした光と無線を融合した災害時のネットワーク環境実証を行った。 • 試験公開中の DISAANA、D-SUMM は、企業への技術移転を実施した他、東京都、大分県を始めとする様々な地方自治体で防災訓練での利用が行われると共に H29 の九州北部豪雨災害や岩手県での雪崩災害、R1 に頻発した各地の豪雨災害等でも災害状況把握などで実用されている。また、説明会等を通じた更なる地方自治体での利用拡大にも取り組んだ（見込み）。更に、防災チャットボット SOCDA に関し 	<p>練を実施した点を評価する。・耐災害 ICT 研究協議会の総会等を定期的に開催し、同分野の研究開発の促進・成果展開や情報収集、意見交換を行うとともに、導入ガイドラインを策定したことを評価した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・産との連携では、光ネットワーク技術のキャリアとの連携は評価できる。社会知の技術移転も良い取り組みとして評価した。 <p>等、耐災害 ICT 分野の産学官連携につながる成果の創出や将来的な成果の創出が期待される実績が得られた。</p> <p><標準化></p> <ul style="list-style-type: none"> ・「災害に強い情報通信ネットワーク導入ガイドライン」や、慶応技術大学及び防災科学技術研究所とともに「人工知能を用いた災害情報分析の訓練ガイドライン」の策定に積極的に参加した点を評価した。 ・センターが事務局を務める耐災害 ICT 研究協議会において策定した「災害に強い情報通信ネットワーク導入ガイドライン」について、随時、技術の進展に伴う改訂を行い、自治体等の活用の促進に努めていることを評価した。 ・令和元年 6 月に設立された AI 防災協議会に参画し、大学、研究機関と連携して、SNS 等を用いた災害情報の分析に関する情報収集、意見交換、情報発信に努めていることを評価した。 ・D-SUMM などで自治体の災害時オペ
--	--	--	---	--

			<p>ても様々な地方自治体での防災訓練利用や実災害での利用が進んだ。</p> <ul style="list-style-type: none"> セミナー・展示などを通じた技術の社会展開活動として、ICT フェア in 東北、防災推進国民大会、けいはんな情報通信フェア、震災対策技術展等に毎年出展すると共に、タイ国科学技術博 (H28. 8, H29. 8)、ITU 世界テレコム (H28. 11)、WTDC (世界/地域電気通信開発会議 総会 (H29. 10)、ASTAP (アジア・太平洋電気通信共同体) (R1. 6)、World BOSAI Forum (R1. 11) 等国際イベント等にも出展し、技術の積極的なアピールを行った。 	<p>レーションへの組み込みなどが議論されていることは評価できる。</p> <p>等、標準化につながる将来的な成果の創出が期待される実績が得られた。</p> <p><国際展開></p> <ul style="list-style-type: none"> 東南アジアの大学・研究機関と連携し、ASEAN-IVO プロジェクトや APT プロジェクトが実施され、地滑り早期警戒システム実証実験や、タイにおけるダム監視ネットワークの耐災害性強化実証実験、養殖池の水質管理等の現地実証実験、ナーブネットを利活用したルーラル地域の教育支援等の現地実証実験を実施し、技術の有用性を確認したことと、東南アジア地域への国際展開が進んだ点を評価した。 NerveNet の展開は評価できる取り組みである。 ASEAN-IVO, APT プロジェクトを複数展開しており、国際展開の足がかりとして活動している点は評価できる。 <p>等、研究開発成果の国際的普及や日本企業の競争力強化につながる成果の創出や将来的な成果の創出が期待される実績が得られた。</p> <p>以上のことから、中長期目標期間を着実に達成する成果の創出が認められた他、将来的な成果の創出が期待される実績も得られたため、評定を「B」とした。</p>
--	--	--	--	--

(4) 戦略的な標準化活動の推進

ICT分野では世界中で多数のフォーラムが設立されるなど、フォーラム標準化活動やオープンソースに関する取組が多様化・複雑化していることから、総務省との連携を密にしながら、産学官の連携体制の構築を含めた標準化活動をより積極的に推進することにより、機構の研究開発成果の最大化を目指すものとする。

また、標準化活動においては、特許出願等による権利化やノウハウとしての秘匿化を適切に使い分け等、戦略的な知的財産の取扱いを行うものとする。なお、標準化活動に際しては、デファクト標準として製品・サービスの速やかな普及やグローバル展開を含め、我が国が最終的に目指すべきものを意

2-4. 戦略的な標準化活動の推進

ICT分野においては、様々な機関や組織で標準化活動が行われており、総務省、産学官の関係者、国内外の標準化機関等との連携の下、情報収集や関係者間での情報共有に努め、戦略的な標準化活動の推進を目指す。

研究開発成果の利活用の促進を目指して、知的財産の戦略的な取扱いについても考慮しつつ、その成果をITU等の国際標準化機関や各種フォーラムへ寄与文書として積極的に提案するとともに、外部の専門家の活用や国内外の関連組織との連携協力を通じて、研究開発成果の国内外での標準化活動を積極的に推進する。

機構は、ICT分野における専門的な知見を有しており、中立的な立場であることから、標準化に関する各種委員会への委員の派遣等を積極的に行い、国内標準の策定や国際標準化会議に向けた我が国の対処方針検討に貢献する。

また、標準化に関するフォーラム活動、国際会議等の開催を支援することにより、研究開発成果の標準への反映や国際的な周知広報を推進し、我が国の国際競争力の強化を目指す。

戦略的かつ重点的な標準化活動の実現に向けて、総務省とも連携しつつ、機構の標準化に係るアクションプランを明確化し実施する。

2-4. 戦略的な標準化活動の推進

- ・研究開発成果の効果的・効率的な国際標準化に資するため、重点分野や具体的な行動計画等を定めた「情報通信研究機構標準化アクションプラン」を平成29年3月に策定し、以降毎年度、研究開発・標準化活動の進展や標準化機関の動向の変化等を踏まえて改定し、戦略的な標準化活動の推進に努めた。

- ・前中長期機関から引続き国際標準化機関・団体（ITU-R/T/D、APT、ETSI）のメンバーシップを維持するとともに、平成28年度からは3GPPへの参加資格（メンバーシップ）を確保し、国際標準化活動に参画した。国際標準化機関等に対して寄与文書を提出するとともに、議長等の役職者を派遣し、機構の研究開発成果に基づく国際標準等の成立に貢献した。例えば、量子鍵配送（QKD: Quantum Key Distribution）技術については、ITU-Tにおける標準化活動を機構が主導し、令和元年10月にQKD関連の初のITU-T勧告Y.3800が承認され、引き続き関連の会合で議論を推進している。Windプロファイラについて、技術要件を定めるISO国際規格作業原案に、NICT主導で作成した提案を反映した。テラヘルツ帯を利用するために必要な世界無線通信会議（WRC）における無線通信規則への反映のため、WRC-19（令和元年10-11月）に向けITU-R、APT等で活動を実施するとともに、IEEE802.15.3dに役職者を出して標準化をリードし、WRC-19において陸上移動業務と固定業務に計137GHz幅が特定された。製造現場の無線化について、製造現場における無線ユースケースや通信要件をまとめたFlexible Factory IoTレポートがIEEE802.1で承認され、IEEE-SA Industry Connection Reportとして2020年4月17日に発行された。また、電波防護

**2-4. 戦略的な標準化活動の推進
＜標準化＞**

- ・「標準化アクションプラン」を策定し、標準化活動の進展を踏まえて毎年度改訂した点を評価した。
- ・量子鍵配送、Windプロファイラ、テラヘルツ、製造現場の無線化等の標準化活動を行った点を評価した。
- ・テラヘルツ帯の割当に向けた標準化活動を推進し、WRC-19で決定に至ったこと、IEEE802.15.3dの標準化をリードし採択に至ったことは高く評価出来る。
- ・積極的な標準化活動が行われており評価できる。
- ・APT関連会合での日本招致における出展で貢献していること評価した。

等、標準化につながる成果の創出や将来的な成果の創出が期待される実績が得られた。

以上のことから、中長期目標期間を着実に達成する成果の創出が認められた他、将来的な成果の創出が期待される実績も得られたため、評定を「B」とした。

<p>識しつつ、機構内の産学官連携や国際展開に係る組織との連携はもちろんのこと、標準化関連団体や産業界とも密接に連携して取り組むものとする。</p> <p>このような戦略的かつ重点的な標準化活動を実現するため、機構の標準化に係るアクションプラン(総務省との調整を経て、適宜適切に更新するものとする。)を明確化し、実施するものとする。</p>			<p>適合性評価方法については、5G等の新たな周波数帯を利用する無線通信システムについての標準化活動を推進しており、令和元年5月に携帯端末のSAR評価法の改定版 IEC 62209-2:2010/AMD1:2019、9月に携帯端末の高速 SAR 評価法 IEC 62209-3:2019 が成立した。</p> <ul style="list-style-type: none"> 国内標準や国際標準化会議に向けた我が国の対処方針の検討を行う国内委員会等の役職者として機構職員を派遣し審議に貢献した。 国際標準化会合の日本招致に機構として貢献した。例えば、アジア太平洋地域の標準化関連会合である APT WTSA-20 準備会合及び APT Standardization Program (ASTAP) の日本招致(令和元年度)、APT WRC-19 準備会合の日本招致(令和元年度)に貢献するとともに会合での議論に参画した。 研究所主導での標準化関連会合の開催を支援した。例えば、量子情報技術に関する産学官連携を推進している量子 ICT フォーラム(平成 29、30 年度)、有線/無線のローカル・エリア・ネットワーク(LAN)などの標準規格を策定している IEEE 802.1(平成 30 年度)等の会合運営を支援した。 ITU、APT 等の標準化会合に参加した結果について、機構内 HP への報告の掲載等により研究所等に情報提供を行った。 ARIB との連携協定に基づき、両組織の理事等から構成される連絡会を毎年開催し、無線分野の標準化等について意見交換を実施した。 機構職員の標準化に関する啓発活動として、 	
--	--	--	---	--

			<p>「標準化セミナー」を毎年度開催し、標準化の進め方や欧州電気通信標準化機構の動向等を説明した。</p> <ul style="list-style-type: none"> 産学官の関係者との交流・啓発活動として、TTCと協力してIoTセミナー（平成28、29、30年度）、TTC、ARIBと協力して「oneM2Mショーケース2」（平成28年度）を開催するなどした。 海外で開催されたITU世界テレコム2016、2017、2019、ITUデジタルワールド2020やAPT/ITU相互接続性イベント（平成28、29年度）、我が国で開催されたAPT政策・規制フォーラム（平成28年度）などへの研究成果の出版により、国際的な周知広報を推進した。 	
<p>(5) 研究開発成果の国際展開の強化</p> <p>世界がグローバルに繋がる昨今においては、機構の優れた研究開発成果を世界に発信するとともに、諸外国と連携することで研究開発成果の相乗効果を発揮させ、相互に発展させていく国際展開の取組が必要となっている。</p> <p>具体的には、国際的な人材交流、国際共同研究、国</p>	<p>2-5. 研究開発成果の国際展開の強化</p> <p>機構が行う研究開発成果をグローバルに普及させること及び国際的なビジネスにつなげていくことを目指して国際展開を推進する。</p> <p>このため、国際研究ネットワークの形成・深化に向けて、有力な海外の研究機関や大学との間で国際的な共同研究を推進するとともに、国際研究集会の開催や、インターンシップ研修員制度の活用により国際的な人材交流を活発に行う。</p> <p>また、機構の研究開発課題に関連するICTを発展途上国等の課題克服に適用して国際貢献を行うことを通じて、機構の研究開発成果がグローバルに普及することを目指し、総務省の実施する海外ミッション</p>		<p>2-5. 研究開発成果の国際展開の強化</p> <ul style="list-style-type: none"> 新規連携先を開拓し定常的に90~100機関と連携し、国際実証実験、国際共同研究、国際研究集会の開催、インターンシップ研修員の受入れ等に寄与した。 平成20年に年間2名から開始したインターンシップ研修員の受入れを、年間約20名にまで拡大。平成28年度から令和元年度までに22カ国・45機関から78名の研修員の受入れを行った。この結果、翻訳技術研究分野等において、論文発表や受賞、リクルーティング等の成果へと発展した。 機構主導のASEAN IVOのスキームにより、東南アジア諸国共通の社会課題に対して機構の研究開発成果や研究開発課題関連ICTを適用する共同研究開発プロジェクトを累計29件創出・推進し実証実験を実施した。その一部は次のステップとして外部資金(アジア太平洋電気通信共同体(APT)やJST)を得て、社会実装に向けた実証実 	<p>2-5. 研究開発成果の国際展開の強化</p> <p><国際展開></p> <ul style="list-style-type: none"> 日米・日欧の国際共同研究で新分野(計算論的神経科学等)を開始したほか、アジアでは台湾との共同研究を開始し、ASEAN IVOの活動を順調に拡大などした。 ASEAN-IVOなどの活動を継続実施しICT技術の社会導入を促進した点を高く評価した。 ASEAN IVOを順調に拡大してきたことを評価した。 米・欧・ASEANとの連携の中で共同研究を着実に推進していることは評価できる。 米国NSFと連携して、ネットワーク分野のJUN02、計算論的神経科学の

<p>際研究ネットワークの形成、国際セミナーの開催、国際展示会への出展、海外情報の継続的・体系的・組織的な収集・蓄積・分析、相手国・地域への研究開発成果の普及を目指した活動を強化していくことが必要である。また、機構の研究開発課題に関連するICTについて日本企業の国際展開につなげていくためには、総務省や在外公館、関係機関との連携・協力が必要となっている。</p> <p>このため、先進国に関しては、先進的技術に関する共同研究開発や標準化・制度化・政策対話の場において国際調整等を円滑に進めることが機構の研究開発成果の最大化につながることから、引き続き活発な国際展開の取組を行うものとする。一方、東南アジア諸</p>	<p>への参加や、在外公館や関係機関と一体となった国際実証実験を実施する。</p> <p>さらに、機構の研究開発成果を技術移転した日本企業が海外展開できるように、在外公館や関係機関との連携・協力のもとで機構の研究開発成果を展開・社会実装するための実証実験を計画的に推進する取組を行う。</p> <p>米国や欧州等の先進国に関しては、これらの国との政策対話や科学技術協力協定のもとでの国際調整を円滑に進め、標準化や制度化において機構の技術が採用されることが機構の研究開発成果の最大化につながることから、引き続き日米、日欧で連携し共同で研究開発課題を公募するスキームの活用等により、共同研究開発を推進する。</p> <p>一方、東南アジア諸国に関しては、これまで機構が培ってきた研究連携ネットワークの活動においてリーダーシップを発揮し、共通の課題解決を目指した国際共同研究プロジェクトを推進する。</p> <p>このような国際的な活動を推進するため、ボトムアップの提案に基づく国際展開を目指すプログラムを実施するなど、国際連携の取組を重層化し、更に機構の国際的なプレゼンスを高めるため、国際的な会議やフォーラム等に積極的に参加するほか、機構自らによる国際セミナーの開催や国際展示会への出展等を行う。</p> <p>また、このような国際的な活動を</p>		<p>験 7 件を実施した。また、そのうち 4 件は技術移転先企業も参画し、ビジネス化を推進した。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 米国国立科学財団(NSF)と共同で、ネットワーク領域を対象とする JUNO プログラムを終了し、後継の JUNO2 プログラムを新規に開始するとともに、計算論的神経科学分野の多国間共同フレームワーク CRCNS に参画して研究を開始した。 • 欧州委員会 Horizon 2020 の下で第 3 弾と第 4 弾の国際共同研究プロジェクトを開始し、第 6 弾の調整と募集を実施(令和 2 年募集、3 年研究開始予定)。また、日欧国際共同シンポジウムを 3 回(見込み 1 回含)開催し、プロジェクトの進捗確認と将来の方向性の共有を行った。 • 台湾 NARLabs との間で共同研究プログラムを新設し、令和元年に 2 件の共同研究を開始した。 • ASEAN IVO の活動を主導し、共通の社会課題に対する ICT ソリューション案を毎年のフォーラム(100 名以上参加、30 件以上の提案)で議論してプロジェクトを醸成し新規プロジェクトを開始。累計で 24 件、142 機関 248 名が参画するボリュームの国際共同研究プロジェクトを実施した。(令和 2 年度終了時累計 29 件、170 機関以上、300 名以上の見込み) • 新規プログラム(機構内部用「国際展開ファンド」)を平成 28 年度に開始して毎年度 7 件を実施し、国際実証実験等の取り組みを推進した。 • 機構の国際的なプレゼンスの向上のため、国際的な会議やフォーラム等に積極的に参加するほか、機構自らによる国際セミナーの開催や国際展示会への出展等を積極的に実施した。 • 北米、欧州、アジアの各連携センターでは、例えば、在外公館による訪日客促進イベント等の機会を捉えた音声自動翻訳ソフトの紹介や、宇宙天気や先端ネットワーク研究に関するワークショップの開催を行うなど、機構内の研究所と密に連携を図りながら、地域に合わせた成果展開活動を実施している。 	<p>分野の CRCNS の共同研究プロジェクトを推進していることは評価できる。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 国際展開ファンドによる機構の成果展開や、APT・JST 案件での日本企業の参画など、日本企業の国際競争力強化に一定の貢献をしている。 • 日米・日欧の国際共同研究を着実に実施し、台湾との共同研究も開始したことを評価した。 • ASEAN 諸国との連携、タイを拠点とした活動、欧州、米国での活動など、国際各方面情勢把握と具体的活動の強化に大きな貢献をしてきたことを評価した。 <p>等、研究開発成果の国際的普及や日本企業の競争力強化につながる将来的な成果の創出が期待される実績が得られた。</p> <p>以上のことから、中長期目標期間を着実に達成する成果の創出が認められた他、将来的な成果の創出が期待される実績も得られたため、評定を「B」とした。</p>
---	--	--	---	---

<p>国に関しては、機構がこれまで培ってきた研究連携ネットワークを基礎として、研究開発成果の国際展開に向けて一層のリーダーシップを発揮するものとする。</p> <p>さらに、海外拠点を一層活用することで、従来の海外情報収集や人材交流、研究協力だけでなく、研究開発成果の最大化の観点を中心に踏まえ、戦略的な研究協力推進や研究開発成果の相手国・地域への展開・社会実装、日本企業の海外展開支援等に取り組むものとする。この取組に際しては、国際展開の対象とする研究開発の分野等について重点的な取組を推進するものとする。</p>	<p>通じて、公開情報のみでは得られない海外情報の継続的・体系的・組織的な収集・蓄積・分析に努める。</p> <p>北米、欧州、アジアの各連携センターは、機構の国際展開を支援するためのハブとしての機能を発揮する。そのため、各連携センターでは、上述した国際展開の各取組を実施し、これらに対する支援を行うとともに、機構の研究開発についての情報発信、機構と海外の機関との研究交流や連携の促進に取り組む。また、特に国際展開を目指す研究開発分野においては、相手国・地域への展開・社会実装を目指すとともに、機構の研究開発成果を技術移転した日本企業による海外展開等を目指した取組を行う。</p>		<ul style="list-style-type: none"> • また、工場無線に関する FFPA/FFPJ の活動支援や RSA カンファレンスにおけるセキュリティ技術展示など、技術移転先企業の海外展開意向を確認した上で、海外へのプロモーション支援、海外でのパイロットプロジェクト形成支援を行っている。 • 当機構に来訪した海外の方々向けに、本部展示室において英語による説明実施及び展示物解説の日英併記の充実を行った。また令和元年度から、本部構内 2ヶ所(日本標準時展示室、航空機搭載合成開口レーダー展示エリア)を対象とした英語解説付き見学ツアーの実施を始めた。平成 28 年度～令和 2 年 1 月の展示室および見学ツアーの英語対応団体見学数は 189 組。 • 海外への発信が効果的な案件については、英文による報道発表を平成 28 年度から令和元年度の各年度に、各々 11 件、6 件、11 件、10 件(2/6 現在)行うとともに米国科学振興協会(AAAS)が提供するオンラインサービスを使って投稿するなど PR に努めた。その結果、海外メディアから直ちに反響があり、速報として令和元年度は 110 件以上の掲載があった(広報部把握分)。特に令和元年度は、プラズマバブル観測レーダーのタイ国内運用開始の報道発表に際しては、現地で開催された開所式での報道対応も行った。 • 海外向け機関誌「NICT Journal」(「研究報告」の英訳版)については、読者層が限定され、外部からの閲覧が必ずしも十分ではない状況にあったことから、機構内部でその扱いの見直しを検討した。その結果、研究者・技術者や経営者層等を含む、より広い海外の読者層に向けて、NICT の活動紹介とともに、直近 1 年間の代表的な研究成果をハイライトとして紹介する、英文機関誌「NICT REPORT」を年 1 回発行(電子ブック及び PDF)することとし、創刊号を平成 31 年 1 月に発刊した。さらに、令 	
--	--	--	--	--

			<p>和 2 年 1 月に発行した「NICT REPORT 2020」では、NICT の研究成果・活動紹介・研究成果ハイライト等に加え海外拠点の紹介等のマガジ的な要素も織り交ぜた。また、国際連携研究室と連携し、広報誌「NICT NEWS」(英語版)の配信先に「NICT REPORT」の発行を配信するとともに、「NICT REPORT2020」では、さらに海外に向けアピールすべく、試験的に冊子版、リーフレット、URL・QRコード付カードを作成した。</p>	
<p>(6)サイバーセキュリティに関する演習 機構は、国の行政機関等のサイバー攻撃への対処能力の向上に貢献するため、国等から補助等を受けた場合には、その予算の範囲内で、サイバーセキュリティ戦略(平成 27 年 9 月 4 日閣議決定)等の政府の方針を踏まえ、機構法第 14 条第 1 項第 7 号の規定に基づき、機構の有する技術的知見を活用して、国の行政機関等における最新のサイバー攻撃事例</p>	<p>2-6. サイバーセキュリティに関する演習 機構は、国の行政機関等のサイバー攻撃への対処能力の向上に貢献するため、国等から補助等を受けた場合には、その予算の範囲内で、サイバーセキュリティ戦略(平成 27 年 9 月 4 日閣議決定)等の政府の方針を踏まえ、機構法第 14 条第 1 項第 7 号の規定に基づき、機構の有する技術的知見を活用して、国の行政機関等における最新のサイバー攻撃事例に基づく効果的な演習を実施する。その際、サイバーセキュリティ基本法(平成 26 年法律第 104 号)第 13 条に規定する全ての国の行政機関、独立行政法人及び指定法人の受講機会を確保するとともに、同法第 14 条に規定する重要社会基盤事業者及びその組織する団体並びに地方公共団体につい</p>	<p>2-6. サイバーセキュリティに関する演習 ・実践的サイバー防御演習「CYDER」及び東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会関連組織セキュリティ関係者向け実践的サイバー演習「サイバーコロッセオ」において、当機構の有する技術的知見等を活用して、脆弱性を悪用した現実的な攻撃事例等に基づく演習を実施した。</p> <p><実践的サイバー防御演習 CYDER> CYDERについては、主に以下のような取り組みを行った。</p> <p>【平成 28 年度】 ・総務省からの事業移管を受け、NICT としての演習事業を開始した。 ・従前に実施していた国の行政機関等向けに加え、地方公共団体向けコースを新設した。 ・全国 11 都道府県、合計 39 回の演習を実施し合計 1539 人が受講した。</p>	<p>2-6. サイバーセキュリティに関する演習 <演習の実施> ・CYDER, サイバーコロッセオ、SecHack365 の 3 つのプログラムが受講目標をいずれも達成しているだけでなく、サイバーコロッセオにおいては、予定より前倒しできているだけでなく、質的向上が達成できていることを評価した。 ・CYDER については、途中、自然災害の影響等もあり受講できない地方自治体等があつて予定の受講数を確保できない年度もあつたが、様々な取り組みを通じて、現時点において、大多数の行政機関、地方自治体等の職員に対して演習機会を提供できている点は大いに評価できる。 ・センターから個別組織への文書の直接送付等による周知、政府との連携による周知等により、国の機関での</p>	

<p>に基づく効果的な演習を実施する。その際、サイバーセキュリティ基本法第13条に規定する全ての国の行政機関、独立行政法人及び指定法人の受講機会を確保するとともに、同法第14条に規定する重要社会基盤事業者及びその組織する団体並びに地方公共団体についても、サイバー攻撃により国民生活等に与える影響の大きさに鑑み、より多くの受講機会を確保できるよう配慮する。あわせて、対象者に応じた演習内容の多様化など、演習の充実に向けた取組を推進する。</p>	<p>ても、サイバー攻撃により国民生活等に与える影響の大きさに鑑み、より多くの受講機会を確保できるよう配慮する。また、演習内容については、対象者に応じた演習シナリオを用意するなど、対象者のサイバー攻撃への対応能力向上に向けた柔軟な取組を推進する。</p>		<p>【平成29年度】</p> <ul style="list-style-type: none"> 従前に実施していた中級レベルの演習に加え、初級Aコースを新設し、事前オンライン学習を導入することにより、演習日程を1.5日から1.0日に短縮した。 全国47都道府県で計100回の演習が実施され、3009人が受講した（前年度比約2倍）。 ナショナルサイバートレーニングセンター独自の研究開発として、演習シナリオの自動生成、演習環境の自動構築などを可能とするサイバー演習自動化システム「CYDERANGE」（サイダーレンジ）を開発した。 <p>【平成30年度】</p> <ul style="list-style-type: none"> 演習基盤の一層の効果向上 サイバー演習自動化システム「CYDERANGE」の実運用を開始し、多数のコースの演習環境を迅速に構築・運用することが可能となった。 より効果的なコース運営に向けた改善 Bコースにおけるグループワークにおいて、「担当」等を設定し、訓練グループ内で役割分担して協力しながら課題に取り組む仕組みを導入した。 公的な演習事業としての更なる展開 中央省庁における、「実践的サイバー防御演習実施業務」の演習に参画し、合計4回実施した。 既存の資格制度との連携 (ISC)²が提供する資格の継続認定に必要なCPEクレジット（継続教育単位）付与対象の演習となった。 ※(ISC)² (International Information Systems Security Certification Consortium)は、ベンダーフリーであり、知名度と信頼の高いセキュリティ国際資格の一つ、CISSP (Certified Information Systems Security Professional)などの国際資格を提供している。 受講者拡大のための周知・広報活動の継続・強化 	<p>未受講組織実質ゼロを達成した。ことを評価した。</p> <ul style="list-style-type: none"> 政府の「情報システム統一研修」への参画、国立大学法人等の情報システム担当者向けの訓練事業への参画、国家資格事業との連携に向けた準備に取り組んでいることを評価した。 東京2020大会に向けたサイバーコロッセオの演習内容の多様化、コロッセオカレッジの科目の充実に取り組んでいることを評価した。 CYDER、サイバーコロッセオでは、計画通りに演習を実施し、その間様々な工夫をしていることを評価した。 受講状況などを把握し、適切に対処を実施していることを評価した。 演習コースを増やすことで対象を着実に広げ効果の浸透を図っていることを評価した。 CYDERについては、常にサイバーセキュリティの最新情報を踏まえた質の高いシナリオを用意し、ハイレベルな実践的サイバー防御演習を実施できていることを評価した。 演習の周知広報にも積極的に取り組み、平成29年度以降毎年度約3千人に演習を提供し、国の機関での未受講組織実質ゼロを達成したことを評価した。 サイバーコロッセオについては、受講者のレベルに合わせたきめの細かい演習を前倒して実施したこと、技術的知識を補完するための講義演習「コロッセオカレッジ」を開設し提供したこと、受講者の科目選択の参考となる小冊子を作成し配布したことを評
---	---	--	---	--

			<p>対象となる組織別に直接訪問による説明、メール、電話等での周知に加え、関係する会合、大規模見本市等の機会を捉え事業内容の理解浸透を図るなど、引き続き受講者拡大に向け、積極的に活動した。</p> <ul style="list-style-type: none"> • その他コースの構成においては、従前に実施していた地方公共団体向け、国の行政機関向けの演習に加え、重要社会基盤事業者向けの「B-3 コース」を新設した。 • 全国 47 都道府県、合計 107 回の演習を実施し合計 2,666 人が受講した。 <p>【令和元年度】</p> <ul style="list-style-type: none"> • 開催場所・開催時期の改善 県庁所在地以外での開催や同一地域での開催が同じ時期に集中しないようにするなど、より一層、受講者の利便性等を考慮し、開催場所・時期を改めて見直した。 • サイバーセキュリティをめぐる社会情勢等をより反映したシナリオの実現 IoT 機器の普及をふまえて、Web カメラを経由した攻撃シナリオを作成し、併せて、サイバー攻撃における仮想通貨の悪用の事例もシナリオに反映した。 • 周知広報の多面的かつ積極的な展開 受講の優先順位の高い組織(国・独立行政法人等)や地方公共団体等に向けて、政府等とも連携の上、各組織に合わせた多面的な周知啓発を積極的に展開した。 • 公的な演習事業としての更なる展開 サイバーセキュリティ分野の人材育成の中軸を担う「質の高い事業」の実現に向け、政府の「情報システム統一研修」への参画、国家資格との連携に向けた準備を行った。 • 海外における実践的サイバー防御演習事業への演習シナリオ等を初提供した。 • 国の行政機関での未受講組織実質ゼロを達成し 	<p>価した。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 予定通りの実施を進められてきたこと自体を評価すべきである。また、演習内容や方法について、常に提案を行いながら改善してきたことを高く評価した。 <p>以上のことから、中長期計画を達成する業務運営が極めて着実に実施されたため、評定を「A」とした。</p>
--	--	--	--	---

			<p>た。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 全国 47 都道府県、合計 105 回の演習を実施し合計 3,090 人が受講した(累計受講者数は 11,000 人を超え、国内最大規模の演習に成長した)。 <p>【令和 2 年度】</p> <ul style="list-style-type: none"> • 全国 47 都道府県で計 100 回程度実施し、3000 人受講の見込み。また、オンラインでの演習も併せて実施する予定。 • 新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言下において、過去の演習教材の一部を公開し、公開後 1 週間で 3,000 件の申込みを達成した。 <p>「CYDER」の各演習内容は下記のとおり</p> <p>【コース別のシナリオを用意】</p> <ul style="list-style-type: none"> • 初級 A コース: CSIRT (Computer Security Incident Response Team) アシスタントレベルの受講者向け、平成 29 年度以降実施、47 都道府県全 60 回程度開催 • 中級 B コース: CSIRT メンバーレベルの受講者向け <ul style="list-style-type: none"> B-1 コース: 地方公共団体向け、11 都道府県全 20 回程度開催 B-2 コース: 国の機関等向け、令和元年度以降 B-3 コースを統合、東京全 20 回程度開催 B-3 コース: 重要社会基盤事業者・民間企業等向け、平成 30 年度のみ実施、令和元年度以降 B-2 コースに統合 <p>◆ なお、CYDER 事業は、各年度ともに、外部の有識者を招いた実行委員会を開催し、事業全般</p>	
--	--	--	---	--

			<p>について、助言をいただくなど、事業の適正な実施に努めた。</p> <p><サイバーコロッセオ> 「サイバーコロッセオ」においては、主に以下のような取り組みを行った。</p> <p>【平成 29 年度】</p> <ul style="list-style-type: none"> • 総務省からの事業移管を受け、NICT としての演習事業を開始した。 • 受講者の習熟度や業務の性質等に合わせて、初級・中級・準上級コースを設定した(ただし初・中級を分離および初級実施は平成 30 年度から)。 • 機構での初年度実施に当たり、大会組織委員会等との連携のもと、従前当機構で実施していた「CYDER」の演習プログラムにはない「攻防戦(※)」等の演習形式で実施した。 <p>※「攻防戦」とは、受講者が複数チームに分かれ、自組織のネットワークの守備と他チームのネットワークへの攻撃を両方体験することで、攻撃者側の視点をも踏まえたハイレベルな防御手法の検証及び訓練を行う演習形式</p> <ul style="list-style-type: none"> • 演習中級コースを 1 回開催し 34 名が受講、演習準上級コースを 1 回開催し 40 名が受講した。 <p>【平成 30 年度】</p> <ul style="list-style-type: none"> • 対象組織の状況に応じて、育成人数枠を拡大(初級・中級で最大 100 名規模)し、実機を用いる「コロッセオ演習」を引き続き実施した(実機演習の時間を多めに確保)。 • 技術的知識を補完するための講義演習「コロッセオカレッジ」を新設し、「コロッセオ演習」との相乗効果を狙うため、講座受講を推奨した。 • 育成機会の拡大のため、オンライン学習コンテンツの常時公開による予習復習時間を拡充した。 • CYDER と同じく、(ISC)²が提供する資格の継続認定に必要な CPE クレジット(継続教育単位)付 	
--	--	--	--	--

			<p>与対象の演習となり、CISSP 認定資格保持者が本演習に参加するインセンティブの向上につなげた。</p> <ul style="list-style-type: none"> • コロッセオ演習においては、初級 A/B 各 1 回、中級、準上級を各 2 回開催し合計 137 名が受講し、コロッセオカレッジにおいては、15 科目 20 コマの講義演習を 347 名が受講した。 <p>【令和元年度】</p> <ul style="list-style-type: none"> • 当初計画(平成 29 年度時点)における育成人員を前倒し 大会に向けた準備のため、演習の前倒しを希望する組織委員会と調整のうえ、事業全体の育成計画は維持し、令和 2 年 6 月までの育成人員計画(220 名)の半数分を令和元年度へ前倒した。 • 受講者アンケートや外部有識者の助言等に基づき、受講者のニーズ等に応じた演習内容のより一層の拡充 コロッセオ演習においては、組織委員会での業務内容を反映して、ネットワークエンジニア向け演習シナリオを提供した中級 B を新設したほか、準上級 B や攻防戦における防御側の実機演習ニーズに応えた準上級 C を新設した。また、コロッセオカレッジにおいては、GDPR(EU 一般データ保護規則)への注目が高い等といった新たな需要に応じて、国内法の個人情報保護関連法令と国際法の GDPR に分割する等、科目を分割および新設した。 • 充足率向上および適切な科目選択への取り組み 演習コンテンツの準備を前倒しで行う等の工夫により、募集開始から演習実施までに十分な周知期間を確保したことで高い充足率を達成したほか、従来のシラバスに加え、講師インタビュー等を盛り込んだ小冊子の作成に取り組んだ。 • コロッセオ演習は初級 2・中級 2・準上級 3 の 7 コース 15 回開催し 193 名が受講し、コロッセオカレッジは 20 科目 59 回開催し 992 名が受講した。 	
--	--	--	--	--

			<p>【令和 2 年度】</p> <ul style="list-style-type: none"> 大会前年度のため、大会職員の業務スケジュールを考慮し、準上級を優先しつつ初級、中級各レベルを並行して開催する。 <p>「サイバーコロッセオ」の各演習内容は下記のとおり。</p> <ul style="list-style-type: none"> コロッセオ演習:受講者の習熟度や業務の性質等に合わせて、初級・中級・準上級コースを設定 <ul style="list-style-type: none"> 初級 A/B コース(CSIRT アシスタントレベル等の受講者向け):事前オンライン学習、実機演習、グループワーク(1日)、オンライン復習 中級 A/B コース(CSIRT メンバーレベル等の受講者向け):事前オンライン学習、実機演習、グループワーク(1日)、オンライン復習 準上級コース(データ解析者(※)レベルの受講者向け):事前オンライン学習、高度セキュリティ講義演習・実機演習、グループワーク(2日)、オンライン復習 <p>※「データ解析者」:ネットワークに侵入したボットやワーム等のマルウェアを発見し、そのデータから、挙動などを解析することが可能なレベルのセキュリティ人材</p> <ul style="list-style-type: none"> コロッセオカレッジ (20 科目) コロッセオ演習と連携する初・中・準上級の補助講義、コース間ステップアップ講義、実践的情報セキュリティ講義を内容として講義演習を実施。 (例)初級:個人情報保護法関連、GDPR 等 中級:セキュリティツール M 等 準上級:マルウェア解析実務 等 <p>◆ なお、サイバーコロッセオ事業は、各年度ともに、外部の有識者を招いた実行委員会を開催し、事業全般について、助言をいただくなど、事</p>	
--	--	--	--	--

			<p>業の適正な実施に努めた。</p>	
<p>(7)パスワード設定等に不備のあるIoT 機器の調査 機構は、IoT 機器のサイバーセキュリティ対策に貢献するため、国から補助等を受けた場合には、その予算の範囲内で、サイバーセキュリティ戦略(平成 30 年 7 月 27 日閣議決定)等の政府の方針を踏まえ、機構法附則第 8 条第 2 項の規定に基づき、機構の有する技術的知見を活用して、パスワード設定等に不備のある</p>	<p>2-7. パスワード設定等に不備のあるIoT 機器の調査 機構は、IoT 機器のサイバーセキュリティ対策に貢献するため、国から補助等を受けた場合には、その予算の範囲内で、サイバーセキュリティ戦略(平成 30 年 7 月 27 日閣議決定)等の政府の方針を踏まえ、機構法附則第 8 条第 2 項の規定に基づき、機構の有する技術的知見を活用して、パスワード設定等に不備のある IoT 機器の調査及び電気通信事業者への情報提供に関する業務を実施する。その際、総務省や関係機関と連携を図るとともに、本調査の重要性等を踏まえ、調査手法や情報の安全管理に留意しつつ、広範な調査を行うことができるよう配慮する。</p>		<p>2-7. パスワード設定等に不備のあるIoT 機器の調査</p> <ul style="list-style-type: none"> 国立研究開発法人情報通信研究機構法の改正と施行を受け、実施計画書を策定し、総務省より認可を受けた。ナショナルサイバーオペレーションセンターを平成 31 年 1 月 25 日に設置し、2 月 20 日から調査を開始した。 IoT 機器のサイバーセキュリティ対策の一環として計画に従って着実に調査を実施した。 体制強化のため、平成 31 年 2 月 19 日に特定アクセス行為に係る業務に従事する者を追加する実施計画書の変更申請を行い、同年 3 月 19 日に総務省より認可を受けた。 令和元年度末には、調査のための手続きが完了しているインターネット・サービス・プロバイダ (ISP) 50 社に係る約 1.1 億 IP アドレスに対して調査を実施 (延べ 2,249 件が注意喚起の対象) しており、令和 2 年度も対象数を拡大し、調査を実施予定である。 	<p>2-7. パスワード設定等に不備のあるIoT 機器の調査 <調査の実施></p> <ul style="list-style-type: none"> 少ない人員にも関わらず、約 1.1 億 IP アドレスに対して調査を着実に実施できた点を評価した。 実施計画にしたがい、また総務省等とも調整のうえで、適切に実施されていることを評価した。 ISP の対象社数を増やし、調査するアドレスを増やし、特定アクセスを実施した上で、注意喚起の対象件数を増やしており、NICT として果たすべき業務を着実に実施していることを評価した。 準備期間が短かったにもかかわらず、少ない人員で計画通り着実に調査を実施したことを評価した。 決められた業務を着実にやっている点

IoT 機器の調査及び電気通信事業者への情報提供に関する業務を実施する。その際、総務省や関係機関と連携を図るとともに、本調査の重要性等を踏まえ、情報の安全管理に留意しつつ、広範な調査を行うことができるよう配慮する。				以上のことから、中長期計画を達成する業務運営が着実に実施されたため、評定を「B」とした。
---	--	--	--	--

なお、この自己評価に関しては、国立研究開発法人情報通信研究機構の研究活動等に関する外部評価委員会（総括評価委員会）において、以下のような意見をいただいている。

1. 開催日

令和2年5月15日(金) 15時～18時

2. 委員名簿

酒井 善則	委員長	東京工業大学	名誉教授
安浦 寛人	委員	九州大学	理事・副学長
國井 秀子	委員	芝浦工業大学	客員教授
安藤 真	委員	東京工業大学	名誉教授
渡辺 文夫	委員	Fifth Wave Initiative	代表
有川 節夫	委員	放送大学学園	理事長
松井 充	委員	三菱電機株式会社	開発本部 役員技監
太田 勲	委員	兵庫県立大学	学長
飯塚 久夫	委員	株式会社ぐるなび	常勤顧問

3. 委員長及び委員からの意見

- ・全体として、自己評価の評点をもう少し上げて良いのではないか。

例えば、大項目については、センシング基盤分野については、見込み・単年度共にAとなっているが、いくつかのSクラスの成果が含まれており、本分野についてもSクラスにかなり近いと思う。統合ICT基盤分野については、見込み・単年度共にBとなっているが、Aに近いと思う。フロンティア研究分野については、見込

み・単年度共に A となっているが、かなり S クラスの研究が含まれている。オープンイノベーション分野については、見込み・単年度共に B だが、非常に良い部分もある。

- ・（オープンイノベーション分野について）戦略的な標準化活動の推進が含まれている中項目については、見込み・単年度共に A あるいは S に相当するような成果をあげていると思う。とても社会実装に成果を上げており、もっと評価されるべきと思う。質の良いデータを収集する、テストベッドをきっちり構築する、コーパスのデータを多く収集する、という地道な活動の成果が着々として出てきている。社会的意義や目的を明確にし、将来を見据えた技術目標のマイルストーンを明確に置いて研究しており、研究者の取り組みの姿勢が良いと思う。

（全体を通して）

- ・社会実装という評価軸は科学的意義とは異なり評価されづらい。しかも、これからの世の中で重要になってくるので、このためしっかりと評価し、モチベーションの維持等を含めて、頑張る社会実装に取り組んでもらいたい。
- ・それぞれの技術分野で、様々な社会的課題に対して研究を行っており、技術分野だけでなく、社会課題別の視点でのアピールなど、多面的なまとめ方で情報発信を行うことが重要ではないか。
- ・コロナ騒動の中で、世界が一気に社会構造や産業構造、経済活動が大きく変化していく中で、新しい社会の在り方を NICT から描いていただきたい。
- ・全体の印象として、とても大きな成果を上げている。基礎研究の分野では、様々な賞を受賞しており、科学技術的に大変意義のある成果を達成している。

国立研究開発法人情報通信研究機構 第4期中長期目標期間終了時見込評価 項目別自己評価書(No.7 研究支援業務・事業振興業務等)

1. 当事務及び事業に関する基本情報			
中長期目標の当該項目	Ⅲ. -4. 研究支援業務・事業振興業務等		
関連する政策・施策	—	当該事業実施に係る根拠 (個別法条文など)	国立研究開発法人情報通信研究機構法第14条第1項第8号から第12号及び第2項各号
当該項目の重要度、難易度		関連する研究開発評価、政策評価・行政事業レビュー	行政事業レビューシート ****

2. 主要な経年データ												
主な参考指標情報							主要なインプット情報(財務情報及び人員に関する情報)※					
	基準値等	28年度	29年度	30年度	元年度	2年度		28年度	29年度	30年度	元年度	2年度
「海外研究者の招へい」に対する応募件数	目標15件以上	16件	20件	13件	16件		予算額(百万円)	4,169	7,609	11,792	9,934	
「国際研究集会の開催支援」に対する応募件数	目標15件以上	20件	32件	17件	24件		決算額(百万円)	4,819	6,099	7,402	9,303	
イベント開催件数(ベンチャー)	目標20件以上	40件	38件	39件	47件		経常費用(百万円)	26,892	2,463	5,187	9,299	
実施後1年以内に商談に至った割合(ベンチャー)	目標50%以上	100%	100%	100%	100%		経常利益(百万円)	48	△135	△9	12	
有益度の評価(上位2段階の得る割合(ベンチャー))	目標7割以上	96.5%	95%	98.9%	92.2%		行政サービス実施コスト(百万円)	602	672	682	9,474	
助成終了2年後の継続実施率(バリアフリー)	目標70%以上	100%	100%	100%	100%		従事人員数(人)	10	10	11	12	

※ 予算額、決算額は支出額を記載。人件費については共通経費分を除き各業務に配賦した後の金額を記載。従事人員数は、常勤職員の本務従事者数。

3. 中長期目標、中長期計画、主な評価軸、業務実績等、中長期目標期間評価に係る自己評価				
中長期目標	中長期計画	主な評価軸 (評価の視点)、指標等	法人の主な業務実績等	自己評価

<p>4. 研究支援業務・事業振興業務 研究支援業務・事業振興業務については、「独立行政法人の事務・事業の見直しの基本方針」(平成 22 年 12 月 7 日閣議決定)等の政府決定を踏まえ、国の政策目的達成のために必要なものに限定しつつ、引き続き効率的かつ効果的に実施していくものとする。また、各業務における支援対象の選定に当たっては、第三者委員会の設置等適切な方法により評価を行い、透明性の確保に努めるものとする。</p>	<p>4. 研究支援業務・事業振興業務</p>			<table border="1"> <tr> <td data-bbox="1850 124 1966 185"> <p>評価</p> </td> <td data-bbox="1966 124 2112 185"> <p>B</p> </td> </tr> <tr> <td colspan="2" data-bbox="1850 185 2112 1465"> <p>4. 研究支援業務・事業振興業務 中長期計画に沿って以下のように適切に運営を行い、十分に目標を達成した。</p> </td> </tr> </table>	<p>評価</p>	<p>B</p>	<p>4. 研究支援業務・事業振興業務 中長期計画に沿って以下のように適切に運営を行い、十分に目標を達成した。</p>	
<p>評価</p>	<p>B</p>							
<p>4. 研究支援業務・事業振興業務 中長期計画に沿って以下のように適切に運営を行い、十分に目標を達成した。</p>								

(1) 海外研究者の招へい等の支援

高度通信・放送研究開発を促進し、我が国の情報通信技術の研究レベルの向上を図るため、「海外研究者の招へい」及び「国際研究集会の開催支援」を行うものとする。「海外研究者の招へい」及び「国際研究集会の開催支援」のいずれも、前期（平成23年度から平成27年度まで）と比較して今中長期目標期間中の実績が上回るものとする。さらに、「海外研究者の招へい」において、各招へい毎に、共

4-1. 海外研究者の招へい等による研究開発の支援

高度通信・放送研究開発を促進し、我が国におけるICT研究のレベル向上を図るため、「海外研究者の招へい」及び「国際研究集会開催支援」を行う。

また、民間の研究機関における通信・放送基盤技術に関する研究レベルの向上を図るため、「国際研究協力ジャパントラスト事業」による海外からの優秀な研究者の招へいを着実に実施し、上記「海外研究者の招へい」と一体的に運用する。これらについては、内外の研究者の国際交流を促進し、ICT分野の技術革新につながる優れた提案を競争的に採択するため、中長期目標期間中の応募件数が前中長期目標期間（平成23年度から平成27年度まで）を上回るように、積極的に周知活動を行うこととし、「海外研究者の招へい」（「国際研究協力ジャパントラスト事業」によるものを含む。以下同じ。）及び「国際研究集会開催支援」ともに、毎年15件以上の応募を集めることを目指す。さらに、「海外研究者の招へい」については、各招へい毎に、共著

<評価の視点>

- 「海外研究者の招へい」の論文投稿や外部への研究発表、共同研究の締結等の研究交流の具体的な成果はどうだったか。
- 「国際研究協力ジャパントラスト事業」は、「海外研究者の招へい」と運用面で一体的に着実に実施したか。
- 「海外研究者の招へい」及び「国際研究集会の開催支援」の応募・採択状況はどうだったか。
- 支援対象の選定に当たっては、適切な方法により評価を行い、透明性の確保に

4-1. 海外研究者の招へい等による研究開発の支援

・令和2年度は「海外研究者の招へい」で11名を予定しており、中長期計画期間においては、「海外研究者の招へい」で45名、「国際研究協力ジャパントラスト事業」で10名となると見込まれる。

「海外研究者の招へい」実施件数（前年度からの継続を除く）

区分	第4期中長期					
	合計見込	H28	H29	H30	R1	R2 予定
「海外研究者の招へい」	45	8	11	10	5	11
「国際研究協力ジャパントラスト事業」	10	4	2	2	2	0

「海外研究者の招へい」（「国際研究協力ジャパントラスト事業」によるものを含む。以下同じ。）による論文投稿、研究発表、共同研究の締結等の研究交流の成果については、令和元年度までに71件の共著論文の執筆、58件の研究発表及び終了した計45件中40件で共同研究の締結等の研究交流の計画があった。

「海外研究者の招へい」における共著論文、研究発表及び終了後の研究交流計画件数

区分	第4期中長期					
	合計	H28	H29	H30	R1	R2
共著論文	71	7	20	30	14	令和3年 3月末 調査予定
研究発表	58	10	19	2	27	
研究交流	40/45	11/11	13/13	8/9	8/12	

同様に、追跡調査により、招へい終了年度後に43件の共著論文の執筆及び11件の研究発表の計画がある事を確認した。

招へい終了年度後の共著論文及び研究発表計画件数

区分	第4期中長期					
	合計	H28	H29	H30	R1	R2
共著論文	43	3	13	13	14	令和3年 3月末 調査予定
研究発表	11	6	0	0	5	

「国際研究集会開催支援」については、令和2年度は12件の支援を予定しており、中長期計画期間は56件となると見込まれる。

4-1. 海外研究者の招へい等による研究開発の支援

・令和元年度までの「海外研究者の招へい」の論文投稿は71本、外部への研究発表は58件、共同研究の締結は40件で、第4期においてはこれら以上の件数が見込まれる。

・国際研究協力ジャパントラスト事業と海外研究者の招へいを、公募から採択、事後評価に至るまで一体的、効率的に実施した。

・令和元年度までの「海外研究者の招へい」の応募件数は65件、「国際研究集会の開催支援」の応募件数は93件で、第4期においてはこれら以上の件数が見込まれる。

・支援対象の選定に当たっては、審査要領にもとづき、審査委員会の委員が個別に評価を行い、その合計点に

著論文、研究発表、共同研究成果のとりまとめ、共同研究の締結等の研究交流の成果が得られるものとする。

また、民間の研究機関における通信・放送基盤技術に関する研究レベルの向上を図るため、民間の公益信託の運用益等を原資として、海外から優秀な研究者を招へいする「国際研究協カジャパントラスト事業」を着実に実施する。実施にあたっては、「海外研究者の招へい」との運用面での一体的実施を図るものとする。

論文の執筆・投稿や、外部への研究発表、共同研究の締結等の研究交流の具体的な成果が得られるように、働きかけを行う。

努めたか。

<指標>

- 「海外研究者の招へい」及び「国際研究集会開催支援」に対する応募件数

「国際研究集会開催支援」実施件数

区分	第4期中長期					
	合計見込	H28	H29	H30	R1	R2予定
「国際研究集会開催支援」	56	12	12	10	10	12

- ・「国際研究協カジャパントラスト事業」による海外研究者の招へいについては、平成23年度から「海外研究者の招へい」の実施部門と審査委員会を統合し、公募から採択、事後評価に至るまで一体的、効率的に実施した。
- ・機構内の研究所や大学等の委託研究先・産学連携窓口、総務省総合通信局、学会やフォーラム等の各種団体へ周知依頼を行うとともに過去の応募者へも直接周知をするなど、積極的な周知活動を行った。
- ・「海外研究者の招へい」の応募件数については、令和元年度まででは、平成30年度以外のすべての年度において15件以上となった。また、「国際研究集会開催支援」は、すべての年度において15件以上の応募となった。

「海外研究者の招へい」及び「国際研究集会開催支援」の応募件数

区分	第4期中長期					
	合計	H28	H29	H30	R1	R2
「海外研究者の招へい」	65	16	20	13	16	未定
「国際研究集会開催支援」	93	20	32	17	24	未定

- ・審査要領にもとづき、審査委員会の委員（外部有識者）が個別に評価を行い、その合計点により順位付けしたのち、審査委員会を開催して総合評価を行った。なお、審査委員会の委員が関係している応募案件については、審査委員会規程により、その評価に参加できないこととしている。
- ・招へいの具体的な成果の増加を目的として、共著論文、外部への研究発表、共同研究契約等がより一層図られるよう、働きかけを行った。

より順位付けしたのち、審査委員会を開催して総合評価を行ったことから、適切な方法・透明性確保ができた。

以上のように、海外研究者の招へい等による研究開発の支援について、業務を着実に実施し、十分に目標を達成した。

(2) 情報通信ベンチャー企業の事業化等の支援

次世代の情報通信サービスのシーズを生み出す情報通信ベンチャー企業の事業化、IoT サービスの創出・展開、チャレンジド向けの情報通信サービスの普及に対する以下の支援等を行うものとする。

なお、これらの業務の実施に当たっては、情報提供の充実や標準処理期間の明示等により利用者に利便性の高い業務となるよう努めるとともに、政策目標に関連した具体的か

4-2. 情報通信ベンチャー企業の事業化等の支援

4-2. 情報通信ベンチャー企業の事業化等の支援

4-2. 情報通信ベンチャー企業の事業化等の支援

つ定量的な目標の達成度に応じて、事業の見直しを行いつつ、着実に進めるものとする。

ア

次世代のより豊かで多様な情報通信サービスを実現するため、独創的な技術のシーズを有し、かつ、資金調達が困難な全国各地の情報通信ベンチャー企業や将来の起業を目指す学生等に対し、自治体や地域においてベンチャーを支援する団体等との連携を通じて、情報提供及び交流の機会提供等の支援を行うものとする。

(1) 情報通信ベンチャーに対する情報及び交流機会の提供

リアルな対面の場合やオンライン・メディアを活用しつつ、情報通信ベンチャーの事業化に役立つ情報及び交流の機会を提供することにより、情報通信ベンチャーの有する有望かつ新規性・波及性のある技術やサービスの事業化等を促進する。その際、次の点に留意する。

有識者やサポーター企業による情報の提供、助言・相談の場を提供するとともに、情報通信ベンチャーによるビジネスプランの発表会や商品・サービス紹介等のイベント等を通じたマッチングの機会を提供する。

また、全国の自治体やベンチャー支援組織・ベンチャー団体等との連携の強化により、効率的・効果的な情報の提供や交流の機会の提供を図る。

これらの取組により、イベ

<評価の視点>

- 全国各地の情報通信ベンチャー企業や将来の起業を目指す学生等に対し、自治体や地域においてベンチャーを支援する団体等との連携を通じて、情報提供及び交流の機会提供等の支援を行ったか。
- イベントを年間20件以上開催したか。
- 事業化を促進するマッチングの機

(1) 情報通信ベンチャーに対する情報及び交流機会の提供

・ベンチャーキャピタル、ICTスタートアップ業界等のプロフェッショナル(以下「ICTメンター」という。)により構成している「ICTメンタープラットフォーム」による情報通信ベンチャー(以下「ICTスタートアップ」という。)への助言等を以下のとおり行った。(ICTメンター数 H28:20人、H29・H30:19人、R1:18人)

・地域から発掘したICTスタートアップが販路拡大等を目的としてビジネスプランを発表する「起業家万博」及び将来のICTスタートアップの担い手となる高専学生、大学生等の若手人材の発掘・育成を目的とする「起業家甲子園」を毎年度3月に開催した。(令和元年度は、新型コロナ感染症拡大の防止に配慮し、オンライン等で開催した。)

・「起業家甲子園」及び「起業家万博」の審査委員をベンチャーキャピタリストに依頼する(平成30年度から)等、イベントの魅力向上を図った。

・「起業家万博」及び「起業家甲子園」の開催に向け、地域の有望なICTスタートアップの発掘・育成を目的として、大学、地方公共団体及び地域のスタートアップ支援組織・団体等と連携し、地域におけるICTスタートアップ発掘イベントを毎年度連携・実施した。これらには、ICTメンターも参画し、発掘したICTスタートアップに対するメンタリング等を実施した。

・上記のほか、講演会やブラッシュアップセミナー等を毎年度連携・実施し、若手人材の発掘やビジネスプランへのアドバイス等を行った。

・「起業家甲子園」出場者を対象として、グローバル志向のICTスタートアップマインドの醸成と、より実践的なスキルの向上を図るため、「シリコンバレー起業家育成プログラム」を毎年度(2~3月頃)実施した。

・「起業家万博」、「起業家甲子園」、地域連携イベント等を含め、講演会・セミナー等のイベントを毎年度連携・開催した。(このうち、「起業家万博」、「CEATEC」又は「NICTオープンハウス」において、機構の研究開発成果の社会実装や機構が有する知的財産権の社会還元を目指し、機構発ベンチャーの出展を通して、機構の知的財産等の情報提供を実施した。(機構発ベンチャー出展イベント数 H28:1件、H29:3件、H30:3件、R1:2件。なお、H28は1

(1) 情報通信ベンチャーに対する情報及び交流機会の提供

・「起業家甲子園」・「起業家万博」、地域におけるICTスタートアップ発掘イベント、「シリコンバレー起業家育成プログラム」、ブラッシュアップセミナー等を通じて、自治体や地域のベンチャー支援団体等と連携し、情報提供及び交流の機会提供等の支援を行った。

・目標の年間20件以上を上回るイベントを開催できる見込み(R2は未定)である。また、1年以内のマッチング等商談に至る状況について、目標の50%以上を上回る100%の社が新規取引先の開拓等につながる

さらに、機構の研究開発成果の社会実装や機構が有する知的財産権の社会還元を目指す観点から、自治体や地域においてベンチャーを支援する団体等との連携の枠組みを有効に活用するものとする。

情報通信ベンチャーに対する情報提供及び交流事業については、実施の結果、ベンチャーの創業や事業拡大にどの程度の貢献があったかといった成果に関する客観的かつ定量的な指標により成果を把握するものとする。

ント等を毎年 20 件以上開催し、そのうち年 2 回以上のイベントにおいて、機構の知的財産等の情報提供を実施する。特に、事業化を促進するマッチングの機会を提供するイベントは、その実施後 1 年以内において具体的なマッチング等商談に至った割合が 50%以上となることを目指す。

イベントについて、参加者に対して有益度に関する調査を実施し、4 段階評価において

て上位 2 段階の評価を 70%以上得ることを目指すとともに、得られた意見要望等をその後の業務運営に反映させる。

インターネット上に開設したウェブページ「情報通信ベンチャー支援センター」について、情報内容を含め、そのあり方を随時検討する。

会を提供するイベントについては、関係企業の参加を積極的に募るとともに、その後の状況を定期的に把握したか。

● 機構の研究開発成果の社会実装や機構が有する知的財産権の社会還元を目指したか。

● 「有益度」に関する調査し、得られた意見要望等をその後の業務運営に反映させたか。

● ウェブページ「情報通信ベンチャー支援センター」について、あり方を検討したか。

件であるが 2 社が出展した。))

年度	H28	H29	H30	R1	R2 (見込み)
イベント等の開催 (件)	40	38	39	47	未定
ICT スタートアップ 発掘イベント (件)	22	19	20	25	未定
ブラッシュアップ セミナー等 (件)	9	7	12	11	未定
その他 (件)	9	12	7	11	未定

・ 起業家万博出場者等に対し、「Interop Tokyo 2016」(平成 28 年 6 月)、「CEATEC」(平成 29 年以降毎年 10 月)及び「Innovation Leaders Summit 2019 (令和元年 10 月)」への出展機会を提供するとともに、海外展開を予定している起業家万博出場者等に対して、米国(サンフランシスコ)で開催された「Tech Crunch DISRUPT SF」(毎年 9 月、10 月頃)及びタイ(バンコク)で開催された「Digital Thailand Big Bang 2019 (令和元年 10 月)」への出展機会を提供し、ビジネスマッチングの充実を図った。

・ 「起業家万博」及び「起業家甲子園」の大会当日は、協賛企業との交流・マッチングを促進するため附設の展示会場において、ビジネスプランの紹介等を行うブースやパネル展示等を行う等、ビジネスマッチングの機会を提供した。

・ 平成 28 年度から令和元年度までの各年度に実施した事業化を促進するマッチングの機会を提供するためのイベント実施後に、各年度起業家万博出場者に対して実施したアンケートの結果で、目標の 50%以上を上回る 100%の社が新規取引先の開拓等につながったとの回答を得た。

年度	H28	H29	H30	R1	R2 (見込み)
マッチング等商談に 至った割合 (%)	100	100	100	100	未定

・ イベント毎に行った参加者への「有益度」に関する調査では、目標の 70%以上を大きく上回る回答者から 4 段階評価において上位 2 段階の評価を得た。アンケートから得られた意見要望に対しては、地域応援団会議を開催し、地域イベントの進め方の協議を行う等、業務に反映させた。

年度	H28	H29	H30	R1	R2 (見込み)
参加者の有益度 (%)	96.5	95.0	98.9	92.2	未定

・ 「情報通信ベンチャー支援センター」を「ICT スタートアップ支援センター」に改称した(平成 30 年度)。Facebook ページを活用したタイムリーな情報

見込み(R2 は未定)である。

・ 海外を含めて展示会への出展機会を提供し、ビジネスマッチングの充実を図った。

・ 機構発ベンチャーに対し、ビジネスマッチングの機会の提供を行った。

・ 「有益度」調査における上位 2 段階の評価の割合は、目標の 70%以上を上回る評価を得られる見込み(R2 は未定)である。要望点等については、検討・反映を行った。

・ 「ICT スタートアップ支援センター」では、ICT スタートアップに有益な情報提供の充実を図るとともに、機構内 HP 管理システムへの再構築による、運用コスト削減と迅速な情報の更新を行った。

イ

信用基金の運用益によって実施している通信・放送新規事業に対する債務保証業務及び地域通信・放送開発事業に対する利子補給業務については、平成 28 年 5 月末以降は、新規案件の採択は行わないものとし、当該利子補給業務については、既往案件の利

(2)債務保証等による支援

通信・放送新規事業に対する債務保証業務及び地域通信・放送開発事業に対する利子補給業務については、平成 28 年 6 月以降は、新規案件の採択は行わないものとし、同利子補給業務については、既往案件の利子補給期間終了まで、着実に実施する。

新技術開発施設供用事業及び地域特定電気通信設備供用事業に対する債務保証業務及び助成金交付業務については、これらの事業が着実に成果を上げ、IoT サービスの創出・展開につながるものとなるよう努める。

なお、信用基金については、平成 33 年度を目途に清算する。

<指標>

- イベント開催件数
- マッチング等商談に至った割合
- 「有益度」調査における上位2段階の評価の割合(ベンチャー)

<評価の視点>

- 地域通信・放送開発事業に対する利子補給業務については、既往案件の利子補給期間終了まで着実に実施したか。
- 新技術開発施設供用事業及び地域特定電気通信設備供用事業に対する債務保証業務及び助成

発信（平成 23 年度から）、起業家甲子園・起業家万博のビデオライブラリの公表（平成 25 年度から）等を行い情報内容の充実を図るとともに、そのブランディング向上のため PR に努めた。また、機構内ホームページ管理システムへの再構築を行い（平成 28 年度）運用コスト削減、情報の迅速な更新を実施した。

(2)債務保証等による支援

- ・第 4 中長期計画期間中の債務保証業務については、新規案件はなし。
- ・第 4 期中長期計画期間(平成 28 年度～令和 2 年度)は、新規貸付 2 件、既往分も含めて 24 件(19 社)に対して、利子補給(841 万円)を適切に実施した。
- ・第 4 期中長期計画期間(平成 28 年度～令和 2 年度)の新技術開発施設供用事業及び地域特定電気通信設備供用事業に対する助成金交付業務については、採択評価時に IoT サービスの創出・展開につながる基準を設定した上で、同基準に従って評価した結果、新技術開発施設供用事業(IoT テストベッド)を実施しようとする 8 社に対して 13,765 万円、地域特定電気通信設備(地域データセンター)供用事業を実施しようとする 20 社に対して 20,988 万円の交付を決定した。
- ・電気通信基盤充実のための施設整備事業に対する助成(利子助成)業務については、既往案件の利子助成期間終了の平成 30 年度まで適切に実施し、本事業は全て終了した。

(2)債務保証等による支援

- ・利子補給業務について、24 件(19 社)に対する貸し付けの利子補給を着実に実施できる見込みである。
- ・助成金交付業務について、IoT サービスの創出・展開につながるように事業を選定し、助成金の交付を決定した。
- ・利子助成業務について、既存貸付 1 件についての利子助成を着実に実施し終了した。

子補給期間終了まで、着実に実施するものとする。

新技術開発施設供用事業及び地域特定電気通信設備供用事業に対する債務保証業務及び助成金交付業務については、これらの事業が着実に成果を上げ、IoTサービスの創出・展開につながるものとなるよう努めるものとする。

なお、信用基金については、平成33年度を目途に清算するものとする。

また、電気通信基盤充実のための施設整備事業に対する

電気通信基盤充実のための施設整備事業に対する助成(利子助成)業務については、既往案件の利子助成期間終了の平成30年度まで着実に実施する。

金交付業務について、着実に成果を上げ、IoTサービスの創出・展開につながるよう努めたか。

- 電気通信基盤充実のための施設整備事業に対する助成(利子助成)業務について、着実に実施したか。

助成（利子助成）業務については、既往案件の利子助成期間終了の平成30年度まで着実に実施するものとする。

ウ

財政投融資特別会計からの出資金を原資として実施してきた出資業務については、毎年度の決算、中間決算の報告等を通じて、各出資先法人の経営内容の把握に努め、経営状況に応じて、毎月の収支状況、資金の推移の報告を求めるなどにより、的確に経営状況の把握を行い、経営健全化計画を提

(3)出資業務

出資業務については、毎年度の決算、中間決算の報告等を通じて、各出資先法人の経営内容の把握に努める。また、経営状況に応じて、毎月の収支状況、資金の推移の報告を求めるなどにより、的確に経営状況の把握を行う。さらに、経営健全化計画を提出させるなど、事業運営の改善を求めることにより、出資金の最大限の回収に努める。

<評価の視点>

- 出資業務について、各出資先法人の経営内容の把握に努めたか。事業運営の改善を求めたか。出資金の最大限の回収に努めたか。

(3)出資業務

- ・旧通信・放送機構が直接出資し機構が承継した法人のうち、株式保有中の2社については、中期経営計画、累損解消計画及び年度毎の事業計画の提出を求めるとともに、年度決算や中間決算の報告等を通じて経営分析を行い事業運営の改善を求めることによって、第4中長期計画期間中を通して単年度黒字を継続している。また、出資契約に基づく実地監査を行い、内部管理全般に亘る監督を強化した。
- ・出資により取得した株式がその取得価格以上の適正な価格で処分し得ると見込まれる企業に対しては、株式処分に関する協議を進めている。
- ・1社は、平成29・30年度の各決算期末において株式配当が実施され収益を得ている。

(3)出資業務

- ・出資先法人2社の年度決算や中間決算の報告等を通じて事業運営の改善を求めることにより、第4中長期計画期間中においても2社とも単年度黒字を継続している。うち1社は、株式配当が実施されたことにより、収益を得ている。黒字を計上し純資産額を増加させることは、出資会社の価値を高め、売却等により出資金の回収を有利に進める材料となるため、出資会社2社の当該期における黒字計上は、今後の出資金回収の最大化に寄与するものと評価している。また、

出させる等、事業運営の改善を求めることにより、出資金の最大限の回収に努めるものとする。

エ

誰もが等しく通信・放送役務を利用できる情報バリアフリー環境の実現を図るため、次の事業を実施するものとする。

(ア)視聴覚チャレンジド向け放送の充実を図るため、国庫補助金を原資として、字幕番組・解説番組等を制作する者等に対する助成を実施するものとする。

(イ)チャレンジド向けの通信・放送役務の利用利便

(4)情報弱者への支援

誰もが等しく通信・放送役務を利用できる情報バリアフリー環境の実現を図るため、総務大臣の定める基本方針を踏まえつつ、情報バリアフリー助成金制度である次の事業を実施する。

(ア)視聴覚チャレンジド向け放送の充実を図るために行う放送事業者等に対する助成

①字幕・手話・解説番組制作の促進

字幕番組、手話付き番組や解説番組の制作を助成することにより、字幕番組等の拡充に貢献する。なお、普及状況等を勘案して、助成対象や助成率の見直しを行う等、適切に助成を実施する。また、採択した助成先について公表する。

<評価の視点>

- 字幕・手話・解説番組制作の助成が効果的となるよう適切に実施したか。
- 採択した助成先の公表を行ったか。

(4)情報弱者への支援

(ア)字幕・手話・解説番組制作の促進

① 字幕・手話・解説番組制作の促進

- ・第4期中長期期間を通じ、普及状況等を勘案したうえで、重点分野である解説番組、手話番組に加え、生放送字幕番組及びローカル局が制作する字幕番組に対しても、優先的に予算配分を行い効果的な助成を実施している。
- ・採択した助成先について報道発表を行っている。

字幕番組・解説番組及び手話番組制作促進助成金の実績

項目	第4期中長期					
	合計	H28	H29	H30	R1	R2
助成額(百万円)	1,644	263	245	362	363	388
番組数	242,503	39,003	43,552	47,701	52,833	55,084
事業者数	605	118	116	120	122	122

R2は交付決定

出資により取得した株式がその取得価格以上の適正な価格で処分し得ると見込まれる企業に対しては、株式処分に関する協議を進めている。

(4)情報弱者への支援

(ア)視聴覚障がい者向け放送の充実を図るために行う放送事業者等に対する助成

①字幕・手話・解説番組制作の促進

- ・普及状況等を勘案し、重点分野に加え、生放送字幕番組及びローカル局が制作する字幕番組に対しても、優先的に予算配分を行い効果的な助成を実施した。
- ・採択した助成先について報道発表を行った。

の増進を図るため、国庫補助金を原資として、チャレンジド向け通信・放送役務の提供・開発を行う者に対する助成等を実施するものとする。助成に当たっては、助成終了2年後における継続実施率が70%以上となることを目標とする。

②手話翻訳映像提供の促進

手話が付いていない放送番組に合成して表示される手話翻訳映像の制作を助成することとし、その際、次の点に留意する。

・手話翻訳映像提供促進助成金について、ウェブページ等を通じて、助成制度の周知を行い、利用の促進を図る。

・採択案件の選定に当たっては、外部の専門家・有識者による厳正な審査・評価を行う。また、採択した助成先について公表する。

③字幕付きCM番組普及の促進

制作された字幕付きCM番組が基準に適合しているか確認する機器の放送事業者による整備を助成することとし、その際、次の点に留意する。

・字幕付きCM番組普及促進助成金について、ウェブページ等を通じて助成制度の周知を行い、利用の促進を図る。

・事業者の字幕付きCM番組の放送実施に向けた

<評価の視点>

- 手話翻訳映像制作の助成を行ったか。
- 助成制度の周知を行ったか。
- 支援対象の選定に当たっては、適切な方法により評価を行い、透明性の確保に努めたか。
- 採択した助成先の公表を行ったか。

<評価の視点>

- 字幕付きCM番組普及の促進のための助成を行ったか。
- 助成制度

② 手話翻訳映像提供の促進

- ・第4期中長期期間を通じ、毎年助成を実施してきている。
- ・公募に当たっては、報道発表を行うとともに、ウェブページで制度の概要や実績も含めて情報提供してきている。
- ・採択に当たっては、7名の外部有識者による厳正な審査・評価を行い決定している。
- ・採択した助成先については報道発表を行っている。

手話翻訳映像提供促進助成金の実績

項目	第4期中長期					
	合計	H28	H29	H30	R1	R2
件数	5	1	1	1	1	1
助成額(百万円)	38.9	7.1	7.2	7.4	8.8	8.4
番組数	522	90	94	107	121	112

R2は交付決定

③ 字幕付きCM番組普及の促進

- ・第4期中長期期間を通じ、公募に当たっては、報道発表を行うとともに、ウェブページで制度の概要や実績も含めて情報提供してきている。
- ・令和元年度については応募が無かった。
- ・採択に当たっては、CM字幕確認の実現方法等の審査を行い適切に実施している。
- ・採択した助成先については報道発表を行っている。

字幕付きCM番組普及促進助成金の実績

項目	第4期中長期					
	合計	H28	H29	H30	R1	R2
件数	14	5	4	5	0	0
助成額(百万円)	5	2	1	2	0	0

②手話翻訳映像提供の促進

- ・公募に当たっては、報道発表とウェブページにて情報提供した。
- ・採択に当たっては、外部有識者による審査・評価を行い決定した。
- ・採択した助成先については報道発表を行った。

③字幕付きCM番組普及の促進

- ・公募に当たっては、報道発表とウェブページにて情報提供した。
- ・令和元年度については応募が無かったことから助成は行わなかった。
- ・採択に当たっては、CM字幕確認の実現方法等の審査を

取組状況や財務規模等も考慮し、採択案件の選定を効果的に行う。また、採択した助成先について公表する。

(イ) チャレンジの利便増進に資する観点から、有益性・波及性に優れた事業に対する助成

次の点に留意する。
 ・本制度の周知を行い、利用の促進を図る。
 ・採択案件の選定に当たっては、外部の専門家・有識者による厳正な審査・評価を行う。また、採択した助成先について公表する。
 ・毎年度、採択事業の成果について事後評価を行い、業務運営等に反映させる。
 ・助成に当たっては、助成終了2年後における継続実施率が70%以上となることを目指す。
 また、情報バリアフリー関係情報の提供を行うこととし、その際、次の点に留意

の周知を行ったか。

- 採択に当たり、効果的な助成になるよう適切に実施したか。
- 採択した助成先の公表を行ったか。

<評価の視点>

- 身体障害者の利便増進に資する事業に対する助成金交付業務を適時適切に実施したか。
- 助成制度の周知を行ったか。
- 支援対象の選定に当たっては、適切な方法により評価を行い、透明性の確保に努めたか。

(イ) 身体障がい者向け通信・放送役務の提供及び開発の促進

- ・第4期中長期期間を通じ、毎年4～6件を採択し、適時適切に助成交付業務を実施してきている。
- ・公募に当たっては、報道発表、ウェブページで概要や実績も含め情報提供するとともに、福祉関係団体への周知依頼や「情報バリアフリーのための情報提供サイト」の登録者へのメール配信等で周知している。
- ・採択に当たっては、7名の有識者による評価委員会を開催して申請者によるプレゼンテーションや質疑応答を実施するとともに、採択案件の選定では「有益性」、「波及性」及び「技術の適格性」の観点から厳正な審査・評価を行っている。
- ・採択結果については報道発表及びウェブページで公表している。
- ・採択案件の実績について成果報告に基づく書面による事後評価を行い、各事業にS～Bの評点及びコメントを付し、次年度の業務の参考としている。
- ・助成終了2年後の継続実施率は100%であり、目標の70%以上を達成している。

情報バリアフリー通信・放送役務提供・開発推進助成金の実績

項目	第4期中長期					
	合計	H28	H29	H30	R1	R2
件数	20	4	5	5	6	未
助成額(百万円)	139	31	31	38	37	未

行った。
 ・採択した助成先については報道発表を行った。

(イ) 身体障がい者の利便増進に資する観点から、有益性・波及性に優れた事業に対する助成

- ・毎年4～6件を採択し、適時適切に助成交付業務を実施した。
- ・公募は、報道発表とウェブページで情報提供するとともに、福祉関係団体への周知依頼や「情報バリアフリーのための情報提供サイト」の登録者へのメール配信等で周知した。
- ・採択に当たっては、有識者による評価委員会を開催して厳正な審査・評価を

する。

・「情報バリアフリーのための情報提供サイト」では、チャレンジドや高齢者のウェブ・アクセシビリティに配慮しつつ、チャレンジドや高齢者に役立つ情報その他の情報バリアフリーに関する幅広い情報等の提供を定期的に行うほか、機構の情報バリアフリー助成金制度の概要やその成果事例を広く情報提供する。

・情報バリアフリー助成金の交付を受けた事業者がその事業成果を発表できる機会を設け、成果を広く周知するとともに、チャレンジドや社会福祉に携わる団体等との交流の拡大を図る。

・「情報バリアフリー関係情報の提供サイト」の利用者及び成果発表会の来場者に対して「有益度」に関する調査を実施し、4段階評価において上位2段階の評価を70%以上得ることを目指すとともに、得られた意見要望等をその後の業務運営に反映させる。

- 採択した助成先の公表を行ったか。
- 採択案件の実績について事後評価を行い、次年度以降の業務運営に反映させたか（平成29年度以降）

- 助成終了2年後の継続実施を把握し、70%以上を目指したか。（平成30年度以降）

<指標>

- 助成終了2年後の継続実施率（平成30年度以降）

<評価の視点>

- 「情報バリアフリーのための情報提供サイト」による情報等の

情報バリアフリー関係情報の提供

- ・「情報バリアフリーのための情報提供サイト」では、障害者や高齢者などに有益な情報を定期的にウェブ・アクセシビリティに配慮した上で提供することにより、機構の情報バリアフリーに向けた施策と貢献を含め情報発信している。
- ・第4期中長期期間を通じ、情報バリアフリーの実現のために取り組む民間事業者等を毎月トピックコーナーで取り上げて情報提供している。
- ・機構が行う情報バリアフリー助成金制度の概要や実績、成功事例についても情報提供している。

行った。

- ・採択結果は報道発表及びウェブページで公表した。
- ・書面による事後評価を行い、次年度の業務の参考とした。
- ・助成終了2年後の継続実施率は100%であり、目標の70%以上を達成した。

情報バリアフリー関係情報の提供

- ・「情報バリアフリーのための情報提供サイト」で、機構の情報バリアフリーに向けた施策や貢献などを発信した。

提供を月一回程度定期的に行ったか。

- 情報バリアフリー事業助成金の制度概要やその成果事例についての情報提供を行ったか。
- 情報バリアフリー事業助成金の交付を受けた事業者が発表できる機会を設けたか。また、チャレンジドや社会福祉に携わる団体等との交流の拡大を図ったか。
- 研究機構が取り組んだ情報バリアフリーに向けた研究成果についても情

- ・第4期中長期期間を通じ、毎年秋に開催される国際福祉機器展において、助成事業者による成果発表の場を設け、社会実現に向けた取り組みを広く情報発信するとともに、身体障害者や社会福祉に関わる団体等との交流拡大を図っている。
- ・また、国際福祉機器展では、機構の音声認識・合成技術の研究成果を生かした(株)フィートの「こえとら」の展示を行うなど、機構の取り組みについても広く情報発信している。
- ・情報提供サイトの利用者や成果発表会の機構ブース来場者に対し、「有益度」に関するアンケート調査を実施した結果、9割以上から「有益」との回答を得ており、得られた意見要望はウェブサイト等の運営に参考としている。

情報提供サイトのアクセス数等

項目	第4期中長期				
	H28	H29	H30	R1	R2
サイトアクセス数(万)	6	7	8	9	未
アンケート結果 (有益の評価)	9割以上	9割以上	9割以上	9割以上	未

国際福祉機器展でのブース来場者数等

項目	H28	H29	H30	R1	R2
NICT ブース来場者数(人) 括弧内は発表会来場者数	1,710 (210)	2,200 (275)	3,440 (215)	1,466 (118)	未
来場者アンケート調査結果 (有益の評価)	9割以上	9割以上	9割以上	9割以上	未

- ・情報バリアフリーの実現に取り組む民間事業者等を毎月トピックコーナーで取り上げて情報提供した。
- ・機構が行う情報バリアフリー助成金制度を情報提供した。
- ・毎年秋に開催される国際福祉機器展において、成果を広く情報発信するとともに、身体障害者や社会福祉に関わる団体等との交流拡大を図った。
- ・また、国際福祉機器展では、「こえとら」の展示を行うなど、機構の取り組みを情報発信した。
- ・「有益度」に関するアンケート調査では9割以上から「有益」との回答を得ており、得られた意見要望はウェブサイト等の運営に参考とした。

以上のように、情報通信ベンチャー企業の事業化等の支援に

(3) 民間基盤技術研究促進業務の的確な実施
 財政投融資特別会計からの出資金を原資として実施してきた民間基盤技術研究促進業務については、既往の委託研究締結案件について、追跡調査によるフォローアップ等により収益納付・売上納付に係る業務を推進する等、繰越欠

4-3. 民間基盤技術研究促進業務
 基盤技術研究促進業務については、売上(収益)納付に係る業務の着実な推進を図るため、毎年度策定した追跡調査によるフォローアップに係る実施方針のもとに、契約期間中の案件の売上状況等について適正に把握することにより、改善点やマッチング等の助言を行う。さらに、経営・知的財産等の各分野の外部専門家を活用し、今後の納付の拡大が見込める委託対象事業を重点的に売上向上に向けた課題の把握と実効性ある改善策の助言、受託者が取得した特許等の知的財産権が相当の期間活用されていないと認められる場合における当該知的財産権の第三者への利用

- 報発信をしたか。
- 「有益度」に関する調査を行い、得られた意見要望等をその後の業務運営に反映させたか。
- <評価の視点>
- 研究開 25 課題について、追跡調査によるフォローアップを行い改善点やマッチング等の助言を行ったか。
 - 売上向上に向けた取組を重点的に強化したか。
 - 委託研究期間終了 10 年が経過する研究開発課題について、売上(収

4-3. 民間基盤技術研究促進業務
 ・売上(収益)納付業務の着実な推進を図るため、当該期間中の毎年度、(1)年度開始前の3月に民間基盤技術研究促進業務関係の追跡調査によるフォローアップ等に係る実施方針を策定。
 ・今後の売上(収益)納付が見込まれる研究開発課題を選定し、受託者を实地に訪問しヒアリングを行い、事業化状況についての意見交換を行い、課題の把握と改善策の助言を行った。

	第3期中長期目標期間	第4期中長期目標期間				
		合計	平成28年度	平成29年度	平成30年度	令和元年度
追跡調査によるフォローアップ実施方針の策定日	—	—	H28.4.28	H29.3.22	H30.3.28	H31.3.28
報告徴収した件数	283	140	43	40	30	27
現地調査(実地ヒアリング)を実施した件数	207	66	16	24	14	12
課題の把握と改善策の助言を実施した件数	220	93	26	29	21	17

(2)売上向上に向けた取組みとして、事業化動向に精通したコンサルタント事業者を活用して、事業化の状況を踏まえ、技術・事業マッチング等が期待できる企業の紹介を実施した。

	第3期中長期目標期間	第4期中長期目標期間				
		合計	平成28年度	平成29年度	平成30年度	令和元年度

ついて、業務を着実に実施し、十分に目標を達成した。

- 4-3. 民間基盤技術研究促進業務
- ・売上(収益)納付業務の着実な推進を図るため、追跡調査を実施した。
 - ・特に売上向上が見込まれる課題について、その分野に精通した外部有識者と受託者による意見交換会を実施し、事業化の取組を強化した。
 - ・売上(収益)納付を確保するため、受託者と延長の協議をして 17 の課題について納付契約期間を延長する見込みである。
 - ・研究成果の積極的な公表による、成果の普及・実用化を促

損金の着実な縮減に向けた取組を進めるとともに、縮減状況等を踏まえ、取組の随時見直しや必要な措置を講じるものとする。さらに機構内の他部署とも連携して、今中長期目標期間内において、委託研究成果の社会への普及状況等の本業務の効果の把握及び検証を実施するものとする。

や移転の促進などの方策により、売上向上に向けた取組を強化する。また、委託研究期間終了後10年が経過する案件について今後の収益の可能性・期待度を分析することにより、売上(収益)が見込める案件を重点的にフォローアップして売上(収益)納付契約に従い契約期間の延長に結びつけるなど、収益納付・売上納付に係る業務を推進し、繰越欠損金縮減に向けた取組を着実かつ効率的、効果的に進める。

また、縮減状況を踏まえ、取組の随時見直しや必要な措置を講じる。

さらに、委託対象事業の実用化状況等については、適宜公表する。

加えて、機構内の他部署とも連携して、今中長期目標期間内において、委託研究成果の社会への普及状況等の本業務の効果の把握及び検証を実施する。

益)が見込める研究開発課題を選定し、契約期間の延長に結びつけたか。

- 委託対象事業の実用化状況等の公表をしたか。
- 委託研究成果の社会への普及状況等について、本業務の効果の把握及び検証の具体的な進め方について検討結果に基づき、受託者等からの情報収集やヒアリング調査等を実施したか。

専門家を交えた意見交換会の実施件数	—	6	3	2	1	—
マッチング企業等紹介の実施	14	7	4	1	1	1

納付収入年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度	令和元年度
売上納付額	2,147万円	3,139万円	3,156万円	2,362万円

- (3) 当該期間中、売上(収益)納付契約期間が終了する10年目を迎えた26案件について、今後の売上(収益)が見込める研究開発課題を選定し、契約の5年延長の妥当性を含め特別な調査を実施した。その調査を踏まえ5年延長について検討した。受託者と延長の協議をした結果、16課題について納付契約期間を延長した。

	第3期中長期目標期間	第4期中長期目標期間				
		合計	平成28年度	平成29年度	平成30年度	令和元年度
収益納付10年目案件への特別調査の実施件数	10	24	5	11	5	3
収益納付10年目案件数	25	26	6	9	8	3
収益(売上)納付の延長実施件数	2	16	7	5	3	1

- (4) 研究成果の積極的な公表による、成果の普及・実用化の促進のため、全課題について研究成果と製品化事例をとりまとめた『成果事例集』を機構のホームページで公表中。
 ・また、NICT オープンハウスにおいて研究成果のパネル展示のほか、成果事例集を配布した。



進した。
 ・委託研究の効果が見込まれる59課題を対象に委託研究の効果の把握、および詳細な検証に必要な情報収集を実施する見込みである。

以上のように、民間基盤技術研究促進業務について、業務を着実に実施し、十分に目標を達成した。

<p>(4)ICT人材の育成の取組</p> <p>厳しい国際競争によって我が国の民間企業におけるICT分野</p>	<p>4-4. ICT人材の育成の取組</p> <p>ICT人材育成に関する諸課題の解決に向けて、産学官連携による共同研究等を通じて、幅広い視野や高い技術力を有する専門人材の強化に貢献する。</p>	<p><評価の観点></p> <ul style="list-style-type: none"> ● 専門人材の強化に貢献したか。 ● 機構の研究者を大学 	<p>(5) 民間基盤技術研究促進業務全般に係る委託研究の効果の分析及び評価については、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・平成 28 年度は、委託研究の効果の把握及び検証の手法についての調査を実施した。 ・平成 29 年度は、特に顕著な波及効果が見込まれる課題(5課題)、それに次ぐ波及効果が見込まれる課題(12 課題)を抽出した。 ・平成 30 年度は、前年度に抽出した波及効果が見込まれる 17 課題について効果の把握及び検証に必要な情報とデータ収集を行った。 ・最終年度の令和元年度は、前年度の調査結果を踏まえ、上記 17 課題をベースに59課題すべてについて、 <p>(1)成果を利用するユーザにおける便益、</p> <p>(2)成果に基づく市場形成、</p> <p>(3)委託研究の実施を通じた人事育成等を分析し民間基盤技術研究促進業務の成果が社会全体へ及ぼすインパクト、等10項目による波及効果を取りまとめた。</p> <p>定量的な波及効果は、全体で700億円規模と試算された。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・調査に当たっては、関連部署に情報提供を行い、関連部署からの知見を参考にして実施し、結果は今後の業務維持に活用。 <p>・なお、調査に当たっては、客観性担保のため、以下の(1)~(4)の方法を組み合わせ実施した。</p> <p>(1)文献調査(成果に関する報道資料や、市場現況等について公表資料をもとに収集・分析)</p> <p>(2)受託者ヒアリング(当事者のみが把握している実績やデータについて、ヒアリング及び資料の提供を受けそれを基に分析)</p> <p>(3)当該分野の専門家・有識者ヒアリング(課題の対象分野を専門とする学識者や民間の専門家から、専門的見地からの評価を収集し、分析)</p> <p>(4)モデル構築(成果により構築された市場や利用者における便益等を試算するモデルを構築して評価を実施)</p> <p>4-4. ICT人材の育成の取組</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 未来のサイバーセキュリティ研究者・起業家の創出に向け、当機構のサイバーセキュリティ研究資産を活用し、若年層の ICT 人材を対象に、実際のサイバー攻撃関連データに基づいたセキュリティ技術の研究・開発を 1 年かけて本格的に指導するプログラム「SecHack365」を実施した。 ・ SecHack365 については、主に以下のような取組を行った。 	<p>4-4. ICT人材の育成の取組</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「SecHack365」を実施することで、ICT 分野の専門人材の育成・強化に貢献した。 ・大学との連携協定を
---	---	--	---	---

の研究開発の力点が基礎研究から応用・開発研究にシフトする傾向にあることから、機構はICT分野における基礎的・基盤的研究開発を担う中心的な役割を期待されている。

機構はそのような役割を踏まえ、人材の育成についても、産学官連携による共同研究等を通じた専門人材の強化、連携大学院協定等による機構の職員の大学院・大学での研究・教育活動への従事、国内外の研究者や学生の受け入れ等を推進し、一層深刻化するICT人材の育

また、連携大学院制度に基づく大学等との連携協定等を活用し、機構の研究者を大学等へ派遣することにより、大学等におけるICT人材育成に貢献する。

国内外の研究者や大学院生等を受け入れることにより、機構の研究開発への参画を通して先端的研究開発に貢献する人材を育成する。

なお、平成28年度補正予算(第2号)により追加的に措置された交付金については、「未来への投資を実現する経済対策」の一環として安全・安心の確保のために措置されたことを認識し、サイバーセキュリティに係る人材の育成に資するネットワーク環境の構築のために活用する。

等へ派遣し、ICT人材育成に貢献したか。

- 国内外の研究者や大学院生等を受け入れることにより、先端的研究開発に貢献する人材を育成したか。

- ・ トレーニー(受講者)に対し、遠隔研究・開発環境の提供及びトレーナーからの遠隔指導と並行して、国内各地における集合研修(2ヶ月に1回程度)で指導を行った。
- ・ 研究・開発成果を、最終成果発表会において発表した(令和元年度のみ新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から延期(令和2年度内の開催を検討中))。
- ・ 法律や企画の専門家など異分野の専門家の参画やプレゼンテーション能力を磨く指導など、技術分野に偏らない指導を実施した。
- ・ その他、アンケートや外部有識者の助言等に基づくきめ細やかな運営改善。

- ・ 各年度における特筆すべき取組は以下のとおり。

【平成29年度】

- ・ NICTにより企画・開発した事業として開始した。
- ・ 応募者358名、39名が修了した。
- ・ 米国オースティンで開催された世界最大級のクリエイティブイベント SXSW ハッカソンへの海外派遣を実施した(スポンサー賞を受賞)。

【平成30年度】

- ・ 応募者345名、46名が修了した。
- ・ 多様なトレーニーに対する柔軟なサポートを実現すべく、応募時から表現駆動コース、思索駆動コース、開発駆動コースを選択して募集を行い、指導方針のミスマッチを抑制。
- ・ 修了生コミュニティの構築にも着手し、①修了生に対する支援(チャットツールによるコミュニティ基盤の整備、修了生を対象としたイベント「SecHack365 Returns」の実施、NICTへの受け入れによるキャリアサポート)や、②現役生との交流機会の確保(集合イベントに招待し、年度を超えた現役生へのフィードバックの実施、現役生との混合メンバによる SXSW ハッカソンへの海外派遣)を実施した(スポンサー賞を受賞)。
- ・ 新たな人材発掘のため、大都市ながら参加者が少ない場所を実験的に選定し、次年度募集キャラバン(説明会)を福岡と大阪で実施した。

【令和元年度】

- ・ 応募者295名、45名が修了した。
- ・ 3コース制から5コース制へコースの拡充を行い、応募時にコースを選択させることで各トレーニーの作品作りのスタイルに合った指導を実施した。
- ・ 新たな人材発掘のため、各イベント回において地元学生・教育関係者を対象に

活用して、今目標期間中令和元年度までに機構研究者のべ138名を講師として大学院へ派遣し人材育成に貢献した。

- ・ 大学との連携協定を活用するなどして、今目標期間中令和元年度までに外部研究者や大学院生等のべ2,195名を受け入れた。

以上のように、ICT人材の育成の取組について、業務を着実に実施し、十分に目標を達成した。

成にも貢献するものとする。

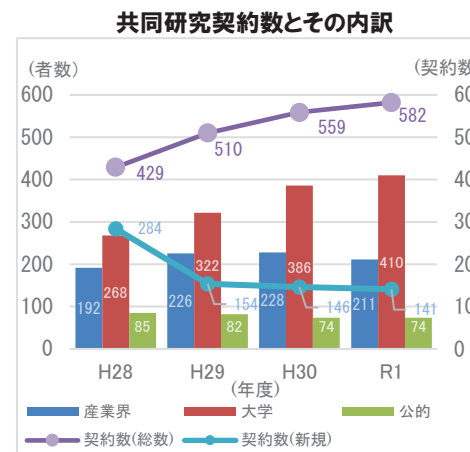
説明会・見学会を実施した。

- ・ 修了生が各イベント回に参加し、体験談の発表、コースワークでの指導等を担当するほか、オンラインでの個別指導も経験する機会を作り、現役生と修了生の連携を強化した。
- ・ 修了生の活動継続の奨励と支援等を目的とした修了生イベント「SecHack365 Returns」を実施し、前年度より規模を拡大し、修了年度を越えた交流をさらに促進した。
- ・ イスラエル国家サイバー総局と総務省との MoC (MEMORANDUM OF COOPERATION)に基づき、両国間の人材育成協力の一環として世界的なサイバーセキュリティ関係の巨大イベント「CyberTech Tokyo, CyberTech Tel Aviv」に参加。世界の専門家を前にして発表の機会を提供した。
- ・ 一部の修了生に機構の研究補助業務に従事する機会(リサーチアシスタント)を提供。

【令和2年度】

- ・ 応募者の中から40名程度のトレーニー(受講者)を選抜し、育成を予定。

- ・ 外部の研究リソースを有効活用する観点に加え、ICT人材の育成に貢献するため、令和元年度は582課題の共同研究を実施し、今中長期初年度(平成28年度)の429件から35.7%増加の582件となり、幅広く産学官連携を図ることができた。



連携大学院(研究員派遣と受入人数)

- ・ 連携大学院制度に基づく大学との連携協定数は18件であり、協定を締結している大学院から48名の大学院生を受け入れた。これにより、研究経験を得る機会を確保するとともに、機構

(5)その他の業務

電波利用料財源による業務、型式検定に係る試験事務、情報収集衛星に関する開発等について、国から受託した場合には、適切

4-5. その他の業務

電波利用料財源による業務、型式検定に係る試験事務等の業務を国から受託した場合及び情報収集衛星に関する開発等を国から受託した場合には、電波利用技術等の研究開発能力を活用して効率的かつ確実に実施する。

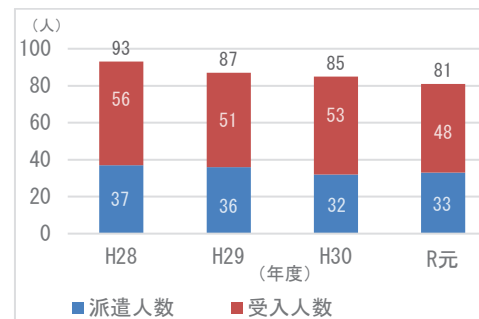
＜評価の視点＞

- 国から受託した業務を適切に実施したか。

4-5. その他の業務

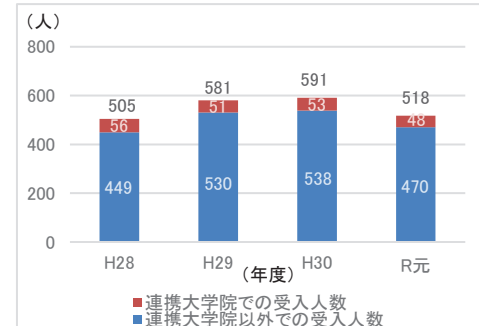
- ・標準電波による無線局への高精度周波数の提供(第4期中長期以前から継続)、南極地域観測事業における電離層観測(南極地域観測事業:総務省、第4期中長期以前から継続)、電波伝搬の観測・分析等の推進(平成31年度～)について、電波利用技術等の研究開発能力を活用して効率的かつ確実に実施するように、契約の事務など研究支援を行った。
- ・情報収集衛星のうちのレーダ衛星について、全期間にわたり継続的に開発および維持管理業務を実施した。

の研究者33名を講師として大学院へ派遣し人材育成に貢献した。



- ・機構の研究開発への参画を通して先端的な研究開発に貢献する人材を育成するため、外部研究者や大学院生等を518名(上述の48名を含む)受け入れた。

研究者交流(協力研究員と研修員 連携大学院受入)



平成 28 年度 総務省補正予算(「サイバーセキュリティの強化」)を受けて、北陸 StarBED 技術センターに本事業に向けた計算機環境の整備を推進した。

4-5. その他の業務

- ・機構が保有する電波利用に関する研究ポテンシャルや研究設備等を活用して受託業務を適切に実施した。
- ・情報収集衛星に関する開発の受託業務を効率的かつ確実に実施し、再委託先への監査も適切に実施した。

に実施するものとする。			
-------------	--	--	--

国立研究開発法人情報通信研究機構 第4期中長期目標期間終了時見込評価 項目別自己評価書(No.8 業務運営の効率化に関する事項)

1. 当事務及び事業に関する基本情報			
中長期目標の当該項目	IV. 業務運営の効率化に関する事項		
当該項目の重要度、難易度		関連する政策評価・行政事業レビュー	行政事業レビューシート ****

2. 主要な経年データ									
評価対象となる指標	達成目標		28年度	29年度	30年度	元年度	2年度	(参考情報) 当該年度までの累積値等、必要な情報	
一般管理費及び事業費の合計の効率化状況(%)	平均 1.1% 以上	前年度額 (a)	2739 億円	2703 億円	2725 億円	2802 億円			増減額累計 △25.03 億円
		当年度額 (b)	2703 億円	265.7 億円 (新規拡充分 6.8 億円を除く)	2700 億円 (新規拡充分 10.3 億円を除く)	265.9 億円 (新規拡充分 4.8 億円を除く)			
		対前年度増減率 (b/a-1)	△1.31%	△1.70%	△0.91%	△5.11%			
		増減率の毎年度 平均	△1.31%	△1.51%	△1.31%	△2.26%			

3. 中長期目標、中長期計画、主な評価軸、業務実績等、中長期目標期間評価に係る自己評価							
中長期目標	中長期計画	主な評価指標	法人の業務実績等			自己評価	
IV. 業務運営の効率化に関する事項	II 業務運営の効率化に関する目標を達成するためとるべき措置					評価	B
						業務運営の効率化について	

1. 機動的・弾力的な資源配分

機構の役員は、研究開発の最大限の成果を確保することを目的とした国立研究開発法人制度の趣旨を踏まえ、研究開発に係る機動的かつ弾力的な資源配分の決定を行うものとする。そのため、機構内部で資源獲得に対する競争的な環境を醸成し、研究開発成果（研究開発成果の普及や社会実装を目指す取組実績を含む。）に対する客観的な評価に基づき、適切な資源配分を行うものとする。

また、外部への研究開発の委託については、機構が自ら行う研究開発と

1. 機動的・弾力的な資源配分

研究開発の最大限の成果を確保することを目的とした国立研究開発法人制度の趣旨を踏まえ、機構内外の情勢に応じた機動的・弾力的な資源配分を行う。

資源配分は、基本的には研究開発成果（研究開発成果の普及や社会実装を目指す取組実績を含む。）に対する客観的な評価に基づき実施する。評価に当たっては、客観性を保てるよう、外部の専門家・有識者を活用するなどと、適切な体制を構築するとともに、評価結果をフィードバックすることにより、PDCAサイクルの強化を図る。

なお、資源配分の決定に際しては、機構が定常的に行うべき業務や長期的に維持すべき研究開発体制の構築（若手研究者の育成を含む。）に配慮する。

また、外部への研究開発の委託については、機構が自ら行う研究開発と一体的に行うことでより効率化が図られる場合にのみ実施することとし、委託の対象課題の一層の重点化を図る。

< 評価の視点 >

- 資源配分は、基本的には研究開発成果に対する客観的な評価に基づき、機構内外の情勢に応じた機動的・弾力的な資源配分を行ったか。
- 評価は、外部の専門家・有識者を活用するなど、適切な体制を構築するとともに、評価結果をフィードバックすることにより、PDCAサイクルの強化を図ったか。
- 資源配分の決定に際して、機構が定常的に行うべき業務や長期的に維持

1. 機動的・弾力的な資源配分

- 研究開発成果に対して、外部の専門家による外部評価及び機構幹部による内部評価を適正に実施し、その結果や機構内外の情勢に応じて、各年度の予算決定を行った。また、情報通信研究機構法の改正（IoT機器調査業務の追加）等の新たな業務追加により、中長期計画を平成28年度に2度、平成29年度、平成30年度に変更したほか、熊本震災対応への配分（平成28年度）など機動的かつ弾力的な資源配分を行った。
- 情勢の変化等による新たな重点分野等については、予算や人員等の資源配分についての特段の配慮を意識したマネジメントを行った。
- 定常業務等を含め、機構が長期的に取り組むべき業務について、技術やノウハウを確実に継承していくことを意識した資源確保に努めた。
- 外部評価において、外部の専門家や有識者を構成員とする外部評価委員会による研究分野ごとの評価に加え、新たに機構の自己評価の妥当性を審議する総括評価委員会を新設し、評価の客観性を高めるための体制を構築した。
- 長期的な視点でのコスト削減につながる計算機資源の集約化のための予算配分や、新たに追加された業務等の環境整備のための予算措置など機動的・弾力的な資源配分を行った。
- 各研究所で実施している研究活動の実態把握のため、研究所・センター等を訪問し研究現場との意見交換を行うとともに、各研究室の予算、人員、施設、外部資金、共同研究等について研究課題ごとに資料としてとりまとめ、内部評価のバックデータとして研究資源等の実態把握を行った。
- 若手人材確保と早期育成に向け、新たにリサーチアシスタント制度を創設した。また、若手研究者が挑戦できる機会の拡大として、テニュアトラック制度の導入を行った。
- 研究者や総合職職員の自由闊達な議論を醸成し、職員各々が機構の研究開発や業務実施体制の構築・改革に関する高い意識を持つための以下の取組についても、予算を確保し、推進した。

は、中長期計画に沿って以下のように適切に運営を行い、十分に目標を達成した。

1. 機動的・弾力的な資源配分

- 外部評価及び内部評価を適正に実施して各年度の予算を決定した。情報通信研究機構法改正による新たな業務、また、熊本震災への配分など、機構内外の情勢を鑑み、機構の重点研究分野に係る外部評価結果や、各研究所・センター等の意見交換を通じて把握した研究資源等の実態に応じて機動的・弾力的な資源配分を行った。
- 評価は、研究分野ごとに外部の専門家・有識者を活用するほか、全分野を通して評価の妥当性を検討する総括評価委員会を新設するなど、評価の客観性を高める体制を構築し適切な評価の実現に努めた。また、評価結果を各部署にフィードバックすることにより PDCA サイクルの強化を図った。
- リサーチアシスタント制度やテニュアトラック制度など、若手研究者を確保するための新たな制度を構築したほか、将来ビジョンタスクフォースの中に若手職員による

一体的に行うことでより効率化が図られる場合にのみ実施することとし、委託の対象課題の一層の重点化を図ることで機構全体の資源配分の最適化を図るものとする。

なお、資源配分の決定に際しては、機構が定期的に行うべき業務や長期的に維持すべき研究開発体制(若手研究者の育成を含む。)に対しては十分に配慮するものとする。

加えて、客観的な評価に当たっては、外部の専門家・有識者を活用する等適切な体制を構築するとともに、評価結果をその後の事業改善にフィードバックする等、PDCAサイクルを強化するものとする。

2. 調達等の合理化

委託研究に関する客観的な評価に当たっては、外部有識者による事前評価、採択評価、中間評価、終了評価、追跡評価等を踏まえ、PDCAサイクルを着実に回し、社会的課題の変化等に柔軟に対応した研究を推進する。

2. 調達等の合理化

「独立行政法人における調

すべき研究開発体制の構築に配慮したか。

- 外部への研究開発の委託について、機構が自ら行う研究開発と一体的に行うことでより効率化が図られる場合にのみ実施したか。
- 委託研究の推進にあたっては、PDCAサイクルを意識した評価を行ったか。

< 評価の視点 >

- ✓ 若手研究者等からの幅広い提案を募集し、新規研究課題のフェイジビリティスタディや業務上の課題解決アイデア等を試行する「TRIAL」の実施。
- ✓ 機構内の全階層(研究者、総合職及び経営層)によるオープンな意見交換会や検討会を通じ、新たな価値の創造や機構内の活性化を行うことを目的としたスキーム「NEXT」の実施。
- ✓ 機構の課題や改革のアイデアについて自由に議論する機構内全階層によるビジョンアイデアソンの開催。
- ✓ 将来の研究開発テーマや機構の組織・風土改革について、研究者や総合職が継続的に議論する将来ビジョンタスクフォースの立ち上げと運営。将来ビジョンタスクフォースの中に若手職員(研究者及び総合職)によるワーキンググループを形成し、自由な発想による議論を促進。
- 第4期においては、委託研究課題54課題(122個別課題)(見込数)について、担当する研究所において計画書を策定、所属する研究者が各種評価において連携して対応。平成30年度の公募課題からは、機構の研究者がプロジェクトオフィサーとして委託研究を統括することで、全て機構が自ら行う研究開発と一体的に実施し、効率化を図った。
- 委託研究の推進に当たっては、外部有識者により、事前評価、採択評価、中間評価、終了評価を実施したほか、PDCAサイクルを意識し、終了後数年後の課題を対象に成果展開等状況調査を実施し、各年度4~6個別課題の追跡評価を実施した。
- 委託研究の推進に当たり、研究内容については外部有識者による評価を受けるとともに、委託費の経理処理については経理検査業務の改善等を実施し、着実に業務を実施した。

2. 調達等の合理化

ワーキンググループを形成、また、若手研究者対象の TRIAL、全階層対象の NEXT など、様々な試みを通じて、機構全体の運営改善や横断連携施策の取組を継続的に推進した。

- 外部への研究開発の委託については、平成30年度の公募課題から、機構の研究者がプロジェクトオフィサーとして委託研究を統括することで、対象課題の一層の重点化を図った。
- 委託研究に関して一連の評価を実施したほか、PDCAサイクルを意識して、終了後数年後の課題を対象に成果展開等状況調査を行うなど、社会的課題の変化に沿うよう、研究を推進した。

以上のように、機動的・弾力的な資源配分について、業務を着実に実施し、十分に目標を達成した。

2. 調達等の合理化

・調達契約の予定案件を入札

「独立行政法人における調達等合理化の取組の推進について」(平成27年5月25日、総務大臣決定)に基づき策定した「調達等合理化計画」を着実に実施し、公正性・透明性を確保しつつ、迅速かつ効率的な調達の実現を図る。

調達等合理化の取組の推進について」(平成27年5月25日、総務大臣決定)に基づき策定した「調達等合理化計画」を着実に実施し、公正性・透明性を確保しつつ、迅速かつ効率的な調達の実現を図る。

● 公正性・透明性を確保しつつ、自律的かつ継続的に調達等の合理化に取り組んだか。

- 特殊の物品で買入先が特定されるもの等規程に定める随意契約によることができる事由に合致しているかについて適切に審査を行い、効率的に調達事務手続きを実施した。
- 入札参加者拡大のため、平成28年から平成30年度において、競争契約案件を対象としたアンケートを行い、令和元年度から当年度に予定される調達契約の案件を、入札公告以前に機構Webサイト「調達情報」に掲載した。
- 入札情報配信サービスの周知に努め、同サービスへの登録者の増加により、競争の機会の拡大につなげた。
- 競争性のない随意契約案件であるとして提出された全件について、財務部に設置した「随意契約検証チーム」により、会計規程に定める随意契約によることができる事由との整合性について点検を適切に実施した。
- 公平性・透明性・競争性の確保のため、専任職員による仕様内容の適正化に向けた点検を実施した。
- 契約に係る事務について、規程において「契約担当」の権限を明文化している。
- 規程に基づき、原則要求者以外の者による適正な検収を実施している。
- 不適切な処理の発生未然防止並びに業務の円滑な処理を目的に、財務部における業務全般に関する「財務部総合説明会」、「eラーニング」及び「各研究所別の個別説明及び意見交換会」を引き続き実施し、不適切な処理の防止及びルール遵守について、職員の意識の向上を図った。
- 現場購買に関する不適切な処理の再発防止策として、財務部による事後点検を実施するとともに内部監査等の対策を実施した。事前点検(平成30年5月をもって解除)及び事後点検(令和元年9月以降抽出点検へ移行)の取組により不適切(不適正)な処理が発生していないことを確認している。
- 上記に加え、調達の迅速化かつ効率化のため以下の取込を実施した。
 - ✓ 少額随意契約(現場購買を含む)を対象とするオープンカウンター方式を令和元年9月から導入した。
 - ✓ 現場購買における Amazon ビジネスの試行を実施した。(令和元年12月～令和2年2月末)
 - ✓ 外部事業者からの電子入札システム利用者登録申請及び情報通信研究機構競争参加資格審査申請についてインターネ

公告以前に機構 Web サイトに掲載することで入札参加者の拡大を図り、また、財務部内に設置した「随意契約検証チーム」により随意契約の妥当性を審査、専任職員による点検を実施して仕様内容の適正化を図るなど、公正性・透明性を確保しつつ効率的な調達手続きを実施した。

- 自律的かつ継続的に調達業務が遂行されるよう、また、不適切な処理の発生未然防止のための取組として、規程において契約担当の権限や検収体制を明らかにするとともに、関係する職員を対象に説明会や e ラーニング等を実施した。
- オープンカウンター方式を 9 月から導入した。
- Amazon ビジネスの試行を行った。令和 2 年度の早期導入を図る。
- 外部事業者からの電子入札システム利用者登録申請及び競争参加資格審査申請についてインターネット申請化した。

以上のように、調達等の合理化について、業務を着実に実施し、十分に目標を達成した。

3. 業務の電子化の促進

電子化の促進等により事務手続きの簡素化・迅速化を図るとともに、研究開発や機構業務を安全にかつ利便性を持った情報インフラを維持・運用し、研究開発の促進に寄与する。業務の電子化における震災等の災害時への対策を確実に行うことにより、業務の安全性、信頼性、継続性を確保するものとする。

3. 業務の電子化に関する事項

機構内の事務手続きの簡素化・迅速化を図るため、機構内の情報システムを横断的にサポートする情報システム環境の整備を行う。また、安全性・利便性の高い情報インフラを維持・運用するための情報システム環境の構築及び提供を行い、研究開発の促進に貢献する。さらに、震災等の災害時においても機構の業務が滞らないよう、耐災害性の高い情報通信システムを構築・運用することにより業務の安全性、信頼性、継続性を確保する。

< 評価の視点 >

- 電子化の促進等により事務手続きの簡素化・迅速化を図ったか。
- 情報インフラを維持・運用し、研究開発の促進に寄与したか。
- 業務の電子化における震災等の災害時への対策を確実に行ったか。

ット申請に対応した。(令和元年 12 月～)

以上のとおり、各年度において計画した「年度調達等合理化計画」について着実に実施している。

3. 業務の電子化に関する事項

- 資産管理システム更改により、紙ベースで行っていた資産に係る機構内での各種申請を電子化した。また、資産の現物確認(棚卸し)作業において、機構内 Wi-Fi を活用し、資産管理データベースサーバとピッキング端末間での棚卸しデータのやり取りがリアルタイムで行えるようになり、確認作業の簡素化・迅速化を図った。
- 紙様式で行われていた各種申請書類について、段階的に電子化(ペーパーレス化)へ移行し、事務手続きの簡素化・迅速化を図った。
- 職員採用の応募手続きについて、Webによるエントリーを開始し、応募書類の取りまとめ等の事務作業の簡素化を図った。
- メールプール等のストレージを HDD から SSD へ更新することで、従来遅かったメール読み込み速度を大幅に改善できた。
- 共通事務PCを更新することで、業務環境の高速化・効率化を行っただけでなく、OS を Windows7 から Windows10 に更新した。
- 地方拠点 TV 会議端末を更新することで、TV 会議の高解像度化(Full HD 化)、安定化を実現するとともに、設置拠点を追加した。
- 会議のペーパーレス化をすすめるため会議室等へのディスプレイ整備を実施した。
- 研究システム間を接続するためのポリシーの策定、相互接続環境(IPルーティング、ファイアウォールポリシー)の設備提供を行った。
- 機構全体で利用できるスケジューラの提供・利用促進を図り情報共有を促進した。
- 研究系ネットワーク用ファイルサーバを整備し、研究所、管理部門間のファイル共有が可能となり利便性及び安全性の向上を図った。
- 個別システムや拠点間バックアップに関して、技術的な相談対応や周辺サービスの支援、設定変更、周辺設備(ラックスペース、

3. 業務の電子化に関する事項

- 紙様式による各種手続きについて順次電子化への移行を進め、資産の現物確認(棚卸し)作業について機構内 Wi-Fi を活用してデータのやり取りをリアルタイムで行うなど、事務手続きの簡素化・迅速化を図った。
- ペーパーレス会議やTV会議の環境を整備し、各種端末やストレージ等を更新することで各種業務環境の改善を行いつつ、情報インフラを維持・運用した。
- 研究システム間における相互接続環境の設備提供、また、各個別システムや拠点間の各種支援を行い、研究開発の促進に寄与した。
- 業務システムの仮想化やバックアップメディアの耐火金庫保管など、災害時を想定した運用を実施した。

以上のように、業務の電子化に関する事項について、業務を着実に実施し、十分に目標を達成した。

4. 業務の効率化

運営費交付金を充当して行う事業については、新規に追加されるもの、拡充分等は除外した上で、一般管理費及び事業費の合計について、毎年度平均で1.1%以上の効率化を達成するものとする。
また、総人件

4. 業務の効率化

運営費交付金を充当して行う事業については、新規に追加されるもの、拡充分等は除外した上で、一般管理費及び事業費の合計について、毎年度平均で1.1%以上の効率化を達成する。
総人件費については、政府の方針を踏まえ、必要な措置を講ずる。その際、給与水準について、「独立行政法人改革等に関する基本的な方針」（平成25年12月24日閣議決定）を踏まえ、国家公務員の給与水準も十分考慮し、厳しく検証を行った上で、適正な

< 評価の視点 >

- 一般管理費及び事業費の合計について、1.1%以上の効率化を達成したか。
- 総人件費について、必要な措置を講じたか。
- 給与水準について、適切性を検証し、必要に応じて

10Gbps ネットワーク機器 等)の提供を行った。

- 研究開発用システムに関する技術的な相談対応や周辺サービスの支援、研究開発にあった環境(ネットワーク、ラックスペース、セキュリティ)を提供し、研究開発の促進に貢献した。
- 外部公開用のウェブサーバーについて冗長化を進めることで、故障等による運用停止を避けられ、より継続的に情報発信ができるようになった。
- 業務系・基幹系システムの仮想化と物理サーバの処理能力の向上をはかり、リソース(CPU やメモリなどの資源)を有効的に活用するとともに、システム負荷増大に合わせた柔軟な運用変更、システムのバックアップメディアを耐火金庫保管し、災害時を想定した運用を実施した。
- 老朽化した業務システムのハードウェア更新時に仮想化を行い、システムの柔軟性と可用性、及び信頼性を向上させた。
- 重要なデータのバックアップと、一部のサービスを堅牢なデータセンター内に收容した。
- 業務システムの仮想化やシステムのバックアップメディアの耐火金庫保管など、災害時を想定した運用を継続的に実施した。

4. 業務の効率化

- 運営費交付金を充当して行う事業については、新規に追加されるもの、拡充分等は除外した上で、一般管理費及び事業費の合計について、毎年度平均で 1.1%以上の効率化を達成した。
- 総人件費については、政府と同様に、人事院勧告を踏まえた給与改定を行ったほか、国家公務員退職手当法等の一部を改正する法律（平成 29 年法律第 79 号）に準じて平成 29 年度に退職手当の支給水準を引き下げ、総人件費の増加を抑制した。
- 国家公務員の給与水準を考慮しつつ、機構の給与水準を検証した。
- 第 4 期中の法人の給与水準（ラスパイレス指数）

対国家公務員（研究職）	
平成28年度(253人)	95.0
平成29年度(249人)	95.9
平成30年度(246人)	95.8

4. 業務の効率化

業務の効率化については、一般管理費及び事業費の合計について効率化目標を達成した。
総人件費については、国家公務員の給与水準を考慮しつつ、機構の給与水準を検証し、人事院勧告を踏まえた給与改定を行ったほか、平成 29 年度に退職手当の支給水準を引き下げ、総人件費の増加を抑制した。
給与水準の検証結果や適正水準維持の取組状況について、機構 Web サイトで公表した。

<p>費については、政府の方針を踏まえ、必要な措置を講じるものとする。その際、給与水準について、「独立行政法人改革等に関する基本的な方針」(平成25年12月24日閣議決定)を踏まえ、国家公務員の給与水準も十分考慮し、厳しく検証を行った上で、適正な水準を維持するとともに、その検証結果や取組状況を公表するものとする。</p> <p>5. 組織体制の見直し</p> <p>研究開発の成果の最大化その他の業務の質の向上を実現するため、機構の本部・各拠点における研究等の組織体制の見直しを不断に行う。組織体制の見直しに際しては、研究開発成果を最大化するための機能に係る組織の役割及びマネジメント体制を明確化することで効率的・効果的な組織運営を実現する。</p> <p>また、オープンイノベーション創出に向けて産学官連携</p>	<p>水準を維持するとともに、その検証結果や取組状況を公表する。</p> <p>5. 組織体制の見直し</p> <p>研究開発成果の最大化その他の業務の質の向上を実現するため、機構の本部・各拠点における研究等の組織体制の見直しを不断に行う。組織体制の見直しに際しては、研究開発成果を最大化するための機能に係る組織の役割及びマネジメント体制を明確化することで効率的・効果的な組織運営を実現する。</p> <p>また、オープンイノベーション創出に向けて産学官連携</p>	<p>適正化を図ったか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 給与水準の検証結果等を公表したか。 <p><指標></p> <ul style="list-style-type: none"> ● 一般管理費及び事業費の合計の効率化状況(%) <p><評価の視点></p> <ul style="list-style-type: none"> ● 機構の本部・各拠点における研究等の組織体制の見直しを不断に行い、効率的・効果的な組織運営を実現したか。 ● 分野横断的な取組や外 	<table border="1"> <tr> <td>令和元年度(254人)</td> <td>96.2</td> </tr> <tr> <td>(事務・技術職員)</td> <td></td> </tr> <tr> <td>対国家公務員(行政職(一))</td> <td></td> </tr> <tr> <td>平成28年度(97人)</td> <td>106.6</td> </tr> <tr> <td>平成29年度(93人)</td> <td>105.2</td> </tr> <tr> <td>平成30年度(94人)</td> <td>106.3</td> </tr> <tr> <td>令和元年度(92人)</td> <td>105.0</td> </tr> </table> <ul style="list-style-type: none"> ● 給与水準の検証結果や適正水準維持の取組状況について、国民の理解が得られるよう機構Webサイトで公表した。 <p>5. 組織体制の見直し</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 機構の本部・各拠点における研究等の組織体制の見直し、特に、研究開発成果の普及・社会実装を目指すオープンイノベーション推進本部の組織体制について不断の見直しを図ってきた。 ● この一環として、より効率的・効果的な組織のあり方を検討し、ナショナルサイバートレーニングセンター、知能科学融合研究開発推進センターを設立したことに加え、ソーシャル ICT システム研究室を総合テストベッド研究開発推進センター内に新設するなどの組織改編を行うとともに、Beyond 5G 時代を見すえた今後の重要な研究課題のために、CPS エミュレータプロジェクト準備室の立ち上げを行った。 ● 第5期の計画検討に資するため、研究所長等を中核とする将来ビジョンタスクフォースを設置した。将来ビジョンタスクフォース会合は 	令和元年度(254人)	96.2	(事務・技術職員)		対国家公務員(行政職(一))		平成28年度(97人)	106.6	平成29年度(93人)	105.2	平成30年度(94人)	106.3	令和元年度(92人)	105.0	<p>以上のように、業務の効率化について、業務を着実に実施し、十分に目標を達成した。</p> <p>5. 組織体制の見直し</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 機構の本部・各拠点における効率的・効果的な組織のあり方を検討し、社会的なニーズを踏まえて、新たなセンターを設立するなど、組織体制の不断の見直しを図った。 ● 分野横断的な取組や外部との連携が必要な研究開発課題に対しては、機動的に研究課題を設定し、センターを新設したほか、Beyond 5G
令和元年度(254人)	96.2																	
(事務・技術職員)																		
対国家公務員(行政職(一))																		
平成28年度(97人)	106.6																	
平成29年度(93人)	105.2																	
平成30年度(94人)	106.3																	
令和元年度(92人)	105.0																	

体的推進、最先端の研究開発成果の外部への早期の橋渡し、社会実証への取組強化に向けて、テストベッドに係る運営体制について見直しを図るものとする。

また、組織体制の見直しに際しては、研究開発成果を最大化するための機能に係る組織の役割及びマネジメント体制を明確化することで効率的・効果的な組織運営を実現するものとする。

の強化を促進するため、分野横断的な取組や外部との連携が必要な研究開発課題に対しては、機動的に研究課題の設定や研究推進体制の整備を行う。

特に、テストベッドの体制については、最先端の研究開発成果の外部への早期の橋渡しに加え、社会的受容性の検証等、社会実証への取組体制を強化するなど不断の見直しを図る。

部との連携が必要な研究開発課題に対して、機動的に研究課題の設定や研究推進体制の整備を行ったか。

- テストベッドの体制について、最先端の研究開発成果の外部への早期の橋渡しに加え、社会的受容性の検証等、社会実証への取組体制の強化など見直しを図ったか。

経営層も加わる形で平成 30 年度 11 月以降 14 回開催し、マネジメントレベルによる今後の中長期計画の検討や将来ビジョンの検討、有識者による講演会を実施した。また、若い世代の研究者や総合職で構成するワーキンググループも組織し、第 5 期以降の研究開発の柱の検討や、機構の組織・風土改革に関する議論を行い、とりまとめを行った。

- 研究分野の動向等について、機構内研究者と経営層の間のディスカッションを促進する会合(「サロン」)を平成 30 年度から継続的に開催し、将来に向けた研究課題の検討を行うとともに、今後重点的に取り組むべき研究課題に関し、外部の著名研究者を招いて、少人数の合宿形式で密なディスカッションを行う「NICT Open Summit」を平成 30 年度、令和元年度に開催し、それぞれ「量子情報処理技術、自然知、AI のアプリケーション」、「次世代量子情報処理と人工知能」について意見交換を行った。
- 分野横断的な研究推進体制の整備においては、サイバーセキュリティ人材の育成のためのナショナルサイバートレーニングセンター、AI 技術の研究開発と社会実装を推進するための知能科学融合研究開発センター、新たに機構の業務として追加された IoT 機器の調査等を実施するためのナショナルサイバーオブザベーションセンターをそれぞれ設立した。
- 外部との連携による研究推進体制の整備について、製造現場の IoT 化を促進するための規格化や標準化、普及促進を行うためのアライアンスとして、民間企業とともにフレキシブルファクトリーパートナーアライアンスを設立し、会員 8 社、ユーザグループ 32 社が加入するなど産学連携の拡大を図った。また、大学との連携を強化し外部資金獲得等の促進を目的としてマッチング研究支援事業を開始し、連携先を 3 大学まで拡充した。
- 総合テストベッド研究開発推進センター内に新設したソーシャル ICT システム研究室においては、IoT 系のアプリケーションについて地域や企業と密接に連携した実践的なパイロットプロジェクトを推進し、地域社会や企業によるサービスへの受容性などの視点を強く意識した研究開発を行った。
- テストベッドの窓口の一元化や利用手順の改善等により、外部利用者の拡大を図るとともに、様々な実証ニーズに対応したテストベッドを整備・構築及び統合による効率化を図り、内外の利用者による技術実証や社会実証の推進に貢献した。また、社会的受容性を検証する上で重要なプライバシー保護の観点からパーソナルデー

時代を見すえた今後の重要な研究課題のために、CPS エミュレータプロジェクト準備室の立ち上げを行った。

- 第 5 期の計画検討に資するため、「将来ビジョンタスクフォース」を設置し、会合は経営層も加わる形で平成 30 年度 11 月以降 14 回開催、ワーキンググループも組織し、第 5 期以降の計画検討や組織・風土改革などに向けた議論を推進し、とりまとめを行った。
- 機構内研究者と経営層の間のディスカッションを促進する「サロン」や、外部の著名研究者を招いて、少人数の合宿形式で密なディスカッションを行う「NICT Open Summit」を開催し、将来に向けた研究課題の検討等の議論や意見交換を行った。
- 分野横断的な取組や外部との連携が必要な研究開発課題に対しては、産学連携を拡大、マッチング研究支援事業を開始し連携先を拡充するなど、研究推進体制の整備を行った。
- 特にテストベッドについては外部利用者の拡大と効率化を図り、技術実証や社会実証の推進など、取組体制の強化を図った。

		<p>タの適正な取扱いについて事前に検討するための体制を構築し運用した。</p>	<p>以上のように、組織体制の見直しについて、業務を着実に実施し、十分に目標を達成した。</p>
--	--	--	--

国立研究開発法人情報通信研究機構 第4期中長期目標期間終了時見込評価 項目別自己評価書(No.9 財務内容の改善に関する事項)

1. 当事務及び事業に関する基本情報			
中長期目標の当該項目	V. 財務内容の改善に関する事項		
当該項目の重要度、難易度		関連する政策評価・行政事業レビュー	行政事業レビューシート ****

2. 主要な経年データ									
評価対象となる指標	達成目標	基準値等 (前中長期目標期間最終年度値等)	28年度	29年度	30年度	元年度	2年度	(参考情報) 当該年度までの累積値等、必要な情報	

3. 中長期目標、中長期計画、主な評価軸、業務実績等、中長期目標期間評価に係る自己評価							
中長期目標	中長期計画	主な評価指標	法人の業務実績等			自己評価	
V. 財務内容の改善に関する事項	<p>Ⅲ 予算計画(人件費の見積もりを含む。)、収支計画及び資金計画 予算(人件費の見積もりを含む。)、収支計画及び資金計画については、次のとおりとする。 予算の見積もりは、運営費交付金の算定ルール等に基づき中長期目標を踏まえ試算したものであり、実際の予算は毎年度の予算編成において決定される係数等に基づき決まるため、これらの計画</p>					評定	B
						<p>予算計画、収支計画及び資金計画に基づき、以下のように適切に運営を行い、十分に目標を達成した。</p>	

の額を下回ることや上回る
ことがあり得る。

予算計画
収支計画
資金計画

1. 一般勘定

運営費交付金を充当して行う事業については、「Ⅳ 業務運営の効率化に関する事項」で示した事項について配慮し、特許料収入等の自己収入及び競争的資金等の外部資金の適正な収入を見込んだ上で、中長期計画の予算及び収支計画を作成し、当該予算及び収支計画による運営を行うものとする。

また、独立行政法人会計基準の改定(平成12年2月16日独立行政法人会計基準研究会策定、平成27年1月27日改訂)等により、運営費交付金の会計処理として、

1. 一般勘定

運営費交付金を充当して行う事業については、「Ⅱ 業務運営の効率化に関する目標を達成するためとるべき措置」で示した事項について配慮し、特許料収入等の自己収入及び競争的資金等の外部資金の適正な収入を見込んだ上で、中長期目標期間中の予算計画及び収支計画を作成し、当該予算計画及び収支計画による運営を行う。

なお、収益化単位の業務ごとに予算と実績を管理し、目標と評価の単位である事業等のまとまりごとに、財務諸表にセグメント情報を開示する。また、事業等のまとまりごとに予算計画及び執行実績を明らかにし、著しい乖離がある場合にはその理由を決算書において説明する。

その他、保有資産については、不断の見直しを行うとともに有効活用を推進し、不要財産は国庫納付する。

< 評価の視点 >

- 運営費交付金を充当して行う事業について、適切に、中長期計画の予算及び収支計画を作成し、当該予算及び収支計画による運営を行ったか。
- 収益化単位の業務ごとに予算と実績を管理したか。
- 事業等のまとまりごとに財務諸表にセグメント情報を開示し、また、予算計画及び執行実績を明らかにし、著しい乖離がある場合にはその理由を決算書にて説明したか。

1. 一般勘定

- 運営費交付金を充当して行う事業については、「Ⅱ 業務運営の効率化に関する目標を達成するためとるべき措置」で示した事項について配慮し、特許料収入等の自己収入及び競争的資金等の外部資金の適正な収入を見込んだ上で、年度の予算計画及び収支計画を作成し、当該予算計画及び収支計画による運営を行った。
- 収益化単位の業務ごとに予算と実績を管理し、目標と評価の単位である事業等のまとまりごとに、財務諸表にセグメント情報を開示した。また、事業等のまとまりごとに予算計画及び執行実績を明らかにし、著しい乖離についてはその理由を決算報告書にて説明した。
- 施設・設備等保有資産については、年1回棚卸及び減損兆候調査の実施による見直しを行った結果、不要となる資産はなかった。現有している資産について引き続き有効活用に努めている。
- 白山ネットワーク実験施設及び犬吠テストフィールドについては、平成28及び29年度にいずれも国庫納付済み。
- 平磯太陽観測施設について、土地の現物国庫納付に向け、現在、既存建物等の撤去工事を実施中。

1. 一般勘定

- 運営費交付金を充当して行う事業については、効率化に関する目標について配慮し、左記のとおり外部資金の適正な収入を見込んだ上で、適切に予算計画等を作成し、これらの計画に基づく適切な運営を行った。
- 収益化単位の業務ごとに予算執行状況を管理し、目標と評価の単位である事業等のまとまりごとに、財務諸表にセグメント情報として開示した。
- 決算書においては、予算計画及び執行実績を明らかにし、著しい乖離についてはその理由を決算報告書にて明示した。
- 保有資産については毎年棚卸及び減損兆候調査の実施による見直しを行い、有効活用を推進した。白

業務達成基準による収益が原則とされたことを踏まえ、収益化単位の業務ごとに予算と実績を管理する体制を構築する。

その他、保有資産については不断の見直しを行うとともに有効活用を推進し、不要財産は国庫納付するものとする。

2. 自己収入等の拡大

「独立行政法人改革等に関する基本的な方針」(平成25年12月24日閣議決定)において、「法人の増収意欲を増加させるため、自己収入の増加が見込まれる場合には、運営費交付金の要求時に、自己収入の増加見込額を充てて行う新規業務の経費を見込んで要求できるものとし、これに

2. 自己収入等の拡大

機構が創出した知的財産等について、社会で活用される可能性や機構のミッションにおける重要性、重点的に推進すべき課題における特許戦略、外国特許の効率的運用等を勘案して特許取得・維持に関する判断をより適切に行うことにより、保有コストの適正化を図る。また、技術移転活動をより効果的に実施することにより、知的財産収入の増加を図る。

これらの取組によって、中長期目標期間の平均年間知的財産収入が前中長期目標期間よりも増加することを目指し、保有コストと知的財産収入の収支改善に努める。

さらに、競争的資金等の外

- 保有資産については不断の見直しを行うとともに有効活用を推進し、不要財産は国庫納付したか。

< 評価の視点 >

- 知的財産の保有コストの適正化を図ったか。
- 知的財産収入の増加を図ったか。
- 競争的資金等の外部資金の増加に努めたか。

2. 自己収入等の拡大

- 機構の知的財産ポリシーに基づき、「特許検討会」において、出願、外国出願、審査請求、権利維持のそれぞれの段階で特許の有効活用の観点から要否判断を行うこととした。
- 機構の研究開発により創出された知的財産が社会で最大限活用されるために、知的財産に係る機構の活動を一体的かつ戦略的に進めるに当たり必要な事項を調査審議することを目的として、平成28年度に「知的財産戦略委員会」を新たに設置し、知的財産に係る収支改善方策等について検討を行った。この委員会の中で、出願から10年を経過する特許の維持に係る基準、及び外国出願に係る判断基準・運用方針を見直すこととした。特許取得・維持に要する経費は、第4期の4年間の平均では、年額145百万円となっている。
- 展示会や交流会等の国内外のイベントにおける研究開発成果の周知広報や、音声翻訳技術、サイバーセキュリティ技術などを中心に、技術移転推進担当者と研究所・研究者が連携して企業に対する技術移転活動等を進め、知的財産の活用促進を図った。この結果、第4期の4年間の知的財産収入は613百万円となっている。なお、新規契約件数は4年間で133件となっている。
- 第4期の平均年間知的財産収入は、平均年額で153百万円であり、第3期(78百万円)を上回っており、一方、保有コストとしての平均年間支出額は

山ネットワーク実験施設及び犬吠テストフィールドについては国庫納付済であり、平磯太陽観測施設についても、不要財産としての現物納付に向け手続きを進めた。

2. 自己収入等の拡大

- 第4期初年度である平成28年度に新たに「知的財産戦略委員会」を設置し、知的財産に係る収支改善方策等について検討を行い、特に、出願から10年を経過する特許の維持及び外国出願に係る判断基準・運用方針を見直す等、知的財産保有コストの適正化を図った。
- 展示会や交流会等の国内外のイベントにおける研究開発成果の周知広報や企業に対する技術移転活動等を進め、知的財産収

<p>より、当該経費に充てる額を運営費交付金の要求額の算定に当たり減額しないこととする。」とされていることも踏まえ、機構の財政基盤を強化するため、保有する知的財産について、保有コストの適正化を図るとともに、技術移転活動の活性化により更なる知的財産収入の増加を図るものとする。</p> <p>また、技術移転活動の活性化に向けて知的財産戦略を明確化し、取組を進めるものとする。これにより、中長期目標期間の平均年間知的財産収入が前中長期目標期間よりも増加となることを目指すものとする。</p> <p>さらに、競争的資金等の外部資金の増加に努</p>	<p>部資金の増加に努める。</p>		<p>第3期(179百万円)を下回っている。</p> <ul style="list-style-type: none"> 外部資金獲得に関する説明会、科研費説明会の開催及び「外部資金獲得推進制度」の実施など、外部資金増加のための取組を行った。この結果、受託研究等においては、 <ul style="list-style-type: none"> 平成28年度 167件、3,189百万円 平成29年度 203件、4,181百万円 平成30年度 219件、4,495百万円 令和元年度 224件、6,895百万円 <p>と対前年度比で増加し続けた。</p> <p>また、資金受入型共同研究においても、 <ul style="list-style-type: none"> 平成28年度 35件、88百万円 平成29年度 42件、265百万円 平成30年度 42件、258百万円 令和元年度 29件、429百万円 </p> <p>と対前年度比で増加傾向にある。</p>	<p>入は第3期よりも増加した。</p> <ul style="list-style-type: none"> 外部資金獲得の取組を毎年度実施し、件数、金額とも対前年度比で増加傾向にある。
---	--------------------	--	---	---

めるものとする。

3. 基盤技術研究促進勘定

基盤技術研究促進勘定について、更に業務経費の低減化を図るとともに、Ⅲ.4.(3)の取組を進め、繰越欠損金の着実な縮減に努めるものとする。

4. 債務保証勘定

各業務の実績を踏まえ、信用基金の規模や運用の適正化を図る。債務保証業務については、資金計画や担保の確保等について多角的な審査・分析を行い、保証範囲や保証料率については、リスクを勘案した適切な水準とするものとする。また、

3. 基盤技術研究促進勘定

基盤技術研究促進勘定について、更に業務経費の低減化を図るとともに、収益納付・売上納付に係る業務を着実に実行し、繰越欠損金の着実な縮減に努める。

4. 債務保証勘定

各業務の実績等を踏まえ、信用基金の規模や運用の適正化を図る。

債務保証業務については、債務保証の決定に当たり、資金計画や担保の確保等について多角的な審査・分析を行い、保証料率等については、リスクを勘案した適切な水準とする。

また、保証債務の代位弁済、利子補給金及び助成金交付の額については、同基金の運用益及び剰余金の範囲内に抑えるように努める。

これらに併せて、同基金の運用益の最大化を図る。

< 評価の視点 >

- 業務経費の低減化を図るとともに、繰越欠損金の着実な縮減に努めたか。

< 評価の視点 >

- 基金の規模や運用の適正化を図ったか。

- 債務保証の保証範囲や保証料率について、リスクを勘案した適切な水準としたか。

- 保証債務の代位弁済、利子補給金及び助成金交付の額は同基金の運用益及び剰余金の範囲内に抑えるように努めたか。

- 信用基金の

3. 基盤技術研究促進勘定

- 第4期中の業務経費は、業務委託費等の削減により、着実に業務経費の低減化を図った。
- 追跡調査のほか、売上(収益)納付の確保、収入の増加のため、第4期から新たに、特に売上向上が見込まれる対象研究開発課題についてその分野に精通した外部有識者と受託者による意見交換会を実施し、よりきめ細やかな改善策を助言した。また、納付契約の契約期間の延長に鋭意取り組み、繰越欠損金の減少に努めた。

4. 債務保証勘定

- 平成28年度より新たに業務追加された助成制度及び既存の利子補給制度の原資を確保するため、平成27年度の利益剰余金5.3億円に加えて、56.2億円の基金を維持した。
- 第4期中の債務保証業務については、新規案件はなかった。
- 利子補給金及び助成金交付の額とあわせ、基金の運用益及び剰余金の範囲内に抑制した。
- 保有債券は償還日まで保有するとともに、償還を迎えた債券は、可能な限り有利な利率で運用した。

3. 基盤技術研究促進勘定

- 業務経費の低減化を図るとともに、追跡調査・意見交換会等を着実に実施するなど、繰越欠損金の着実な縮減に努めた。

4. 債務保証勘定

- 運用益も助成制度等の原資とする等、基金の規模を維持し、運用の適正化を図った。
- 利子補給金及び助成金交付の額については、運用益及び剰余金の範囲内に抑えた。
- 保有債券は償還日まで保有するとともに、償還を迎えた債券を可能な限り有利な利率で運用し、信用基金の運用益の最大化を図った。

<p>業務の継続的実施のために信用基金を維持する観点から、保証債務の代位弁済、利子補給金及び助成金交付の額は同基金の運用益及び剰余金の範囲内に抑えるように努めるものとする。なお、これらに併せて、信用基金の運用益の最大化を図るものとする。</p> <p>5. 出資勘定 出資勘定について、更に業務経費の低減化を図るとともに、出資金の最大限の回収に努めるものとする。</p>	<p>5. 出資勘定 出資勘定について、更に業務経費の低減化を図るとともに、出資金の最大限の回収に努める。</p>	<p>運用益の最大化を図ったか。</p> <p>< 評価の視点 ></p> <ul style="list-style-type: none"> ● 業務経費の低減化を図るとともに、出資金の最大限の回収に努めたか。 	<p>5. 出資勘定</p> <ul style="list-style-type: none"> 旧通信・放送機構が直接出資し機構が承継した法人のうち、株式保有中の2社については、中期経営計画、累損解消計画及び年度毎の事業計画の提出を求めるとともに、年度決算や中間決算の報告等を通じて経営分析を行い事業運営の改善を求めることによって、第4期を通して単年度黒字を継続している。また、出資契約に基づく実地監査を行い、内部管理全般に亘る監督を強化した。 出資により取得した株式がその取得価格以上の適正な価格で処分し得ると見込まれる企業に対しては、主要株主も参画し、株式処分に関する協議を進めている。 1社は、平成29・30年度の各決算期末において株式配当が実施され収益を得ている。 	<p>5. 出資勘定</p> <ul style="list-style-type: none"> 業務経費の低減化については、必要最小限の支出に抑えた。 黒字を計上し純資産額を増加させることは、出資会社の価値を高め、売却等により出資金の回収を有利に進める材料となるため、出資会社2社の当該期における黒字計上は、今後の出資金回収の最大化に寄与するものと評価している。
<p>IV 短期借入金の限度額</p>	<p>IV 短期借入金の限度額</p>	<p>< 評価の視点 ></p> <p>IV 短期借入金の限度額</p>	<p>IV 短期借入金の限度額</p>	<p>IV 短期借入金の限度額</p>

<p>年度当初における国からの運営費交付金の受入れが最大限3ヶ月遅延した場合における機構職員への人件費の遅配及び機構の事業費支払い遅延を回避するため、短期借入金を借り入れることができることとし、その限度額を25億円とする。</p> <p>V 不要財産又は不要財産となることが見込まれる財産がある場合には、当該財産の処分に関する計画 別表4に掲げる白山ネットワーク実験施設、犬吠テストフィールド及び平磯太陽観測施設について、国庫納付を行う。</p> <p>VI 前号に規定する財産以外の重要な財産を譲渡し、又は担保に供しようとするときは、その計画 なし。</p> <p>VII 剰余金の使途</p>	<p>></p> <ul style="list-style-type: none"> ● 短期借入金について、借入があった場合、借り入れ理由や借入額等は適切なもの認められるか。 <p>< 評価の視点 ></p> <ul style="list-style-type: none"> ● 不要資産について、適切に対応を行ったか。 <p>—</p> <p>< 評価の視点</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 短期借入金の借入はなかった。 <p>V 不要財産又は不要財産となることが見込まれる財産がある場合には、当該財産の処分に関する計画</p> <ul style="list-style-type: none"> • 白山ネットワーク実験施設については、平成28年度に売却を行い、売却で得た額を国庫納付した(95百万円)。 • 犬吠テストフィールドについては、平成29年度に土地を現物国庫納付した。 • 平磯太陽観測施設については、令和元年度に撤去工事のための設計業務を完了、撤去工事の契約締結と工事に着手し、令和2年度中に土地を現物国庫納付の予定。 <p>VI 前号に規定する財産以外の重要な財産を譲渡し、又は担保に供しようとするときは、その計画</p> <p>なし。</p> <p>VII 剰余金の使途</p>	<p>額</p> <ul style="list-style-type: none"> ・短期借入金の借入はなかった。 <p>V 不要財産又は不要財産となることが見込まれる財産がある場合には、当該財産の処分に関する計画</p> <ul style="list-style-type: none"> ・不要資産について、白山ネットワーク実験施設は売却で得た額を、また、犬吠テストフィールドは土地を国庫納付したほか、平磯太陽観測施設については令和2年度の現物納付に向けて適切に対応を行っている。 <p>VI 前号に規定する財産以外の重要な財産を譲渡し、又は担保に供しようとするときは、その計画</p> <p>なし。</p> <p>VII 剰余金の使途</p>
---	--	--	---

	<ol style="list-style-type: none"> 1 重点的に実施すべき研究開発に係る経費 2 広報や成果発表、成果展示等に係る経費 3 知的財産管理、技術移転促進等に係る経費 4 職場環境改善等に係る経費 5 施設の新営、増改築及び改修等に係る経費 	<p>></p> <ul style="list-style-type: none"> ● 剰余金が発生したときは、利益または損失について適切に処理されたか。 	<ul style="list-style-type: none"> • 剰余金についてはすべて通則法の規定に基づき適切に処理され、これを使用した経費は無かった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・発生した剰余金は、すべて通則法の規定に基づき適切に処理された。
--	--	---	--	--

**国立研究開発法人情報通信研究機構 第4期中長期目標期間終了時見込評価
項目別自己評価書(No.10 その他業務運営に関する重要事項)**

1. 当事務及び事業に関する基本情報			
中長期目標の当該項目	VI. その他業務運営に関する重要事項		
当該項目の重要度、難易度		関連する政策評価・行政事業レビュー	行政事業レビューシート ****

2. 主要な経年データ									
評価対象となる指標	達成目標	基準値等 (前中長期目標期間最終年度値等)	28年度	29年度	30年度	元年度	2年度	(参考情報) 当該年度までの累積値等、必要な情報	
研究成果に関する報道発表の掲載率	100%	100%	100%	100%	100%	100%			

3. 中長期目標、中長期計画、主な評価軸、業務実績等、中長期目標期間評価に係る自己評価										
中長期目標	中長期計画	主な評価指標	法人の業務実績等			自己評価				
VI. その他業務運営に関する重要事項	VIII その他主務省令で定める業務運営に関する事項					<table border="1"> <tr> <td>評定</td> <td>B</td> </tr> <tr> <td colspan="2"> その他主務省令で定める業務運営に関する事項については、中長期計画に沿って以下のように適切に運営を行い、十分に目標を達成した。 </td> </tr> </table>	評定	B	その他主務省令で定める業務運営に関する事項については、中長期計画に沿って以下のように適切に運営を行い、十分に目標を達成した。	
評定	B									
その他主務省令で定める業務運営に関する事項については、中長期計画に沿って以下のように適切に運営を行い、十分に目標を達成した。										

1. 施設及び設備に関する計画

中長期目標を達成するために必要な別表5に掲げる施設及び設備の効率的な維持・整備を適切に実施する。

＜評価の視点＞

- 施設及び設備の効率的な維持・整備を適切に実施したか。

1. 施設及び設備に関する計画

第4期中に策定した中長期修繕計画に基づき、以下のとおり、主な工事及びその他小破修繕及び工事設計業務等を含め、本部及び各拠点における施設・設備の更新・改修、整備を実施した。

年度	主な工事
28年度	本部 107・111・126 棟空調設備更新工事(施設整備費補助金事業)及び本部 126 棟直流盤更新工事ほか 2 件
29年度	本部 6 号館空調設備更新(第 1 期)工事(施設整備費補助金事業)及びユニバーサルコミュニケーション研究所入退室管理設備更新工事ほか 2 件
30年度	本部 6 号館空調設備更新(第 2 期)工事(施設整備費補助金事業)及び未来 ICT 研究所機械設備等更新工事ほか 2 件
元年度	ユニバーサルコミュニケーション研究所機械設備等更新工事(施設整備費補助金事業)及び北陸 StarBED 技術センター外壁等改修工事ほか 2 件
2 年度	沖縄電磁波技術センター外壁改修等工事(施設整備費補助金事業)及び未来 ICT 研究所電気設備更新工事ほか 5 件(予定)

2. 人事に関する計画

1. 施設及び設備に関する計画

- ・中長期修繕計画に基づき、施設及び設備の効率的な維持・整備のため、改修・更新工事を適切に実施した。

2. 人事に関する計画

1. 人事制度の強化

機構の研究開発成果を最大化するためには、優秀かつ多様な人材を採用するとともに、それぞれの人材が存分にその能力を発揮できる環境を整備することが重要である。このため、能力・実績主義に基づく公正で透明性の高い人事制度を確立すると

2. 人事に関する計画

研究開発成果を最大化する上で研究開発力を継続的に確保・向上させるためには、優秀かつ多様な人材を確保するとともに、職員が存分に能力を発揮できる環境を整備することが重要である。このため、能力・実績主義に基づく公正で透明性の高い人事制度を確立すると

もに、ICT分野の技術革新の状況に応じて効果的・効率的に対応できる柔軟な組織構築・迅速な人員配置を行うものとする。

また、人材の専門性や組織の研究開発能力の継続性を確保するため、産学官からの優れた外部人材の登用や若手研究者の育成等により、適切な人事配置を行うものとする。また、クロスアポイントメント制度の活用等による研究人材の流動化、海外経験や国内外の機関の勤務経験に対する一定の評価付与やキャリアパス設定、女性の人材登用促進を実現するものとする。

2-1. 研究開発成果の最大化のための人材の確保・育成・評価・活用

研究開発成果の最大化を実現するための研究人材をミッションの性質に応じて戦略的かつ柔軟に獲得するように努める。

強いリーダーシップのもとで効果的に研究開発を推進していくため、内部の有能人材を活用することのみならず、国内外の優れた外部人材の登用や若手研究者の育成により適切な人材配置・活用に努める。

内外の有機的な連携による研究開発を円滑かつ的確に推進するため、コーディネータ等の人材を配置し、プロジェクト企画から成果展開までを実践的な視点で推進する。また、知的財産の戦略的活用等による成果展開や社会実装に向かう流れの加速を実現するための人材の確保・育成に努めていく。

部署間の連携研究を通じた研究者としての視野の拡大や、企画戦略等に関する業務経験を通じたマネジメント能力の向上等、職員の育成に努めていく。

テニュアトラック制度等、若手研究者が挑戦できる機会の拡大とそのための制度及

< 評価の視点 >

- 内部の有能人材の活用、国内外の優れた外部人材の登用や若手研究者の育成により適切な人材配置・活用に努めたか。
- プロジェクト企画から成果展開までを実践的な視点で推進するプロジェクト運営を実現したか。
- 知的財産の戦略的活用等による成果展開や社会実装に向かう流れの加速を実現するための人材の確保・育成に努めたか。
- 視野の拡大やマネジメント能力の向上等、職員の育成に努めたか。
- 若手研究者

2-1. 研究開発成果の最大化のための人材の確保・育成・評価・活用

- 研究成果の最大化を実現するための人材として、求める人材の専門性やミッションに応じてパーマナント職員（研究職、研究技術職及び総合職）及び有期雇用職員を採用したほか、民間企業等からも出向者（専門研究員・専門研究技術員・専門調査員）を受け入れた。
具体的には、以下のとおり採用又は受入れを行った。

	28年度	29年度	30年度	元年度
パーマナント研究職	7名	7名	5名	9名
パーマナント研究技術職	0名	2名	1名	3名
パーマナント総合職	0名	0名	2名	3名
有期雇用職員（新規）	139名	132名	155名	175名
出向者	20名	18名	31名	18名

（令和2年3月31日現在、パーマナント研究職 276名、研究技術職 8名、総合職 120名、有期雇用職員 676名、出向者 71名が在籍）。

- 「国の重要な政策目標の達成のために必要な研究開発課題」を指定し、当該課題の目標達成に不可欠な能力を有する者を特定研究員又は特定研究技術員に指定し、一定額の手当を支給する制度を平成29年度に創設した。令和2年3月31日現在の指定者は30名であった。
- AI やセキュリティ関連分野の優秀な若手人材確保のため、リサーチアシスタント制度を平成29年度に創設し、令和元年度までの3年間で11名を採用した。
- プロジェクト企画から成果展開までを実践的な視点で推進し、プロジェクト運営をサポートする人材として、企業で製品の開発・展開等の経験が豊富な外部人材を、イノベーションプロデューサー・イノベーションコーディネーターとして配置した。配置数は以下のとおりであった。

	28年度	29年度	30年度	元年度
イノベーションプロデューサー	6名	8名	15名	15名
イノベーションコーディネーター	4名	8名	8名	8名

○数値は各年度末現在の配置数である。

- 知的財産の戦略的活用等による成果展開等の加速に向け、知的財産推進室に特許庁からの出向者を配置するとともに、令和元年度には民間企業の知的財産部門のハイクラス経験者の受入れ手続きを進め、令和2年4月に配属した。また、社会実装に向かう流れの加速を担うソーシャルイノベーションユニット内の各組織への必要な人員の配置やベンチャーに関する役職員

2-1. 研究開発成果の最大化のための人材の確保・育成・評価・活用

- 研究成果を最大化するため、求める人材の専門性やミッションの性質に応じてパーマナント職員及び有期雇用職員を採用し、出向者を受け入れた。また、特定研究員・特定研究技術員を指定する制度を創設し、不可欠な研究者・技術者の確保を図った。更に、リサーチアシスタント制度やテニュアトラック制度を活用した。このように、内部の有能人材の活用、外部人材の登用、若手研究者の育成を行い、適切な人材配置・活用に努めた。

● 経験豊富な外部人材等を配置することにより、プロジェクトを企画から成果展開までを実践的な視点で推進した。

● 知的財産関係人材の外部からの受入れを進めるとともに、社会実装に必要な人員の

び環境の整備を行う。

直接的な研究開発成果のみならず、研究開発成果の普及や社会実装に向けた活動への貢献や、海外経験及び国内外の機関勤務経験等についても適切に評価し、キャリアに反映させる。

職員の能力・成果等について公正で透明性の高い方法で評価し処遇等に反映させる人事制度を確立する。その際、職員が携わる業務の性格等を勘案した上で、個人業績評価を勤勉手当や昇格等へ適切に反映させるとともに、優れた業績に対して積極的に報いる制度の改善を図る。

が挑戦できる機会の拡大と制度及び環境の整備を行ったか。

- 研究開発成果の普及や社会実装に向けた活動への貢献や海外経験及び国内外の機関勤務経験等についても適切に評価し、キャリアに反映させたか。
- 職員の能力・成果等について公正で透明性の高い方法で評価し処遇等に反映させる人事制度を確立したか。その際、個人業績評価を勤勉手当や昇格等へ適切に反映させるとともに、優れた業績に対して積極的に報いる制度の改

の啓発のための講演会の開催を行った。

- ・ 経営企画部等に若手から中堅層までの職員をプランニングマネージャーとして配置して機構全体のマネジメント業務にあたらせるなどにより、部署間の連携研究を意識した研究マネジメント能力の向上に努めた。
- ・ マネジメント能力の向上等のため階層別研修として管理監督者研修及び中堅リーダー研修を毎年度実施し、また、英語によるプレゼン研修(28年度)、ファシリテーション研修(29年度)、課題解決研修(30年度)、メンター研修(元年度)等各種研修を実施した。
- ・ 若手研究者が挑戦できる機会として、テニュアトラック制度を平成28年度に開始し、テニュアトラック研究員を平成28年度～令和2年度の5年間で17名採用した。そのうち既に成果を挙げた2名はテニュアトラック終了後、パーマネント職員として採用済みである。
- ・ 学生が研究就業体験を通じて研究者として挑戦するきっかけとなるよう、国内インターンシップ制度を整備するための規程等を令和元年度に制定した(令和2年度から実施予定。)
- ・ 業務経験や海外経験及び国内などの他機関勤務の経験についても適切に評価し、その後のキャリアに反映させた。
- ・ 公正で透明性の高い方法で評価を行い、処遇等に反映させる人事制度を確立するため、本人の策定した計画・目標に基づき業績を評価する業績評価制度を、従来の管理監督者及び管理監督者を含む研究職・研究技術職に加えて、管理監督者以外の事務系職員(総合職)への適用を令和元年度に開始した。その際、職員の評価制度に対する理解を増進させ、適正な評価に資することを目的として「評価マニュアル」を作成した。
- ・ 個人業績評価結果を踏まえて勤勉手当を決定するとともに、管理監督者について、個人業績評価結果を踏まえた査定昇給制度の適用を令和元年度に開始した(個人業績評価結果を踏まえた査定昇給制度の一般職員への適用は、令和2年度からを予定。)
- ・ また、平成28年度には有期雇用職員に対する業績手当や部内表彰における成績最優秀者に対する報奨金について制度を創設した。

配置を行う等、知的財産の戦略的活用等による成果展開や社会実装に向かう流れの加速を実現するための人材の確保・育成に努めた。

- ・ 経営企画部等でのプランニングマネージャーとしての業務、階層別研修等により、職員の視野の拡大やマネジメント能力の向上を図る等、職員の育成に努めた。
- ・ テニュアトラック研究員の採用を行うとともに、テニュアトラック研究員の中からパーマネント職員を採用した。また、リサーチアシスタントの採用を行ったほか、国内インターンシップ制度を整備した。このように、若手研究者が挑戦できる機会の拡大と制度及び環境の整備を行った
- ・ 業務経験や海外・他機関の経験等について個人業績評価等を通じて適切に評価し、その後のキャリアに反映させた。
- ・ 公正で透明性の高い方法で評価を行い、

処遇に反映させる人事制度を確立するため、業績評価制度の対象を拡大し、評価結果を踏まえて勤奨手当を決定するとともに、管理監督者について、個人業績評価結果を踏まえた査定昇給制度の適用を開始する(一般職員への同制度の適用は令和2年度からを予定。)など、制度の改善を図った。

2-2. 人材採用の広視野化・流動化の促進等

- ・研究プロジェクトの進捗等に応じて適時有期雇用職員を採用し、民間企業等に在籍する専門性の高い人材を受け入れ、また、大学法人との間でクロスアポイントメントによる人事交流を行うなど、人材活用効果の拡大と研究活動の活性化を図った。
- ・女性職員の人材登用の促進に努め、一層の活用に向けて女性のマネジメント人材

善を図ったか。

< 評価の視点 >

- 人材活用効果の拡大と研究活動の活性化を図ったか。
- 女性の人材登用促進に努めたか。
- 多様な職務とライフスタイルに応じた弾力的な勤務形態の利用を促進したか。

2-2. 人材採用の広視野化・流動化の促進等

- ・クロスアポイントメントによる人事交流を大学法人と行った(平成29年4月から2名)。また、女性職員の人材登用については、以下のとおり実施した。

H28	上席研究員	2名
	室長	1名
H29	プランニングマネージャー	1名
H30	グループリーダー	2名
R01	シニアマネージャー	1名
	統括	1名
- ・国家公務員の勤務時間制度に関する動向も踏まえ、職員のワーク・ライフ・バランスに配慮しつつ、柔軟な勤務形態による労働が可能になるよう、裁量労働制・フレックスタイム制・在宅勤務制度などを促進した。裁量労働制については、平成28年度に有期研究員を対象とすることを可能とした。フレックスタイム制については、平成28年度にそれまで対象外であった総務部及び財務部の職員も対象とした。
- ・特に在宅勤務制度については、令和元年度に在宅勤務許可の有効期間の上限を撤廃し、日々の在宅勤務実施に係る上司への申請期限を前週から前日に短縮して利便性向上を図ったこと、新型コロナウイルス感染症(以

2-2. 有期雇用等による最先端人材の確保等

有期雇用等による課題毎の最先端人材の確保を行うとともに、クロスアポイントメント制度の活用等、外部との人材の流動化を促進することなどにより、人材活用効果の拡大と研究活動の活性化を図る。また、女性の人材登用促進に努める。
多様な職務とライフスタイルに応じ、弾力的な勤務形態の利用を促進する。

下、COVID-19)対策として在宅勤務を推進したことから、在宅勤務制度利用者は、令和2年3月末現在で610名となった。(前年同月比587名増)

の育成にも取り組んだ。

- ・原則として、管理監督者を除く全ての職員について、研究者は裁量労働制、その他はフレックスタイム制による柔軟な勤務形態による勤務を可能とし、特に在宅勤務制度の利便性向上と通信環境の改善を通じて弾力的な勤務形態の利用を促進した。

以上のように、人材の確保等について、中長期計画に沿って業務を着実に実施し、十分に目標を達成した。

3. 積立金の使途

- ・第3期終了までに自己収入財源で取得した固定資産の減価償却に要する費用に充当し、適切に処理した。
- ・地域通信・放送開発事業の既往案件に係る利子補給金、新技術開発施設供用事業及び地域特定電気通信設備供用事業に対する助成金

< 評価の視点 >

- 積立金は適切に処理されたか。

3. 積立金の使途

- ・第3期終了までに自己収入財源で取得し、第4期に繰り越した当該固定資産の減価償却に要する費用に充当した。
 - ・第4期中において、地域通信・放送開発事業の既往案件に係る利子補給金に0.02億円を、新技術開発施設供用事業及び地域特定電気通信設備供用事業に対する助成金交付額に2.63億円を充当し、積立金から取り崩しを行った。
- なお、債務保証業務がなかったため、代位弁済費用は生じない。

3. 積立金の使途

「Ⅶ 剰余金の使途」に規定されている剰余金の使途に係る経費等に充当する。

第3期中長期目標期間終了までに自己収入財源で取得し、第4期中長期目標期間に繰り越した固定資産の減価償却に要する費用に充当する。

第4期中長期目標期間において、地域通信・放送開発事業の既往案件に係る利子補給金、新技術開発施設供用事業及び地域特定電気通信

交付額に充当し、適切に処理した。

4. 研究開発成果の積極的な情報発信

・報道発表や記者向け説明会の効果的な実施による情報発信力強化に加え、積極的な取材対応を通じて機構の紹介を多数行った結果、令和元年度の報道発表が55件、新聞掲載が1,058件(大手一般紙8紙への掲載率51%)となったほか、研究成果に関する報道発表の新聞掲載率は4年度間を通じ100%を維持するなどの反響を得た。NICTオープンハウスの日程や内容を見直し、30年度から金曜土曜に開催、青少年向けのイベントも豊富に準備するなど、機構の知名度のみならず、一般への波及効果を狙った活動を行った。
来訪者数やツイッタ

4. 研究開発成果の積極的な情報発信

- ・報道関係者と日頃から良好な関係を維持し、取材時は広報部がコミュニケーションとして主導的に対応した。報道発表だけでなく、記者への個別説明を積極的にアレンジし、メディアからの取材依頼、問い合わせや相談などには丁寧かつ迅速に対応した。
- ・報道発表に関する事故を防止するための「チェックシート」により、コンプライアンスを強化することができた。また、「報道発表に関する確認事項」という様式に発表概要をまとめることにより、タイトルや内容が分かりやすくなるよう報道室で担当部署と調整を行い、メディアに取り上げられるようアピールした。報道発表資料においては実担当者名を前面に出すように取り組んだ。さらに、セレモニー関係など内容に応じて記者説明会を開催した。
- ・その結果、研究開発成果等に関する報道発表を平成28年度から令和元年度の各年度に、各々64件、51件、66件、55件実施した。
- ・また、海外への発信が効果的な案件については、英文による報道発表を平成28年度から令和元年度の各年度に、各々11件、6件、11件、14件行うとともに米国科学振興協会(AAAS)が提供するオンラインサービスを使って投稿するなどPRに努めた。その結果、海外メディアから直ちに反響があり、速報として令和元年度は110件以上の掲載があった(広報部把握分)。特に令和元年度は、プラズマバブル観測レーダのタイ国内運用開始の報道発表に際しては、現地で開催された開所式での報道対応も行った。
- ・様々な媒体への発信に取り組んだことや研究成果の効果的なアピールにより、報道メディアからは多くの取材要望があり、取材対応件数は平成28年度から令和元年度の各年度に、各々353件、492件、449件、410件となった。
- ・記者からの取材依頼や電話問い合わせに、迅速かつきめ細やかな対応を行った結果、新聞掲載は平成28年度から令和元年度の各年度に、各々887件、1,687件、1,214件、1,058件(令和元年度の大手一般紙8紙への掲載率は51%)、TV/ラジオ等放送が平成28年度から令和元年度の各年度に、各々105件、177件、101件、114件、雑誌掲載が平成28年度から令和元9年度の各年度に、各々85件、234件、210件、160件、Web掲載が平成

<評価の視点>

- 機構の活動に対する関心や理解の促進につながる広報活動を積極的に実施したか。
- 機構の役割や研究開発成果を外部にアピールしたか。

<指標>

- 研究成果に関する報道発表の掲載率

設備供用事業に対する債務保証業務における代位弁済費用が生じた場合に必要となる金額及び助成金交付額に充当する。

4. 研究開発成果の積極的な情報発信

機構の研究開発成果の普及や社会実装に向けた活動を推進するために、機構の活動に対する関心や理解の促進につながる広報活動を積極的に実施する。

機構の活動が広く理解されるよう、最新の研究開発成果に関する報道発表、記者向け説明会の実施等、報道メディアに対する情報発信力を強化するとともに、メディアからの取材に積極的に対応する。また、ウェブページ、広報誌等を活用して研究開発成果を分かりやすく伝える等、情報提供機会の充実を図る。これらにより、広報活動におけるアウトカムの最大化を目指す。また、機構の施設の一般公開等を戦略的に行うことや、見学者の受入れ等を積極的に行うことで、ICT分野及び機構の業務への興味を喚起するとともに理解を深める機会を積極的に提供する。

さらに、研究開発成果の科学的・技術的・社会的意義の説明、学術論文の公開、知的

2. 研究開発成果の積極的な情報発信

研究開発成果の科学的・技術的・社会的意義の説明、学術論文の公開、知的財産権の実施許諾、民間への技術移転、データベースやアプリケーション等の提供等の情報発信を積極的に行うことで、機構の役割(ミッション)や研究開発成果を外部にアピールしていくものとする。

また、機構の研究開発成果の普及や社会実装を推進するためには、上記の情報発信が受け手に十分に届けられることから、広報業

務の強化に向けた取組を行うものとする。この場合、報道発表数等のアウトプットだけでなく、当該アウトプットの効果としてのアウトカムとして新聞・雑誌・Web等の媒体での紹介や反響等の最大化を目指した取組を行うものとする。

財産権の実施許諾、民間への技術移転、データベースやアプリケーション等の提供等の情報発信を積極的に行うことで、機構の役割や研究開発成果を外部にアピールする。

28年度から令和元年度の各年度に、各々 6,694 件、9,244 件、8,396 件、7,633 件(広報部把握分)となった。新聞の 1 面掲載(令和元年度)は大手一般紙 32 件を含み 149 件あった。

- 雑誌掲載については、一般業界誌から小中学生向けの雑誌まで幅広い層を対象に掲載された。
- 平成 28 年度から令和元年度の各年度に、研究成果に関する報道発表に対する新聞掲載率は 100%を維持した。
- 機構の活動を広く社会に周知することを目的に、理事長とメディアとの意見交換の場として、「理事長記者説明会」を平成 28 年度から令和元年度までに計 8 回開催し、研究者の最新成果をわかりやすくメディアに説明をしている。
- 日刊工業新聞のコラム枠「情報通信研究機構 NICT 先端研究」を平成 29 年 7 月から開始し、現在も保持・継続中。毎週 1 回、NICT の研究者とその研究内容が大きくコラム欄に掲載され、各研究所・センターの研究者紹介の PR に貢献している(平成 29 年 7 月から、計 128 回掲載)。
- NICT 紹介ビデオ(日本語: 18 分版・5 分版、英語: 18 分版・5 分版)を作成し、第 4 期における各部署の取組について分かりやすく紹介した。作成したビデオは DVD 等で配布するだけでなく、Web で情報発信を行い、情報提供機会の充実を図った。
- 年 6 回発行の広報誌「NICT NEWS」(英語版を含む)では、研究者による従来の研究紹介記事のほか、外部向けの視点をより重視した、トピックページの一層の活用に努めた(直近のプレス記事、NICT 知財の紹介、受賞者紹介など)。また、若手研究者等にスポットをあてた「NICT のチャレンジャー」の連載を平成 30 年から開始し(NICT NEWS 2018 No.6 から)、職員の人となりを含めた紹介をするよう工夫した。令和元年度には、表紙デザインをリニューアルした。「NICT NEWS」英語版は、平成 28 年 4 月号(NICT NEWS No.457 APR 2016)をもって印刷物の頒布を終了し、その後はウェブ公開版での発行のみとした。
- 技術情報誌「研究報告」を毎年度 2 号発行し、第 4 期中に研究 5 分野から計 10 号を発行見込み。
- 「年報」については、前年度の活動報告を取りまとめ、タイムリーに発行した(平成 28 年度版からは電子版のみ(電子ブック及び PDF))。
- 「ジャーナル(Journal of NICT)」(英文)について、「研究報告」の英語版としての在り方を見直し、平成 30 年度から、定期的な発行は行わないこととした。
- 英語版機関誌として、海外向けに、より幅広い NICT 研究活動等の情報発信となるよう、NICT の研究成果・活動紹介、研究成果ハイライト等をまとめ

一フォロー数等の増加等、効果が確認できる。

令和 2 年度は、COVID-19 の感染拡大のため、本部オープンハウスを中止し、特別オープンシンポジウムを開催し、3,601 名が視聴した。引き続き、情勢変動に対して、イベント等の中止や繰り下げ開催、オンライン開催への変更などで対応する。

• NICT NEWS のような定期刊行物について、より分かりやすい内容でまとめることを心掛け、日刊工業新聞での長期連載(平成 29 年 7 月から令和元年度末まで計 128 回掲載し、継続中)、各種視察対応、CEATEC や Interop Tokyo に出展し多くの来場者をブースに集めるなど、機構の役割や研究開発成果を積極的に外部にアピールした。また、機構 Web サイトをリニューアルしたほか、アクセシビリティガイドラインを作成

た「NICT REPORT」(英文)を平成 30 年度(2019 年度版)から発行した(年 1 回発行。電子ブック及び PDF)。2020 年版からは、海外拠点の紹介等のマガジ的な要素も織り交ぜた。

- 刊行物については、掲載と同時に機構公式ツイッターへ投稿(日・英)し、周知に努めた。また、「NICT REPORT」については、国際連携研究室の協力により、広報誌「NICT NEWS」(英語版)の配信先に「NICT REPORT」の発行を配信するとともに、さらに令和 2 年 1 月に発行した「NICT REPORT 2020」では海外に向けアピールすべく、試験的に冊子版、リーフレット、URL・QR コード付カードを作成した。
- 平成 30 年度から J-STAGE(科学技術情報発信・流通総合システム:国立研究開発法人科学技術振興機構(JST)が運営する総合学術電子ジャーナルサイト)への「研究報告」と「Journal」の掲載を進めている。「研究報告」については、前身の電波物理研究所(RPL)から中央電波観測所(CRWO)、電波研究所(RRL)、通信総合研究所(CRL)、そして現在の NICT(令和元年 9 月発行)まで掲載し、電離層観測や無線通信などの研究開発の黎明期の史料から最新の研究に至る約 80 年間(昭和 17 年から令和元年)の成果を閲覧可能とした。
- 平成 29 年度まで 10 月又は 11 月の平日に実施していた本部オープンハウスを平成 30 年度から 6 月の金・土開催とし、学生やご家族連れなど来場対象の拡大を図った。さらに、令和元年度は、前年度まで実施していた「こども公開デー」のプログラムも加え、6 月 21 日(金)~22 日(土)に開催した。特に 6 月 22 日は、社会人のほか、学生によるポスターセッションやサイエンストークや青少年向けイベントなどもあり、小中高大学生や家族連れなど幅広い世代の方々に来場いただいた。来場者数は、2 日間で 4,863 人となり(平成 30 年度(2,781 人)比 1.7 倍)、現在のオープンハウス形式になった平成 24 年以降では最多となった。また、各拠点でも視察公開を行い(耐災害 ICT 研究センターは台風の影響で中止)、全拠点で、8,167 名が来場した。令和 2 年度は、COVID-19 のため、6 月 12 日と 13 日に予定していた本部オープンハウスを中止し、6 月 12 日に特別オープンシンポジウム『アフターコロナ社会のかたち』をオンライン開催し、3,601 名が視聴した。
- 平成 29 年度から CEATEC JAPAN に出展している。令和元年 10 月開催の CEATEC 2019 では 11 テーマの研究成果を展示したほか、起業家万博出場社の事業紹介を展示した。令和 2 年 10 月開催予定の CEATEC2020 は、COVID-19 に伴いオンライン開催となり、出展形態の変更に応じて対応する。
- 各種イベントへの出展にあたって、研究所等へ支援を行っている。例えば、令和元年度は、ワイヤレス・テクノロジー・パーク 2019、G20 貿易・デジタル

し、運用を開始した。さらに、前身の電波物理研究所(RPL)から情報通信研究機構(NICT)まで約 80 年間の「研究報告」を J-STAGE に掲載し、電離層観測や無線通信などの研究開発の黎明期からの史料を閲覧可能とした。令和 2 年度は、COVID-19 の感染拡大の影響を受け、自宅で過ごす小中高生等向けの特設サイト「学び応援サイト」を開設し、動画コンテンツやペーパークラフトを提供している。また、パリ日本人学校の小中学生向けに国立研究開発法人 5 法人が連携してオンライン講座を実施した。各種データベースや外部向けコンテンツにおいて特許に係る情報を最新化し、JST と共催による説明会を開催して最近の研究成果による特許出願のうち、企業での実用化シーズとなり得る技術を紹介するなど、積極的な情報発信を行った。

経済大臣会合、Interop Tokyo 2019 等のイベントへの出展に当たって支援を行った。令和 2 年度は、COVID-19 に伴う企画の中止や繰り下げ開催、オンライン開催への変更などに応じて支援を行う。

- 市民・青少年の科学技術への興味の喚起及び次世代人材育成等に資するための活動を実施した。例えば、令和元年度は、東京農工大学創立記念祭、こども霞が関見学デー、青少年のための科学の祭典への参加・出展を行った。また、科学技術系高校での特別講義など、次世代人材育成を目的としたアウトリーチ活動を実施した。令和 2 年度は、COVID-19 のため、こども霞が関見学デーなどの中止が既に決定している。
- 機構の活動内容を深く理解してもらうため、学生、社会人の見学者を積極的に受け入れた。視察・見学者は機構全体で平成 28 年度から令和元年度まで各年度に、3,542 人、3,517 人、4,008 人、3,544 人を受け入れた。COVID-19 のため、令和 2 年 2 月から 4 月は多数のキャンセルが発生し、6 月現在受け入れを休止しているが、7 月以降、感染防止策などを講じて再開する見込み。
- 平成 29 年 3 月から千葉県立現代産業科学館において機構の業務を紹介する常設展示及び最新のプレスリリース紹介を継続したほか、多摩六都科学館におけるミニ企画展の広報支援等、沖縄県立博物館・美術館における科学イベントへの出展等を実施した。
- 機構 Web サイトについて、平成 29 年度から開始したデザインのリニューアルを令和元年度に完了し、高齢者や障がい者をはじめすべての人々の利用のしやすさに配慮した情報提供を行うためのアクセシビリティガイドラインを作成し、運用を開始した(令和 2 年 2 月)。また、令和 3 年度から始まる第 5 期開始に向けた機構 Web サイトのリニューアルを進める。サイトのアクセス数(ページ数)は、平成 28 年度から令和元年度まで各年度に、8,500 万ページ、9,900 万ページ、13,700 万ページ、12,905 万ページであった。令和 2 年 2 月より、COVID-19 の影響に伴うイベント企画の中止や延期、オンライン対応への変更などを紹介するアナウンスサイトや自宅で過ごす小中高校生等向けの特設サイト「学び応援サイト」を開設し、動画コンテンツやペーパークラフトなど素材を提供している。また、国立研究開発法人 5 法人(NICT、JAXA、JST、JAEA、NEDO)が連携して、パリ日本人学校の小中学生向けに日本や米国からオンライン講座を 5 月に 8 回開催し、延べ 526 名の児童生徒が参加した。
- 研究紹介/プレスリリース/イベント情報など、最新の活動状況を Web サイトにアップするとともに、プレスリリース/お知らせ/イベントに掲載した情報はツイッターでの発信も行った。ツイッターのフォロワー数は平成 28 年度から令和元年度まで各年度に、4,826 人、6,452 人、7,539 人、8,662 人と拡大し

以上のように、研究開発成果の積極的な情報発信について、中長期計画に沿って業務を着実に実施し、十分に目標を達成した。

3. 知的財産の活用促進

知的財産権の適切な確保及び有効活用により、研究開発成果の社会への移転及び利用の拡大を図るものとする。特に、技術移転事務については、関係する部署間の連携強化を図り、より効果的な技術移転を推進するものとする。

5. 知的財産の活用促進

機構の知的財産ポリシーに基づき、知的財産取得から技術移転までを一体的かつ戦略的に進め、研究開発成果の社会への移転及び利用の拡大を図る。重点的に推進すべき課題については、その推進体制を整備し、効果的な技術移転を実施していく。また、外国における知的財産取得についても適切に行い、研究開発成果のグローバル展開を促進する。

さらに、研究開発成果が社会に広く認知され利用されるために、公開システムによる知的財産等の情報提供等を進める。

< 評価の視点 >

- 研究開発成果の社会への移転及び利用の拡大を図ったか。
- 重点的に推進すべき課題については、効果的な技術移転を実施したか。
- 外国における知的財産取得についても適切に行い、研究開発成果のグローバル展開を促進したか。
- 公開システムによる知的財産等の情報

た。

- 機構の活動を動画で紹介するビデオライブラリ (YouTube NICT Channel) を運用した。平成 28 年度から令和元年度まで各年度に、40 本、49 本、37 本、49 本、合計 175 本の映像コンテンツを追加し、アクセス数は、各年度の 5 万 5 千件、9 万 3 千件、9 万 6 千件、9 万 7 千件であった。令和 2 年度は、COVID-19 のために実施するオンラインイベントも追加する。
- INPIT の開放特許データベースや機構 Web サイトにおける特許紹介コンテンツの更新等、積極的な情報発信を行った。
- 令和元年 7 月には、JST と共催で情報通信研究機構新技術説明会を開催し、最近の研究成果による特許出願のうち、企業での実用化シーズとなり得る技術を紹介した。

5. 知的財産の活用促進

- 展示会や交流会等の国内外のイベントにおける研究開発成果の周知広報や、音声翻訳技術、サイバーセキュリティ技術を中心に、技術移転推進担当者と研究所・研究者が連携して企業に対する技術移転活動等を進め、知的財産の活用促進を図った。また、それ以外の分野についても、産業界からの関心を踏まえ、研究部署と連携して、深紫外半導体発光素子等の新たな実施許諾契約を締結した。
- 「知的財産戦略委員会」での決定を踏まえ、外国特許出願の要否判断を行うとともに、機構の知的財産ポリシーに基づき、「特許検討会」において、外国における取得・維持を含め特許全般に関し、出願、審査請求、権利維持のそれぞれの段階で特許の有効活用の観点から要否判断を行った。
- INPIT の開放特許データベースや機構 Web サイトにおける特許紹介コンテンツの更新等、積極的な情報発信を行った。
- 令和元年 7 月には、JST と共催で情報通信研究機構新技術説明会を開催し、最近の研究成果による特許出願のうち、企業での実用化シーズとなり得る技術を紹介した。

5. 知的財産の活用促進

- 展示会や交流会、また、企業に対する技術移転活動等を進め、知的財産の活用促進を図った。
- 重点的に推進すべき課題については、効果的な技術移転を実施した。
- 外国における知的財産取得を適切に行った。
- 公開システムによる知的財産等の情報提供等を進めた。

以上のように、知的財産の活用促進について、中長期計画に沿って業務を着実に実施し、十分に目標を達成した。

4. 情報セキュリティ対策の推進

政府の情報セキュリティ対策における方針及び実際のサイバー攻撃の実態を踏まえ、情報システムや重要情報への不正アクセスに対して十分な対策を講じるとともに、サイバーセキュリティ基本法に基づき、情報セキュリティポリシーの強化等により情報セキュリティ対策を講ずるものとする。さらに、情報セキュリティポリシーを不断に見直すことで対策強化を図るものとする。

6. 情報セキュリティ対策の推進

政府の情報セキュリティ対策における方針及び実際のサイバー攻撃の実態を踏まえ、CSIRT（Computer Security Incident Response Team: 情報セキュリティインシデント対応チーム）の適切な運営を行うとともに、研修やシステムの統一的な管理等を進めることで、セキュリティを確保した安全な情報システムを運用する。また、サイバーセキュリティ基本法に基づき、ガイドラインを適宜整備するとともに、情報セキュリティポリシーを不断に見直すなど、機構のセキュリティの維持・強化に努める。また、機構のサイバーセキュリティ分野の先端的研究開発成果の導入等により安全性を高めていく。

提供等を進めたか。

< 評価の視点 >

- CSIRT の適切な運営を行ったか。
- セキュリティを確保した安全な情報システムを運用したか。
- 情報セキュリティポリシー等を不断に見直し、対策強化を図ったか。

6. 情報セキュリティ対策の推進

- 平成25年4月に発足した機構内のセキュリティ対応専門部隊CSIRT（Computer Security Incident Response Team）により、インシデント発生時に、ネットワーク切断やその対応策などを迅速に実施し、インシデント発生時の緊急対策・連絡の迅速化、被害拡大の防止に努めた。
- 基幹ファイアウォールにより、アンチウイルスや侵入検知にも対応した統合脅威防御を運用した。
- 業務の効率化、運用コスト削減を実現するため業務系システムの統合設計を進め（仮想環境を活用）、業務系システムのプライベートクラウド化を完了した。
- 重要なデータのバックアップをデータセンターに保存するシステムの運用を開始し、大規模災害等発生時の業務継続性を高めた。
- 業務の効率化、運用コスト削減を実現するため業務系システムの統合設計を進め（仮想環境を活用）、業務系システムのプライベートクラウド化を完了した。
- 全職員等を対象としたセキュリティセミナー、セキュリティ自己点検、セキュリティ研修、標的型攻撃メール訓練を毎年継続的に実施し、新しい項目を追加するなどして、個々のセキュリティ意識の向上を図った。
- 機構のセキュリティ研究開発成果を活用したSOC（Security Operation Center）をサイバーセキュリティ研究所と共同で運用し、従来から実施・運用している脆弱性診断、侵入検知装置、ファイアウォール、アクセスログ等の情報を分析し、24時間365日の監視体制の下、情報システムや研究成果のセキュリティ向上に資した。
- サイバーセキュリティ基本法に基づく政府機関等の情報セキュリティ対策のための統一基準群に基づき、国立研究開発法人情報通信研究機構情報セキュリティポリシーの見直しを平成29年度に実施。また、統一基準群の改訂（平成30年度版）を反映した改定を実施した。
- セキュリティポリシーの見直しを踏まえた、情報セキュリティに関する手順書類の整備及び改正を実施した。
- 機構内で共通的に使用するソフトウェアを一括契約し、最新のソフトウェアの利用を推進することによりセキュリティ確保に努めた。

6. 情報セキュリティ対策の推進

- 政府の情報セキュリティ対策における方針及び実際のサイバー攻撃の実態を踏まえ、CSIRT の適切な運営を行った。
- 基幹ファイアウォールによる統合脅威防御、24時間監視体制の整備、最新のソフトウェアの利用推進、業務系システムのプライベートクラウド化、重要なデータのバックアップをデータセンターに保存するシステムを開始するなど、様々なセキュリティ向上を図り、安全な情報システムの運用を実施した。
- 政府統一基準に基づく情報セキュリティ規程類の整備を行い、また、全職員等を対象とした各種セミナーや研修、訓練の実施を通じて職員の意識向上やインシデント対処方法の対策強化を図った。

5. コンプライアンスの確保

機構の社会的な信頼性の維持・向上、研究開発業務等の円滑な実施の観点から継続的にコンプライアンスが確保されていることが不可欠であり、理事長の指揮の下、職員の規律の確保、適切かつ効率的な予算執行を含む機構における業務全般の適正性確保に向け、厳正かつ着実にコンプライアンス業務を推進する。

特に、研究不正の防止に向けた取組については、「情報通信分野における研究上の不正行

7. コンプライアンスの確保

機構の社会的な信頼性の維持・向上、研究開発業務等の円滑な実施の観点から継続的にコンプライアンスが確保されていくことが不可欠であり、理事長の指揮の下、職員の規律の確保、適切かつ効率的な予算執行を含む機構における業務全般の適正性確保に向け、厳正かつ着実にコンプライアンス業務を推進する。

特に、研究不正の防止に向けた取組については、「情報通信分野における研究上の不正行為への対応指針（第3版）」（平成27年4月21日総務省）に従って、適切に取り組む。

< 評価の視点 >

- 業務全般の適正性確保に向け、厳正かつ着実にコンプライアンス業務を推進したか。
- 特に、研究不正の防止に向けた取組について適切に取り組んだか。

7. コンプライアンスの確保

- コンプライアンス意識の一層の向上を図るため、役職員（派遣職員含む。）全員を対象とした合同コンプライアンス研修（eラーニング・講演会）を実施した。合同コンプライアンス研修（eラーニング）については通年受講を実施し、毎年度対象役職員全員の受講を達成した。合同コンプライアンス研修（eラーニング）については、平成28年度はコンプライアンス全般、研究不正防止、公的研究費の適正執行の3分野で実施したが、平成29年度には内部統制、リスクマネジメント、反社会勢力対応、個人情報保護を追加し、平成30年度には、パーソナルデータ、利益相反マネジメント、生体情報研究倫理、共同研究実施上の留意事項を追加した。

また、コンプライアンス研修教材である「コンプライアンスガイドブック」を作成し、毎年度改訂するとともに、令和元年度からはこれに加え、新規採用者向けにコンプライアンスについて最低限認識すべき内容に特化したガイドブック「NICT職員となって最初に読む冊子」を作成し、新規採用者研修等で使用した。

- 平成30年度以降、研修実施部署全てが参加する研修検討チームを設け、研修実施時期を調整して研修の年度計画を作成し、eラーニングのテスト問題の事前点検を行うこと等により、研修の計画的かつ効率的・効果的な実施を図った。
- 研究不正の防止に向け、「情報通信分野における研究上の不正行為への対応指針（第3版）」（平成27年4月21日総務省）を踏まえ、研究活動に係る不正行為への対応に関する規程を平成28年度に改正し、その後も同指針への対応状況について継続的に点検を行った。また、合同コンプライアンス研修（eラーニング・講演会）において研究不正防止に関する研修を毎年度実施した。令和元年度には、特定不正行為に該当しない二重投稿、不適切なオーサーシップも不正行為として認識されるようになっていることも伝える

以上のように、情報セキュリティ対策の推進について、中長期計画に沿って業務を着実に実施し、十分に目標を達成した。

7. コンプライアンスの確保

- 合同コンプライアンス研修（eラーニング）の通年受講の実施・対象者全員の受講、新規採用者向けのガイドブックである「NICT職員となって最初に読む冊子」の作成、計画的かつ効率的・効果的な研修の実施、法務に関する対応の充実等、厳正かつ着実にコンプライアンス業務を推進した。
- 特に、研究不正の防止に向けて、総務省の指針を踏まえて関係規程を改正した。また、役職員対象の研修に加え、研究用ソフトの不適切利用の問題を周知するなど、適切に取り組んだ。

為への対応指針(第3版)」(平成27年4月21日)に従って、適切に取り組むものとする。

6. 内部統制に係る体制の整備

内部統制については、法人の長によるマネジメントを強化するための有効な手段の一つであることから、「独立行政法人の業務の適正を確保するための体制等の整備」(平成26年11月28日付け総務省行政管理局長通知)等で通知された事項を参考にしつつ、必要な取組を推進するものとする。

8. 内部統制に係る体制の整備

内部統制については、「独立行政法人の業務の適正を確保するための体制等の整備」(平成26年11月28日付け総務省行政管理局長通知)に基づき業務方法書に記載した事項に着実に取り組むとともに、内部統制の推進に必要な取組を推進する。

< 評価の視点 >

● 内部統制に係る体制整備のための必要な取組を推進したか。

等、研修内容を充実してきている。さらに、令和元年度には、他法人で発生した研究者による研究用ソフトの不適切利用について、推進会議や企画室長等連絡会議を通じて注意喚起を行う等、通常の研修以外にも不正防止のための周知啓発を行っている。

- 法務に関する対応の充実を図った。

具体的には、弁護士資格を有する職員を平成28年度から1名、令和2年度から更にもう1名雇用し、法務・コンプライアンス室の体制を強化し、研究所等の各部署で発生する法規制、契約その他の法務に関する課題について、同室が支援を行うとともに、毎週及び必要に応じて臨時に顧問弁護士との法律相談を実施した。機構に係る紛争・訴訟が発生した場合には、同室が一括管理して対応した。また、同室が、規程類、マニュアル等の制定・改正や解釈について各部署を支援した。

8. 内部統制に係る体制の整備

● 「独立行政法人の業務の適正を確保するための体制等の整備」に基づき、引き続き内部統制に係る体制を整備した。具体的には、第3期においては内部統制委員会とリスク管理委員会が並立して活動していたが、平成28年度から、内部統制委員会(委員長:理事長)が、リスクマネジメント委員会(委員長:総務系理事。リスク管理委員会の体制を強化して改称。)からの報告や規程等の整備・運用状況等を踏まえて、内部統制について審議する体制を構築した。

● 内部統制委員会を毎年度1回開催し、「内部統制システムに係る課題対応整理表」により内部統制システムに係る課題の取組状況の報告を受けるとともに、リスクマネジメント委員会によるリスク低減の取組状況の報告を受け、内部統制の実施計画を策定した(平成28年度は初回であるため、実施計画の策定が中心。)

● リスクマネジメント委員会を毎年度2回開催し、洗い出したリスクについての取組状況の報告を受け、必要に応じて当該リスクに係る改善策の追加や新たに認識されたリスクの追加を行い、リスクマネジメントの実施計画を策定した。

リスクの追加件数

平成29年度 優先対応リスク2件・一般リスク1件

以上のように、コンプライアンスの確保について、中長期計画に沿って業務を着実に実施し、十分に目標を達成した。

8. 内部統制に係る体制の整備

● 内部統制委員会及びリスクマネジメント委員会を核としたPDCAサイクルを構築し、内部統制の徹底及びリスク低減を図るとともに、規程の適正化を図る等、内部統制に係る体制整備のための必要な取組を推進した。

以上のように、内部統制に係る体制の整備について、中長期計画に沿って業務を着実に実施し、十分に目標を達成した。

<p>7. 情報公開の推進等 機構の適正な業務運営及び国民からの信頼を確保するため、適切かつ積極的に情報を公開するとともに、個人情報に適切に保護を図るものとする。具体的には、独立行政法人等の保有する情報の公開に関する法律（平成13年法律第140号）及び独立行政法人</p>	<p>9. 情報公開の推進等 機構の適正な業務運営及び国民からの信頼を確保するため、適切かつ積極的に情報の公開を行うとともに、情報の開示請求に対し、適切かつ迅速に対応する。 また、機構の保有する個人情報の適切な保護を図る取組を推進する。 具体的には、独立行政法人等の保有する情報の公開に関する法律（平成13年法律第140号）及び独立行政法人等の保有する個人情報の保護に関する法律（平成15年法律第59号）に基づき、適切に対応するとともに、役職員へ</p>	<p>< 評価の視点 ></p> <ul style="list-style-type: none"> ● 情報の公開を適切かつ積極的に行うとともに、情報の開示請求に対し適切かつ迅速に対応したか。 ● 機構の保有する個人情報の適切な保護を図る取組を推進したか。 ● 独立行政法人等の保有 	<p>平成30年度 優先対応リスク1件・一般リスク4件 令和元年度 優先対応リスク3件・一般リスク4件</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 上記の実施計画に基づき、各担当部署において、内部統制の徹底及びリスクの低減に取り組んだ。 ● 以上のように、内部統制委員会及びリスクマネジメント委員会を核としたPDCAサイクルを構築し、内部統制の推進に必要な取組を推進した。 ● 適正な内部統制を確保するため、規程類を総点検し、規程類の適正化に取り組んだ。また、規程類の制定・改正時における法務・コンプライアンスによる審査を強化したほか、職員向けに規程類作成マニュアルを作成する等、制定・改正作業の適正化にも取り組んだ。 ● 平成31年3月の制度改正により、令和元年度の事業報告書から「内部統制の運用状況」及び「業務運営上の課題及びリスクの状況並びにその対応策」等の記載が新たに義務付けられたことに対して、適切に対応する予定。 <p>9. 情報公開の推進等</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 機構Webサイトにおいて、組織に関する情報、業務に関する情報、財務に関する情報等、適切かつ積極的に情報の公開を行った。 ● 平成28年度から令和元年度までの間における法人文書の開示請求は以下のとおりであり、独立行政法人等の保有する情報の公開に関する法律に基づき、適切かつ迅速に対応した。 平成28年度:3件※ 平成29年度:2件 平成30年度:5件 令和元年度:7件 ※ 1件について審査請求があり、一部不開示について理由が不十分とされたものの、不開示の結論は維持。 ● 合同コンプライアンス研修（平成30年2月及び令和元年11月）、新規採用者研修（毎年4月）において個人情報保護に関する研修を実施すること等により、個人情報の適切な取扱いを徹底した。 	<p>9. 情報公開の推進等</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 機構 Web サイトにおいて情報の公開を適切かつ積極的に行うとともに、情報の開示請求に対し適切かつ迅速に対応した。 ● 個人情報保護に関する研修の実施、個人情報取り扱いマニュアルの策定及び委託先事業者への実地検査等その内容の充実等、機構の保有する個人情報の適切な保護を図る取組を推進した。 ● 上記の取組に加え、
--	---	--	---	--

<p>等の保有する個人情報の保護に関する法律(平成15年5月30日法律第59号)に基づき、適切に対応するとともに、職員への周知徹底を図るものとする。</p>	<p>の周知徹底を行う。</p>	<p>する情報の公開に関する法律等に基づき、適切に対応するとともに、役職員への周知徹底を行ったか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 個人情報に関する法令上のルール、個人情報保護管理者の役割、具体的な管理方法を説明する個人情報取扱いマニュアルを作成した(平成29年度)。 • 各部署において毎年度行うこととしている保有個人情報等の点検について、具体的な点検方法を点検者が十分理解できるよう、チェックリストのひな形を個人情報取扱いマニュアルで定めた(令和元年度)。 • 「独立行政法人等の保有する個人情報の保護の適切な管理のための措置に関する指針」が改正されたことを受け、保有個人情報の取扱いに係る業務の委託先事業者に対する定期点検は、原則実地検査によることを規程で定め、当該実地検査の手続きのフロー、検査様式を個人情報取扱いマニュアルで定めた(令和元年度)。 • 役職員を対象にコンプライアンスの基本を説明するコンプライアンスガイドブックにおいて、法人文書の適切な管理、開示請求を受けた場合の対応等について解説する等、周知徹底を行っている。 	<p>コンプライアンスガイドブックにおいて法人文書の適切な管理、開示請求を受けた場合の対応等について解説すること等により、独立行政法人等の保有する情報の公開に関する法律等に基づき、適切に対応するとともに、役職員への周知徹底を行った。</p> <p>以上のように、情報公開の推進等について、中長期計画に沿って業務を着実に実施し、十分に目標を達成した。</p>
--	------------------	---	--	--